

豊後国分寺跡

1979

大分市教育委員会

豊後国分寺跡

大分市教育委員会



巻首図版

国分寺周辺の空中写真（昭和49年11月撮影）

序 文

豊後国分寺跡は、新産業都市として発展を続ける大分市の南郊賀来、国分の地にあります。

この一帯は近年大分市のベッドタウンとして急速に宅地化が進んでおり、国分寺跡の保護については緊急の課題となってきました。

このため大分市では遺跡の環境整備をふくめた抜本的な保護対策を講ずることとし、昭和49年度より5ヶ年にわたり、国庫補助を得て発掘調査を実施、その結果天平の昔この地にそびえたった壮大な伽藍の全体像をほぼ把握することができました。

周知のように豊後国は近世以降小藩分立の宿命を負い、また中世に盛威を誇った大友氏についてもその威光をしのぶ遺跡はほとんど失われています。豊後国にはそれらを象徴するに足る遺跡がないので郷土を愛する人々の久しい待望のひとつになっています。

豊後国分寺跡は、その意味でも特に貴重な遺跡であるにちがいありません。私たちは今回の調査成果をふまえて、その保存に万全を期す所存です。調査は学術的にも多くの貴重な成果を得ました。

近年相ついで発表されている諸国国分寺の調査成果のうえにさらに新たな資料を加えるものと自負しています。

調査の実施にあたっては多くの方々の協力と助言をいただきとくに報告書作成にいたるまで指導いただいた調査委員の諸先生方、文化庁、大分県教育委員会、また調査期間中、常にあたたかい協力をいただいた国分寺および地元の方々に感謝の意を表します。

昭和54年3月

大分市教育委員会教育長 松 本 喜 義

例 言

1. 本書は、大分市教育委員会が昭和49年度より53年度まで国庫補助金を得て実施した史跡豊後国分寺跡発掘調査の報告書である。
2. 国分寺跡周辺の地形実測図の作成はアジア航測株式会社が行ったものを、遺構の拡大にともない北方および南方を補足測量した。挿図はこれをもとにして作成したものである。
3. 報告書の作成には、調査員全員があたりそれぞれ分担執筆した。第3章は調査指導の先生方よりいただいたものである。
4. 報告書に使用した写真の撮影は遺構については真野が、遺物については牧尾義則(大分県文化課)が担当した。挿図については、製図は讃岐和夫・牧尾・真野が行い、拓本は丸田喜代子・佐藤厚子・田原真喜子・東圭子各氏の協力を得た。
6. 本書の編集には真野がたった。

本文目次

序 文

第1章 序 説	1
---------------	---

1 位置と環境	1
2 豊後国分寺の沿革と研究史	3
3 調査の経過	5

第2章 遺跡の調査	8
-----------------	---

第1節 遺 構

I 南門地区遺構	9
II 回廊および中門地区の遺構	14
III 薬師堂地区遺構	21
IV 塔 跡	28
V 薬師堂北第2遺構	33
VI 溝 遺 構	37
(1) 西側溝各トレンチ	39
(2) 「コ」字状張り出し部	42
(3) 塔 西 地 区	44
(4) 東側溝各トレンチ	46
VII 塔東地区の遺構	51
VIII 東門および西門地区の遺構	54
(1) 東門地区発掘区	54
(2) 西門地区発掘区	56
IX その他の遺構	60
(1) 北 方 地 区	60
(2) 薬師堂西発掘区	60
(3) 地下式横穴	66

第2節 遺 物

I 瓦	69
(1) 軒 平 瓦	69
(2) 軒 丸 瓦	76

(3) 平 瓦	82
(4) 丸 瓦	121
(5) 道具瓦	132
(6) その他の瓦	135
II 土 器	136
(1) 薬師堂西地区瓦溜出土土器	143
(2) 塔西地区出土土器	144
(3) 薬師堂北第2遺構出土土器	148
(4) 西側溝遺構出土土器	150
(5) 各地区出土の土器	150
III 鉄 製 品	15
IV 石 製 品	154
第3節 小 結	157
第3章 考 察	162
1 豊後国分寺の伽藍	162
2 豊後国分寺跡出土の瓦当資料	169
第4章 豊後国分寺の沿革および関係史料	181
1 豊後国分寺の沿革	181
2 豊後国分寺跡の石造品	202

図 版 目 次

巻首図版 国分寺周辺の空中写真

図版 1 豊後国分寺遠景

図版 2 周辺の現況

図版 3 南門地区

図版 4 中門地区および回廊

図版 5 薬師堂地区(1)

図版 6 薬師堂地区(2)

図版 7 薬師堂地区(3)

図版 8 塔跡地区(1)

図版 9 塔跡地区(2)

図版10 塔跡地区(3)

図版11 塔跡地区(4)

図版12 北第1遺構および北第2遺構(1)

図版13 北第2遺構(2)

図版14 北第2遺構(3)

図版15 塔西地区(1)

図版16 塔西地区(2)

図版17 塔西地区(3)

図版18 溝遺構(1)

図版19 溝遺構(2)

図版20 東門地区

図版21 西門地区(1)

図版22 西門地区(2)

図版23 塔東地区(1)

図版24 塔東地区(2)

図版25 薬師堂西発掘区(1)

図版26 薬師堂西発掘区(2)

図版27 薬師堂西発掘区(3)

図版28 北第3遺構礎石と地下式横穴

図版29 軒平瓦(1)

図版30 軒平瓦(2)

図版31 軒平瓦(3)

図版32 軒丸瓦

図版33 平瓦(1)

図版34 平瓦(2)

図版35 平瓦(3)

図版36 平瓦(4)

図版37 平瓦(5)

図版38 平瓦(6)

図版39 丸瓦(1)

図版40 丸瓦(2)

図版41 戲面瓦および国分寺・永興寺現蔵瓦

図版42 造瓦資料(1)

図版43 造瓦資料(2)

図版44 造瓦資料(3)

図版45 造瓦資料(4)

図版46 土器(1)

図版47 土器(2)

図版48 土器(3)

図版49 土器(4)

図版50 墨書遺物

挿 図 目 次

第1図	豊後国分寺跡周辺の地形と遺跡	2~3
第2図	豊後国分寺跡全測図	8~9
第3図	トレンチ配置図	8~9
第4図	南門地区第1トレンチ実測図	9
第5図	南門地区第1トレンチ南門遺構実測図	10
第6図	南門地区第2トレンチ遺構実測図	12
第7図	回廊第1・第2トレンチ断面実測図	15
第8図	塔西地区実測図	16~17
第9図	南回廊地区トレンチ実測図	18
第10図	中門地区第15トレンチ実測図	20
第11図	薬師堂東側の礎石群	21
第12図	薬師堂地区遺構実測図	22~23
第13図	薬師堂地区トレンチ断面実測図	23
第14図	薬師堂地区第8発掘区礎石等実測図	27
第15図	塔跡実測図	28
第16図	塔初層の復原	29
第17図	塔跡トレンチ実測図	31
第18図	塔跡第3トレンチ遺物出土状態実測図	32
第19図	薬師堂北第2遺構復原想定図	33
第20図	薬師堂北第1遺構遺物出土状態	34
第21図	薬師堂北第1遺構・第2遺構トレンチ実測図	34~35
第22図	薬師堂北第2遺構の根締め石	36
第23図	薬師堂北第1遺構・北第2遺構トレンチ断面実測図	36~37
第24図	溝遺構関係トレンチ配置図	38
第25図	溝遺構第1・第2・第3トレンチ実測図	40
第26図	溝遺構第10・第11トレンチ断面実測図	41
第27図	溝遺構「コ」字状張り出し部実測図	42~43
第28図	根締め石状遺構	44
第29図	溝遺構「しきり」部	45
第30図	溝遺構第17トレンチ(溝遺構東南隅)実測図	47
第31図	溝遺構第20・第21トレンチ実測図	49
第32図	塔東地区トレンチ実測図	52~53

第33図	東門地区トレンチ実測図	55
第34図	西門第1地区トレンチ実測図	57
第35図	薬師堂西発掘区遺構実測図	62
第36図	地下式横穴実測図	67
第37図	平瓦・丸瓦の用語と記号	69
第38図	軒平瓦拓影実測図(1)	71
第39図	軒平瓦拓影実測図(2)	72
第40図	軒平瓦拓影実測図(3)	73
第41図	軒平瓦拓影実測図(4)	74
第42図	軒平瓦拓影実測図(5)	75
第43図	軒丸瓦拓影実測図(1)	79
第44図	軒丸瓦拓影実測図(2)	80
第45図	軒丸瓦拓影実測図(3)	81
第46図	叩き板復原集成図	82~83
第47図	分割角度(1)	84
第48図	分割角度(2)	85
第49図	叩き締めの実例	87
第50図	叩き締め法模式図	88
第51図	平瓦凹面の二次調整叩き	88~89
第52図	布 11	90
第53図	平瓦凹面布11経緯関係図(1)縄目叩き	91
第54図	縫い目模式図	92
第55図	平瓦凹面布11経緯関係図(2)その他の叩き	92~93
第56図	平瓦拓影実測図(1)	93
第57図	平瓦拓影実測図(2)	94
第58図	平瓦拓影実測図(3)	95
第59図	平瓦拓影実測図(4)	96
第60図	平瓦拓影実測図(5)	97
第61図	平瓦拓影実測図(6)	98
第62図	平瓦拓影実測図(7)	99
第63図	平瓦拓影実測図(8)	100
第64図	平瓦拓影実測図(9)	101
第65図	平瓦拓影実測図(10)	102
第66図	平瓦拓影実測図(11)	103
第67図	平瓦拓影実測図(12)	104

第68図	平瓦拓影実測図03	105
第69図	平瓦拓影実測図04	106
第70図	平瓦拓影実測図05	107
第71図	平瓦拓影実測図06	108
第72図	平瓦拓影実測図07	109
第73図	平瓦拓影実測図08	110
第74図	平瓦拓影実測図09	111
第75図	平瓦拓影実測図00	112
第76図	平瓦拓影実測図01	113
第77図	平瓦拓影実測図02	114
第78図	平瓦拓影実測図03	115
第79図	平瓦拓影実測図04	116
第80図	平瓦拓影実測図05	117
第81図	平瓦拓影実測図06	118
第82図	平瓦拓影実測図07	119
第83図	平瓦拓影実測図08	120
第84図	丸瓦拓影実測図(1)	123
第85図	丸瓦拓影実測図(2)	124
第86図	丸瓦拓影実測図(3)	125
第87図	丸瓦拓影実測図(4)	126
第88図	丸瓦拓影実測図(5)	127
第89図	丸瓦拓影実測図(6)	128
第90図	丸瓦拓影実測図(7)	129
第91図	丸瓦拓影実測図(8)	130
第92図	丸瓦拓影実測図(9)	131
第93図	面戸瓦・毀斗瓦拓影実測図	133
第94図	切隅瓦拓影実測図	134
第95図	戲画瓦拓影図	135
第96図	主要土師質土器の分類(1)	138~139
第97図	小皿の法量の比較	139
第98図	主要土師質土器の分類(2)	140~141
第99図	主要土師質土器の分類(3)	142~143
第100図	薬師堂西地区瓦溜出土土器実測図	142~143
第101図	塔西地区出土土器実測図(1)	145
第102図	塔西地区出土土器実測図(2)	146

第103図	緑釉陶器実測図	147
第104図	蔵骨器墨書銘	147
第105図	北第2遺構出土土器実測図	149
第106図	西側溝遺構出土土器実測図	151
第107図	各地区出土土器実測図	153
第108図	鉄製品実測図	155
第109図	石製品実測図	156
第110図	豊後国分寺跡主要遺構配置図	157
第111図	豊後国分寺地割り案(1)	158
第112図	豊後国分寺周辺の字図	159
第113図	豊後国分寺周辺の地割り案(2)	160
第114図	宇佐地方出土古瓦参考資料	170
第115図	大分市永興寺出土軒丸瓦	171
第116図	豊後国分寺跡出土軒丸瓦第Ⅲ・Ⅴ類瓦当文の図割り	172
第117図	老司系軒平瓦扇行唐草対照拓影	174
第118図	豊後国分寺跡出土軒平瓦第Ⅰ-b・c類瓦当分復原図	175
第119図	浜口鹿寺・豊後国分寺(第Ⅱ類)軒平瓦均正唐草文対照拓影	176
第120図	豊後国分寺現蔵瓦当資料	179
第121図	石造品実測図	206

第1章 序 説

1 位置と環境

豊後国分寺跡は大分市の西南部、大分市大字^{註1}国分に所在する。現在なお天台宗医王山国分寺と称して薬師堂・観音堂を中心に広い境内をようし、点在する礎石群や樹令700年といわれる大杉に往古の勢威をしのぶことができる。

国分寺跡の立地する標高およそ30mの低台地は大分川の営みによって形成された段丘である。東に向う大分川の流れは国分寺のある台地をコーナーとして北にかわり、やがて賀来川、七瀬川と合流し、蛇行をくり返しながらか市街地に達し別府湾へ注ぐ。このような大分川の蛇行が南側および東側に約10mほどの比高を有する直角二等辺三角形をした段丘を形づくった。この二等辺三角形の北隅は浅い谷の解析によって西北側台地と切り離された状態となって突出し、そこに春日神社がまつられている。台地上における国分寺の位置はこの春日社と密接な関係をもっているとみられ、東西182m・南北292mにおよぶ広大な国分寺の寺域東辺の延長線上に鎮座している。

現在の行政区画でみると豊後国分寺の位置は大分郡挾間町に近く、大分市街地から直線距離にして7kmほどの奥まったところにある。国分寺の占地を考えるうえで、言うまでもなくもっとも重要なのは国府との位置関係であろう。現在、国府推定地として最も有力なのは^{註2}大分市古国府を中心とする一帯であるが、推定地域内4〜5ヶ所の発掘調査の結果では、期待とは裏腹にそれらしい遺構、遺物の検出は^{註3}まだない。古国府地区に国府を比定する有力な根拠の一つとなっている印船社周辺の調査(昭和52年)でも国衙に関する手掛りはなにも一つ得ることができなかった。この他に前述した賀来川周辺に求める説もあるが、これはむしろ国分寺との位置関係を重視したもので根拠に乏しく、しかも、考古資料の裏づけがない点では同様である。また、大分川周辺における条里遺構についてその地割り一辺の方向によってまとめると次のようになる。

- ①賀来地区条里遺構(賀来川右岸一帯、真北から約30度東に振れる)
- ②^{わかた}植田地区条里遺構(七瀬川左岸を中心に田尻・南大分一帯、真北から約77度東に振れる)
- ③古国府地区条里遺構(大分川左岸古国府一帯、真北から73度東に振れる)

位置的に国分寺に最も近いのは、賀来地区条里遺構ということになるが、ほぼ真北方向をとる国分寺の伽藍方位はこれにのらない。

一方、古国府〜南大分地区には奈良〜平安時代の古瓦を所蔵する^{註4}永興寺および金剛宝戒寺の二古刹が所在する。前者は植田地区条里遺構の北端にあたる南大分地区を臨む台地縁辺に位置している(大分市南大分字永興)。国分寺との距離は約4kmである。国分寺跡で発掘されたもっとも古式の軒丸瓦と同型ないしは同范瓦とみられる瓦や百済系単弁軒丸瓦を有し、国分寺との近い関係がうかがわれ、

この寺を国分尼寺にあてる説もある。後者は現在上野の台地上にあるが前身は大分市古国府五丁津留にあったといわれ、「金剛宝戒国大工道」の文字の入った瓦が発見されている。所蔵の古瓦中にやや脱化した文様の百済系単弁8葉軒丸瓦2例がある。

以上のように、この地域で現在考えうる同時代遺跡のすべてが国分寺の占地に対してほぼ無関係といえることができる。したがって次に地理的環境をみると、国分寺のある台地は「安定した場所」という地形条件を十分に満たしている。その上で遺跡の分布に注意するならば、国分寺跡のある段丘を中央にして南北に古墳群が対峙していることがわかる。どちらも5世紀代とみられる前方後円墳1基を盟主とする古墳群でとりわけ北側の低丘陵縁辺につらなるグループは前方後円墳蓬萊山古墳を筆頭に6世紀代後半の千代丸古墳（横穴式石室・石棚前面に線刻壁画をもつ、史跡）まで18基の古墳が知られており、この地域でもっとも有力な豪族（「豊後風土記」にいう大分君？）の本拠地であったとみられる。したがって国分寺の立地を客観的にみるならば、「河川の合流点以前の位置でなおかつ氾濫の恐れのない高台を選び、しかも前代からの有力豪族の本拠地に至近の場所」ということになる。さらに、別府を経由して豊前へ、あるいは湯布院から日田・大宰府へ通じる古代官道、また直入などの内陸部へ通じる交通の要衝地であったことも見逃すことができない。ここで、とくに河川氾濫に対する強い配慮がうかがわれるとみるのは、丘陵に挟まれた狭隘な低地に蛇行する三河川が合流する地形の中で、安定した沖積地の形成がきわめて遅かったことによる。すなわち大分川流域の沖積地ないしは微高地で弥生時代～古墳時代の集落跡が発見されたのは古国府地区の印船社の周辺（微高地）を除いて1ヶ所もなく、この時代の遺跡はすべて標高60m前後の丘陵上に立地している。建城の台遺跡・守岡遺跡・尼ヶ城～城南団地遺跡がその代表的遺跡である。したがって、国分寺創建前後の時期で、沖積地で現在遺構として確認されるのは前述した条里遺構とみられる地割りのみというのが実情である。

いずれにせよ、このような地理的環境のなかで豊後国分寺は「国の華」として現在の分市国分の丘陵上に「好所」を定め建立されたのである。

注1. 明治44年に編集された「豊後国大分郡神社明細帳」によれば、天平13年の創立となっている。

注2. 昭和48年にやや北側に位置する字雲田を調査したところ、時期不明の平行した三条の溝遺構を検出した。大分市教育委員会「市立豊府小学校建設地緊急発掘調査概報」1974

昭和51年に印船社の北側字石橋を調査した。古墳時代および中世の溝遺構が発見された。

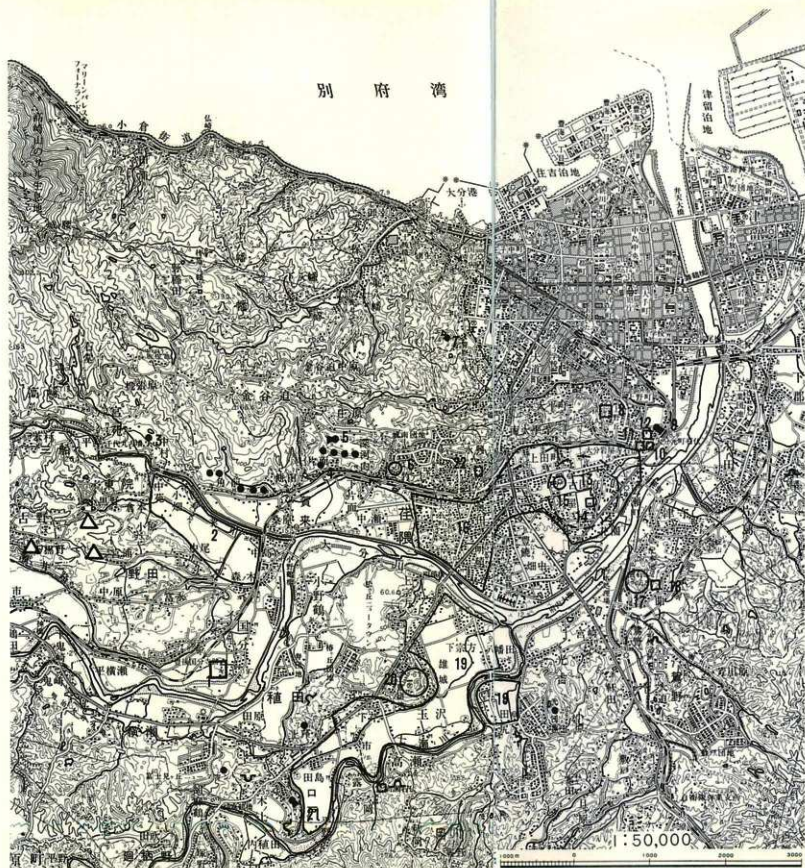
昭和51年の字八幡前の調査では中世の溝遺構、井戸、土壇基などが発見され、土師器、輸入陶磁器類が多数出土した。

昭和53年、印船社に隣接する字石明の調査では、古墳時代の竪穴遺構および時期不明の掘立柱建物、中世の井戸などが検出されている。

注3. 永興寺所蔵の古瓦については古く、河野清実「大分県の古瓦」 大分県史蹟名勝天然記念物調査報告第13輯 1936

において紹介されているが、豊後国分寺跡では昭和53年の調査（瓦溜）ではじめて発見された。

別 府 湾



△ プレ・縄文
○ 弥生
● 古墳
△ 穴
□ 歴史

- 1 豊後国分寺跡
- 2 賀来桑里跡
- 3 千代丸古墳
- 4 丑殿古墳
- 5 蓬萊山古墳
- 6 尼ヶ城・城南遺跡
- 7 亀甲山古墳
- 8 金剛宝戒寺
- 9 大匠塚古墳
- 10 元町石仏
- 11 岩屋寺石仏

第1図 豊後国分寺跡周辺の地形と遺跡

2 豊後国分寺の沿革と研究史

沿革の概要…豊後国分寺跡には、現在も国分寺の名をもつ天台系寺院があり、その法灯を守りつづけている。正慶元年(1332)の「^{註1}由原官年中行事次第」に、国分寺僧が由原宮の放生会に諸役を負担した記事がみえるが、このころすでに天台宗系の寺として位置づけられた可能性が^{註2}つよい。寺記によれば、天正年間、大友・島津の戦いにあたり兵火にあい焼亡した。現存する国分寺の堂舎については寺記や境内の塔婆銘・棟札等により、薬師堂(元禄7年—1693)、銅鐘・鐘堂(宝永5年—1708)、護摩堂(宝暦7年—1757)、観音堂(享保9年—1724)等の建物があげられる。いずれも江戸時代初^{註3}～中頃の再興である。

このように現国分寺は、中世・近世の永い時代にわたって天台宗の寺院として存続したのであるが、別に鎌倉時代はじめ、仁治元年(1240)大友大炊介親秀が西大寺忍性を招き再興をはかったという所伝(「豊後国志」所引の「豊府間書」等)がある。しかし後述するように忍性の来豊には疑問がある。

いずれにせよ、豊後国分寺は、中世以後、再度の再興がはかれ、その時、本来の国分寺とは全く異質の寺として再生した経緯をもっているが、中世の古文書、近世の史書等によれば、すべて国分寺の名で記されており、この寺が、かつて天平13年の詔によって全国に建立された「国分寺…金光明四天王護国寺」の系譜を引く寺であることは見失われることがなかった。

研究史…中世の古文書類はもちろん、「豊後国志」、「太宰管内誌」、「地域雜誌」等の近世の史書においても、国分寺を古代の寺院跡として言及した例はほとんどない。豊後国分寺について、奈良時代の寺院跡として論考した最初の本格的な論著は、昭和3年、久多羅木儀一郎氏の「^{註4}豊後国分寺跡」である。この中で、現薬師堂周辺の礎石群を金堂に、観音堂を塔に、薬師堂北方の旧阿弥陀堂所在地の礎石群を講堂跡にあてた所見は、その後の豊後国分寺研究の基礎となった卓見であった。また塔を一塔のみと考え東塔の存在を否定した見解、南大門・西門の推定、方2町の伽藍域の推定等も注目される所見である。

昭和6年、郷土史蹟伝説研究会の「^{註5}豊後国分寺研究」は、久多羅木氏の研究をふまえ、さらに詳細な現地踏査を行ってまとめられた労作である。この報告によって、塔跡が初層36尺の柱間をもつ壮大なものであることが確認されると共に、塔心礎の部分的発掘を行って一辺7尺6寸～7寸、中央に4寸8分の遺出しをもつものであることが確認された。このとき四天柱の探索を行い、これがすでに原位置になく現在の観音堂に転用されていると報じている。また西塔にたいする東塔の存在について、遺跡の現況からこれを否定している。現薬師堂所在地の礎石は7間4面の金堂跡と推定、講堂は久多羅木氏と同じく阿弥陀堂跡の礎石群をあてた。この地区の建物跡について報告は「金堂の北方、現在礎石のある辺一帯は、近年迄は草原で、附近に祇園祠・天神祠等があり、阿弥陀堂は頽廃して、小庵室となっていたが(中略)小堂も全く取壊され(中略)現在僅かに田畠に数個の石が名残を留めるに過ぎぬ有様となって居る。最も南地のものは金堂址北辺より約17間の地点、溝の縁にあり、それより北に10尺を隔て一個の礎石があり、更に12尺を隔てて礎石の残欠があり、それより又北に20尺を隔てて一個の礎石が存在している。」と述べ、これらは表面を削平したモザイク石だが造り出し等

は認められないとしている。又付近の水路中からは特に布目瓦が多く出土したという。

今回の発掘調査により、この地区から、講堂跡とみられる基壇が確認されており、上記の報告は、今確認しえないこの地区の旧状を報じたものとして参考となるものである。

この他、南門・東門についても久多羅木説をすすめ、東門は薬師堂前道路より東58間、西門は同地点より西99間の礎石をあてた。また中門の所在についてふれ、塔の東、金堂のすぐ南とし、塔は中門の外に出ると考えている。

昭和13年 角田文衛編の「国分寺の研究」では鏡山猛氏が豊後国分寺について報告している。^{註6}氏は塔については、12尺等間(平均値12.017尺)、一辺36尺と報告している。薬師堂地区の建物は、やはり金堂とし、現存する礎石から梁間48尺、桁行70尺の建物を推定した。講堂、南門、西門、北門等については、ほぼ従来の所見に従っているが、現在の庫裡のうらの井戸近くにある礎石より、この地を中門とし、回廊が塔をとりこむ伽藍配置を想定している点は興味深い。又、出土古瓦については丸瓦6類、平瓦4類に分け、平瓦・丸瓦とも天平期以後のものであるとした。とくに丸瓦には、平瓦の1、2類に対応するものがなく、いずれも奈良期を過ぎたものであろうとしている。この年代比定はともかくとして、氏が丸瓦の5類として抽出した複弁10葉軒丸瓦は今回の発掘調査でも軒丸瓦の中で最も多く出土した(軒丸瓦Ⅱ類)にあたるものであり、これが瓦当文の形式上、軒平瓦の主流である2類(扁行唐草文軒平瓦)より退化した様式を示し、軒丸瓦と軒平瓦のセット関係の設定に難点のあることを示唆している点も興味深い。鏡山氏は想定される伽藍配置、古瓦の様式より、天平13年の詔以前の建立説を否定した。

その後、渡辺澄夫氏の「大分市史(古代史・国府時代)」^{註7}、賀川光夫氏の「大分県の考古学」等が国分寺について論考している。

以上いずれも本格的発掘調査のない段階での論考であり、それぞれの論考の中で、伽藍の配置、規模等について推定の域を出ないものの多いのはやむをえないが、主要堂塔の位置と性格、伽藍の四至について、今回の成果と対応して、大きな誤りのないことは、敬服の他はない。

以上の他、当国分寺出土の古瓦等に論及した文献は数多いが、ここでは発掘調査の参考としたものにとどめ、特記しない。

註1. 由原八幡宮文書、正慶元年由原宮年中行事次第 大分県史料刊行会「大分県史料9」1956所収

註2. 「豊後史蹟考」所引の寺記

註3. このうち、ほぼ旧状を残して現存するのは観音堂と薬師堂である。「医王山国分寺略縁起」

によれば、本堂(薬師堂)18間4面東向き、本尊薬師如来、阿弥陀堂16間4面、南向、観音堂□2□4面東向とある。

註4. 久多羅木儀一郎「豊後国分寺社」(大分県史蹟名勝天然記念物調査報告第六輯 1928)

註5. 郷土史蹟伝説研究会編「豊後国分寺研究」(1931)

註6. 角田文衛編「国分寺の研究」(1938)

註7. 渡辺澄夫「大分市史・国府時代」(1955)

賀川光夫「大分県の考古学」(1971)

3 調査の経過

1) 調査にいたる経過

豊後国分寺跡は昭和8年に塔跡・薬師堂のある現国分寺境内を中核として南北約270m、東西約220mの範囲が史跡として指定されている。この指定に際して大きな拠り所となったのは、南門・西門・東門などのいわゆる四至に関する所伝であったろうが、とにかく今にして思えば驚異的な広さを指定したものである。しかし、皮肉にも余りに広い指定地はかえってその範囲が忘れられ、次第に住宅化するところとなった。

一方、大分市は新産業都市として折りからの高度経済成長の波にのって急速にその都市域を拡大しつつあり、市周辺の丘陵という丘陵は造成され住宅地として変貌を遂げていった。

このような地域のかかえる緊急性により、また一方では全国的な官衙・古代寺院跡への関心の高まりのなかで、豊後国分寺跡に調査のメスを加えられることとなったのはむしろ当然のことであった。調査は将来史跡の環境整備を行うことを前提に、正確な寺域の把握および伽藍配置の究明を目的として、昭和49年度より国の補助金を得て実施した。

2) 発掘調査の経過

調査	期 間	主たる調査地点	調 査 成 果	備 考
第1次	49年11月18日 ～12月9日	薬師堂地区 薬師堂北方地区 塔 跡 塔東地区	薬師堂地区基壇遺構 薬師堂北第2遺構 塔跡基壇	500分の1地形 図作成 49年度概報
第2次	50年11月19日 ～ 51年2月25日	薬師堂北第2遺構 塔西地区 東溝遺構関係各地点 塔 跡 回廊・中門関係各地点	薬師堂北第2遺構 溝遺構「しきり」構造・回廊 溝遺構「コ」字状張り出し部 塔基壇 回廊基壇	50年度概報
第3次	51年11月20日 ～ 52年1月21日	南門地区 東門地区 西門地区 溝遺構関係各地点	南門遺構 東門遺構・堀列 西門遺構 西側溝遺構北端部・地下式横穴 東側溝遺構	51年度概報
第4次	53年3月9日 ～4月8日	薬師堂地区 薬師堂西地区	薬師堂地区基壇遺構東側	出土瓦整理 地形図補足実測
第5次	53年5月8日 ～5月24日	薬師堂西地区	瓦 葺	石造品実測 出土瓦整理

3) 調査団の構成

調査主体者 大分市教育委員会

調査団長 大分市教育委員会教育長 池見 喬、松本喜義

調査委員会委員

渡辺澄夫 (大分大学名誉教授・現別府大学教授、歴史)

兼子俊一 (大分大学名誉教授、地理)

岩尾 順 (大分大学名誉教授、大分市文化財審議会委員、美術)

中野橋能 (県立芸術短大教授、大分市文化財審議会委員、宗教史)

富来 隆 (大分大学教授、大分市文化財審議会委員、歴史)

賀川光夫 (別府大学教授、考古)

沢村 仁 (九州芸術工科大学教授、考古・建築、調査指導)

小田富士雄 (北九州市立歴史博物館、考古、調査指導)

県教育庁文化課長 (矢野朔雄、衛藤 久、浅田弘明)

市教育委員会社会教育課長 (有定稔雄、森 信男、岡 博)

調査委員会事務局

安部幸人 (大分市教育委員会社会教育課文化財係長)

小野雅途 (大分市教育委員会社会教育課主事)

油布和久 (大分市教育委員会社会教育課主事)

調査員

第1次調査 後藤宗俊・清水宗昭・真野和夫 (以上県文化課)

第2次調査 後藤宗俊・真野和夫・渋谷忠章・坂本嘉弘・讃岐和夫・橋爪啓史 (以上
県文化課) 杉崎重臣・羽田野光洋 (以上大分市教育委員会)

第3次調査 後藤宗俊・真野和夫・讃岐和夫・村上久和 (以上県文化課)
杉崎重臣・羽田野光洋 (以上大分市教育委員会)

第4次調査 後藤宗俊・真野和夫・羽田野光洋 (以上県文化課)
杉崎重臣・讃岐和夫 (以上大分市教育委員会)

第5次調査 後藤宗俊・真野和夫・坂本嘉弘・羽田野光洋 (以上県文化課)
杉崎重臣・讃岐和夫 (以上大分市教育委員会)

調査補助員

第1次調査 乙峠政己 (大分大学学生)、亀田修一 (九州大学学生)、下村悟史・栗
田勝弘 (別府大学学生)

第2次調査 亀田修一 (九州大学学生)、國尾 裕・平田豊弘・森裕行・福島政文 (以
上別府大学学生)、大分大学歴史研究部

第3次調査 亀田修一（九州大学大学院生）、福島政文・平田豊弘・森裕行（以上別府大学学生）

第4次調査 山下俊雄（別府大学卒業生）

4) 報告書の作成と執筆分担

5年次にわたる豊後国分寺跡の発掘調査はトレンチ調査が主体となったため発掘カ所は全部で58カ所にのぼり、当然それに対応する多くの遺構実測図が手元に残った。加えて膨大な量の出土古瓦があり、結果的にその整理におおむね1年半を要した。

報告書の執筆にあたっては、煩雑を避けるためまず各遺構毎の結論部分を前に置き、関係する個々のトレンチの遺構説明を後に付す記述法とした。したがって、内容的に若干の重複があるのはやむを得ない。また、遺物の項でも紙数の関係上総括的に述べたところがある。遺構図面はできるだけ掲載するよう努め、必要に応じて関係トレンチ配置図を付した。発掘報告部分の記述は原則として調査担当者があつたが、必ずしも十分に全体討議する機会に恵まれなかったところもあり、調査委員の先生方の指導によって真野が加筆した。

第1章 序 説

- | | |
|----------------|----|
| 1 位置と環境 | 真野 |
| 2 豊後国分寺の沿革と研究史 | 後藤 |
| 3 調査の経過 | 杉崎 |

第2章 遺跡の調査

第1節 遺 構

- | | |
|-----------------|--------|
| I 南門地区遺構 | 羽田野 |
| II 回廊および中門地区の遺構 | 坂本・羽田野 |
| III 薬師堂地区遺構 | 清水・羽田野 |
| IV 塔 跡 | 讃岐 |
| V 薬師堂北第2遺構 | 渋谷 |
| VI 溝遺構 | |
| (1) 西側溝各トレンチ | 羽田野 |
| (2) 「コ」字状張り出し部 | 真野 |
| (3) 塔西地区 | 坂本 |
| (4) 東側溝各トレンチ | 羽田野・讃岐 |
| VII 塔東地区の遺構 | 真野・讃岐 |

VII 東門および西門地区の遺構

- | | |
|-------------|-----|
| (1) 東門地区発掘区 | 讃岐 |
| (2) 西門地区発掘区 | 羽田野 |

IX その他の遺構

- | | |
|-------------|-----|
| (1) 北方地区 | 清水 |
| (2) 薬師堂西発掘区 | 羽田野 |
| (3) 地下式横穴 | 村上 |

第2節 遺 物

- | | |
|----------|-------|
| I) 瓦 | 真野 |
| II) 土 器 | 真野 |
| III) 鉄製品 | 真野 |
| IV) 石製品 | 真野・讃岐 |

第3節 小 結

第3章 考 察

- | | |
|-----------------|----|
| 1 豊後国分寺の伽藍 | 沢村 |
| 2 豊後国分寺跡出土の瓦当資料 | 小田 |

第4章 豊後国分寺の沿革および関係史料

- | | |
|--------------|----|
| 1 豊後国分寺の沿革 | 後藤 |
| 2 豊後国分寺跡の石造品 | 山下 |

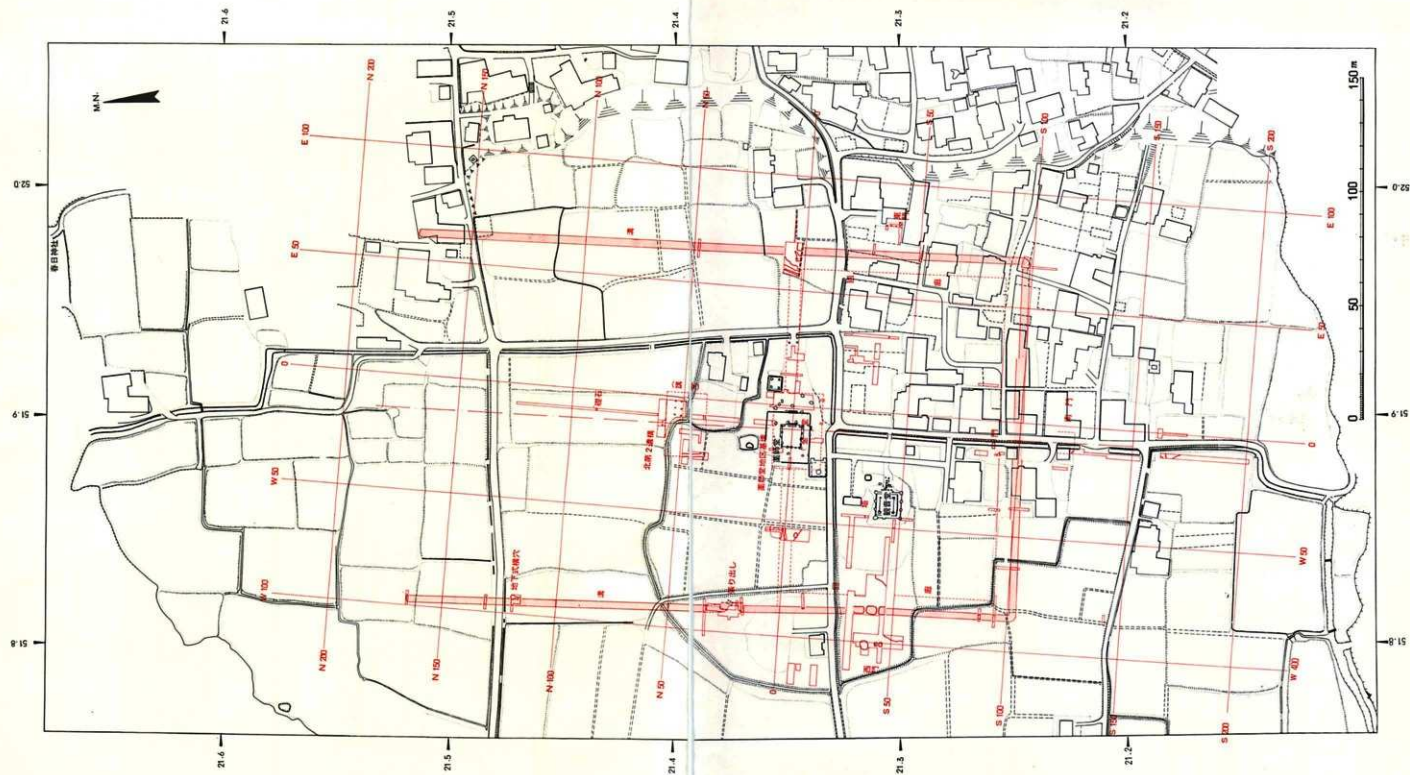
第2章 遺跡の調査

遺跡の概観…前述したように豊後国分寺跡の立地する河岸段丘の形状は、ほぼ直角二等辺三角形を呈している。すなわち、東側および南側は比高約10mの崖によって画され、長辺をなす北西側は丘陵裾部にあたり、国鉄久大線が敷設されている。段丘上面は現在大部分が水田となっているが、西側で標高32m前後、東側で27m前後の緩やかな傾斜地である。調査の結果判明した東西約182m、南北292mの伽藍域はこの台地の東側を占めている。（台地上の地割りについては別項で述べる。）面積にしておよそ53,000㎡の伽藍域の現況は、薬師堂・観音堂を中心とする現国分寺境内地および住宅地がそれぞれ約1/5を占め、残りが主として水田部分である。なかでも住宅が密集するのは薬師堂より南側の地区である。

調査以前の段階で確実な国分寺遺構としてその位置がわかるものに、現在薬師堂が建っている位置（薬師堂地区と称する）にある礎石群とその西南約40mの位置にある塔跡基壇（観音堂が建っている）があり、また中門跡はかつて礎石が発見されたことによってほぼ位置の推定がなされていた。そのほか南門・西門・東門などの伝承地が存在するが外見上それとわかる遺構を伴うものではなく、道路の辻などをあてた場合が多い。しかし国分寺跡のある段丘上の道そのものが、例えば南から南門を通過して薬師堂地区の旧堂宇に向う道や、同様に北側から段丘上に登って北門へ向う道あるいは南回廊をそのまま踏襲した道などがあり、国分寺の伽藍と密接に関係したものが多く、したがって所伝も極端に位置をとり違えたものではない。

トレンチの設定…調査の対象となる現薬師堂・塔跡を中心とした一帯、南北350m、東西200mの範囲を図化し、この中に4ヵ所の基準点を設置した。このうち、薬師堂地区に設定した基準点（ベンチマーク1と称する）を中心としてすべての測量が行なわれている。また、基準方位は調査の結果判明するであろう伽藍中軸線と大幅に違わないことが望ましいので、塔跡礎石を利用して一辺の方位を求めた。その結果、真北から3°50'38"東に振れた方位を調査基準方位と定めた。（磁北と真北の差は真北が磁北より6°21'42"東に振っている）したがって、トレンチの設定は地形や建物等による制約がない限りこの基準方位に合わせて行ない、文中および挿図におけるトレンチ位置の表示は、ベンチマーク1と基準方位によってつくられる座標を利用したものである。

基本層序…豊後国分寺跡の立地する段丘は地質的には中新世以降の堆積層である碩南層群に属す。場所によって多少の違いはあるが、表土層（又は水田耕作土）の下位の層序は、砂質の黒色火山灰土層(1)→砂質の黒色火山灰土層(2)→地山となる。火山灰土層は上下2層に分かれ、(1)が国分寺廃絶後の堆積であり、(2)とは色調・硬さ等に若干の相違がある。黒色火山灰土層(1)は場所によって堆積状況が大きく異なり、薬師堂の北方水田部や、塔の西側一帯では0.3～0.6mと深いが、塔の東側地区はほとんど堆積していない。遺構が検出されるのは多くの場合、その下位の地山と称する黄色土ないしは暗褐色土層である。さらに下位には円礫層が存在する。



第2図 豊後国分寺跡全測図

第1節 遺 構

1 南門地区遺構

伽藍のほぼ中軸線上には現薬師堂（推定金堂跡）から南へのびる市道とこれに沿う水路が走る。東側はすでに密集した住宅地となっており、西側は宅地面より約1mほど高い水田がある。

古来、現薬師堂の南150mほどの位置にある四辻付近を南門跡と伝えてきた。調査はこの四辻を挟んで南北に設定したトレンチ（第1～第4トレンチ）により行い、第1トレンチ北端において、南門跡西南隅と認められる基壇の一部を発見した。遺構は地下約60cmの深さの掘り込み地盤を施した版築層で、基壇端化粧とみられる栗石列によって縁どりされている。位置は薬師堂地区基壇の中心より約120mを測る。また、後述する薬師堂地区基壇遺構（推定金堂跡）および北第2遺構（推定講堂跡）によって想定される伽藍中軸線からは西4.5mの距離にあたる。

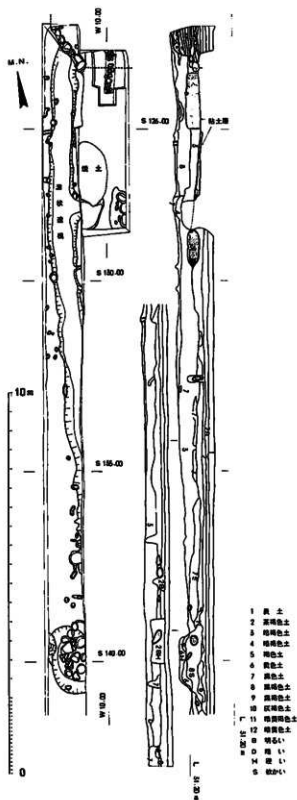
1) 第1トレンチ

①位 置

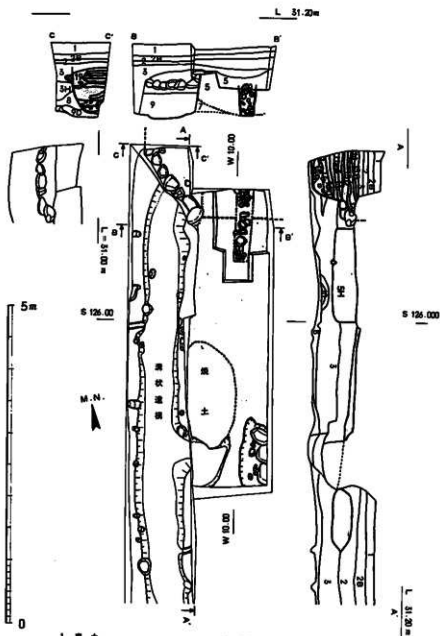
南門伝承地の北側水田部に設定したトレンチで、ベンチマーク1からの位置はほぼ(W 9.2～12.5m, S 123～154 m)である。

②遺 構

南門跡の一部とみられる遺構は、表土（耕作土）下40cmで検出された。黒褐色土を約60cm掘り下げて、内部に14層におよぶ版築を施し、きわめて丁寧につき固めた掘り込み基壇である。版築下部は黄褐色粘質土と黒色土（黒褐色土）の互層であるが、上部は黄褐～褐色粘質土を重ねたものである。なかでも基底部付近の版築（10・11層）には多量の小礫を粘質土に混入させよう入念な版築地盤を行なっている。基壇掘にあ



第4図 南門地区第1トレンチ実測図



- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1 表土 | 12 暗黄褐色土 |
| 2 茶褐色土 / 粘質土 | 13 黄褐色土 |
| 3 暗褐色土 / 黄褐色粒多く混入 | 14 暗茶褐色土 |
| 4 暗褐色土 | 15 暗茶褐色土 (小石混入) |
| 5 褐色土 | 16 黄褐色土 (多量の黄褐色土混入) |
| 6 黄褐色土 | 17 暗黄褐色土 (多量の黄褐色土混入) |
| 7 黄褐色土 | 18 黄褐色土 (小石、小石混入) |
| 8 黄褐色土 | 19 黄褐色土 (多量の黄褐色土混入) |
| 9 黄褐色土 / 黄褐色粒混入 | H 硬い B 明るい |
| 10 灰褐色土 | S 軟かい D 暗い |
| 11 暗黄褐色土 / 高砂層 | |

第5図 南門地区第1トレンチ南門遺構実測図

たる栗石列が1段遺存し、やや湾曲してN23°Wの方向を示している。ここでも塔跡と同様栗石積みの基壇化粧が想定されるが、発掘部分を基壇西南隅に相当するとした場合かなり鈍いカーブを描いて基壇隅が形成されることになる。また南門推定遺構の推定金堂跡基壇中心との距離は約120mである。

一方、掘り込み基壇の調査中、版築部分の南側に接して黄茶色粘土を分厚くつき固めた遺構が検出された。そのため東側に1.2×5mのトレンチを接続させ拡張し調査を進めたところ、基壇から南へ5mの間に遺構があることが判明した。粘土層は版築状をなすものでなくほぼ均質な層である。深さは一定してなく、掘り込み基壇に接する付近が深く約35～60cmあり基底部の一部は地山層に達する。南へ向うにつれてしだいに厚さを減じ10～20cmと薄くなっている。上面の高さは基壇裾にあたる栗石列の高さに一致し、一部版築上面を覆っている。内部には幅30cm深さ60cmの小渠をつめ込んだ排水溝を付設している。また粘土層南側には焼土が検出され、上面が焼けた部分がみられた。遺物は粘土層直上で陶器片が出土し、排水溝内の礫に混って瓦質に近い焼成の陶器攪鉢破片が発見された。粘土層はまだ東側にのびる模様で東西幅については確認できなかった。以上のことから、版築部南側の粘土層の時期は一応中世以後の作業と考えられるが、どのような目的でつくられた施設かは明らかではない。

その他に黄褐色の地山に掘り込んだ幅60cm深さ10cmほどの断面皿状をなす浅い南北溝が検出された。遺物の出土はないが、掘り込み基壇下より間層をおいてさらに下位に検出されたことから、国分寺創建以前のものである。

③土 層

水田耕作土の下位に5～10cmの深さで暗褐色土が遺構を覆っており、南門基壇の検出レベルは30.37mである。掘り込み基壇版築層最下部(レベル29.61m)はほぼ地山に達している。遺構より南側部分では黒色土～黒褐色土が分厚く堆積しており、とくに注意すべき遺構・遺物の検出はなかった。

2) 第2トレンチ

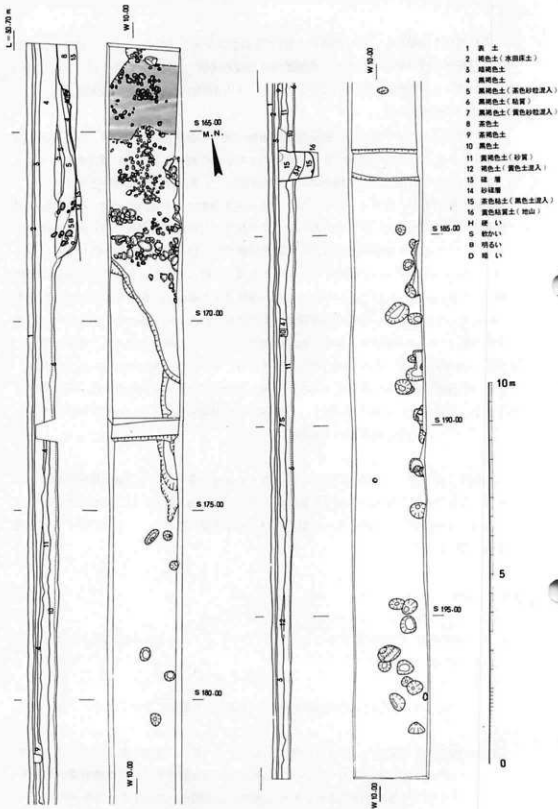
①位 置

南門伝承地の南側水田部に設定したトレンチで、ベンチマーク1からの位置はほぼ(W10m、S159～201m)である。

②遺 構

トレンチ北端において近世～近代の溝遺構が、中ほどから南側にかけて小ピット群が検出された。

まず溝遺構は西から南側へほぼ直角に屈曲するコーナー部分を発掘した。この付近では耕作土下約80cmで黄茶色の地山に達するが、この地山を約40cm掘り下げた形で溝遺構が存在する。溝中には多量の円礫が投げ込まれており、遺物として磨白、ごく小量の陶磁器片、瓦片なども混入していた。北側溝底の一部には踏みかためられたような形跡がみられる。この溝



第6図 南門地区第2トレンチ遺構実測図

遺構は現在トレンチと1.5mの間隔をおいて南北方向に排水路があるがその旧状とも考えられる遺構である。

トレンチ中ほどから南側にかけて存在する小ピット群は直径30～40cm、地山表面より深さ約15～30cmを測るが、前述の溝遺構の西側土手にあたり木根による攪乱が著しい。調査区内においてとくに建築物を想定できるような柱穴の組み合わせは認められない。

③土 層

水田耕作土下に暗褐色土および黒褐色土の堆積がある。北端の溝遺構内部は細かい茶色砂粒のまじった黒褐色土がレンズ状堆積を示し、中央部より北側に礫の落ち込みが著しい。溝底レベルは29.34mである。この部分で地山の状態は約30cmの深さの茶色土層の下位に礫層がある。

3) 第3トレンチ

①位 置

第1トレンチにおいて検出した基壇遺構を南門基壇西南隅とした場合に想定される基壇の西側6m付近に設定した。ベンチマーク1からの位置はほぼ(W18m、S115.5～122m)である。

②遺 構

南門に付設が想定される溝等の遺構の存在を探るために設置したトレンチである。表土下80cmで地山に達する(レベル29.58m)。遺構はトレンチ中央付近で直径30cmほどの浅い掘り込みが発見されたが、後述する東門跡で検出した外垣の柱穴とは明らかに異っている。小トレンチによる試掘の結果であり詳細については今後の精査をまちたい。

4) 第4トレンチ

①位 置

南北方向の水路および道路を隔てて第2トレンチの東側水田に設定したトレンチでベンチマーク1からほぼ(EW0m、S160.5～173.5m)に位置する。

②遺 構

水田の耕作土直下が地山(黄茶色土層)で、遺構・遺物はまったく検出されない。

II 回廊および中門地区の遺構

薬師堂地区基壇遺構の探索中東側第7トレンチにおいて、細かい砂礫土をまじえたごく固い版築層を検出し、回廊基壇の一部が遺存していることが判明した。そして、その後の調査によって、薬師堂地区東側境内では掘り込み基壇が発見され、ついで塔西地区では溝に接する幅5m前後の基壇が土塁状に遺り、南側溝遺構との関連においても、地山を削り出した回廊基壇の基底部の存在が確認された。これら一連の調査によって塔をとり込んで中門～推定金堂を結ぶ伽藍中心部の様相が一層明確なものとなり、その規模の大きさに改めて驚嘆した。すなわちおよそ東西140m、南北90mの範囲が回廊によって囲まれていることになる。各調査区で検出した遺構がそれぞれ異なるので、回廊基壇の規模について即断し難いがほぼ5m前後の幅を有するとみられ、梁間3mほどの単廊と推定される。また、推定金堂跡への取りつきはその後面つまり身舎の北側柱付近に回廊中軸線をおいている。

一方、中門遺構に関する調査はいまだほとんど進んでいない。現在の薬師堂から南約90mの地点で納屋の建築工事によって発見された礎石が遺っており、また中門にとりつく回廊(溝)調査の進展からも、その位置の推定はほぼ動かぬところである。すなわち推定金堂～中門の心々距離はおよそ92mと考えられる。しかし、中門にとりつく南回廊の形態についてはいまだほとんど不明部分がある。各トレンチで確認した基壇南端(溝)線が中門に近づくにつれて約1mほど北側にずれて一直線をなさない。また、南回廊西側部分で溝を半ば埋めて基壇を改築した形跡もみられる。将来、中門地区の調査と合わせて解明する必要がある。

なお、報告の都合上、中門から東西に延びる回廊に付随する溝(南側溝遺構と仮称する)はこの項で扱うこととする。

1) 第1トレンチ

①位置

薬師堂東側の境内に設定したトレンチである。ベンチマーク1からの位置は(E20m、N4.5～S3m)にあたる。

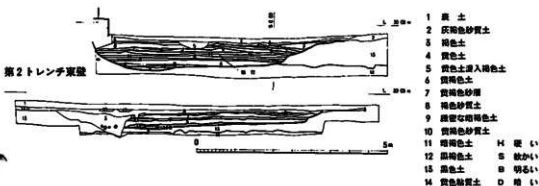
②遺構

検出した遺構は回廊基壇の掘り込み地盤である。南北断面形は底の平たい舟底状を呈し、検出面での南北幅約6m、検出面(レベル29.68m)より深さ70cmである。黄色の粘質土(地山)まで掘り込んで約70cmの厚さで堆積する黒色土を除いたうえ、内部に20層におよぶ緻密かつ強固な版築を行っている。検出面で東西に約3mの拡張を行ったが根締め石等は発見されていない。

③土層

境内全面に隣接地にある防火用水槽を掘った際の黄色土を敷きつめておりこれを除去すると版築層が検出される。版築層は黄色土～黄褐色土と褐色砂質土～黄褐色砂質土との互層できわめて固く仕上げられている。版築内部から瓦片、鉄釘が出土した。

第1トレンチ東壁



第7図 回廊第1・第2トレンチ断面実測図

2) 第2トレンチ

①位置

第1トレンチの西6mの位置に設定した。ベンチマーク1からの位置はほぼ(E13m、N7～S3m)である。

②遺構

第1トレンチ同様検出された遺構は回廊基壇の掘り込み部である。断面形状は底の平たい舟底状を呈するが、基底部(レベル29.13m)は地山まで達していない。南北幅5.2mまで確認することができるが北端に投乱部がある。版築は10層ほどに分かれ、堅緻である。

③土層

版築土層はほぼ第1トレンチと同様である。

3) 第3トレンチ

①位置

薬師堂の西側、西側溝遺構との中間付近に設定した。ベンチマーク1からほぼ(W53～57.5m、N8.8～S11m)に位置する。

②遺構

2次調査で小トレンチを設定したところ、水田耕作土直下に段落ちが確認され、地山削り出しの基壇遺構と判断した(第2次調査概報)。ところが、位置的にやや南にずれるところから4次調査で再び拡張したところ、段落ちは古墳時代の溝遺構であった。結局、この付近はすでに50cm以上の地下げが行なわれ、回廊基壇遺構は遺存しないことが判明した。

なお、第4次調査の拡張で大規模な瓦溜遺構や大形土坑などが発見された。詳細はⅨその他の遺構(2)の薬師堂西発掘区で述べている。

4) 塔西地区

塔西地区では回廊・溝・西門に関する遺構を発掘した。ここではこのうち回廊遺構について詳述する。本来、回廊および溝遺構は密接な関係をもって構築されており当然切り離して論じるべきではないが、報告上詳細は別項で扱うこととし、必要に応じて触れる程度にとどめる。

塔跡西側の境内地は塔跡基壇端を起点として西約63mまでトレンチによる調査を行い主要遺構部分について拡張する方法をとった。調査の目的はまず西側回廊の位置を決定することにあった。その結果、外側に大規模な溝遺構をとまなう西側回廊基壇が判明し、さらに溝遺構の追跡によって国分寺四至の調査に関して重要な進展をもたらすに至った。

①位置

ベンチマーク1からほぼ(W54~84m、S30~46m)に、1~4のトレンチあるいは発掘区を設定した。

②遺構

回廊基壇遺構は第3発掘区を中心として調査したもので、第2次調査概報では土塁状遺構として報告している。

基壇の構造は一種の削り出し基壇で西側は溝を掘削し、東側は塔に向って緩傾斜をつけることによって相対的に約1.3mほどの比高が生じている。このため、基壇東側ではすでに礫層に達しており、礫にまじって瓦片、土師器碗などが出土している。基壇上面は版築によって覆われ遺存のよい部分で約40cmの厚さがある。基壇上面のレベルは現状で31.65mである。これはほぼ塔基壇上面のレベル(31.87m)に近い。基壇上面には直径10~30cmの扁平栗石数個が散在している。東側溝中からも瓦にまじって若干数の栗石が存在したことからみて溝側に栗石列に縁取られた狭い犬走りがつくと推測される。このように考えて現状をみると、溝際に3個の栗石がみられさらにこれと5mの間隔をおいて東側に5個の栗石が並んでいるが、これをそのまま基壇幅とすることは若干疑問が残ろう。また、基壇上には小形の柱穴が多数検出されており、南北方向におよそ3列をなしている。大部分直径30cm弱、掘り込みの深さ30cm前後の規模でその配置は溝際に最も集中し、およそ2~2.4mの間隔で東側に2列ある。一番東側の列は先に基壇端を示すかとみた栗石列より西側70cmの位置に並ぶ。したがって、非常に不規則であるが大まかに東西幅4.7mでなんらかの構築が行われたことは確実である。しかし、これらの柱穴はその規模・配置からみて回廊本体の遺構とは考え難く、建築に当って使用した足場等の構築によるものとみている。

基壇側には一部に緩斜面のテラス状の張り出しが存在し、ここが西門から塔に至る通路であったことを示している。テラス状張り出し部は回廊基壇端と想定した位置から東8m付近では周辺を硬い粘土で縁どりし、内側に黄褐色土を盛り上げて築いていることが知られた。

回廊基壇と塔基壇との間は南北14mの間隔で2本の東西トレンチを設定している。その結果、どちらも目的不明の深い掘り込みがあることがわかった。第1トレンチでは塔跡基壇西

刃より測って9m～21mの間が茶褐色粘質土の地山を約1.8mほど掘り込んでおり底部のレベルは27.83mである。内部は遺物をまったく含まない黒色土が主体となって一部に版築状に整地した形跡がみられる。第4トレンチでは塔基壇西辺の延長線から測って西6m付近から同様の段落ちがある。2つのトレンチで確認した深い掘り込みは一連のものとみられ、西門地区で検出したような不定形大形土壇と呼ばれる遺構と考えられる。この不定形大形土壇のつくられた理由ははっきりとは分っていないが、現在のところ基壇構築等に必要な土の採取場と考えるのが最も妥当のようである。

③遺物

回廊基壇上において表土除去中に蔵骨器とみられる墨書された土師質壺形土器が発見された。溝に近い位置でありとくに注意されるような埋納施設はもっていなかった。鎌倉～室町期のものである。また、基壇東側段落ちの礫にまじって完形の土師器碗が出土した。これには高台内側に「仏」字のヘラ描きがある。

5) 南回廊地区

中門へとりつく南回廊関係のトレンチはこの項で扱うが、トレンチ番号は溝関係トレンチの番号に一致させている。

1) 第13トレンチ

①位置

ベンチマーク1からほぼ(W64m、S94～104m)に位置する。

②遺構

遺構は2時期に分かれ、溝を掘削した時期(1次遺構)と溝上に半ばかかる形で版築し基壇を築いた時期(2次遺構)がある。1次遺構の溝は地山上面で幅3m、深さ1.2m(溝底レベル28.36m)あり、この溝を南縁とする回廊を想定している。

1次回廊基壇は地山上に版築を行わずに地山上に回廊を築いたことも考えられるが、基壇が2次基壇構築時にすでに完全に崩壊していた、あるいは、削り取ったことも考えられ明らかではない。地山上面のレベルは29.56mである。また、基壇はトレンチ内で南側溝から7m近くあるが、後述する14トレンチにおける幅6mの基壇の北側につく浅い雨落ち溝は遺存していない。一次回廊の地山面には溝側で3個の小ピットが検出されたが、塔西地区回廊基壇でみられた足場用と想定される柱穴と同じものとは断定し難い。

2次基壇は表土下約80cm(レベル31.4m)で検出され、溝内に1.8m張り出した形となっている。溝内版築は黄褐色粘質土、黒褐色砂質土などにより13層約1.7mほど行われている。したがってこの時期には溝は完全に埋まっていたことになり、溝内堆積土層の状況もそれを示している。この2次基壇には南端に直径40cmの柱穴、北側に幅1.7mの溝が検出されている。溝の深さは遺存する2次基壇上面から1mあり、1次基壇(地山)を20cmほど掘り込んでいる。

③土層

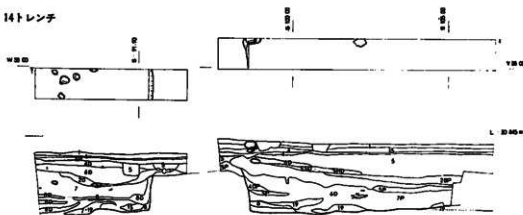
かつて行われたかさ上げも含めて水田に関する土層が5層約70cmある。この下位に遺構面を厚いところで約30cmほど覆う暗茶褐色～黒褐色の砂質土がある。2次基壇は溝内張り出し部分の版築を除けば暗褐色砂質土または黒褐色砂質土が主体をなしており、自然堆積土、溝内堆積土との判別が非常に困難をきわめた。

II) 第14トレンチ

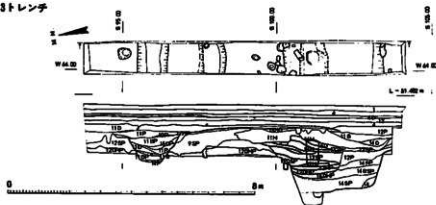
①位置

ベンチマーク1からほぼ(W38m, S88.5~107m)に位置し、中門推定地と第13トレンチの中間にあたる。地形の関係上連続してトレンチを設定することができなかった。

14トレンチ



13トレンチ



- | | | |
|--------------|-----------|--------------|
| 1 表土 | 9 褐色砂質土 | 17 黒褐色粘質土 |
| 2 褐色土 | 10 灰褐色砂質土 | 18 黄褐色粘質土 |
| 3 灰褐色土 | 11 茶褐色砂質土 | 19 黄色ブロック混入土 |
| 4 茶褐色土(水田層土) | 12 黒褐色砂質土 | 20 明るい |
| 5 黒褐色土 | 13 黄褐色砂質土 | D 暗い |
| 6 黄褐色土 | 14 黒色砂質土 | H 硬い |
| 7 黒色土 | 15 褐色粘質土 | S 軟かい |
| 8 黄褐色土 | 16 茶褐色粘質土 | P パズル混入 |

第9図 南回廊地区トレンチ実測図

②遺構

検出した遺構は南回廊基壇遺構で基壇規模が判明した。地山部分で測った基壇上面幅は6.11m、レベルは29.77mである。地山上の版築が約30cmほど遺存しているとみられるが、調査が中央部分におよんでいないので、詳細は不明である。回廊基壇は南側を1.3m、北側を1.1m掘り下げて、一見地山削り出しの基壇を構築したようにみえる。しかし南側の溝遺構（溝底レベル28.44m）は本来3m前後の幅で立ち上るはずのものである。また北側は地山上面のレベルで幅3mほどの浅い溝が断面に存在するので、掘り込み部分は回廊が完成した段階では埋められていたことは確実である。断面観察においても暗黄色土層が水平に数層入る整地層に特有の状況を示している。したがって、回廊北側部分の段落ちは、塔西地区で数ヶ所みられた目的不明の掘り込み遺構（不定形大形土壇と称した遺構もある）と同じ性格の遺構とみることができる。しかし南側段落ち内の堆積状況は回廊基壇側からの流入が主体をしており、しかもトレンチの範囲でみ限り後世、改築を受けた形跡はない。当初から幅広い溝であった公算がつよい。ただ問題として残るのは、基壇南端の位置が第13トレンチと溝遺構東南隅とを結んだ線よりも約1m北側に入ること、南回廊全体の構造を考えるうえでも今後の精査が必要である。

回廊基壇は検出した地山面で現地表から1mの深さがある。南北の基壇端の上位には小溝遺構あるいは栗石積みの痕跡などがみられ、回廊上が後世通路として使用されたことを物語っている。

③土層

トレンチは北側が水田、南側が宅地で中間に水路がある。水田と宅地のレベル差は30cmあるが遺構には影響を与えていない。回廊基壇北側は前述のように掘り込みのあとを暗黄色土、黄色土ブロック混入黒色土などを交えながら黒色土を主体として埋めた整地層上に回廊雨落ちがつくられている。整地層上部および、溝内には瓦片、栗石等が入っている。一方、回廊南側溝の堆積土は基壇側からの緩やかな流入を示しており、基壇に近いあたりでは黄色土ないしは黄色土を含む層が堆積する。基壇端から3.5mほど離れた溝底に近い黒色土中でほぼ完形の平瓦が出土している。

Ⅲ) 第15トレンチ

①位置

かつて礎石の発見された中門推定地（納屋）北側に水路あるいは井戸を避けて小トレンチを設定した。ベンチマーク1からほぼ(W14m、S80.5~94m)に位置する。

②遺構

トレンチは水路をはさんで南北2ヶ所に設定したが北側トレンチでは遺構は存在しない。南側トレンチでは基壇遺構とみられる地山の段落ちが検出された。トレンチの設定位置からして中門基壇である可能性が高いが後世の溝遺構その他による攪乱が著しいうえ、小トレンチであるため、今ひとつ詳細を欠いている。基壇上面のレベルは現状で29.05mを測り

基壇直上に土管が埋設されている状況からしても上部に版築層が遺存する余地はない。基壇端北側は現在2段に削られているが、もともと溝の掘り込みとみられる。掘り込み内部に堆積した土層の状態は安定しており、下層に落ち込んだ多量の栗石・瓦片中にまったく新しい遺物を含んでいない。レベルは最も深いところで、28.10mである。この掘り込みが推定するように溝遺構とすると多量の栗石が落ち込んでいることは南回廊遺構にともなう溝遺構や西側あるいは東側溝遺構と著しく異なる点である。したがってここに注目すれば、この溝は中門基壇ときわめて近い位置にあり、しかも中門基壇端化粧は塔跡などと同様栗石積みであった可能性が強いということになる。溝の位置は第14トレンチで確認された回廊基壇北端を延長した線よりさらに北側へ1mほど張り出す。

③土層

基壇段落ち部が2段に削られたのは後世の溝が一部これにかかっているためで溝中からは陶器の擂鉢破片や染付の施された磁器などが出土している。基壇にともなう溝遺構の堆積土は黄色土の粒子を含む暗茶褐色土あるいは黄褐色土が主体をなしている。その上層を覆う黒褐色土は北側トレンチにおいて地山上面を覆っている層と同一のものである。

④遺物

基壇北側の溝底より軒丸瓦Ⅴ類が、表土中より軒丸瓦Ⅱ類が出土した。

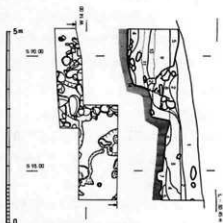
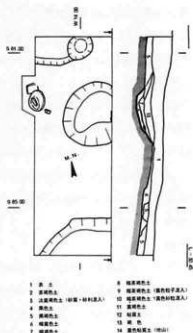
Ⅳ) 第16トレンチ

①位置

ベンチマーク1からの位置は(E15m、S80~89m)である。トレンチは回廊基壇の位置を踏襲したとみられる東西路の北側に接した宅地内の畑に設定した。

②遺構

畑の耕作土20cmほどを除去すると黄色土(地山)にかわる。とくに遺構は検出されていない。



第10図 中門地区第15トレンチ実測図

III 薬師堂地区遺構（推定金堂跡）

薬師堂は塔跡の東北にあって現国分寺では観音堂、鐘つき堂などとともに江戸中期の建築と伝えられる。東面する3間×4間の入母屋造で室内には丈六の木造薬師如来像が安置されている。

薬師堂は自らの礎石およびその基壇(栗石積み、東西21m×南北19m)端の一部などに、柱座造出しをもつ大形礎石をそのままあるいは分割して使用している。

また基壇外の東側にも礎石とみられる7個の巨石が半ば地に埋もれて存在する。

総計40数個にのぼるこの地区の礎石によ

って古くからここに大規模な堂舎が想定され、往時の国分寺伽藍の中心となる建物すなわち金堂跡であろうという推定がなされてきた。本報告書においてもほぼ金堂跡であろうとの推定に立ちながらも、なお全域の伽藍が十分明らかにされていないという現状をふまえ、一応調査時からの名称である「薬師堂地区基壇遺構」を用いることとする。

今回の発掘調査では第1次調査および第4次調査によって基壇の規模、基壇地業、礎石の状況、回廊のとりつき等についてほぼ明らかにすることができた。このうち第1次調査では第2次以後の調査の指針を得るため中心伽藍と目される遺構の調査によって伽藍中軸線を確定することを目標として当基壇遺構の探索を行なった。一方第4次調査は基壇遺構の礎石調査であり、基壇遺構東部に遺る5個の礎石の現状を調べた。

調査の結果、当薬師堂地区には大規模な掘込み地業の存在することが判明した。各トレンチで検出した掘込み地業のいわゆる掘込み線は各辺とも必ずしも一直線でこれを結ぶことはできない。したがって、その規模についてもはなはだ確定し難いものであるが、一応1次および4次調査の結果を勘案すると、東西32.6m、南北21.6mの数値を得る。また基壇版築については、現薬師堂基壇と重複する部分で西北部に設定したトレンチにおいて固く叩きしめられた基壇版築が遺存していることがわかった。遺存する基壇版築の高さは約60cmである。

明らかにし得た掘込み基壇の構造は次のようである。まず黄色土層上面を覆う深さ約70cmの軟弱な黒色火山灰土を排除し、さらに黄色土層を40cmほど掘り下げて逆台形の掘り方をつくった後、その中に人頭大の栗石を敷きつめる。栗石の敷き方は場所によってやや疎密がみられる。版築の最下層つまり敷きつめた栗石を完全に覆う高さまでの土層は上部ほど固くつき固めていない。また土質も黒色土をまったく混入しない。この上部を黒色土を半ばまじえた黄色土で丁寧な版築を行なっている。調査した範囲ではどのような基壇端化粧を施していたのかわかっていない。



第11図 薬師堂東側の礎石群

一方、薬師堂基壇東側での礎石調査の結果、これらの礎石はすべて移動しており、原位置の痕跡すらうかがうことはできなかった。この地区に現存する礎石は東北に隣接する鎗つき堂および南西隅の鉄地藏台座に使用されたものまで含めると完全なものや分割された礎石の数は47個以上にのぼる。このうち表面からの観察で柱座または地覆などの造り出しのあるものは10個ある。これらに使用された石材は二種類あり、一つは塔跡礎石と同質の溶結凝灰岩質のもので、他の一つは硬質かつ緻密な凝灰岩である。薬師堂地区では圧倒的に後者が多い。

さて以上のような掘込み基壇を中心とした調査の結果から、上部の基壇規模さらにその上に建っていた建物の構造等に多少ふれてみると、掘込み基壇と上部基壇との側縁部における関係が十分に明らかにされていないことを前提にしているが、掘込み基壇の規模東西32.6m、南北21.6mはそれぞれ天平尺を29.6cmほどとすると110尺、73尺を企画したものと考えられよう。

この基壇上に建つ建物については礎石等の配置など現状ではまったく復原の手掛りはなく推定によるしかないが、基壇の出については北第2遺構(推定講堂跡)よりひとまわり大きい堂字なのでその復原数値(11.5尺)より大きい12.5尺ほどと考えて、7間×4間の建物を検討してみる。

まず、桁行では、基壇正面長と基壇の出により桁行全長は

$$110\text{尺} - (12.5\text{尺} \times 2) = 85\text{尺}$$

となる。さらに、この数値を7間に割り付けると、

$$85\text{尺} = 12\text{尺} \times 7 + 1\text{尺}$$

すなわち、中央の間を13尺、脇間とこれに隣接する間を12尺とみることができる。

つぎに、梁間についても同様にして、

$$73\text{尺} - (12.5\text{尺} \times 2) = 48\text{尺}$$

となり、これを4間に割り付けると、

$$48\text{尺} = 12\text{尺} \times 4$$

すなわち、身舎・脇間とも12尺となって桁行の結果ともうまく適合する。

以上のような操作によって得られる建物の復原案は、基壇の出を12.5尺(3.70m)とすると、

基壇正面長 110尺(32.56m)

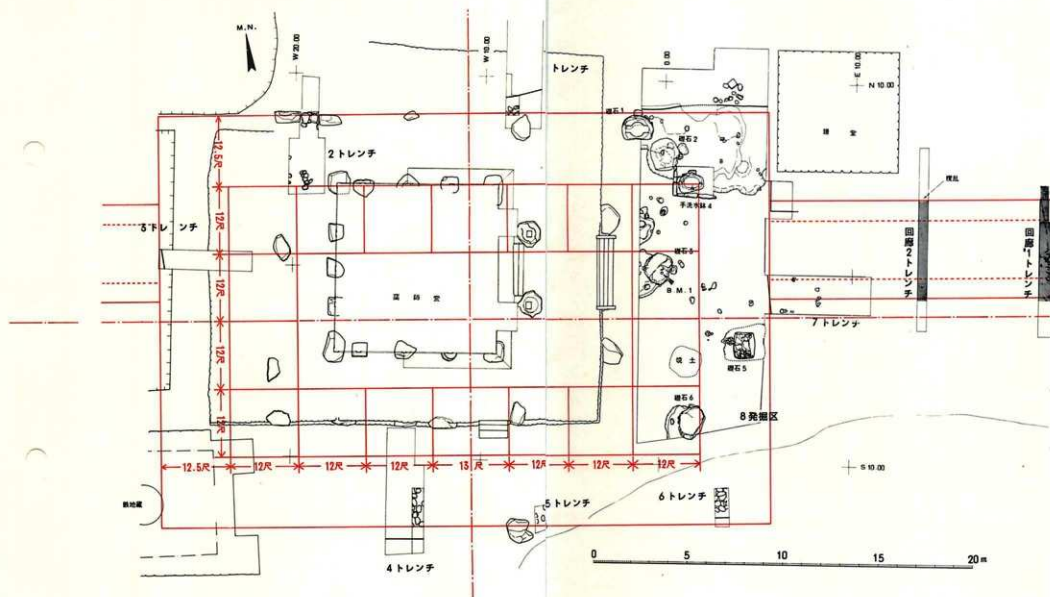
基壇側面長 73尺(21.61m)

建物桁行 85尺(25.16m)で7間(12+12+12+13+12+12+12)

建物梁行 48尺(14.21m)で4間(12+12+12+12)

である。

一方、このようにして復原された建物にとりつく回廊の位置は次のようにして求めることができる。回廊遺構は前項で述べたように薬師堂地区基壇遺構の東側8mと14mの位置で断面調査した舟底状の掘込み基壇である。掘り込み部分のうち、基壇基礎部として十分な厚みをもつのは5～6mの幅とみられる。したがって、この間に回廊中心を求め、先に想定した建物の東西中軸線と平行に回廊中軸線をとると、それはほぼ身舎の北側柱付近となる。



第12図 薬師堂地区遺構実測図(1/20) (赤は想定復原図)

1) 第1トレンチ

①位置

現薬師堂基壇の北側、第1次調査においてベンチマーク1から北へ8.99m、西へ5.68mの地点を基点として北方トレンチを130m設定するが、その最初のトレンチにあたる。

②遺構

掘込み基壇の北側端部。現地表下80cmの深さで掘込み基壇側端線を検出した。検出した北側端線は東側で北に振っている。掘込み基壇の構造は検出面より深さ1.1mほど掘込んで土を排除した後に人頭大の栗石を雑然と敷き、その上部を版築する。栗石は掘込み側端に密接せず20〜30cm内側から置かれており、これは他のトレンチでも同様である。断面でみると掘込み側端は地表に対して垂直ではなく、傾斜して掘られるので、掘込み内部の土を取り除いたあとの全体の形状は逆台形となる。創建当初の版築は検出面つまり、創建当時地表であった黒色土上面のレベルまで遺存している。

③土層

掘込み検出面（レベル 29.75m）より深さ70cmは黒色火山灰土層でありその下位には黄褐

1 トレンチ西壁

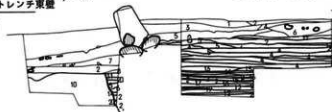
L = 30.855 m



- | | | |
|---------------|-----------------|----------------|
| 1 表土 | 11 黒褐色土・黄褐色土混入 | 21 淡黄褐色土 |
| 2 黄褐色土 | 12 黄褐色土 | 22 暗黄褐色土 |
| 3 黄褐色土・黄褐色土混入 | 13 黄褐色土・淡黄褐色土混入 | 23 黄褐色土・黄褐色土混入 |
| 4 淡黄褐色土 | 14 灰黄褐色土 | 24 黄褐色土・地山 |
| 5 黄褐色土 | 15 黒色土 | H 礎い |
| 6 黄褐色土・黄褐色土混入 | 16 黄褐色土 | S 礎かい |
| 7 黄褐色土・しゅくい混入 | 17 灰黄褐色土 | B 礎かい |
| 8 黄褐色土 | 18 灰黄褐色土・黄褐色土混入 | D 礎い |
| 9 灰黄褐色土 | 19 灰黄褐色土 | |
| 10 黄褐色土・バリス混入 | 20 黄褐色土・黒色土混入 | |

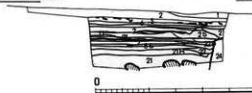
2 トレンチ東壁

L = 31.05 m



3 トレンチ東壁

L = 30.015 m



第13図 薬師堂地区トレンチ断面実側図

色土(地山)がある。この黄褐色土を40cmほど掘り下げたところから基壇を構築している。基底部に投げ込んだ栗石上面を覆うまでの黄褐色土は上部の版築ほど十分につきかためられてはいない。これを含め深さ 110cmの掘込みの間に15層以上の版築層が確認された。掘込み内の版築は下半部では黒色土と黄褐色土の互層から成り、上半部は黄褐色土が主体である。掘込み面より上部に約30cmの厚さの版築状の疎混りの盛土がみられたが、内部に漆喰の混入があり後世のものと思われる。

2) 第2トレンチ

①位置

現薬師堂基壇の北側、第1トレンチの西10mの位置。

②遺構

掘込み基壇北側端部。地表下80cmで掘込み基壇側端線を検出した。上部基壇の版築も高さ60cm遺存している。掘込み基壇部分を60cmほど掘り下げたが基底部まで確認するに至らなかった。現土壇部分上面には隙があたかも根石状に集中した部分があるが当初の版築層より上位にある。トレンチ東側断面には現薬師堂北隅礎石の掘込みがみられる。

③土層

トレンチ北側すなわち基壇外周部分では創建当初の地表とみられる黒色土上面(掘込み検出面レベル、29.87m)まで深さ80cmほどあり漆喰や小礫を含む黒褐色土～茶褐色土で覆われている。基壇側からの流れ込みの状態である。基壇上は約15cmほど同様の土層で覆われて、現薬師堂基壇を構成する。その下位に創建当初の整美な版築層が遺っている。トレンチ中央部にある分割された旧礎石および栗石は現薬師堂基壇端の一部を成すものである。このため基底部までの掘下げ確認を中止した。栗石上面のレベルはほぼ残存する版築上面と一致するので旧基壇北縁を踏襲したものとも考えられる。

3) 第3トレンチ

①位置

現薬師堂の西側。ベンチマーク1より西 22.25mを基点として西側に設定した。

②遺構

掘込み基壇西側端部。現薬師堂基壇より西側畑地において検出したので、位置のみ確認して掘り下げは行なわなかった。検出レベルは 29.87mである。

③土層

畑地耕作土直下において掘込線を検出。

4) 第4トレンチ

①位置

現薬師堂の南側、東西道路に接する地点をトレンチ南限とする。その位置はベンチマーク1より(W13m、S14.75m)である。

②遺構

掘込み基壇の南側端部。現地表下50cmで黄褐色土を掘り込んだ側端線を確認した。版築層を約40cmほど掘り下げると密な状態ではないが、栗石敷きが行なわれている。栗石は掘込み側端より約25cmほど間隔をおいて敷かれている。

③土層

南側端検出面（レベル 29.365m）より約30cm上部まで版築が遺存している。版築層より上位は、瓦片、礫を含む版築状の土層である。現薬師堂基壇南外周に当たるため数次にわたって整地した状況がうかがえる。掘込み基底部レベルは28.7mで、栗石を覆う淡黄褐色土層は約30cmの深さあって他のトレンチでも確認したように固く叩きしめられていないのが特徴である。

5) 第5トレンチ

①位置

第4トレンチの東6mに小トレンチを設定した。

②遺構

掘込み基壇南側端部。栗石敷き基底部まで確認した。

6) 第6トレンチ

①位置

第4トレンチより東16mの地点。

②遺構

掘込み基壇南側端部。栗石敷きの基底部まで確認のうえ、土層をみるため掘下げを行なった。栗石敷きはここでも掘込み側端より30cm内側から始まっている。

③土層

トレンチ設定位置が雑木林中のため根の擾乱層が40cmほどあって、上部の土層が判然としない。ここでも黒色土、黄茶色土を掘込んでおり、版築土層の検出レベルは29.42mである。栗石敷き部分を覆う黄茶色土層は約60cmほどあって、調査したトレンチでは最も深い。掘込み基底部のレベルは、28.63mである。基底部下の掘下げ調査では地山である黄茶色土層は下位に向かってしだいに砂質が強くなり、レベル27.9mほどで礫層に達する。自然礫層の検出面レベルは塔東地区におけるそれより24cmほど高い。

7) 第7トレンチ

①位置

現薬師堂の東側、ベンチマーク1の東2mに設定。

②遺構

掘込み基壇東側端部および回廊掘込み基壇。トレンチ設定位置がちょうど回廊掘込み基壇内部に当たったため東側端部の検出にとどめた。検出した東側端線は北側でやや西に振っている。

8) 第8発掘区

①位置

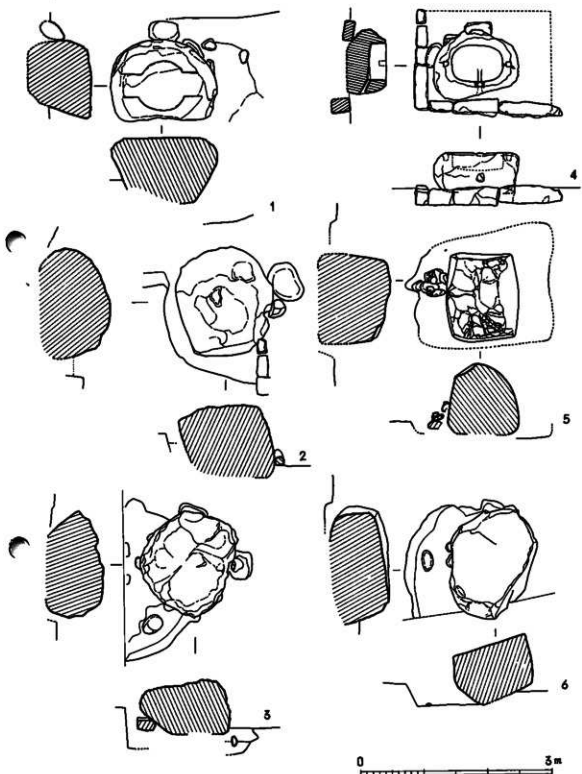
現薬師堂基壇の東外周部について東西6.5m、南北21.5mの発掘を行なった。

②遺構

掘込み基壇北及び東側端部、回廊掘込み基壇の取付き部分。発掘区の北側には版築層を約50cmほど掘り取った跡がある。掘り跡の底部レベルは29.05mで一部に敷かれた栗石がのぞいている。掘込み基壇北側端部の検出レベルは29.44mである。第1、第2トレンチおよび第8発掘区において検出した北側端の掘込み線は、図上で必ずしも一直線とはならずかなり出入りがあることがわかり、掘込み基壇部分のみで復原した場合規模および方位についてかなり厳密性を欠くことが確認された。北側版築部分にある掘り跡には黒褐色土が埋められ、とくにつぎ固めたような形跡はなかった。また遺物の出土もない。

一方回廊基壇の掘込み部は北側のみの確認ではあるが、薬師堂地区掘込み基壇北東隅から約5.8mの位置に検出された。取り付け位置の復原は回廊第1・第2トレンチの遺構を中心として、回廊全体の位置関係によって決定したもので、実際に検出した掘り込み部の位置よりやや北にずれている。

さらに発掘区にある5個の礎石周辺について版築層を精査した結果、礎石は北側根石上に据えられた一個を除いて新しい時期の掘込み内に逆むきに転落している状況がわかった。版築の遺存レベルは29.6m～29.4mであり礎石原位置の判明したものはない。また北側根石上に据えられ一見原位置のように見える円形柱座をもつ礎石(第14図1)にしても礎石下の土層からみて後世この位置に据えられたものである。

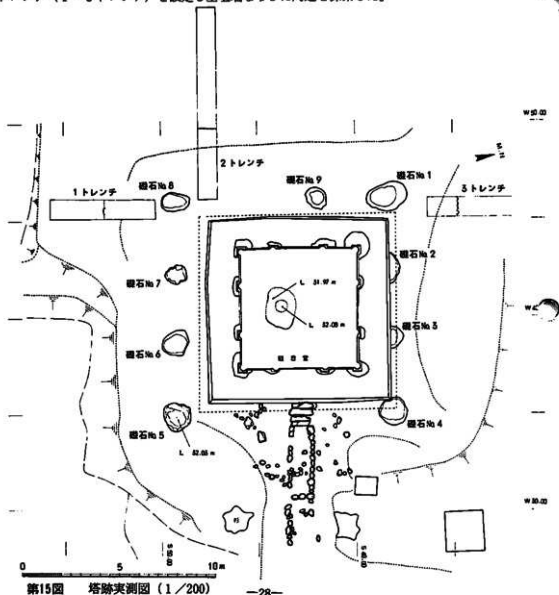


第14图 薬師堂地区第8発掘区礎石等実測図

Ⅳ 塔 跡

塔跡は、当国分寺跡でもっとも遺存状態のよい遺構である。現在その基壇上には、江戸中期の建築と伝えられる観音堂が、杉の木立ちや竹林に囲まれ閑静なたたずまいをみせている。

塔跡礎石は観音堂基壇下において全貌は明らかでないが、南側4個、北側4個、西側1個の計9個および巨大な心礎がほぼ原位置を保っている。礎石は溶結凝灰岩の軟石材を使用しているため全体に大形である。とくに須弥壇下の土壇に半ば埋まっている心礎は長径約2m、短径約1.5mと巨大で、中央部に径60cm前後、高さ11cm（3寸6分強）の円形出桁式造出しをもつ。塔跡基壇の周囲は東側を除いて客土されており（昭和9年の付近一帯の大火後に焼土、瓦礫等を基壇周辺に盛り上げている）外見上基壇の規模、基壇端の様子など一切わからない。調査は基壇の南北および西側にトレンチ（1～3トレンチ）を設定し基壇端ならびに周辺を探索した。



調査の結果、栗石積みの基壇端化粧を施した一辺18m強の基壇が確認された。基壇の構築にあたっては、ここでも薬師堂地区基壇遺構（推定金堂跡）と同様地下の掘込地業を行っていることが判明した。瓦、土器などの遺物の出土状態は西側、北側において多量の瓦片の堆積があった。とくに北側下層では基壇端の栗石積みに立てかけられたような状態で平瓦や丸瓦が検出され、ほぼ完形の唐草文軒平瓦はじめ軒先瓦も多数出土した。出土状態は塔崩壊後基壇上に堆積した瓦類を基壇下にかき落した状況を示している。

塔跡は、薬師堂地区基壇遺構（推定金堂跡）あるいは薬師堂北第2遺構（推定講堂跡）などが後世著しい改変を受けたのに対し、廃寺となったころの状態が比較的良好に保たれた遺構のひとつである。それは出土遺物、とりわけ瓦類の種類と量に如実に反映している。すなわち、軒先瓦では、軒平瓦4種類すべて、軒丸瓦はⅠ類とⅤ類を除く4種類が検出され、また、平瓦・丸瓦の出土量は総数14000点以上にのぼっている。

さて、現在基壇上に遺存する礎石群がほぼ原位置であるとして、塔初層のプランを推定すると次のようになる。まず塔初層の一辺長（ここでいう一辺長とは柱心々距離をさす）については、個々の礎石の位置および上面の状態に規定される。したがって礎石上で柱を載せることが可能なおよその範囲を求めると、第16図のように大形礎石を使用した四隅よりも小形礎石の礎石No3、No7、No9によってより限定を受けていることがわかる。その範囲はおおよそ50cm四方くらいである（四隅礎石の場合は約80cm程度）。したがってこれらの礎石上に径30～60cm前後の柱を建てることを想定した場合、柱中心の位置はごく限られてくることがわかる。すなわち、柱を建てることが可能であるとした一辺50cmの方形の中心位置付近とみてほぼ間違いはない。四隅の場合も同様にして礎石の振り中心位置を求める。ここで礎石No3、No7、No9の振り中心点を通る正方形を作り、四隅礎石の振り中心点付近にそれぞれの四隅を求めると、一辺11m強の正方形ができる。前述のように、礎石No3、No7、No9においては中心位置を大きく動かすことはできないから、おのずから塔初層の一辺長は、ここで求めた11m強という値に極めて近いことが推定される。

（礎石No3、No7、No9の中心位置を振り中心点から直径20cmの中と考えた場合で可能な一辺長の最大値は11.2m、最小値は10.8mを得る。）また、その場合礎石No3とNo4の振り中心間距離（すなわち脇間）は3.7m強となり天平尺に換算すると完尺12.5尺（3.713m）に近似している。よって先に求めた一辺長と合わせて、

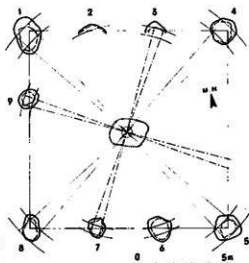
①12.5尺等間の場合

一辺長 11.10m

②12.5尺—12尺—12.5尺の場合

一辺長 10.95m

の二つの場合が適合しよう。このほか12尺等間の場合（一辺長10.66m）、13尺—12尺—13尺の場合（一辺長11.25m）



第16図 塔初層の復原

などが考えられるが、いずれもやや不適合である。また基壇一辺長は発掘の結果では、南トレンチでの基壇端石積が不明のため厳密性を欠くが一応、18m強という値を得ている。したがって柱中心から測った初層基壇の出はおよそ12尺(3.55m)とみられる。初層一辺の真北からの方位は先述した①と②の場合で柱中心位置がやや異ってくるが、①の場合でおよそN 2°40' E、②の場合でおよそN 3°40' Eとなる。

礎石群の示すレベルは絶対高で心礎中央部が 32.08 m で遺存する他の礎石も 32.00 ± 0.03 m におさまる。これに対し北および南トレンチによる発掘の結果、基壇周辺のレベルはおよそ 30.6 m であることがわかり、基壇上に礎石が10cm前後出るとして基壇の高さは約 1.3 m ほどとなる。

豊後国志によれば塔をはじめとする伽藍は大友の兵火により灰燼に帰したとあるが、今回の塔跡の調査でそれを裏付ける資料は何も発見されなかった。またその後塔が復興された形跡ももちろんない。

1) 第1トレンチ

①位置

西南隅礎石(礎石No 8)を基点として南側に設置。現況は、礎石南列を結ぶ線から約7mで低い崖となって水田と接する。

②遺構

渠石積みが発見せず、基壇端は明瞭でない。したがって、このトレンチでは基壇版築部の断面調査を行なった。想定される基壇端から約40cm内側より掘込み地盤を行なっている。掘込みの深さは約80cm前後とみられ、最下部に渠石が敷かれ、その上部に旧地表と同じ高さになるまで約40cmほど黄茶色土を充填する。この充填した土は上部の版築層ほどしっかりつき固められていない。その上部の版築層は高さ60cmほど遺存していた。基壇外周には幅約1mの犬走り状につき固めた段がある。

③土層

基壇から南側へは約25cmほど地表面の傾斜がある。したがって基壇外の土砂、瓦片等の堆積もほぼこの傾斜にそっている。地表から深さ70~90cmの間に瓦片の堆積が集中しており他トレンチとの対比からみて瓦をかき落した時期のものとみられる。その下層には瓦片を少量含む茶褐色土が基壇方向から流れて、基壇外周のつき固められた暗褐色土層上部を覆っている。厚さ約20cmのつき固められた層の下部は、黒色土層で塔建設当時の表土層である。

④遺物

軒平瓦(Ⅱ類)、軒丸瓦(Ⅱ類、Ⅲ類)

2) 第2トレンチ

①位置

西南隅礎石(礎石No 8)付近において西側に設定。

②遺構

栗石積み基壇端化粧が2～3段(高さ約30cm)遺存する。石積み基底部のレベルは南および北側トレンチで検出したそれよりも約30cmほど高い。

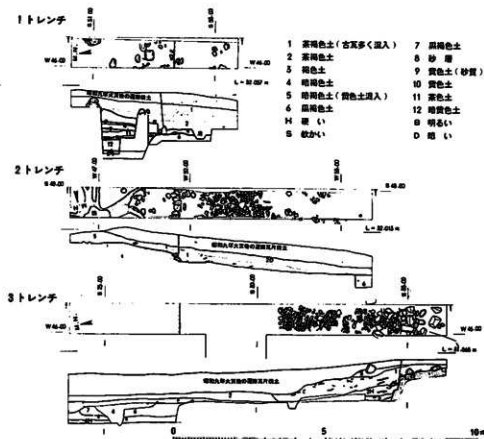
この基底部から西側へは約3度程の傾斜で低くなっている。

③土層

地表は東側から西側へなだらかに約50cmほど傾斜している。表土層約40cmは昭和9年の大火後に運んできた焼土、瓦礫である。深さ60～80cmの間に瓦片の堆積をみる。瓦の堆積した範囲は基壇端より約3.4m付近までがとくに多量である。

④遺物

軒平瓦(I類c)、軒丸瓦(Ⅲ類)



第17図 塔跡トレンチ実測図

3) 第3トレンチ

①位置

西北隅礎石（礎石No1）を基点として北側に設定。

②遺構

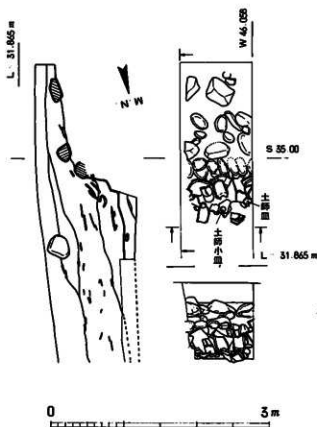
基壇端を示す栗石積みが第2トレンチの場合と同じく2～3段遺存する。石積みに立てかけられたような状態で完形の平瓦、丸瓦が重なって発見された。基壇外周は暗褐色土によって固められている。この土層上面を塔が建っていた時期の表土とすると北側へ向って4度程度の傾斜がある。

③土層

表土層下20～70cmの間に昭和9年時の火災の焼土層がある。深さ40～90cmの間が古瓦片の堆積層で、このトレンチではとくに多量であった。軒先瓦や大形破片が多いことも他のトレンチと異なるところである。先述した石積み付近の瓦の出土状態とも合わせてあまり攪乱を受けずに古い状態を残しているとみられる。古瓦層の下位は基壇外周を固めた暗褐色土であり、創建当時の表土であった黒色土を覆っている。暗褐色土層内には古瓦片が若干混入している。

④遺物

軒平瓦（Ⅰ類a・b・c、Ⅱ類）、軒丸瓦（Ⅵ類）
土師器灯明皿、皿
とくに軒丸瓦Ⅵ類は唯一の発見である。



V 薬師堂北第2遺構（推定講堂跡）

現国分寺の中心をなす薬師堂から北側は10mほどの境内をへだてて畑地および水田が広がっている。薬師堂地区基壇遺構から約40m北側の位置に3枚の水田・畑地が境を接するところがある。かつて阿弥陀堂があった場所と伝えられ礎石の存在が知られている。

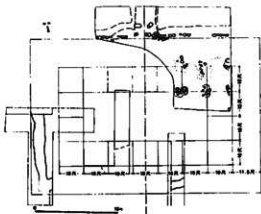
第1次調査、第2次調査の結果、大規模な基壇遺構が確認された。推定される基壇は東西27m、南北18.7mの規模をもち、薬師堂地区基壇遺構と並んで当寺院の中核建物である。調査は3ヶ所のトレンチと北側にやや広い発掘区を設定して行ったが、北側発掘区を除いては遺構の遺存状態がきわめて悪く、南側および西側の掘込み基壇端線の一部をつかんだにすぎない。当建物の掘込み基壇は、薬師堂地区基壇遺構や塔跡基壇のように地山に達するまで黒色土を掘り下げをせず、黒色土を残してその上にいきなり版築をしているところに特色がある。

第1次調査の1トレンチにおいて南北の幅1.5mで東西に帯状に延びる薄い黄色粘質土層が発見されその性格が不明であったが、2次調査において3トレンチでも南北に延びて西南隅を示す同様の土層が確認されて掘込み基壇版築の残存であることがわかった。すなわち軟弱な黒色土層内に掘込んで版築する際に基壇周縁をとくに強く締めためたために下位の黒色土をやや押し下げ、よってその分だけ後世の削平からまぬがれたものである。

一方、北側発掘区では礎石根締石上面まで削平を受けてはいるものの、遺構の保存は比較的良好である。北側基壇端は人頭大の栗石列で画しその北側は雨落ち溝となる。栗石列に接して基壇内側に瓦積みの痕跡がみられる。丸瓦を東西に連結させて置き、その上に南北方向に小口を向けて平瓦1枚を重ねた状況が知られた。位置は基壇北側の中央部である。丸瓦6本とその西側延長線上に丸瓦2本が遺存していた。これに接して北側にある栗石列はそれぞれの長軸を東西にとって並べられていることから塔跡での栗石積みの方法と違って、また栗石積みするための置き方としては、適切でないことからここでは北側基壇端化粧として瓦積みが行なわれたものとみられる。

基壇内部に残った根締め石、またはその抜き跡とみられるものは7ヶ所あり、建物北東隅の様子がわかる。これによって復原される建物は10尺等間の7間×4間というプランである。さらに11.5尺の基壇の出を想定しこれを基壇規模とすると前述した掘込み基壇端線とほぼ一致する。

なお基壇北側中央部に幅およそ2.7mの軒廊が付属する。黒色土を固めて雨落ち溝を南北に切っている。栗石列より北側へおよそ1.2mあたりに東西に大石を並べているところからみて基壇側に石積みの階段が存在したものとみられる。



第19図 薬師堂北第2遺構復原想定図

1) 第1トレンチ

①位置

発掘した基壇遺構の東西中央部で、トレンチ北半が基壇のほぼ南半分にかかる。ベンチマーク1からの位置はほぼ(W9m、N24~46.3m)である。



第20図 北第1遺構遺物出土状態

②遺構

トレンチの中央部付近から南側にかけて北第1遺構と称した柱の抜き跡状の遺構が存在する。比較的軟かい黒色土中にあたかも抜取跡を示すかのように瓦片がブロックで発見されるもので掘り方を明らかにすることができない。瓦片のブロックはトレンチ東側において南北に並ぶ状態を示し、その間隔は南から3.7m—5.2m—3.7mとなる。また、西側にある1ブロックまでの距離は約1.2mである。もっとも北側のブロック付近でⅡ類軒丸瓦が発

見されている。この遺構の性格については、薬師堂地区基壇と北第2遺構基壇とのちょうど中間にあたるので創建時堂舎の一部でないことは明らかである。詳細は今後の精査をまちたい。

つぎに、北側ではベンチマーク1より北約40m付近に掘込み基壇最下部の版築が遺存する。南北幅約1.1mの帯状を呈する黄色粘土層で、やや南側に振れながら東西に延びる。遺存する版築上面のレベルは29.65mである。中央付近で約10cmの厚みがあり断面は薄い紡錘形となる。トレンチの北側に接して小円礫や瓦片が版築遺存部と同様の方向で延びる浅い溝状遺構がある。当初はこれを北第2遺構南側の雨落ち溝に関するものとみていたが、第2トレンチの礫群へと連続していく後世の攪乱とみられる。

③土層

1~3層が水田の耕作土ないし床土で25~6cmある。5層が赤色バミスを混入する黒色土(火山灰土層)でその上層は漸移層。北第1遺構の瓦片ブロックは4層~5層にある。また北第2遺構掘込み基壇端を示す版築遺存部は5層上面にのる。

④遺物

北第1遺構瓦片中の遺物として軒丸瓦Ⅱ類(2094)、平行叩き行基葺丸瓦(2050)などがある。土師器皿

2) 第2トレンチ

①位置

第1トレンチの西側水田と第3トレンチの中間に設定。結果的に第2遺構基壇内部に位置する。

②遺構

第1トレンチで検出した基壇端版築の想定される位置より基壇内中央部に設定しているためにこのトレンチでは検出していない。トレンチ南側で、小礫やローリングを受けた小瓦片が一面に散布している状態が発見された。礫および瓦片は水田床土直下の黒色土層（火山灰土層）の中に混入しており浅い溝状の擾乱部が第1トレンチ北端部から続いているものとみられる。小礫群の検出レベル 29.73 m。

3) 第3トレンチ

①位置

T字状をしており主要遺構の検出された部分の位置はベンチマーク1からほぼ（W25m、N39～49m）である。北第2遺構基壇西端および西南隅にあたる。

②遺構

幅1m～1.4mの黄茶色粘質土がベースになる黒色土中に帯状に検出された。これは第1トレンチ北側にあった基壇端版築の遺存部分と同じ性格のもので、北第2遺構掘込み基壇の西端の一部および西南隅を示す遺構と判断された。西南隅付近の版築土層上面には平瓦片の散布がみられた。また、西側に同様な帯状版築土の突出部分がある。幅1.3mほどあり、西南隅からの位置は約5.4m北側である。復原建物の南庇部分の西側にほぼ相当する位置にあり、あるいは階段がつくものかも知れない。

③土層

版築層遺存部の検出面は水田床土の直下でレベルは29.76m。版築層最下部のレベルは、29.66m。版築は黒色土層上行なわれるが、この部分は黒色土層（火山灰土層）が深く、版築の行なわれたレベルから、深さ約53cmで地山に達する。

④遺物

軒平瓦1類a

4) 第4発掘区

①位置

ベンチマーク1からほぼ（W0.5～18m、N49～61m）に位置する。北第2遺構基壇の北東部分にあたる。

②遺構

第2遺構北側基壇端と雨落ち溝を区画する東西方向の栗石列、南側に接して瓦積みが一部遺存していた。栗石列は安山岩の自然礫を利用したもので、長軸を東西方向にとり、上面レベルは、29.79m～29.98mの間にある。塔跡基壇端化粧積みに使用されているものより大形である。遺存する瓦積みおよび根締め石上面のレベルもこの石列にほぼ等しく、この上面で削平を受けている。瓦積みは玉縁方向を東にむけた丸瓦を連続して並べ、その上部に凸面を

上にした平瓦を敷き並べていた。基壇内部で根締石の位置が確認できるのは7ヶ所ある。そのうちほぼ完全に遺存しているのは2ヶ所で、あとは抜かれるなど攪乱を受けている。根締石は安山岩円礫を主体とし、凝灰岩も一部に混在している。基壇の築成状況は、薬師堂地区基壇や塔基壇に比べ著しく粗雑な地業をしており、根締石検出レベル(29.97 m)で発掘区北半はまったく黄茶色粘質土の版築層はなく、ただ黒色土(火山灰土)を固めているにすぎない。つまり、建物北側庇の礎石より南側部分に薄い版築層が遺存している状況であった。遺存する版築層の最下部のレベルは29.78 mである。



第22図 薬師堂北第2遺構の根締め石

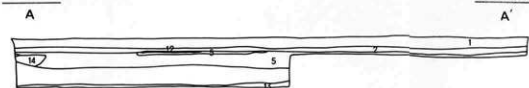
基壇北側の雨落ち溝は、基壇端石列上面から深さ約70cm(レベル29.18 m)で、発掘区内で溝幅を確認することができなかった。北側トレンチの状況からみて、おそらくこの深さで北側へ続くものとみられる。したがって雨落ち溝というよりむしろ、段落ちというべきであろう。この段落ち部分には若干の栗石の落込みがあったが、瓦等の遺物は意外に少い。発掘区の中央部で基壇から北へ通じる軒廊がみつかった。黒色土を固めたもので、基壇側にやや大形の栗石を両側に据えている。その大形礫から基壇側には小形の礫がみられ、礫を積んだ階段状の構造であったことが推定される。周辺から若干の土師器が出土した。

④遺物

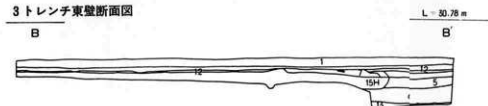
軒丸瓦(Ⅱ類、Ⅳ類a、Ⅴ類)

鉄釘、土師器

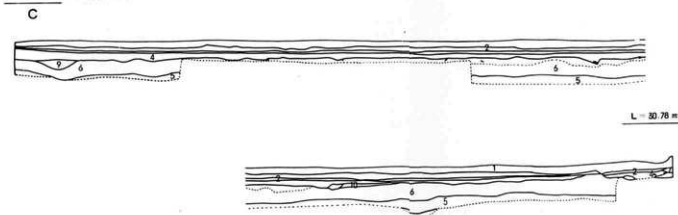
3 トレンチ北壁断面図



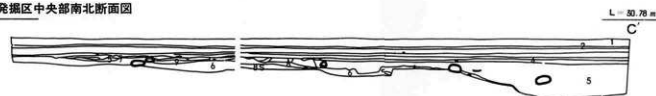
3 トレンチ東壁断面図



1 トレンチ西壁断面図



4 発掘区中央部南北断面図



- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 表土 | 9 黄褐色土 (黒褐色土混入) |
| 2 黄褐色土 (赤田床土) | 10 黄色粘質土 (黒色土混入) |
| 3 黄褐色土 (赤褐色土混入) | 11 赤褐色粘質土 |
| 4 灰褐色土 | 12 明色土 |
| 5 黒褐色土 | 13 茶褐色粘質土 |
| 6 黒色土 | 14 淡茶褐色土 |
| 7 黄色土 | 15 淡黄褐色土 |
| 8 黄褐色土 | B 明色い |
| H 硬い | D 脆い |
| S 軟らかい | |



VI 溝 遺 構

2次調査および3次調査によって明らかとなった当国分寺の伽藍域を示す特徴的な施設の一つである。溝遺構は約3mの幅を有し、回廊外周をとりまくだけでなくさらに北側にのびて、南北の全長270mにおよぶ。東西両溝の距離は約152mありまさに国分寺の壮大な規模を象徴している。そして、さらにこの外側には西門—南門—東門を結ぶ外垣が存在したものとみられている。

調査したなかで構造上注意すべき地点が2ヶ所存在する。1つは西側溝の中央部にある「コ」字状の張り出しである。そして、つぎに塔西側の「しきり」構造がある。まず前者はベンチマーク1からおおよそ(W87m、N21m)の位置にあり、伽藍中軸線でいえば薬師堂地区基壇(推定金堂跡)と北第2遺構(推定講堂跡)とのちょうど中間付近に相当する。この部分の遺構は少くとも2時期にわたるものである。まず西側から「コ」字状に張り出して、溝幅を1mにせばめた構造がある。溝が溝として機能していた時期である。溝幅をせばめてこのような張り出しを造った理由として、溝構築以前にこの部分に動かし難い重要なものが存在した可能性をまったく否定することはできないが、その位置からみて金堂の東西からのびる北回廊以北への通路としての役割を担う構造とみたい。つまりこの上にごく簡単な橋を構築したのではないだろうか。つぎにこの溝が完全に埋った段階で、張り出し部に礎石をおいた痕跡がある。また、やや北側では溝上面を版築して固めている。いずれも、ここを通路とするための構造の一部とみられないこともないが、版築で覆われた溝中より「右院」の墨書をもつ土師器片が出土している点問題が残る。土師器片はその特徴からほぼ創建時頃のものである。

一方、塔西側の「しきり」構造と呼んでいるものは、ちょうど塔の西にあたる溝中につくられた2ヶ所のしきりである。5.3mの間隔で地山を削り出して造っており、中央部がかなり崩壊している現状でも遺存のよい北側のしきりは溝底からの高さ1mに達し、もとは周囲の地山表面の高さと一致していたとみられる。このようなしきりがつくられた目的はやはり溝を渡るための橋とかかわりのある構造の一部と考えている。西門—塔—東門という東西通路の存在が想定されるからである。また回廊を挟んでこの対称的位置には、回廊基壇からなだらかに傾斜するテラスがある。これも西門から塔への通路の存在を裏づける遺構としてみることができる。溝はこの「しきり」構造と西側北限の状態によって明かなように排水を主要な目的としたものではない。

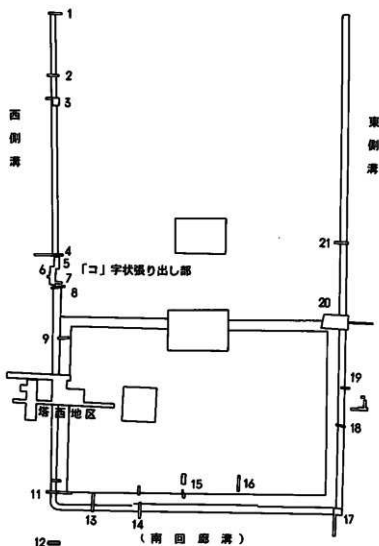
溝遺構調査を目的としたトレンチは全部で19ヶ所にのぼる。それにもかかわらず溝遺構の詳細についてはまだ不明点が多い。とくに回廊南側中門付近の状態、および溝遺構を確認できなかった東門付近について十分に解明されていない。また、西側では幸いにも北限を確認することができたが北側溝の有無についてはまったく調査を行っていないため明らかではない。

このうち回廊南側の中門付近の状態についてはすでに詳述したところであるが、中門付近で回廊基壇が北側へ約1mほどずれ、さらに溝幅も南側へ拡張するなど不審点がある。回廊基壇幅は6mあるので、基壇崩壊による溝位置の誤認のおそれはまずないとみられる。いずれにせよ小トレンチでの「確認」であるので将来の精査に期待すべきであろう。

溝遺構の調査にかかわる発掘区あるいはトレンチは場所によっては回廊探索を目的としたトレンチと同一である。したがって本報告では便宜的に、溝遺構に関する項では、

- (1)西側溝各トレンチ
- (2)「コ」字状張り出し部
- (3)塔西地区（主として溝遺構）
- (4)東側溝各トレンチ

について解説を行い、とくに回廊および中門遺構とかかわりの深い南側溝各トレンチについては、II回廊および中門地区の遺構で詳述した。



第24図 溝遺構関係トレンチ配置図

(1) 西側溝各トレンチ

1) 第1トレンチ

①位置

溝調査のトレンチでは最も北側に設定したもので、ベンチマーク1からほぼ(W92.5～99.6m、N165m)に位置する。

②遺構

溝遺構の北限界を確認した。幅2.4mの溝は現水田面から1.27mの深さあり、底部のレベルは30.06m。溝中から瓦等の遺物の出土はない。溝北端東側に接して大形柱穴1がある。柱の径約60cmあり、北側境界を画する施設の一部となる可能性がある。トレンチ東側には地山を20cmほど掘込んだ東西方向の溝遺構がある。上部での幅約80cm、東側でやや南に振っている。立ち上がり部分には木の根などによるものとみられる斜方向の不定形くぼみが多い。溝底から平瓦片が出土している。同様の小溝は南門1トレンチでも検出されている。創建以前の地割り等に関連する溝とも考えられるが明らかではない。

③土層

水田床土直下にうすい黒色土があつて地山となる。したがって地山の検出は耕作土表面から浅く掘るだけで容易にできる。この方法で、確認した溝北限からさらに北方7m付近まで探索した。溝中の流入土は黒色土を主体とするもので特に変化はない。溝の立ち上がりは、地山より上部については明らかではない。

2) 第2トレンチ

①位置

ベンチマーク1よりほぼ(W92.6～99.1m、N131.07m)に位置する。

②遺構

溝遺構は地山上面での幅3.7m、溝底のレベル29.63mである。溝の形状は大きく開いたU字形を呈するが地山より上層の掘込み位置は明らかでない。

③土層

流れ込みの土層はバミスを混入する黒褐色土および黒色土を主体としている。水田床土直下で東側のみ流入土層がカットされている。したがって、溝の立ち上りは東側(寺域内部)が西側より高かったことが考えられる。

3) 第3トレンチ

①位置

ベンチマーク1からほぼ(W91.7～99.2m、N115.47～119.47m)の位置である。

②遺構

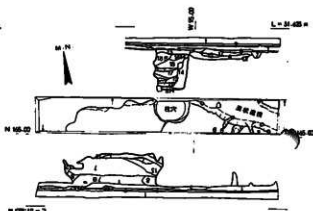
溝遺構および地下式横穴が発見された。地下式横穴についてはⅡ-③においてくわしく述べるが、溝の掘鑿に伴って破壊され埋められている。破壊された横穴内部にもごく少量の瓦片の流入がみられた。溝上面の幅は約3m、溝底のレベルは29.3mである。

③土層

溝中の流入土は黒褐色土ないしバミスを混入する黒色土が主体となっており、こまかい層をなす。地下式横穴内部の埋め土は下半部では地山と同じ黄色土が主体となり、上部では黒褐色土、黒色土の帯状堆積がみられる。最上部には黄色土のブロック、栗石が投げ込まれている。礫中には少量の瓦片が混在している。

溝の立ち上りはこのトレンチでも地山より上部についてははっきりしないが水平堆積している土層のレベルからみて東側の方がやや高いとみられる。西側では地

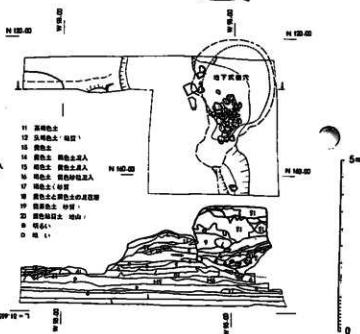
1 トレンチ



2 トレンチ北壁



3 トレンチ



第25図 溝遺構第1・第2・第3トレンチ実測図

出土レベルは溝底より約58cm上。

5) 第10トレンチ

①位置

西側溝が南回廊にしたがって東側へ屈折する付近、ベンチマーク1からの位置はほぼ（W1～89.6m、S79.5m）である。

②遺構

露出しており東側がやや深い。レベルは27.64m。

4 暗器特色



③土層

水田床土の下位に茶褐色土の間層をおいて掘込み面となる。溝中堆積土は黒色土、黒褐色土、暗黄褐色土などが主体をなし、瓦片の落ち込みもある。

6) 第11トレンチ

①位置

第10トレンチよりやや南で、回廊の屈曲部にあたる。ベンチマーク1からの位置はほぼ(W75.7~89.7m、S86m)である。

②遺構

溝遺構、および版築による回廊基壇。畦畔のためにトレンチが分断されている。溝幅約3mで掘込み層は確認できない。溝底のレベル27.58m。トレンチ東側地山上に黒色土と黄色粘土によって構築された回廊(?)基壇がある。東壁土層図によって明らかなように、この版築された基壇はトレンチに対して東側で北側にやや振れており、南回廊の項で述べる第13トレンチの改築基壇へつながる可能性が大きい。

③土層

水田床土より下位は、暗褐色土~黒褐色土、灰黒色土がほぼ水平堆積を示して観察され、溝の立ち上りはまったくわからない。

7) 第12トレンチ

西側溝が南側へ連続するかどうかをみたトレンチである。ベンチマーク1からの位置はほぼ(W81~85m、S143m)である。結果的に溝はこの位置まで延びないことが判明した。土層はほぼ水平堆積を示す。深さ1.05mで地山に達し、レベルは30.28mである。

(2) 「コ」字状張り出し部

「コ」字状張り出し部は第4~8のトレンチによって検出した遺構である。当国分寺の伽藍をとりまく溝は原則としておよそ3mの幅で掘削されているが、この部分で幅を1.3mに減じ、しかも溝をその分だけ伽藍側(東側)に突出させている。したがって、溝西側は東西幅約3m南北長約4mの張り出しをもつことになる。

「コ」字状張り出し部の位置はベンチマーク1からほぼ(W87m、N21m)にある。伽藍との位置関係は、薬師堂地区基壇遺構(推定金堂跡)と北第2遺構(推定講堂跡)とのちょうど中間点西側に相当し、さらに寺域全体でみると南門地区の調査で検出した基壇遺構(推定南門跡)南側と西側溝遺構北端との中間距離(146m)に位置している。

以上の構造と位置関係から「コ」字状張り出し遺構は回廊以北の境内地への通路として設け

られた構造と考えている。また、溝が埋った後、張り出し部のすぐ北側の溝上面を版築して固めているが、なにかの建物を建てるための地業とみるよりもむしろ、同様に道路として利用するための作業とみるべきであろう。ただし、「コ」字状張り出しを、溝を渡るための施設の一部とみるときには、橋桁横架のために造られたと推定される塔西地区の「しきり」構造との構造上の相違について解明することが必要となろう。また、溝内堆積土中より出土した土師器杯の墨書「右院」との関連についても疑問が残されている。

いずれにせよ、この地区の調査はまだ溝遺構の限界を追求していた段階に行なわれたもので発掘範囲も狭く不十分である。将来の精査をまちたい。

1) 第4トレンチ

①位置

ベンチマーク1からほぼ(W86~102 m、N35m)に位置する。

②遺構

検出された遺構は、幅2.7mの溝遺構および溝遺構上面を覆う版築、トレンチ西側に小柱穴群がある。溝遺構底部は現地表から2.32mの深さありレベルは29.48mである。溝上面を覆う版築層は溝の西側壁に一部かかって溝の2/3ほどを覆っている。これは東側からの土砂の流入堆積が早かったことによるとみられる。

③土層

溝の掘削は黄色土層(地山)上を覆う上層(黒褐色土)から行なわれているが、この層の上面は築地等の基壇を想定させるようなものではない。溝内堆積土は漆黒色~暗茶褐色を主体とするもので区別が難しい。上面版築層は5層約35cmほどの厚さで覆っている。

2) 第5トレンチ

①位置

第4トレンチのすぐ南側に接して設定した。

②遺構

溝遺構上面を覆う版築の範囲を確認するために設けたトレンチで、一部掘り下げを行って溝端を検出した。掘り下げ部から、軒丸瓦Ⅱ類・墨書(「右院」)のある土師器杯を発見した。出土レベルは30.98~30.78mである。

3) 第6トレンチ

①位置

第5トレンチのさらに南側に設定した。

②遺構

張り出し部溝遺構屈曲部ならびに小ビット群を検出した。

4) 第7トレンチ

①位置

第6トレンチ南端から東側に設定した。

②遺構

溝遺構張り出し部分、幅の狭まった溝を検出した。溝底レベルは30.04m、溝が埋まったあとの上面に根石状の栗石群がある。



第28図 根締め石状遺構

5) 第8トレンチ

①位置

張り出し部調査のトレンチではもっとも南側に位置し、ベンチマーク1からほぼ(W84.5～92m、N17m)である。

②遺構

張り出し部溝のちょうど屈曲部にあたるとみられ、溝幅4.2mと他に比べ広い。断面の土層はあたかも2つの溝が平行しているようにみえる。張り出し部の狭くなった溝部分から流れてくる水によって屈曲部壁が浸蝕をうけたものとみられる。

(3) 塔西地区(第8図)

塔西地区では回廊・溝・西門に関する遺構を発掘したことは前述したとおりである。この項では溝遺構を中心に詳述し、必要に応じて西門あるいは回廊遺構との関係に触れることとする。

①位置

溝遺構を中心とした発掘区は塔基壇の西側約20m～30mの間に設定した。溝遺構はこの発掘区西側に位置する。確認した溝遺構のベンチマーク1からの位置はほぼ(W84～88m、S30～46m)である。

②遺構

溝遺構の「しきり」構造が発見された発掘区である。他の各トレンチでも同様であるが溝遺構は黄色～黄褐色土の地山部分を掘り下げて築かれている。場所によって掘り下げる深さはやや異なるがほぼ1m前後である。「しきり」構造がみつかった塔西地区では1.2mの深さがあり、あとわずか掘ると礫層に達する。したがって、溝中に設けられた「しきり」は溝を掘る作業過程でしきり状に掘り残すことによって造り出される。しかも南北に5.3mの距離において2ヶ所のしきりが検出された。遺存状態のよい北側「しきり」部の構造は中央部南北断面で基底部の幅1.7m、溝底(レベル30.2m)からの高さ1m、上部幅0.5mの断面台形状を呈する。もっとも中央部が細くなっているので溝両側縁へのとりつき部の数値は当然こ

れをうわまわり、とくに高さは周囲の地山上面の高さになだらかに連なる。すなわち旧状は溝の両側縁に一致した高さをもつ構造であったと考えられる。溝上面の東西幅は二つの「しきり」によって挟まれた部分で3.7mある。

「しきり」に挟まれた溝内で瓦の一括出土があった。出土の状態は明らかに回廊基壇側からの落ち込みを示しており、溝内がある程度埋まった段階で流れ込んだものである。「しきり」によって発掘区内の溝は3つに分けられる。このうち北側2つはそれぞれかなりの量の出土があったが、南端部分からは1点も発見されていない。

この「しきり」構造の果す役割を考えると、それがつくられた位置を見のがすわけにはいかない。す

なわち、西門から塔へ至る通路にあたることである。南門から中門へ至る状況が不明であり、また東門付近では溝遺構そのものが確認できていない現段階では、この特殊な「しきり」構造がつけられた理由について即断するわけにはいかないが、溝を渡るための施設の一部として構築したものと考えたい。つまり、これに溝を覆うにたる長さの横木をわたすだけで十分に橋としての機能を果すであろう。ただこの場合でも2つの「しきり」の中央が、西門と塔中心を結ぶ線より約4m北側に位置する点疑問が残らないでもない。したがってあるいは東西門の構築とこの「しきり」構造を含めた溝遺構の構築時期にずれがあることも考慮する必要があるかも知れない。

「しきり」部を除いた溝内の排水については、塔西地区の溝底レベル 30.29mに対し、隣あう南あるいは北のトレンチにおける溝底レベルは、南側で 27.64m、北側で 28.84mである。

③土層

約30cmの表土層の下位に約30cm前後の厚みで暗褐色土が一帯を覆っている。溝中堆積土は明瞭に分離することが困難な黒色～黒褐色が主体となり、ところどころベルト状あるいはブロック状に基壇側からの流れ込み土である暗黄褐色土が入る。

④遺物

溝内瓦中に軒平瓦Ⅰ類Cが2点ある。また、溝に近い西側部分で軒丸瓦Ⅱ類が発見されている。



第29図 溝遺構「しきり」部

(4) 東側溝各トレンチ

1) 第17トレンチ

①位置

東側溝が中門の方へ屈折するちょうどコーナーにあたり、ベンチマーク1からの位置はほぼ(E67.6~72.5m、S95~99m)である。この付近は住宅密集地のやや東側である。

②遺構

溝遺構東南隅。位置は中門推定地より東側に延びる小道に隣接する畑地である。この溝遺構の検出によって、小道はもとの回廊をそのまま踏襲したものであることが判明した。回廊南側の溝幅は約3.5m、東側溝は約2mである。コーナーはゆるいカーブをなす。溝内流入土には遺物の混入はまったくない。溝の地山部分の立ち上りは回廊側で水平面に対しほぼ垂直をなし、底部のレベルは27.25mである。したがって、西南隅付近よりもおよそ30cmほど低いことになる。溝の南側には近世陶磁器片を含む礫群が周囲をとりまくようにあるが、溝が完全に埋没した後の遺構で、トレンチ東北隅の溝状遺構も同様である。またトレンチ東端には礫混入土でつき固めた竪穴状の基礎地業とみられる遺構2が南北に並んでおり、発掘中にもこの場所にかつて家屋があったことを示す地業の跡がみられた。

溝遺構の南側に1mトレンチを延長したが顕著な遺構は発見されなかった。

③土層

溝外周は地山そのものが溝側に傾斜しており、傾斜面を覆って、黒褐色土あるいは黄褐色土による地固めが行われた形跡がある。溝中の堆積土は外周からの流れ込みを示しており、黒褐色砂質土が主体となっている。東側へ屈折した部分の断面土層は回廊側の立ち上がり遺存部が低いため、北壁全体にわたって水平堆積を行っているようにみえる。

2) 第18トレンチ

①位置

東門跡の西南側にあたり、ベンチマーク1からほぼ(E66~71m、S51m)に位置する。

②遺構

地表より40cmで礫まじりの地山に達する。東側溝遺構の復原ではトレンチ中央部に位置するはずであるがそれらしき遺構はない。表土レベルは28.27m、地山レベルは27.87mである。遺物の出土はない。

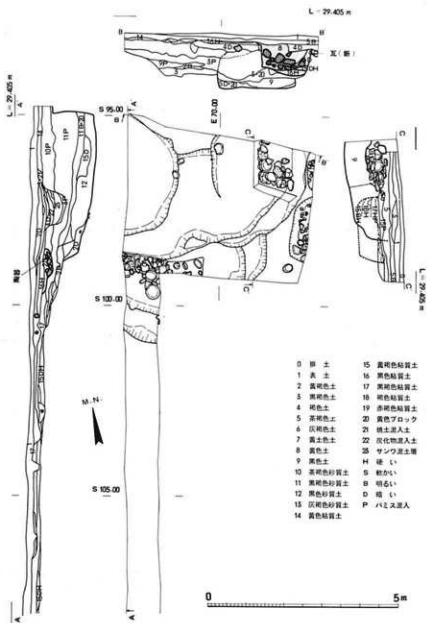
3) 第19トレンチ

①位置

東門跡の北西側にあたり、ベンチマーク1からほぼ(E68~73m、S30m)に位置する。

②遺構

一帯は畑地で約29cmほどの耕作土の下に礫まじりの地山となる。第18トレンチ同様溝遺構



第30図 溝遺構第17トレンチ（溝遺構東南隅）実測図

は検出されていない。地山レベルは27.88m。遺物の出土はない。

4) 第20トレンチ

①位置

現薬師堂東側の水田部分で、伽藍の復原では薬師堂地区基壇遺構から東に延びる回廊が南へ屈折するコーナー部に相当している。ベンチマーク1からの位置はほぼ(E57~71m、N2~9m)である。またこの発掘区東側に小トレンチ(E71.5~84.8m)を設定した。

②遺構

遺構は溝遺構(A・B・C)、竪穴状遺構、柱穴群がある。このうち溝B・Cはほぼ同じ性格の溝であり位置的な問題はあるものの東側溝の痕跡を示す遺構とみている。

I) 溝遺構A

トレンチ北壁近くに終端がある。幅約70cm、検出面からの深さ30cm(レベル27.55m)を測る。立ち上りは水平面に対しほぼ垂直である。遺物は少量の瓦破片を出土しているが、溝B・Cに比べ礫の落ち込みがほとんどない。溝の方向は南北調査基準線に対し、北側で約15度ほど東にふれる。

II) 溝遺構B

溝Bは発掘区を南北に貫通する溝遺構で、幅は0.8~3.6m、最も深いところで検出面からの深さは約30cm(レベル27.54m)である。形状・深さともに出入りの多い不定形となっている。溝遺構西側の急な立ち上りに対して東側はなだらかである。溝中には多量の礫が3群にまとまっており、軒先瓦破片5点はじめ、平瓦・丸瓦破片も多数出土している。

III) 溝遺構C

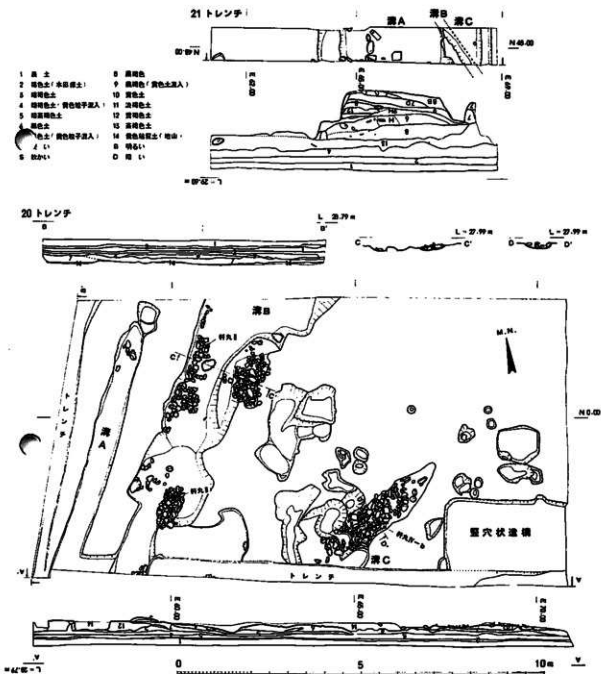
溝Cは発掘区内で3mほど北東方向へ延びて終っている。溝内部の堆積土中には多量の礫が混入している。軒丸瓦破片1が発見された。

IV) 竪穴状遺構

発掘区東南隅において、竪穴状遺構の1隅が検出された。全体の形状は明らかではないが、竪穴状遺構の北辺および西辺はほぼ調査基準線に平行し、約13cmほどの立ち上りをもっている。竪穴は小礫を多量に混入する黄色土地山を掘り込んでつくられており床面はほぼ水平である。柱穴は検出されていない。また遺物の発見もなかった。

以上のように第20トレンチで一応性格の知られる遺構としては、東側溝遺構の痕跡としてみることで溝B・Cに限られ、当初予想したような形で回廊コーナー部および東側溝を検出するにはいたらなかった。これは発掘地の地形によるところが大きく、回廊掘込基壇を検出した現薬師堂地区の境内のレベル29.68mに対し、発掘区の遺構検出面レベルは27.9mで約1.8mほど低い。それは隣接するトレンチとの比較でも明瞭である。例えばすぐ北側の第21トレンチでの遺構検出レベルは、28.4m(溝遺構底部レベルは27.18m)であり、

南側東門跡では27.8m、溝道橋東南隅コーナーでは28.6mとなって、当発掘区から東門跡付近にかけて全体にくぼんだような傾斜地となっていることがわかる。この地形は薬師堂南側を走る東西道路がこの傾斜を利用して比高約8mほどの東側の崖を下っていることとも相互に密接なかかわりをもっているとみられる。



第31図 溝痕構第20・第21トレンチ実測図

③土層

約30cmの水田耕作にかかる土層の下位に遺構が検出されている。溝遺構中の堆積土は粘質の黒色～暗褐色土が主体をなし、これに黄色土のブロックがまじることがある。竪穴状遺構中の堆積土はくすんだ黄褐色～黒褐色粘質土で黒色土あるいは黄色土のブロックが多量にまじる。

発掘区西壁でも溝中堆積土と類似した土層がほぼ水平堆積をしており、なんらかの理由である時期に地山面までカットされてその後この付近一帯を黒色～黒褐色粘質土が覆ったと解釈される。

なお、この発掘区東側に延長した小トレンチでは水田耕作土下には疎混入黄色土(地山)がほぼ水平に基盤をなしており、遺構はまったく発見されていない。

④遺物

溝B 軒丸瓦(Ⅱ類 Ⅲ類)、軒平瓦(Ⅰ類a・c)

溝C 軒丸瓦Ⅳ類

第21トレンチ

①位置

東側溝遺構探索のトレンチとしては最も北側に設定したトレンチである。ベンチマーク1からの位置はほぼ(E61～69m、N48m)である。

②遺構

溝遺構は検出面での幅3.9m、底部で2.5mある。黄色土(地山)を深さ約1.2m掘り込んでつくっており底部のレベルは27.18m、疎層に達している。溝内堆積層中には比較的遺物が多いことも注意される。これは旧地形も西側から東側へ傾斜していたことを示すものである。

溝遺構東側に接して、幅25cmほどの小溝遺構が東南から北西方向へのびている。さらに小溝遺構が掘られる以前にこの部分が整地された形跡がある。小溝遺構が作られたのは東側溝の堆積土からみて、東側溝が完全に埋まる以前のものである。

③土層

かさ上げによる3層の水田耕作土の下位に茶褐色土の水平堆積層が1層ある。溝の検出面が黄色土(地山)に達してからであるのは西側溝とかわりがなく溝遺構に接して伽藍側に築地等が構築されていた手摺りを得ることはできない。溝内における遺物の出土レベルは中位と上位の2群にわかれる。量的に上位すなわち溝検出面とほぼ同じレベルの堆積層中に含まれる遺物が圧倒的に多いのは廃絶後の一時的な流れ込みによるものとみられる。

④遺物

軒丸瓦Ⅴ類、完形丸瓦、平瓦

土師器片

Ⅶ 塔東地区の遺構

従来、九州地方の国分寺伽藍配置では、回廊によって囲まれた境内の東あるいは西に塔を配置し、伽藍中軸線に対しその対称位置には堂宇が存在しないと考えられてきた。当国分寺跡の場合、塔は中軸線西側に位置し回廊に囲まれた範囲は東西およそ140m、南北90mという実に広大な面積を有している。塔東地区の現況は約 3/4 が宅地となっており、残りが畑地である。調査の対象としたのは、おもに薬師堂南側の東西道路と薬師堂から南側へ向う道路がなすT字路に隣接する東側畑地で、「堂の前」と通称されているところである。

1次および3次調査において4つのトレンチを設定した結果、一部に版築が施され石列あるいは根締め石状の遺構などが存在することが判明した。しかし、各トレンチで検出した遺構の状況はまちまちであり、遺構の全容を把握するまでには至っていない。したがって現状では、創建当初の地業が存在することは確実としても、堂宇の規模や性格さらには果して建物が完成したものかどうかについては疑問が残されている。

(1) 第1トレンチ

①位置

第1次調査において、ベンチマーク1からほぼ(E21~23m、S22~33m)に設定したトレンチである。

②遺構

検出された遺構は、版築状の整地層(上部整地層とよぶ。3次調査の結果判明した)および石列、不明土域である。上部整地層の厚さは約20cmで2層に分かれる。この下位に第3トレンチから続く下部整地層(厚さ約20cm)があるが、第1次調査では掘り下げを行っていない。上部整地層上面を薄く削っていく過程で栗石列を発見した。直径20cm前後の扁平礫を南側がほぼ一直線に並ぶように敷き連ねている。石列の方向は南北基準線に対して北側で東に73度振れ(およそN77°E)上面レベルはほぼ一定(レベル28.89m)である。上部整地層はこの石列の北側約1.5mの位置まで存在する。また石列の南側0.8mのところで0.6×0.7mの土域が検出された。第3次調査の結果上下2つの整地層には耕作土が間層として認められ、しかもこの間層上面からの掘り込みの中に発見された廃棄物の年代から、上部整地層がつくられた時期は古くても明治以後と認められる。したがって、石列および土域がつくられた年代もごく新しいものである。上部整地層はかつてこの畑にあったといわれる住宅と関係するものであろう。

(2) 第2トレンチ

①位置

第1トレンチ南側に東西方向に設定した。ベンチマーク1からの位置はほぼ(E12~30m、

S35m)である。遺構はまったく検出されないため深く掘り下げて土層観察を行った。

②土層

約30～55cmの深さの耕作土を除去すると黄色土の地山に達する。このトレンチでは黒色土の自然堆積層は存在しない。地山の黄色土は上から下へ漸移的に三層に分けることができる。最上層は粘質のある黄茶色土層で約40cmの深さがある。中層はしだいに白味をおびた黄色砂質土に変わり、最下層はやや粒子の粗い黄茶色砂質土となる。地表から深さ1.3mで礫層に達する。礫層上面のレベルは27.91mで、東側にいくにつれてレベルは下る。礫の大きさは拳大のものから人頭大のものまでさまざまである。

地山部分の土層調査の結果は、塔西地区の調査(第2次調査)において参考となった。回廊基壇を削り出した際に礫層に達し、この上を若干整地している状態であったが、検出レベルが浅かったこともあってこの礫層上面を最初は敷石であろうと誤認していた。礫層の検出を広範囲に行えば一帯の旧地形の復原に役立つものとみられる。

(3) 第3トレンチ

①位置

第1トレンチの東側に逆「L」字形に設定した。ベンチマーク1からの位置はほぼ(E20.5～28m、S20.5～26m)である。トレンチ西側は第1トレンチと重複している。

②遺構

検出された版築層は各断面ごとに少しずつ様相が異っている。大きく上部整地層と下部整地層に分かれることは前述したとおりである。逆「L」字形に発掘したトレンチのうち南北方向部分は深く、現地表から1.4mで地山に達する(レベル27.70m)。最下層には人頭大栗石が2群に並んだ状態で検出されたが、意味のある配置なのか単なる投げ込みか明らかではない。薬師堂地区基壇遺構の掘り込み地業下部にみられた栗石投げ込みに比べると量的に少なく空間が多い。

③土層

下部整地層の版築の状況は各断面で異っている。しかし下部整地層の最上層には5～10cmの厚さでごく固い黒褐色粘質土が覆うことは共通しており、踏み固められたある時期の地表とみられる。上面レベルは28.70mで、これに相当するものは第4トレンチでも検出されている。この固い層の上位に間層である耕作土がある。

まず東壁の下部整地層の状況は、地山(レベル27.70m)上に一部栗石があるもののほぼ6層、1mの深さ版築されている。版築層はトレンチ北側で不整合面がある。すなわち、あとで述べる北側壁の版築と一様につながらない。東壁にある上層からの掘り込みは前に述べたように現代のものである。最下層の礫にまじって古瓦が2点発見されている。

これに対し、トレンチ南側壁は版築を施した掘り込みが西側に向かってしだいに浅くなっていくので、下部整地層をほぼ水平に覆っている最上層の固い版築層は西側では地山直上に位

置ようになる。そして、旧耕作土は西側まで達していない。東西部分中央部の段落ちとなる部分の版築は薄く緻密である。

トレンチ北側は、薬師堂南側の東西道路にほとんど接する位置にあり、断面土層の状態もこの道路とはまったく無関係ではないとみられる。すなわち、直接つながらないが下部整地層上面に相当する層が存在し、砂利が混入するきわめて固い層となっている。同じような固い層が間層をおいて下部にもみとめられる。

以上のような土層の状況はこのトレンチ部分に関する限り、少なくとも二度以上にわたって道路のカサ上げをしたことを物語っている。

(4) 第4 トレンチ

①位置

発掘した畑地の東端にあたり、ベンチマーク1からの位置はほぼ(E33m, S20~44m)である。

②遺構

トレンチは3つに分かれており、北端部・中央部・南端部と仮称する。このうち北端部と南端部は明らかにごく新しい時期の遺構ないしは攪乱である。

まず北端部は表土下0.6~1.3mにかけて大形栗石の堆積がある。トレンチが小さく詳細は明らかではないが、堆積した栗石の最も深いところで新しい陶磁器等が検出されており、手洗水鉢様に加工された凝灰岩もいっしょにつき込まれている。中央部トレンチから続く整地層が南側下層の栗石群に接してある。栗石最下部には大きな平石が据えられ、その下位には砂質土の堆積がみられた。これらは接近して存在する井戸と関連する作業とみられる。

つぎに中央部は第3トレンチのいわゆる下部整地層に相当する版築層が遺存し、根締め石状の隙群が1ヶ所検出された。版築層の状態は第3トレンチ下部整地層と異って、黄褐色~黒褐色の砂質土および粘質土を交互につき固めた非常に固い均質な層をなしていることが特徴である。この版築層は南北に10mの長さ確認されているが、一応南限を栗石の落ち込んだ幅0.7mほどの溝状遺構(S35m)までとみている。しかし、この溝状遺構および栗石群と基壇状遺構との関係は明らかではない。また溝状遺構については掘り込まれた土層中より出土した瓦器質の摺鉢から年代を推して少なくとも中世以後の所産とすることができる。版築された基壇状遺構については年代を決定することができない。溝状遺構より南側は溝状遺構に先行して地山面(レベル28.46m)まで一旦削られており焼土や炭の堆積がある。

南端部は、近世の陶磁器類(伊万里焼が中心)を一括廃棄したあとが溝状にのこっている。地山は南側にしだいに下っていく傾向を示し、最も深いところでレベルは28.0mである。陶磁器類の廃棄されたレベルは28.46mである。

Ⅳ 東門および西門地区の遺構

東門および西門遺構の存在が確認されたのは、塔西側において南北に連なる二つの掘立柱遺構が発見されたことが端緒となった。掘立柱は掘り方の大きさがおおよそ $2 \times 1.5\text{m}$ あり、柱位置は心々距離 2.9m 、直径約 50cm の柱がこれに建てられる。そして、その結果に基づいて設定した東側トレンチにおいて同じ規模の掘立柱を発見し、さらにこの東側掘立柱にとりつくように北側に延びる柱列が見つかった。

東西の門跡については古来その場所として伝えられてきたところがある。東門跡と伝えるのは、塔の東約 120m の距離にある礎石状の巨石を遺構の一部とみるものである。現状ではちょうど軒を接するようにして建っている家屋の間にあって宅地境をなし、その上に東西方向のブロック塀がつくられている。とくに加工された形跡もなく、また根締石上に据えられているというものでもない。調査によって判明した東門跡は、これより西約 5m の位置であり、南門あるいは西門跡として伝えられてきた位置よりも原位置に近い。これは現薬師堂が東面してつくられて以来、東側の崖を登る通路が前代のものを踏襲する形でしかも重要な通路として存在してきたことを物語っている。土地の人の話では、昭和の初期頃まで国分寺のある台地上(標高 30m 前後)には井戸がなく、台地下(標高約 20m)の井戸(「コーデ井のこ」と称しており、「供膳」の意味か)でまかなっていたといわれ、東門伝承地から至近距離にある。このような事情からも東門を通る道が引き続き長く使われ、東門跡の記憶も比較的正確に伝えられたことがわかる。

一方、西門跡の伝承地は、現薬師堂の西約 100m 付近の境内地西端にあたり、薬師堂南側を東西に走る小道に接している。付近の水路断面にはおびただしい量の古瓦がみえており伝承を裏づけるように思われた。しかし、調査の結果、小柱穴が点々と存在するものの古瓦の出土もなく、門跡が伝承通りこの位置にあったとしてもすでに削平されたと考えざるを得ない状態であった(第1次調査、西門第1地区トレンチ)。西門遺構はしたがって2次および3次調査によって明らかとなった(西門第2地区トレンチ)。

東西門跡は塔中心を通る線上に並ぶ。西門遺構は南北の柱穴が想定される伽藍中軸線と平行にならず北側柱穴がやや西側に振れている。したがってこの北側柱穴と東門柱穴とによって心々距離を算出すると 182.89m となる。また、西門北側柱穴の塔中心からの距離は 55.23m 、西側溝までの距離は 11.7m である。

(1) 東門地区発掘区

東門地区では門遺構および東側溝の存在を調査するため3つのトレンチを設定している。このうち門遺構と直接かかわりのあるトレンチについてこの項で扱い、他の2つについては溝遺構東側各トレンチの項で詳述しているが、この2つのトレンチでは溝遺構は確認されていない。

①位置

東門遺構の発見されたトレンチは住宅に接してL字形に設定した。ベンチマーク1からの

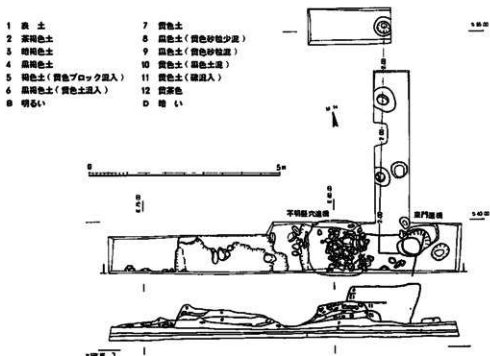
位置はほぼ (E74~83m、S34.4~41.4m) である。

②遺構

東西トレンチにおいて東門を構成する掘立柱とこの西側に接して性格不明の小竪穴遺構が発見された。さらに西側にはトレンチ南側断面に溝状の落ち込みがみられる。南北トレンチでは3本の柱が心々距離2mで南北に並ぶことが判明した。掘立柱(門跡)は1.4×0.9(+)mの大形掘り方を有し、その掘り方の東北隅に直径50cmほどの柱を建てている。掘り方の深さは地山上面から1.1mある。柱を据えたのち、黒色土を混入した黄色土・礫混入黄色土によって埋められている。西門跡南側の柱穴は埋め土がこまかい版築状をなし、入念に叩き締められたことがうかがわれたが、こちらはそれほど固く叩き締められていない。柱の抜き取り跡から糸切底の土師器小皿が出土した。灯明皿として使用されたものである。

掘立柱と隣接して直径1.5mの竪穴遺構がある。竪穴東側は掘立柱掘り方と接しており、この位置だけ底部に縁どりするように栗石を並べている。竪穴の深さは地山上面から0.6mで、内部には礫が多量に落ち込んでいる。礫の落ち込みの状況からは一見南北方向の溝のようにみえる。竪穴内部の流入土は西側からの流入を示しており、最下層から丸瓦破片が出土している。掘立柱遺構とは切り合いからみて、明らかに竪穴遺構が新しい。

トレンチ西側の溝状落ち込みは東西幅3m、地山上面からの深さ0.2mほどあって、黄色土のブロックあるいは黄色砂粒を混入した黒色土が中心となって堆積している。遺物の出土は



第33図 東門地区トレンチ実測図

ない。この溝状落ち込みを仮りに東側溝遺構の一部とみると、溝遺構関係のトレンチ第17および第21によって確認した東側溝の位置より約8mほど東に偏ることになる。しかし第20トレンチで発掘した溝遺構の痕跡が東側溝の想定位置より若干西側にあたることからみてもこの一帯が地形的に不安定であったことが知られ、東側溝の一部である可能性もまったく否定し去ることはできない。将来の精査が必要である。

南北トレンチでは小形の掘立柱が南北方向に並んで発見された。礫まじりの地山を約0.5m掘り下げた直径0.5mほどの掘り方に0.2m前後の柱を立てている。柱列の心々距離は2.0-2.0mで、想定される門の位置より伽藍側に0.8mほど寄っている。

③土層

トレンチの位置は住宅に隣接する畑地で、耕作土(約35cm)下に遺構を検出する。耕作土と遺構検出面との間には薄い黒色土層が全体を覆っている。

④遺物

土師器小皿(糸切り底)

(2) 西門地区発掘区

西門地区は現薬師堂の南側を東西に走る小道によって2地区に分ける。北側を第1地区、南側を第2地区と称する。発掘地はどちらも現国分寺の境内で、第2地区はちょうど塔の西側にあたり、もとはうっ蒼とした木立に囲まれていた。第2地区は回廊基壇、溝遺構のいわゆる「しきり」構造、西門遺構など重要な遺構が集中し、また2ヶ所で緑釉陶器が発見されるなど、開墾を受けていないため、遺構の遺存状態がよい地区の1つである。このように第2地区では各種の遺構が存在するが、この項ではおもに西門跡を中心とした調査区について述べることにする。

a) 西門第1地区のトレンチ

①位置

ベンチマーク1からほぼ(W111.5~120.5m, S5.7~18.7m)に位置する3つのトレンチを設定した。

②遺構

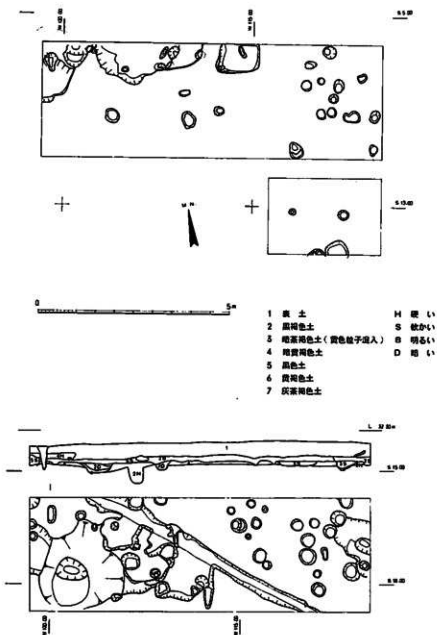
第1次調査で西門伝承地として発掘したところである。現地表より約0.5mの深さで黄色土(地山)に達する。検出された遺構は径20~40cmの柱穴群が中心をなすが、建築遺構としてのまとまりはみとめられない。南側のトレンチでは柱穴を切って西北方向に小溝が走っている。この小溝と同様のものが第2地区回廊基壇上にも検出されており、ごく新しい時期の遺構とみられる。もとの一帯は松林であったといわれ、根による擾乱が著しいが、西門の伝承を裏づける遺構はなんら存在しない。

③土層

表土層は約40cmほどの耕作土があり、黄色土層との間に黒褐色土層が一層入る。

④遺物

根の攪乱によるとみられる不定形の掘り方付近で、黄色土層直上から古瓦片が出土している。



第34図 西門第1地区トレンチ実測図

b) 西門第2地区のトレンチ(第8図)

①位置

塔跡西側境内にあたり第2次・3次調査によって広範囲に調査された。このうちこの項でとり扱うのは主として発掘区西側部分である。2次調査時に約12mの間隔をおいて東西トレンチを2本設定し、発見した門跡主要部分について3次調査を行っている。3次調査の発掘区のベンチマーク1からの位置はほぼ(W97.1~103m, S34~55m)である。

②遺構

I) 西門跡

西門跡の位置は想定中軸線から約91m、塔中心からの距離約60mに位置している。また西側回廊の外側に接する西側溝との距離は約11mである。遺構は南北に約40cmの間隔でほぼ平行につくられた大形柱穴2個からなる。調査は南側の掘り方については完掘したが北側のものは柱位置を確認したにとどめた。掘り方は黄褐色の地山層を掘り込み、規模は南側が2.1×1.6mの整美な長方形、北側のものが1.8×1.5mのやや不整形な長方形を呈している。南側の掘り方をみれば深さ1.2mである。門柱は掘り方の南側にあり直径約50cmである。周囲には黄褐~褐色の粘質土を粗・密に交互に重ね強固につき固めている。北側の門柱の位置は掘り方のやや北側にあり、直径は南側とほぼ同一の大きさである。両者の心々距離はおよそ2.9m、中心を結ぶと北側では中軸線の方位(約N3°E)よりもかなり西へ振れほとんど磁北に一致する。これら2個の大形柱穴の周囲には小形のピットが多数(148個)ある。これらのピット群からここになんらかの建築物を想定することは、はなはだ困難である。また、東門跡で検出されたような柱穴列を見出すことは出来なかった。大形柱穴の周囲にあるピットのうち一部は門本体を建築する際の足場構築に使われたことも考えられるであろう。また総数148個あるピットの内6個のピット内から完形の土師器壊をはじめとして土師器破片が出土した。

II) 不定形大形土壇

発掘区の東南の1角を占める遺構である。一部分の発掘のため全体の形は不明であるが、南北8m以上におよび黄褐色の地山層を深さ1.3mほど掘り下げている。掘り方斜面には直径20cmくらいの大きさのピットもいくつかみられる。土壇の堆積層は基底部付近において一部黄色土の水平層がみられるがほとんどが黒褐色のいわゆる火山灰土と呼んでいる土である。土壇内からの遺物の出土はないが土壇際から土師質の緑釉陶器が検出された。

この種の遺構は同じ西第2地区の塔跡に近い部分でも発見されているが、性格についてはいまだに結論を得ていない。一つの見解として基壇構築や整地につかう黄色土の採取地および排除した軟弱な黒色土の捨て場所として使われたことも考慮されよう。

III) 竪穴状遺構

西門跡の西北にある浅い掘り込みの遺構である。規模は南北3.5m、東西3.6mの隅丸方形を呈し、壁は地山を30cmほど掘り込んでなだらかなカーブで立ち上がる。柱穴は存在しない。底面は凹凸がばげしいが中央部よりやや北西側には固められた平坦部が一部ある。また南側

には床面より約20cm浮いて厚さ10cmほどの木炭が広がる範囲がある。焼土は存在しない。竪穴内堆積層は7層に分かれレンズ状の堆積である。遺物は床面および床直上での出土はまったくなく、竪穴の埋った後、中央付近のくぼみに礫が投げ込まれた状態を示し、礫に混って数点の瓦片が出土している。

また、その他に木炭の入った小形の土壇が3ヶ所から検出された。大きさは径1mほどの楕円形をなし、深さは17cmほどで皿状の土壇である。内部には木炭が混入しているが、床面・壁には焼けた痕跡がなく焼土も存在しない。

竪穴状遺構は住居跡とも見られるが性格・時期については不明な点が多い。小形土壇についてはきわめて短期間の炉穴と考えられる。さらに、西門とそれに連なる南北の外垣を想定した場合それよりやや西側2ヶ所で緑釉陶器が出土しており、寺域が必ずしも、溝あるいは外垣などで囲まれた範囲のみとどまるものでないことを示す資料といえよう。

③遺物

土師質および須恵質の緑釉陶器2点が出土している。出土の状態は単独出土であり、とくに遺構との関連性はうすい。

IX その他の遺構

(1) 北方地区

北第2遺構(推定講堂跡)北方の状況を調査するため、幅1m、長さ65mのトレンチを設定した。結果は、北第2遺構基壇端から約32mの距離に礎石1個を発見し、新たな建築遺構の存在が予想された。また、北第2遺構より北側では自然地形の傾斜にしたがって、遺構自体レベルがやや低く、しかも遺構廃絶後の黒色土層(火山灰土)の2次堆積が非常に厚いことがわかった。

①位置

トレンチはベンチマーク1からほぼ(W9m、N62~126m)の間で、トレンチ幅1mである。北第2遺構第4発掘区とは同一水田内で、水田上面のレベルは30.40m。

②遺構

ベンチマーク1より北に89.5mの位置に根締石上に据えられた礎石1個を発見した。礎石上面は水田面下0.8m(レベル29.60m)、下面は約1.05mである。礎石は径70cmのやや扁平な安山岩自然石を利用し、根締石を下にかんでいる。礎石周辺に版築は認められず、やや固めの黒褐色土を掘りくぼめて据えられている。根締石は南側においては上面より観察されるが、北側は見えず、礎石自体若干北側へ傾斜した状態である。礎石の掘込み内より土師器皿が発見された。これは掘込み面である黒褐色土の上面に散布する瓦片と同一時期のものである。さらにこの黒褐色土より下位の黒色火山灰土層の上面に、古墳時代後期の土師器および須恵器が周辺で出土している。礎石の検出面まで非常に深いため、ボーリングステッキ等による探索も不可能であり、他の礎石の存在を確認するまでには至っていない。

礎石の発見された位置は北第2遺構基壇北端から北約32mのところであり、礎石の遺存状態からみても当然何らかの建築遺構の存在する公算がつよい。僧房あるいは北門などとなる可能性がある。将来の調査が期待される。

③土層

自然地形の北側への傾斜にともなって黒色土(火山灰土)の2次堆積層が深く、遺構はその下位に検出される。しかも、創建当時の旧地表も黒色土層とみられるため、遺構の検出が非常に困難である。礎石の発見された付近で水田面から深さ約1.5mで暗黄褐色の地山に達する。

④遺物

土師器皿

国分寺創建以前の土師器、須恵器片

(2) 薬師堂西発掘区

この発掘区は薬師堂地区基壇遺構にとりつく西側回廊部分を探索する目的でベンチマーク1から西54mの位置(基壇遺構との距離は約26m)に設置したものであったが、この地点では回廊遺構はすでに削平を受けて遺存しないことが判明した。

ここでは、発掘区の南側と北側に瓦溜遺構を検出しその一部を発掘した。このうちとくに南側を占める瓦溜遺構は大規模なもので、当国分寺跡の調査では新発見の複弁10葉蓮花文軒丸瓦をはじめとして軒先瓦90点、灯明皿に使用された土師器類(90点以上)など豊富な資料を得ることができたのは特筆すべきことであった。このほか、北寄りの部分では炉の構築物や小形埴輪などが投げ込まれた大形土壇が発見された。土壇内の埋土は間層をおいて明瞭に上下二層に分けられる。下層埋め土は銅滓や炭灰などの混入する小砂利が主体で、銅銅関係の工房の廃棄物とみられるものである。遺構の形態は、断面のみでみると地表から深さ2.4m、幅3mほどの溝状を呈するが、上層埋土に西側の限界がうかがわれるのでおそらく東西に長手の土壇になるものであろう。ただ通常の廃棄物埋め跡にしてはその上面を丁寧に埋土していることが注意された。この整地作業が行われた時期あるいは銅銅関係遺物を土壇に廃棄した時期などについては確かな資料を欠いており明らかでない。しかしながら、国分寺の当初の伽藍が存続中である場合、あまりにも回廊に密接していること、さらに土壇内から糸切り手法の土師器破片が出土したことにより、一応平安末期以後の所産とすることができよう。また、大型瓦溜への瓦投入の時期もこれをさかのぼるものではあるまい。

さらに、これらの仕事の目的については、その規模からみて、寺の再建等の事業との関係が考えられるが、当寺について古代～中世の時期に大きな復興の作業が行われた確かな史料はない。とすれば、近世における薬師堂再建時の仕事と考えられようか。なお発掘区南隅の瓦溜遺構内の瓦については、瓦溜の位置と多量の灯明皿の一括出土などからみて、その周辺に瓦片の出土がほとんどなかった薬師堂地区基壇に建っていた堂宇の屋瓦の可能性が強い。

註1. 土地の人の話しによれば、戦後水田化する際に50～60cmほど地下げしたとのことで、現在も旧状を遺している西側溝遺構付近(当発掘区から西30m)との比高はいま1.9mある。もとは薬師堂へ向って緩やかな傾斜地であったとみられる。

(1) 南側瓦溜遺構

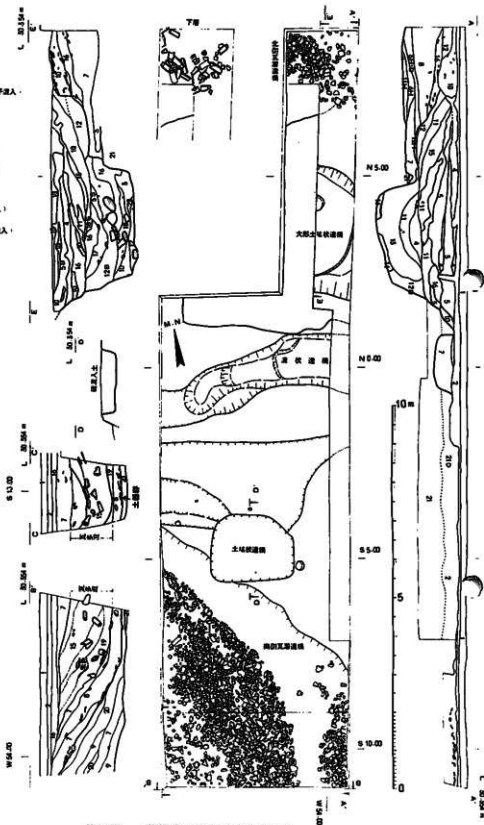
①位置

発掘区の南側隅に位置する。

②遺構

表土下50cmで検出された。発掘した部分の瓦溜の規模からみて瓦溜全体の大きさは平面プランが円形の掘込みと想定した場合径15m以上の大規模な土壇になる。このうち、瓦溜となっている範囲は中央部分の径約10m前後と考えられる。発掘区内で検出した掘込みの部分は南北7m、東西5mであるが発掘区南壁側において掘込みの東端限界を確認していない。また検出した瓦溜部分の大きさは南北5.5m、東西3.5mで想定される瓦溜全体からみた場合東北部の約6分の1にあたりとみられる。検出面でみた瓦の出土状態は周辺部が密で、中心部に近づくにつれ粗となる。つまり瓦溜中心部が落ち込んだ状況を呈している。縁辺から1m内側には黄褐色土が約30cmの巾でベルト状にめぐる。またこの瓦溜の東約1mにも瓦が集中して

- 1 黄 土
 - 2 褐色土 / 未明埋土
 - 3 褐色土
 - 4 褐色土 / 黄色、褐色砂子混入
 - 5 黄褐色土
 - 6 黄褐色土 / 粘质
 - 7 黄褐色土
 - 8 黄褐色土 / 黄色砂子混入
 - 9 黄褐色土 / 黄褐色土混入
 - 10 黄褐色土
 - 11 黄褐色土 / 黄色砂子混入
 - 12 灰褐色土
 - 13 灰褐色土 / 砂质混入
 - 14 灰褐色土 / 粘质
 - 15 暗黄褐色土 / 黄色砂子混入
 - 16 黄褐色土
 - 17 褐色土 / 黄色、褐色砂子混入
 - 18 淡黄褐色土
 - 19 黄褐色土 / 砂质
 - 20 黄褐色土
 - 21 黄褐色土 / 砂质
 - 22 灰灰、粘土层
- H 表 い
B 表 い
D 表 い



第35図 薬師堂西発掘区遺構実測図

出土し、前者を1群、後者を2群として調査した。1群と2群の瓦の投棄時期は2群の方が若干先行するとみられるが、出土瓦の上からそれを区別することはできない。

③土層

大形の掘込み内の土層の堆積状況および、瓦の堆積状況を調査するため、トレンチの南壁に沿って掘込み部は70cm、瓦溜部は2mの巾で掘り下げ調査を行った。その結果、水田の床土の下に約15cmの茶褐色土があり、その下に少量の瓦・土師質土器が混入する黒色土があり、掘込みの部分は黒色土と黄褐色土が交互に流れ込んだ状態で層をなし、検出面から1.7mの深さまで掘り込まれていることがわかった。この流れ込み作用の際、さきに2群とした瓦も一緒に埋没したものである。径15m以上の大形掘り込みに対し、この流れ込み作用が終了し、ゆるい逆円錐形の凹地ができた後、瓦の投棄作業が開始されたものと考えられる。瓦の堆積状態は、ほとんど土砂を混えないほど多量であり中心部に近い部分では丸瓦の完形品が目立つ。また瓦溜の中には朱を混入した土層があり、検出時にベルト状にみられた黄褐色土層から続くことも判明した。瓦溜の下で黒色土と接する部分からは多量のほぼ完形の土師質土器が出土した。なかには4～5枚重なった状態で検出したものもあり、これら土器類の出土状態から、瓦を投げ入れる前にまず土器類を一括して投げ込んだとみられる。したがって、もともと灯明皿に使用された土器類の土器溜があったことがうかがえる。

④遺物

瓦溜部から出土した大量の遺物の中には、約90点の軒丸、軒平瓦をはじめ、鉄釘、燈明皿として使用された痕跡のある土師質土器(約90個体)・緑釉陶器片が出土した。また、掘込み底部近く(検出面より1.5m下部)で白色の約5cmの厚さの漆喰のかたまりも出土した。

⑤年代

調査区が想定される瓦溜全体の約6分の1と狭いため断定するのは危険であるが、発掘範囲内での出土遺物、特に土師質土器に1点ではあるが糸切底(瓦溜上層)がみられることから中世以後の所産とみられる。

(2) 北側瓦溜遺構

①位置

発掘区の北側隅に位置する。

②遺構

表土下30cmで多量の瓦が出土し、南側部で発見された瓦溜と同様の遺構と思われる。一部分の調査のため形態、規模について言及することはできない。遺構上部はかなり削平されているとみられ検出面の瓦についてもその後の耕作のためローリングを受けて細片化している。遺構は南側に隣接する大形土壇の上部を埋土した断面舟底状の整地層、および整地地築を行なう以前に流れ込んだ瓦片を含む包含層(灰褐色、茶褐色)の上面を切り込み、深さ約50cmを測る。瓦は北北東から南南西の方向に傾斜しており前記の方向から投棄された可能性が大きい。

③土層

遺構内の土は黒褐色土の1層である。検出面から約10cmの間は純瓦層といえるほど瓦片が埋っており、細片が多い。下層に向けてしだいに瓦の出土量は減少し、黒褐色土の中に完形の丸瓦が出土した。なお瓦溜遺構の下層の包含層より出土した瓦は、南側遺構でもみられたように瓦投棄の時期差とみられ、発掘区のさらに北側部分に瓦溜の中心部が存在する可能性がある。

④遺物

多量の瓦に混って下層より軒先丸瓦2点・完形の玉縁付丸瓦が約18点出土した。またこれらの瓦の他にへら切り底の土師器坏片が少量出土した。

⑤年代

南側に隣接する大形土坑との切り合いからみて大形土坑上面を版築して埋めた後の作業であり一応上限を中世に求めることができる。

(3) 大形土坑状遺構

①位置

北側瓦溜遺構のやや南側に位置する。

②遺構

一部分の調査のため形態・規模・性格については不明な点が多い。遺構は南北に約7mの範囲で確認され、深さは中心部で地山面下約2mにおよぶ大形土坑状を呈している。発掘した中心部底は一度立ち上がり円形状に区切られているかのようであるが、西側にやや振れながら溝状に延びる可能性もある。いづれにしても一部分の調査のため詳細は不明である。断面調査の結果は黒色土を間層に明瞭に上下層にわかれ、土坑は掘られて後、2度にわたり人為的に埋められていることがわかった。まず下層は底面より約1m上まで行なっている。埋土は色調での分類では数層に分かれレンズ状堆積を呈するが、その性質・混入物等の差はほとんどなく小ブロック状の土塊を多量に混入した鋳造関係の廃棄物である。おそらく周辺部から短期間の内に投げ入れたものと思われる。上層は大形土坑の上部を新たに舟底状に掘り込みその中を黄褐色粘質土によって版築状に築き固めたいわゆる整地地業である。またこの整地地業と下層との間には灰褐色・黒褐色土が流れ込んでおりある程度、時間差があると思われる。整地層の範囲は南北約5.6mあり、西側は発掘区東側端から西へ約4mで立ち上がり終っている。東側は未調査のため不明であるが、土坑底部が発掘区東側で立ち上るものとすれば、東西もほぼ同程度であろう。整地は黄褐色の粘質土を丁寧に重ねたものでレンズ状を呈する。

③土層

遺構内の土層についてはすでに述べた。ここでは遺構の掘り込み線(掘り方)と土層の切り合い関係についてみていくことにする。大形土坑の北側の状況は複雑である。表土下約1.7mで黄褐色の地山が検出される。その上部には約40cmの厚さの整地層がある。整地層は黄褐色・

黒色土の互層で版築状に突き固めている。さらに上層には軒先平瓦等の瓦片を含む黒色土・茶褐色土の包含層がある。大形土壇はこれらの遺構・土層を切り、掘り込んでいる。また南側をみれば表土下40cmで地山面に達し北側と南側との地山面のレベル差は約1.4mある。つまり大形土壇が掘られる以前にすでに北側部分は何らかの遺構によって地山を大きく掘り込んで、その上に版築状の整地が施されていたことになる。なお、北側の瓦溜遺構は大形土壇上面に施された整地地盤より後の掘り込みである。

④遺物

下層中央部より集中して鋳造に関連あると思われる炉の構築物が多量に出土した。一部は加工面を残す珉入粘土でつくられているが、その大半は遺存状態が悪くもとの形を想定できる資料はない。その周辺より銅滓や直径5cmほどに復原される小形の埴場状土器片が少量であるが出土した。また回転糸切底の土師器杯が1点と少量の瓦片、凝灰岩製の宝珠先端部などが出土した。上部の整地層の中からも少量の瓦片が出土した。

以上のことから、園分寺域内において小規模な銅製品等の鋳造が行なわれていたことが想定される。また炉構築物の下より焼土・木炭・粘土塊等も若干ではあるが検出されている。

⑤年代

年代を決定する資料に乏しい。しかし、回転糸切底の土師器杯片が出土したことにより一応中世以降の時期が想定されよう。（豊後地域における糸切り手法の出現時期は未だ確定をみていない。また出土した土師器も底部の一部のみで、その形態を知り得ない。）

(4) 溝状遺構

①位置

トレンチの中央やや北側より東西に走る溝である。

②遺構

黄褐色の地山面で検出された。東側断面で見れば、上幅約1.4m、深さ約0.5mのU字形をなす溝である。溝は西へ向うにつれてやや蛇行しながら溝幅は狭くなり、深さも浅くなっている。これは旧地表の傾斜にしたがうものであろう。

③土層

黒色土の火山灰土1層である。しかし東側断面には北側にみられる舟底形を呈する整地層の一部が覆っており黄褐色粘質土がみられる。

④遺物

土師器の高杯・甕片が少量出土した。須恵器片も1点出土した。

⑤年代

土師器高杯の形態からみて6世紀後半～7世紀前半の時期が想定されよう。

(5) 土壇状遺構

①位置

トレンチ中央部に位置する。

②遺構

南北1.75m、東西2.15mの隅丸長方形を呈す土壇である。深さは地山面から約0.4mある。

土壇は南側瓦溜遺構を切り込んで掘られている。一種の基礎固めの地業であろう。

③土層

栗石・砂利が黄褐色土の中に隙間なく混入している。

④遺物

検出面から若干の土師器破片が出土したが埋土の中からの出土遺物はなかった。

⑤年代

年代を決定する遺物の出土はなく不明である。

(3) 地下式横穴

西側溝遺構の北側に溝遺構探索の際に発見されたもので、溝遺構と切り合い関係にある。竪坑部を南に、平面形が卵形を呈する玄室を北にし主軸の方向はN26°E、主軸長2.9m、最大幅2mを測る。黄茶色の地山を掘り込んで構築されている。

竪坑部は、大部分が溝掘削時に破壊されてしまっており竪坑入口の閉塞の状態についてはいっさい不明である。竪坑は、平面形が0.8×0.9mの不整形で深さ1.9m以上ある。竪坑から緩傾斜の階段状の段を一段降りると羨門に達する。

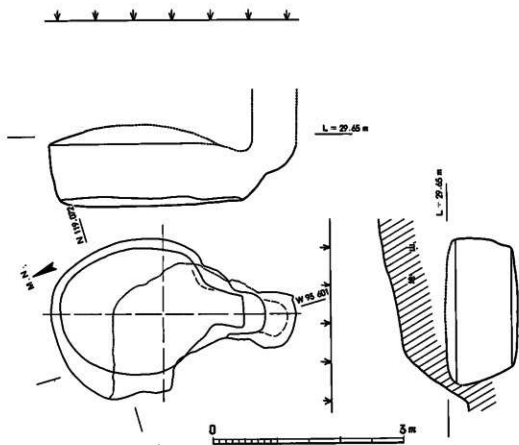
羨門は長さ0.6m、幅0.5mを測り天井は崩落しているが、床面からの天井推定高は約0.7mである。

玄室は、平面形が羨門部に向ってすぼまるいわゆる卵形となり2.4×2.0mを測る。床面は、中央付近が凹んで周辺より約10cmほど低くなっている。また現地表面(水田)から床面までの深さは2.9mである。玄室天井も竪坑部同様に溝遺構の掘削時に破壊されており、ほとんど崩落していたが復原すると横断面形は、天井推定高約1.2mの蒲鉾形となる。また側壁と天井部とは稜線によって明確に分けられている。

玄室内部は、天井部を形成していた黄茶色の地山やその上部の黒色土が堆積しており上部黒色土中には人頭大の栗石が投げ込まれていた。これは溝掘削以降のもので、横穴に伴う遺物ではない。

地下式横穴は、宮崎県を中心として^{註1}5世紀には出現し、九州では鹿児島、熊本、大分、福岡の各県に分布している。^{註2}大分県下においては、^{註3}現在までのところ臼杵市、野津町、竹田市、杵築市、安岐町、武蔵町、国東町、中津市など日田周辺を除きほぼ全域で発見され、福岡県側の築上郡築城町、行橋市、北九州市へとひろがっている。また、大分県下の地下式横穴は多くの場合遺物がなく、なかには五輪塔などの中世の遺物が安置されているものもあり、再利用も含めてその営ま

れた年代についてはかなりの時間的幅があると考えられる。国分寺跡において今回発見された地下式横穴の平面形は、福岡市室岡遺跡の地下式横穴^{註2}あるいは、行橋市竹並遺跡の古式タイプ^{註4}の横穴に類似している。地下式横穴の営まれた時期は溝造構との切り合いからみて溝が掘削された年代より降ることはない。溝造構が仮りに国分寺創建当初のものでないとした場合でも国分寺創建後に寺域内にこのような墓を築くことはまず考えられない。したがって当地地下式横穴造営の下限については国分寺創建以前とみて誤りないところであろう。



第36図 地下式横穴実測図

註1 田中茂他『下北方地下式横穴第5号』 宮崎市教育委員会 1977

註2 横山邦雄他『板付周辺遺跡調査報告書』 福岡市教育委員会 1975

註3 豊前・豊後地下式横穴一覧表

遺 跡 名	所 在 地	出 土 遺 物	文 献 ・ 備 考
門前地下式横穴	大分県 臼杵市大字前田字立中		
深田地下式横穴	臼杵市大字深田	五輪塔登部 平瓦	菊田徹氏の御教示による。
中山地下式横穴	大野郡野津町大字宮原字 中山	内部に五輪塔が 散乱している。	
小高野地下式横穴	竹田市大字入田字小高野		
馬背畑地下式横穴	大野郡緒方町馬背畑		
井手の元地下式横穴	大野郡朝地町宮生字井手 の元		
大内地下式横穴	杵築市大字大内字東天内 山		
大塚地下式横穴	杵築市大字狩宿字大塚		
中の川地下式横穴	東国東郡安岐町矢川字中 の川		
宮西地下式横穴1～2号	東国東郡国東町大字治郎 丸字上治郎丸		
福島地下式横穴1～2号	中津市大字福島字三ノ丸	1号には礎石に よる棺床あり。	渋谷忠森『中津市福島 地下式横穴』1975
福立地下式横穴1～4号	福岡県 豊前市大字福立字太郎羅		弘津弘文「豊前黒土村 の地下式横穴」『考古 学雑誌』14-13 1924 吉村鉄臣「豊前国築上 郡黒土村の地下式横穴」 『考古学雑誌』14-13 1924
日奈古文殊堂地下式横穴	美上郡能田町下日奈古文殊堂下	五輪塔出土	榎室 神本弘氏の御教 示による。
大八木家地下式横穴	京都府豊津町豊津・		定村晋二氏の御教示に よる。
大行事地下式横穴	行橋市大行事		“
長尾正頼八幡地下式横穴	行橋市長尾		“
高瀬地下式横穴	行橋市高瀬	消滅	“
柳田小学校校庭地下式横穴	行橋市下柳田	“	“
鈴井家地下式横穴	京都府羽田町尾倉		“
羽田小学校校庭地下式横穴	京都府羽田町羽田	須恵器出土 ・消滅	“
赤坂地下式横穴	北九州市八幡西区本城		上野精志編『九州畿内 自動車道関係埋蔵文化 財調査報告-X X X -』
善弘寺地下式横穴	同 上		“

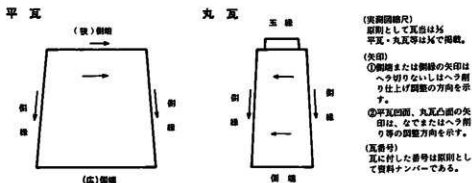
註4 赤崎敏男・長嶺正秀『竹並遺跡調査概報』竹並遺跡調査会 1977

5世紀末の横穴を古式タイプの横穴として設定している。

第2節 遺物

I 瓦

出土遺物の大多数は瓦である。点数にしておよそ36,000点におよび、とくに1・2次調査による塔跡、4・5次調査による瓦溜め遺構からまとまった資料が出土している。言うまでもなく丸瓦・平瓦が圧倒的多数を占めており、軒先瓦が約170点、隅平瓦・熨斗瓦・面戸瓦などの道具瓦が20点ある。これらの瓦類のうち平瓦には従来九州地方であり注意にのぼらなかった特異な製作手法がみられる。そのうちのあるものは明らかに一枚造りの特徴を有するものとして注意されるが、いわゆる一枚造りによる平瓦を四枚造り（桶巻き造り）のそれと明確に判別することは容易ではない。したがって、今回の報告では資料を可能な限り詳細に観察し結果を提示するという方法をとった。なお、主要な用語ならびに押図記載上の記号については次のとおりである。



第37図 平瓦・丸瓦の用語と記号

Ⅰ) 軒平瓦

軒平瓦は出土点数94点におよび瓦当文様により2型式4種類に分けられる。このうちⅠ類としたものは、大宰府老司一式の流れをくむ扇行唐草を主文様とするものでa～cに細分される。Ⅱ類は均正唐草文である。

Ⅰ類 a

全体で11点出土している。左行する扇行唐草文を内区におき、上外区に珠文・27をめぐらし脇区と下外区に外向する凸鋸齒文を配する。唐草文の形態は祖型である老司一式に最も近く流麗である。珠文は小形化して数が多くなっている。顎はすべて段顎で、深さは9～12.5cmを測る。顎のつくりは、平瓦部凸面に粘土板を貼りつけ叩き締めたのちに削り出すものと、粘土紐を貼りたしていくものと二種類ある。復原幅29.5cm。

I 類b

全体で7点出土している。復原幅33cmの曲率の小さい軒平瓦である。内区に唐草文をもつが、中央右向きの2支葉を中心として支葉の方向が対称となって、均正唐草文の影響がみとめられる。この点唐草の右端およびこれに付属する2支葉のみを右向とし、全体として左に向うaと相違している。また右端主唐草の下にも1支葉が配される。脇区および下外区に小形の凸鋸歯文が間隔をおいてめぐる。上外区の珠文は省略されるが、唐草文自体、まだ流麗さを失っていない。顎の形態は、粘土板貼りつけの段顎になるものと、なだらかなカーブの曲線顎とがある。

I 類C

当国分寺の主体となる軒平瓦である。71点出土している。内区唐草文は一見右行する唐草文であるが、実はbの唐草文の左端を省略し短縮したものである。右端主唐草の下部にあった1支葉はここではマッチ棒状の子葉に変わっている。上外区には大形の珠文21を置き、脇区および下外区には内向する凸鋸歯文を配している。線太く描かれた唐草文はすでに美しさはない。また、下外区の凸鋸歯文部分の范の磨耗が早かったとみえて全体が明瞭に押捺された資料はない。加えて、互当面が范全体を十分カバーする大きさをもっていないため文様が上下、または左右で切れたものが多くa、bに比べ粗雑なつくりである。顎の形態は粘土板貼りつけによって5.5～11.5cmの深さをもつ段顎となるもの、粘土板貼りつけ後なだらかなカーブに削って曲線顎となるものがある。量的には後者が多い。幅約29cm。

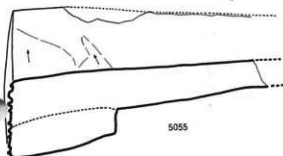
II 類

均正唐草文軒平瓦で5点出土している。中心にほぼ対称にバルメットを置き、これから屈折して右あるいは左にのびる主唐草に3本の支葉が派生する形をとる。文様は左右正しく対称ではなく、支葉の派生する位置および形態などが異なる。また、左側部分上から延びる支葉先端付近に蔓の一部とみられる凸線があり、もともと左右対称であったものをなんらかの理由で彫り直した可能性もある。全体的に彫りは浅い。曲線顎で復原幅は25cmである。

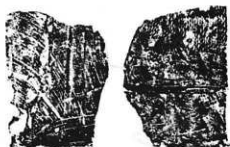
軒平瓦II類文様は福岡県遠賀郡岡垣町浜口庵寺出土品と類似していることが知られている(考察2)。

軒平瓦

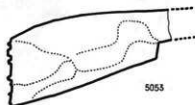
I類a



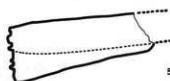
5055



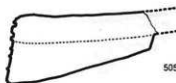
5054



5053



5051

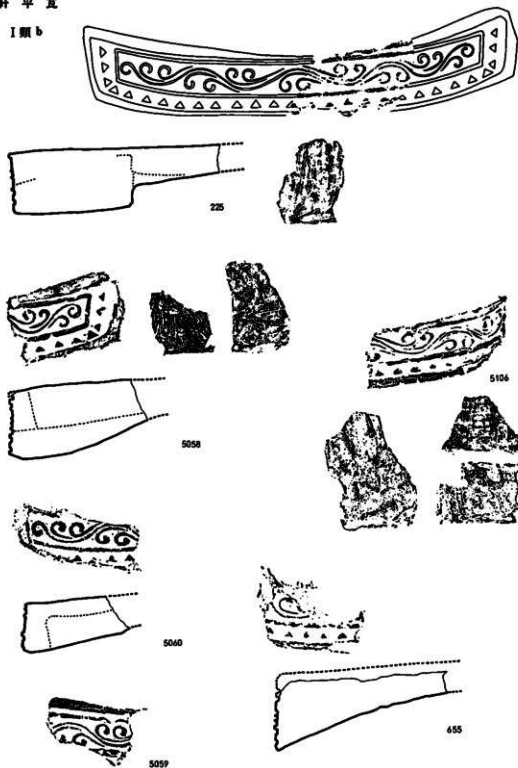


5052

第38圖 軒平瓦拓影實測圖(1) (1/4大)

軒平瓦

I類b



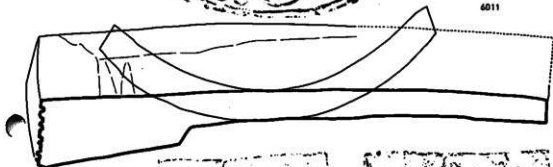
第39圖 軒平瓦拓影實測圖(2) (1/6大)

軒平瓦

I類c



6011



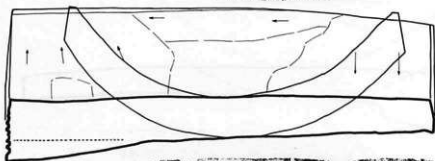
5070



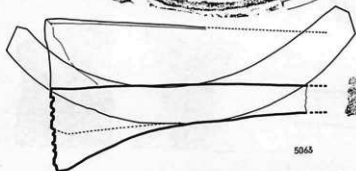
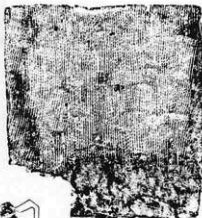
第40圖 軒平瓦拓影実測圖 (3) (1/4大)

軒平瓦

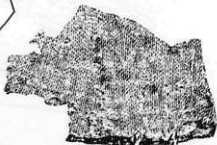
I類c



5064



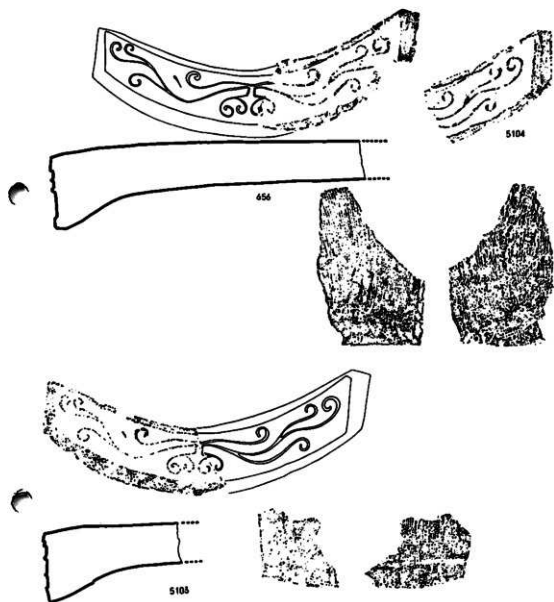
5063



第41圖 軒平瓦拓影實測圖(4) (1/4大)

軒平瓦

Ⅱ類



第42圖 軒平瓦拓影實測圖(5)(1/5大)

(2) 軒丸瓦

軒丸瓦は68点出土し、6型式7種類に分類できる。このほか現在の国分寺に所蔵されている瓦のなかに発掘資料にない型式のものがあり、これについては別項（考察2）で扱うこととする。

I 類

薬師堂西側の瓦溜を調査した5次調査によって新たに発見した軒丸瓦である。内区は複弁10葉蓮花文、外区内縁に29の珠文をめぐらす。外縁は素文で瓦当径は16cm。径5cmの内区中房には1+8の蓮子を配する。一ヶ所だけ間弁、蓮子が一直線をなすが全体に整然とした割付けではない。丸瓦との接合は外区珠文帯よりやや中心に近い位置に相当する部分で行い、丸瓦を深く接合するもの（5012）と、接合のための溝をつくらないもの（5011）とがある。いずれも接合部内面にあてる粘土は薄い。瓦当部断面形についても2資料はやや異っており5011は頸部から接合部分に向って薄くなる。瓦当裏面の調整はなでを主体としたもので、5011は裏面から頸にかけて小さな打痕が著しい。丸瓦との接合部分外面は丸瓦方面へないしは逆方向に1~2cmの幅の削りが行なわれるが、頸部まで同方向の削りのみで仕上げている点が特徴である。

大分市永興の永興寺所蔵瓦に同范または同型とみられる資料がある。この資料は古くから知られていたので、同寺を国分尼寺の有力な候補の1つとしてあげる研究者もあったが、国分寺における今回の発見によって両者の近い関係が実証された。

II 類

軒丸瓦では出土点数はもっとも多く32点出土している。内区は複弁11葉蓮花文でうち1つは単弁である。すでに細弁化の傾向が著しく、むしろ単弁2単位を弁間線で画したという方が適切である。外区に珠文36をめぐらすのが内区との界線は省略されている。圏線で区画された中房に1+8の蓮子が莖盤目状に近い形で配される。瓦当径は14~16cm。丸瓦との接合は縁から珠文に相当する部分に深く接合する。丸瓦端面が周縁の一部となっているものも少数例ある。いずれの場合も接合部内面にあてる粘土はうすく、外面では厚く補強するものとうすいものがある。前者が多い。接合後裏面は丁寧になで調整される。丸瓦との接合部外面の調整は丸瓦の方向あるいは逆方向への削りを行うが、その後丁寧になで調整するものがある。頸部分についても同様である。ただしへら削りの方向では周縁に沿って連続的に削ったもの（5020）がある。灰色須恵質の焼成が多い。

III 類

単弁24葉蓮花文の大形品である。単弁はII類単弁から子葉を省略した形をとる。外区珠文は正しく弁間に配される。縁との間には圏線がある。中房は太い圏線によって画され蓮子は1+8。整然とした規格によるつくりの丁寧な瓦当である。瓦当面径は18cm前後。丸瓦との接合はほぼII類と同様であるが、接合に際して丸瓦端部を指でおさえ、丸ないしはとがり気味に仕上

げている。裏面の調整はなでが多いが、ヘラ削りしたもの（5031）もある。出土点数は12点である。

Ⅳ類a

菊花文状に細弁化した大形瓦当で、42弁を数える。外区には29の珠文をめぐらしその外側に細い圈線をおく。b類との相違はこの圈線の有無による。a、bは花卉の特徴や范のキズ等からもともと同一の范であることは疑いなく、a→bの変遷がたどられる。中房は圈線に画され1+8の蓮子をもち、中心蓮子をやや大形につくっている。瓦当面の縁および外区圈線がヘラ削りされて著しく低くなったものが多い。

製作手法上Ⅳ類軒丸瓦を特徴づけるのは瓦当面作成の際の離れ砂の使用である。a、bともに使用したものが存在する。5041では、瓦当面および丸瓦凸面に使用されている。このような瓦当面への離れ砂の使用はとくに使用粘土との関係が深いと考えられる。すなわち、Ⅳ類にいたってはじめて粘土中に砂粒をほとんど混入しない、いわゆる精製粘土が用いられているのである。使用粘土と離れ砂の使用については平瓦の場合でも高い相関関係を示すことは後述するところである。

丸瓦との接合は珠文から蓮弁にややかかる位置に相当する部分で行う。接合は深い。接合部内面にあてる粘土はうすく、なで調整を施す。これに対し外面は縁までの段差をうめるべく厚く粘土を充填し、上面を丸瓦方向あるいは逆方向にヘラ削りする。周縁額にかけては周縁に沿って粗い削りを行う。瓦当面径は19cm。

Ⅳ類b

形態的にはⅣ類aから外区圈線を取り去ったものがbである。縁を一部ヘラ削りしたものもみられる。丸瓦との接合についてもaより接合位置がやや縁に近くなるという違いはあるが、手法的にほとんど変りがない。裏面および周縁に縄目叩きを密に行う仕上げ調整が特異である（図版42）。

離れ砂の使用からみたⅣ類軒丸瓦の出土数内訳は次のようになる。

離れ砂を使用しない	a	1
	b	7
離れ砂を使用する	a	3
	b	3

不明 1

V 類

6点出土しておりいずれも破片である。復原すると内区は複式弁弁8葉蓮花文、外区に大形の珠文24~25をめぐらす。みかけ上、蓮弁は高く盛り上った楕円形につくられ、弁弁である。しかし、各蓮弁を密接させ、さらに蓮弁内の二つの子葉を画する線を省略し、子葉を極端に拡大した形をとったとみる方が適切であろう。圏線で区画された大形の中房には周環付蓮子が0+4+8と配される。内区の文様の規格性に比して縁の仕上げや作業課程が粗雑である。丸瓦との接続については明らかではないが、裏面および周縁はなで調整によって仕上げる。精製粘土を使用し須恵質堅緻に焼成したものが多い。復原瓦当面径約17cm。

VI 類

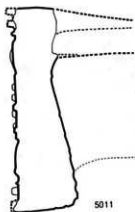
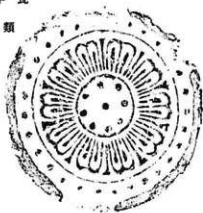
塔跡トレンチから1点出土した。復原すると内区は桃割れ状を呈する単弁8葉蓮花文、圏線で区画した外区には珠文16がめぐる。中房は圏線で区画されて+8の蓮子が配されている。縁は幅が狭くかつきわめて低い。裏面および周縁はなで調整である。精製粘土を使用し黄白色を呈しやや軟質の焼成である。復原径約16cm。

種類		通稱	金堂跡 ^①	講堂跡 ^②	塔跡	回廊	溝	北の溝 回廊以	瓦溜	計
軒平瓦	I	a		1	2		1		7	11
		b			1	1	1		4	7
		c	4	4	14	6	4	5	38	71
II				1	1			3	5	
軒瓦	II	I							2	2
		II	2	3	3	3	2	3	16	32
		III			3		1		8	12
丸瓦	IV	a		1	1			3	10	15
		b					1	6		7
	V		2		3		1		6	
	VI				1				1	
	計		6	7	26	14	10	18	88	169

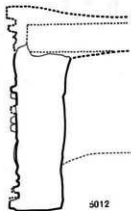
軒先瓦の遺構別出土点数

軒平瓦

I 類



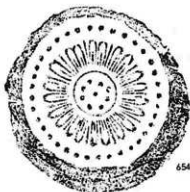
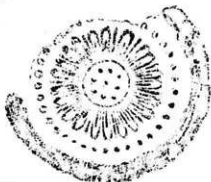
5011



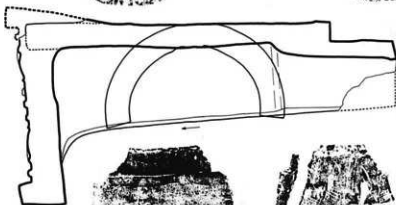
5012

軒平瓦

II 類



654

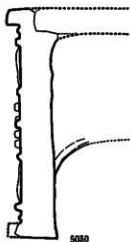
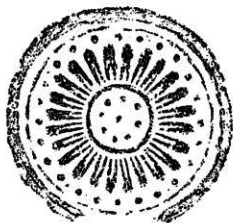


5020

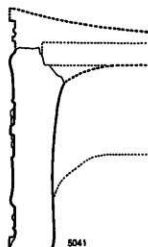


第43圖 軒丸瓦拓影実測図 (I) (1/2大)

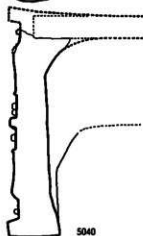
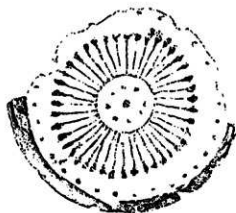
軒丸瓦
Ⅲ類



軒丸瓦
Ⅳ類 a

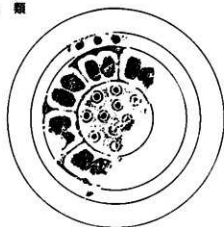


軒丸瓦
Ⅳ類 b

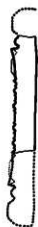


第44圖 軒丸瓦拓影実測圖 (2) (3/4大)

軒丸瓦
VI 類



1033



664

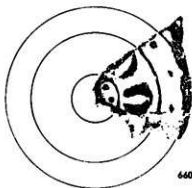


665



1032

軒丸瓦
V 類



660



第45圖 軒丸瓦拓影実測圖 (3) (1/4大)

(3) 平 瓦

今回の調査で出土した平瓦は点数にしておよそ、24,000点以上にのぼっている。とくに塔跡および瓦溜からはそれぞれ8,000点以上のまとまった資料を得た。平瓦の整理法については、現在とくに一定の方式が確立している状況ではなく、一般に製作手法と凸面叩き文様による分類が二本の柱となっており、行われている。

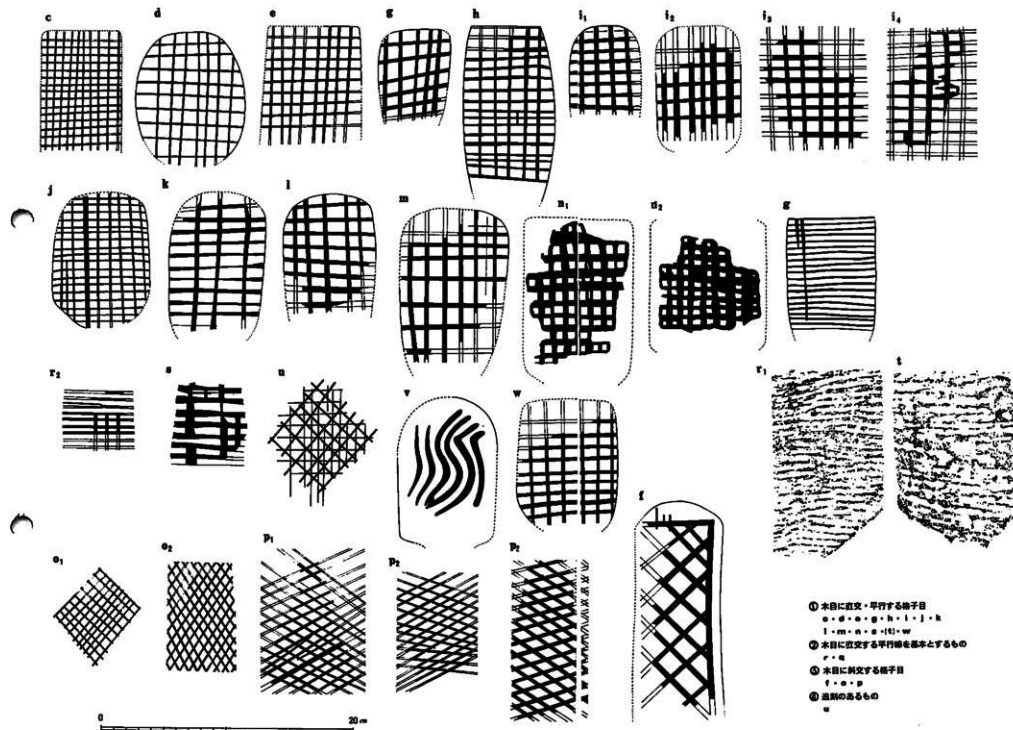
今回の整理に当たって行った方法は、まず叩き文様（厳密には彫刻された叩き板）毎の分類を試み、しかる後、形態および製作手法上の相違に留意し細分した。このため可能なかぎり叩き文の復元を行った。ただし、縄目叩きを有するものについては、後述するように形態および製作手法を優先させている。このような分類法をとった所以は、生産地（または工人）の違いの有無あるいは生産時期の相違の有無といった瓦供給に関する事象を究明しようとするとき、最も端的にそれを示すのは叩き板の相違であろうと考えるからである。したがって、仮に同一の叩き板が世代を越えてあるいは複数の工人で共有されていた場合、反対に同一の工人が二種以上の叩き板を使用する場合でも基本的には分類の基礎資料たる資格を失うものではないと考えている。

この作業を通じて得た一つの大きな収穫は塔跡および瓦溜から出土した瓦の組成が微妙に異なっているという事実である。創建時の瓦とそれ以後の葺きかえないしは補填時の瓦とが明確に分離できない現在、この結果からただちになんらかの結論を導き出すことはできないが、この二つの遺構の出土瓦組成上にみられる相違こそ、瓦供給関係の一端を具体的数値として表すものであり、叩き板を中心とした分類が一応意図した方向へ向っていることを示している。

	塔 跡		瓦 溜		全 体	
	叩き	%	叩き	%	叩き	%
全瓦	2131		535		3858	
a	4967	65.54	5022	64.90	13522	64.63
b	10	0.13	22	0.28	43	0.21
c	21	0.28	9	0.12	63	0.30
d	49	0.65	20	0.26	106	0.51
e	36	0.47	132	1.71	262	1.25
f	3	0.04	0		8	0.04
g	13	0.17	0		15	0.07
h	169	2.23	1228	15.87	2050	9.80
i	468	6.17	1	0.01	626	2.99
j	87	1.15	15	0.19	208	0.99
k	74	0.98	573	7.41	983	4.70
l	154	2.03	14	0.18	211	1.01
m	1	0.01	3	0.04	10	0.05
n	1226	16.18	15	0.19	1401	6.70
o	2	0.03	0		38	0.18
p	1	0.01	0		20	0.10
q	16	0.21	129	1.67	221	1.06
r	92	1.21	335	4.33	577	2.76
s	6	0.08	57	0.74	102	0.49
t	120	1.59	92	1.19	255	1.22
u	51	0.67	64	0.83	142	0.68
v	9	0.12	3	0.04	27	0.13
w	4	0.05	3	0.04	15	0.07
布目				0.01	17	0.08
計・全 面ナデ	7579		7738		20922	
計	9710		8273		24780	

※%は各遺構毎の(計・全面ナデ)に対する数値である。
 ※は縄目叩き、またりとしたものは8期8群(縄目左側)と同一である。

平瓦組成表



第46図 叩き板復原集片(図(1/6大))

つぎに分類の基準とした形態についてはとくに次の点を重視した。

- ① 大きさ、厚さ^(註1)
- ② 凹面径と分割角度^(註2)
- ③ 側縁仕上の形態
- ④ 特殊な形態^(註3)
 - (イ) 凹面側縁または側端の段^(註4)
 - (ロ) 凸面側縁の段^(註5)
 - (ハ) 横断面形

さらに製作手法上の観察では、

- ① 離れ砂の使用^(註6)
- ② 叩き締め^(註7)の内弧^(註8)
- ③ 叩きの疎密^(註9)
- ④ 凹面二次調整^(註10)

以上のようにして、細目叩きを8群に、彫刻叩き板による叩きを行った瓦およびその他のものを31種に分類した。

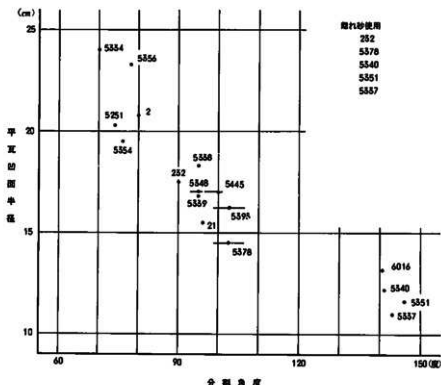
一方、形態および製作手法にみる豊後国分寺使用平瓦の特徴は、いわゆる一枚造り技法の採用という点に集約することができる。一枚造りとおぼしき平瓦の存在はすでに宇佐市法鏡寺廃寺において注意されていた(大分県教育委員会「法鏡寺・虚空蔵寺跡」大分県文化財調査報告第26輯1973)。一般に九州では平安時代を通じて平瓦の製作は桶券き造りによるものと考えられており(佐原真「平瓦桶券作り」考古学雑誌第58巻第2号1972)、太宰府地域における出土資料はその事実を裏づけている。当国分寺において一枚造り手法が採用された時期については、いまだちに明確にすることはできない。それは瓦に残された一枚造りに特有な手法あるいは形態がいまひとつ明らかでないことが理由としてあげられるが、平瓦自体の変遷についても不明の点が多い。

したがって、一枚造りを手法、形態の面から追究する作業と並行して瓦自体の詳細な観察から始めなければならない。

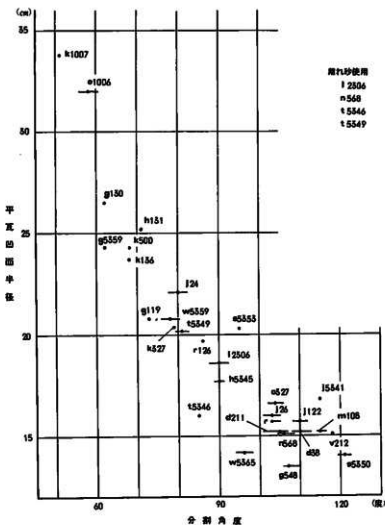
なお、平瓦の分類に直接かわるものではないが、次のような項目について調査した。

- ① 使用布^(註11)
- ② 縫い目^(註12)
- ③ 特殊な凹線^(註13)
- ④ 粘土板のつぎ目^(註14)
- ⑤ フラ痕^(註15)
- ⑥ 凹凸面の糸切り痕

註1 凹面径は平瓦凹面がなす円弧の復原半径であり、分割角度とはその円弧の復原円周上に占める中心角である。凹面径の算出に際しては端部が凹面二次叩きによって反りをもったものがあることから原則的に広端部から10cm程度のところで計測している。また凹面二次調整によって凹凸を生じているものについてはやむをえず近似値をとっている。分類された瓦毎にこの関係を整理したのが次のグラフである。分割角度では70度、90度、110度付近に集中していることがわかる。これらのうち分割角度140度前後の縄目叩き5群、および分割角度がきわめて小さい叩き板h・k・gなどの瓦にきわだった特徴がうかがえる。



第47図 分割角度(1) 縄目叩き



第48図 分割角度(2) その他の叩き

註2 側縁仕上げの形態は大きく次の3つに分類される。(瓦資料は代表例を記す)

①主要面が凹面の中心に向うもの

①切り割りのまま…o類・D類・n類1の一部

②仕上げ調整を施すもの

a. 1面のみ……………a類4群・g類

b. 面取りを施すもの…a類2群・n類の一部・w類の一部

②主要面が凹面の中心に向う線とある角度をなすもの

a. 1面のみ……………a類1群の一部・h類・k類・q類・r類・t類

b. 面取りを施すもの…a類5群・c類・d類・s類・v類

なお、切り割り痕をもつもののうち、r類1(2127)は凸面側に刃物を当てて切っており通常の場合と逆である。k類のうち(5218)は側縁に糸切痕が残っている。仕上げは②-aに属するものである。このことは糸切りを行う際の粘土塊が瓦一枚分の平面をもつ立方体にすでに整えられてたことを示すもので一枚造りの有力な証拠である。(図版45)

註3 凹面の側縁部あるいは側端部に明瞭な段がみとめられるもので縄目叩き4群平瓦、r類1平瓦中にみとめられる。四枚造り平瓦を製作する際使用する櫛状具を構成する模骨の痕跡とは明らかに異なるものである。また今回の出土資料のうち明確な模骨痕を有する平瓦は軒平瓦I類aおよびI類b、輪痕法によってつくられた唯一の資料(縄目叩き7群)など非常に限定されているので模骨痕との混同はない。したがって、平瓦側縁部あるいは側端部にこのような段が生じるためには、通常の櫛状具に粘土板を巻きつける手法ではなく一枚分または二枚分の瓦をつくるための凸型台の存在を考えねばならない。(図版43)

註4 凸面側縁に段を有する平瓦は縄目叩き5群にみられる特徴である。凹面二次調整の際の凹型台への押圧からこのような形態が生じたものともみられるが、極端に高い段となったもの(253)もあり理由は必ずしも明確ではない。(図版43)

註5 四枚造り平瓦の場合、多少の局部的凸凹はあるにしても横断面形はほぼ一様な厚みをもっている。縄目叩き4・5群、r類、u類平瓦中には横断面中央部が極端に厚い瓦、反対に薄い瓦が存在する。中央部が分厚くなった瓦のあるものにはベースになる粘土板に凸レンズ状の粘土を重ねて盛り上げたあとが観察されるものがある。(図版45)

註6 離れ砂の使用は精良粘土が使用される場合に多くみられる。次に記すように3つの使用法がある。

凸面のみ	縄目5群・i ₁ ・i ₂ ・l・n ₁
凹面のみ	縄目6群・n ₂ ・u
凹凸両面	縄目6群・t・u

離れ砂は今回整理した瓦のもつ諸特徴のなかでもとくに顕著な特徴をもつ手法の一つであり、軒平瓦IV類aおよびbの瓦当面あるいは丸瓦部分に使用されている。したがって、軒平瓦IV類aの時期には少なくとも離れ砂は使用されており、離れ砂使用年代の一点をそこに求めることが可能である。すなわち、ほぼそれは平安時代初頭と考えられる。

ところで、離れ砂の凸面への使用はさておき、平瓦凹面への使用はどのような利点があるのだろうか。平瓦凹面への離れ砂の使用は、一枚造りの場合でしかも布が凸型台へ固定してある場合を想定するとき、きわめて有効な手段であると考えられる。叩き終った瓦はまだやわらかいため凸型台からははずす際に形くずれをおこしがちである。凹面に二次調整の叩き

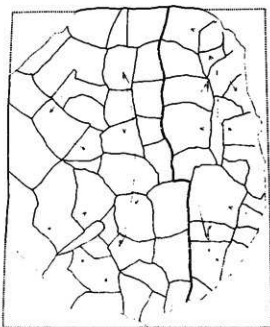
を行なった平瓦が存在することもこの辺の事情を暗示するものかも知れない。ただし、行基葺き丸瓦のなかに凹面に離れ砂を使用したものが存在することは、離れ砂の凹面への使用が必ずしも一枚造りと直接結びつくものでないことを示している。

使用された離れ砂には精選された細砂粒を使用するもの（縄目5群・i・n・t・u）と無神経に大粒砂粒の混在した砂粒を使用したもの（縄目6群）とがある。また、平瓦表面の離れ砂の状態は全面に一樣にまぶされたものもあるが、集中部分とほとんどついていない部分とがあるものも多く、手でふりかけるものとみられる。ただし、凸面については叩き締める際に叩き板の方につけながら行う場合も考慮する必要がある。

なお、丸瓦では行基葺き丸瓦の一部に離れ砂の使用がみとめられる。

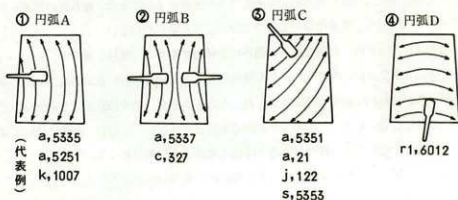
● 注7 叩き締めの円弧とは、平瓦凸面の叩き締めを行う場合の叩き板の移動する方向のことで、平瓦上についた叩き文様の観察によって判別できる。とくに今回の整理では、叩き板の復原を行ったことから、大部分のものについて柄の方向が明らかとなっており、より詳細な観察が可能である。

桶巻き造りと一枚造りとはおのずから瓦に対する工人の位置関係が異なることから、叩き締めの円弧を調べることにはある程度一枚造りかどうかの判定資料となろう。



第49図 叩き締めの実測

叩き締めめの円弧はほぼ次のように分類される。



第50図 叩き締め法模式図

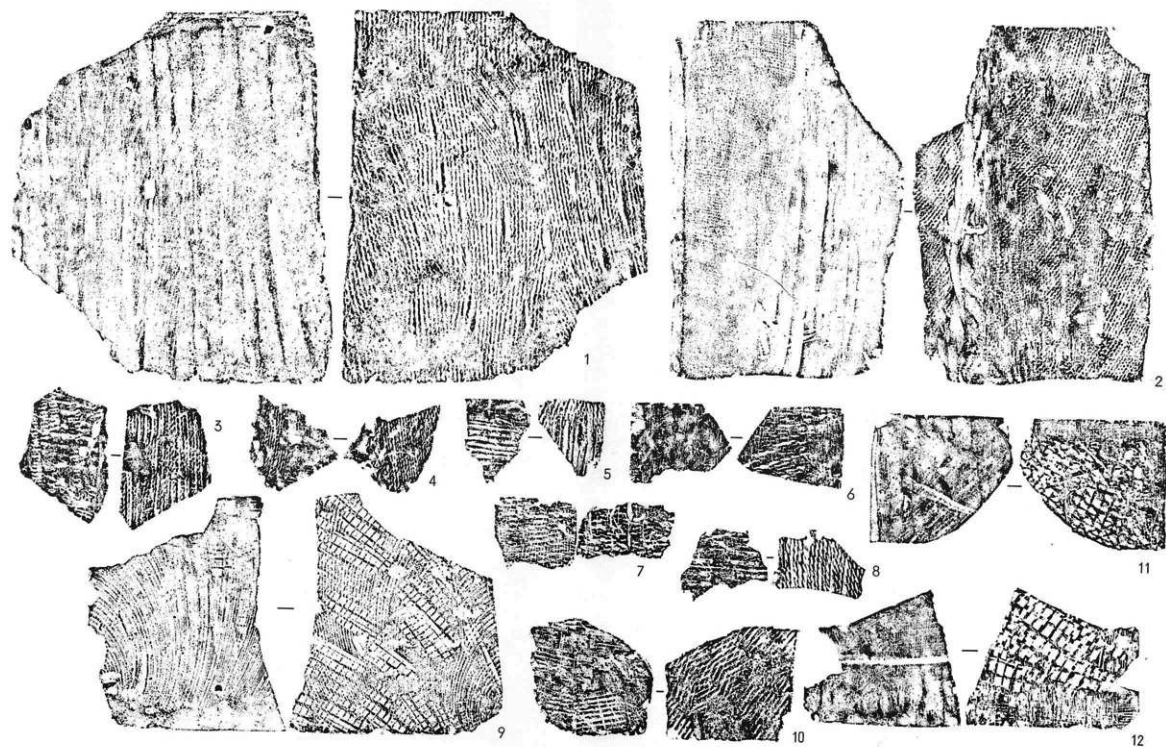
なお、今回整理した平瓦中には縄巻棒の回転押捺によるものは一点もない。

註8 平瓦凸面の叩き締めは通常ほぼ全面に行われ、叩き板圧痕が全面についている。しかしなかには数回しか叩かれていないようなきわめて疎なものがある（a類3群・q）。粘土板を切りはなすための糸切痕が明瞭についており、叩き締め後の調整によって消されたものではないことは明らかである。叩き締めを十分に行わないでつくる平瓦には、凸面に布をあててその上から押えたものや、さらには布さえも置かないで押さえただけのものが存在することから、造瓦技術が著しく低下していく時期があるとみられる。このような叩き締めめの粗雑化も一枚造りの造瓦法と無関係ではないとみられる。

註9 凹面に二次調整の叩きを施したものが存在することはすでに飛鳥・藤原宮出土瓦のなかでも注意されている（奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」1978）。

叩きはほとんどの場合、無彫刻の棒状具によってなされるため、一見模骨痕ないしはなで調整のようにみえる。しかし、棒状具についた特有のキズの圧痕がくりかえしてついていることや、叩き棒の圧痕が互いに交叉していることから判別される。凹面叩きを行うためには凹型台上に置かねばならない。凹面に叩きを施したものに凸面叩きが押圧を受けたり、新たに布痕がついたりしているものがあるのはこのためであろう。凹面叩きは無彫刻の叩き棒によってなされるだけでなく凸面と同一の叩き板を使用したもの、あるいは別の叩き板を使用したものなどがある。（図版43）

このような凹面叩きが行われた理由について、現在のところ十分明らかではないが、一次調整後に模骨（あるいは凸型台）からはずす際の歪みを修正する目的が考えられよう。破片の場合などで調整などとの判別が難しいが確認したものでは、全体で100点前後とあまり多くはない。第50図はその代表例である。



第51圖 平瓦凹面二次調整印き (3/4大)

資料ナンバ	凸面叩き	凹面2次調整叩き	備 考
1 331	縄 目	無彫刻板	凸面が部分的に押圧される
2 331	縄 目	無彫刻板	無彫刻板に豆粒大のキズ、凸面に板目状痕
3 6001	縄 目	縄目(?)	
4 —	縄 目	縄 目	
5 5271	縄目(左)	平 行	
6 114	縄 目	無彫刻板	無彫刻板にキズ、凸面に板目状痕
7 1081	縄 目	縄 目	
8 5273	縄目(左)	平 行	
9 5358	j	j	
10 125	r ₁	r ₁	
11 5396	u	無彫刻板	凸面に板目状痕
12 5370	w	無彫刻板	無彫刻板にキズ、凸面に板目状痕

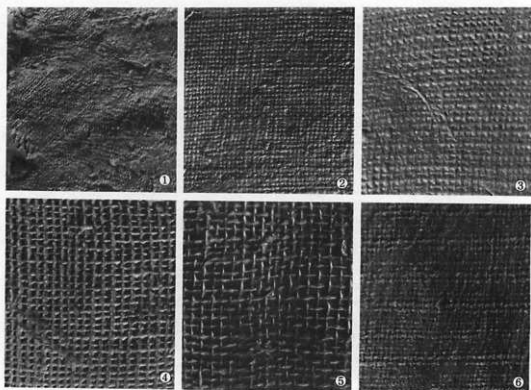
註10 縄目叩き平瓦を8群に分類したのは次の基準によった。

右廻り	粘土板 巻きつけ手法	隠れ砂を 使用しない	側縁又は側端 に段をもたない	叩きが密	大形平瓦 小形平瓦	a類1群
				叩きが疎		a類2群
		隠れ砂を 使用する	側縁又は側端に段を有する			a類3群
			凹面径がきわめて小、かつ分割角度が140°以上			a類4群
	粘土紐 巻きつけ手法	その他			a類5群	
					a類6群	
					a類7群	
左廻り	(側縁又は側端に段をもつものあり)					a類8群

なお、縄目叩き「右撚り」・「左撚り」については、本書では次のように規定した。すなわち、瓦についた圧痕でみて節が左下りについたものを「右撚り」とし、右下りを「左撚り」とした(大分県教育委員会「法鏡寺跡・虚空蔵寺跡」大分県文化財調査報告第26輯1973)。

分類作業の過程で形態上の特徴および製作手法上の特徴が入りまじった形をとっているのは、各特徴項目の組み合わせによっていたずらに種類を作ることよりもより実態に即した分類と考えるからである。すなわち、本書での瓦の分類のねらいが、瓦の生産と供給ということにあるからにほかならない。さらに、縄目叩き平瓦は小破片では分類しにくく、完形に近い瓦をおもに対象とせざるを得ないことも理由の一つとしてあげられる。また左撚り縄目叩きの平瓦、粘土紐巻きつけ手法の平瓦は資料が少いため細分していない。

このような事情から縄目叩き平瓦の分類を8群としたのであって、彫刻の叩き板による平瓦分類に対応する意味での「種類」というまでもなくこの数値をはるかに上まわるものである。



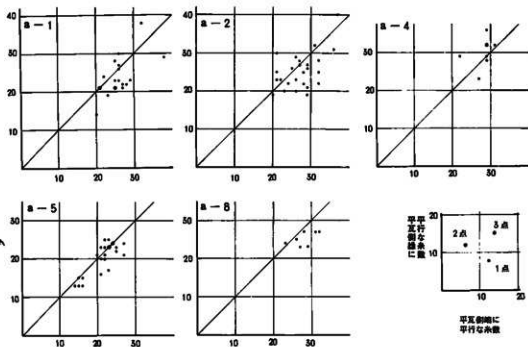
第52図 布 目 (実大)

註11 一枚造りの可能性の高い瓦がかなり存在することから各類使用布の比較（3cm四方の糸数）を試みた。瓦の種類によってとくに特徴的な分布状況を示すものはないが、ある種の糸について製作具、製作手法との関連がみとめられそうである。使用布を疎密によって単純に分類すると細糸を使用し密に織るものから太糸で疎な織り方のものまで第52図のようにほぼ5種類に要約できる。

このうち①はほとんど類例がなく②、③が平瓦・丸瓦を通じて最も多い。④、⑤の糸については前述したように、非常に平滑につくられた桶状具（または凸型台）と組み合わせて用いられることが多く、かつ離れ砂が使用される場合が多い。この種の布の圧痕は比較的乱れが少いことも注意される。布⑤は縫い合わせには適してなく、一枚造り専用布の可能性もあろう。

このほか特徴的な布として、経緯糸のうち1方が6本に1本ないしは6本に2本の割で太糸で織られた布がある。太糸の方向は平瓦では側端に平行に、丸瓦（c類5251）では側縁に平行に現われる。この特殊な布が使用された平瓦の種類は罫目叩き、i、r₁、qなどがある。

つぎに瓦凹面に印された布目痕について、3cm四方を単位とし、側縁に平行する糸数と側端に平行する糸数を座標で示した。調査資料の数が必ずしも十分でないものもあるが、いくつかの瓦について特色ある結果を得ることができた。



第53図 平瓦凹面布目経緯関係図 (1) 縦目叩き

縦目叩きのうち、a類4は凹面側縁に段をもつ平瓦であり、a類5は凹面径がきわめて小さくかつ分割角度が大きいの(約140度)平瓦である。どちらも一枚造りの可能性が強い平瓦である。特徴ある分布をみせている瓦にd、o、vがある。このうち、oは側縁切り割り痕を残しており四枚造りとみられる。また、h、kは一枚造りの可能性が強い平瓦であるが、平瓦側端に平行する糸の方がやや密である。

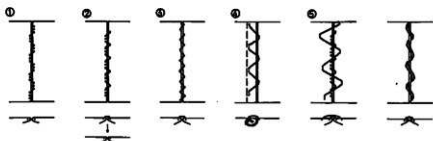
平瓦凹面布目痕の側縁に平行する糸数と側端に平行する糸数との関係が「一枚造り」、「四枚造り」という造瓦法の違いをいかに反映しているかということについては、現状ではまだ調査例が十分とはいえないが造瓦法の違いがそこに用いる布の使用法をある程度規定すると考えられている。つまり、端的に言えば四枚造りの場合模骨を覆う布は筒状に縫い合わせる必要があり、このため使用される布は経糸が側端と平行になる場合が多いというわけである。豊後国分寺跡出土の平瓦の調査結果は、確かな「四枚造り」平瓦の抽出が行なわれていないため断定は控えねばならないが、造瓦法と側縁・側端に平行する糸数との相関度はあまり高くないと考えられる。

このほか、布目は違うが凸面に網目がついた小破片が1点ある(375)。(図版44)

註12 縫い合わせの方法は平瓦・丸瓦を通じて6種類がある。(図版44)

このうち②・③は円筒に布を巻いた状態で縫いつける方法である。④、⑤、⑥の方法をとったものはごく小量である。また⑥は丸瓦にのみみられる。

平瓦で縫い目をもつ資料はそれほど多くなく全部で29例にすぎない。



第54図 縫い目模式図

縫い目が側縁・側端のどちらに平行にあらわれるかを示すと次のようになる。この場合①および②は判別が困難な場合があるのでここではいっしょに扱う。

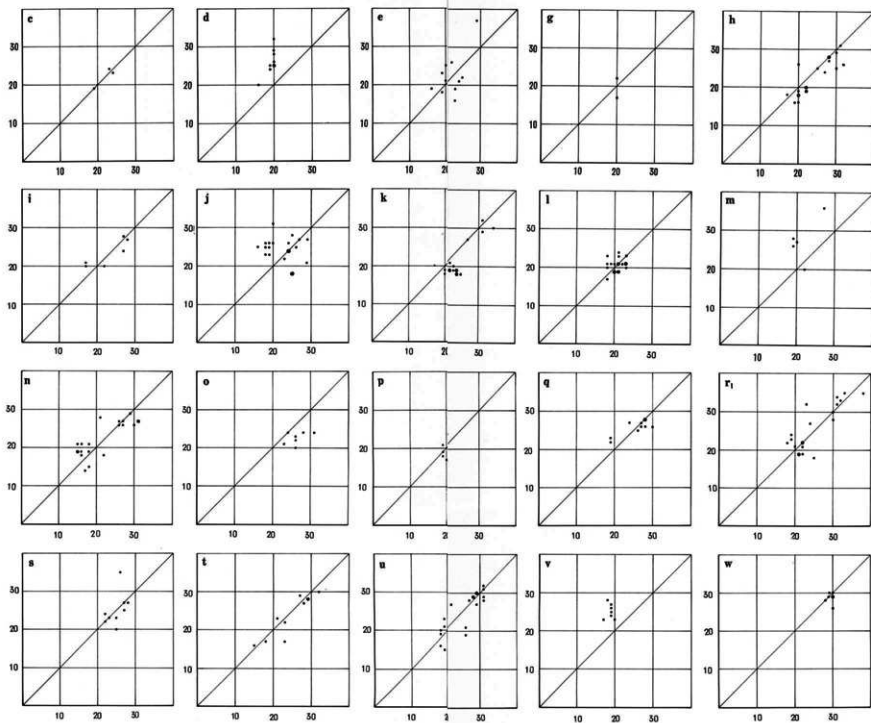
①・②		(数字は資料ナンバー)						③		④	
叩きの種類	a	d	r	s	t	u	w	叩きの種類	a	叩きの種類	a
側縁に平行	200 716		1046(ほか) 2112 2280	622 5350	5346		536	側縁に平行	45 2257	側縁に平行	249 719 2245
側端に平行	163, 5348, 200, 514, 2044, (ほか) 2052	2334		626	609	5370 5395		側端に平行	2 474	側端に平行	

以上の結果、縫い目をもつ平瓦自体非常に少ないこと、側縁に平行に縫い目がある場合と側端に平行にある場合との割合は15対14とほぼ等しいことなどがわかる。そして、理論上四枚造りの場合には四枚に一枚の割で側縁に平行に縫われたものが存在するはずであるが、凹面などで調整等によって欠われる場合が多いことを考慮に入れても 25000 点近い平瓦総数に対して余りにも少なすぎるように思われる。また、凹面曲率の非常に大きい瓦や、逆に k 類のようなきわめて曲率の小さい瓦には縫い目を有する瓦がないことは注目してよい。

註13 資料的には多くはないが凹面側縁に平行、または凹面側端に平行に巾 6mm～1cm 程度の浅い凹線がみられるものがある。側縁に平行な資料縄目叩き 5334 は側縁にほとんど一致して凹線があり分割界線の可能性もある。側端に平行な例 | 2306 および u 5346 は模骨状のものをしめる役割をはたすものであろうか。

註14 粘土板のつぎ目痕のわかる資料もきわめて少い。縄目叩き 5448 はつぎ目部分で剥離したものであるが、凹面つぎ目の上に粘土を塗りかけて上面を縦方向になでている。(図版45)

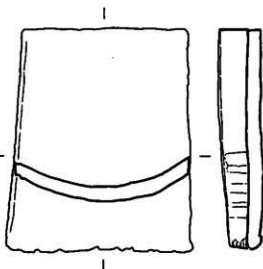
註15 平瓦側端面にワラ痕のつく例があることは知られている(加納重文・片岡肇「平安宮大極殿跡の発掘調査」平安京発掘調査報告第1輯1976)。今回の資料のなかにも多数みられるが、n 類 611 では凸面に朽のついた稲穂圧痕がみられる。造瓦の時期および工房の状態をうかがわせる資料である。(図版45)



* 1点
 * 2点
 * 5点

第55図 平瓦凹面布目経緯関係図(2) その他の叩き

平瓦 a 類 1 群



資料ナンバー	5334
長さ	35 cm
法 規 準	26.5 cm
広 度	29.5 cm
叩き締めの円弧	A ?
仕 上 げ	凹 面
	凸 面
地 土	砂粒多量
その他	両面割端に分割線 (?) 断面に圧痕が多い。



5334

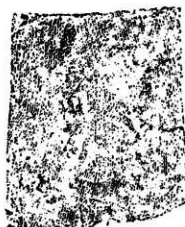
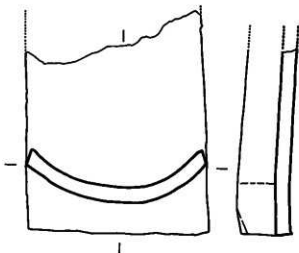


図 面
断面割端叩き
法地部に鉛線
叩き締めの円弧 A

5335

第56図 平瓦拓影実測図(1) (1/2大)

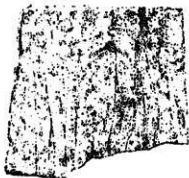
平丸 a 類 1 群



資料ナンバー	5338	
法	長	き
	狭	幅
	広	29 cm
叩き締めの円弧	是？	
仕 げ	凹	面
	凸	面
胎	土	砂粒混入 普通
その他	曜目叩き痕 13本 (5 cm)	
	曜目叩き痕	



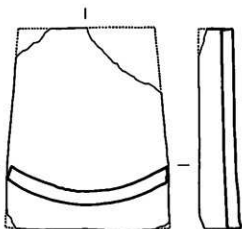
5338



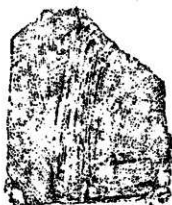
5339

第57図 平瓦拓影実測図(2) (3/4大)

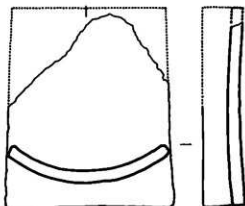
平瓦 a 類 2 群



資料ナンバー	5251
長さ	31.5 cm
伏 端 幅	(23 cm)
広 端 幅	26.5 cm
叩き締めの同基	A
仕 上 げ	凹 面
	凸 面
胎 土	砂粒多混
その他	布目 (5本に1本太糸使用)



5251



凹 面
粗彫刻板叩き
割 破
切り割り (?)

5354

第38図 平瓦拓影実測図(3) (1/6大)

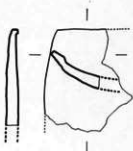
平瓦 a 類 4 群



資料ナンバー	5393	
法 量	長	き
	狭	端 幅
	広	端 幅
叩き締めの内弧 B?		
仕 上 げ	凹	面 広端部ヘラナデ
	凸	面
	胎	土 普通
その他	横断面に粘土重ね痕 凹面側縁に段	



5393

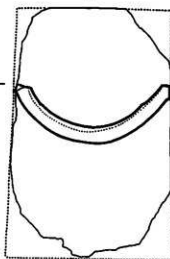


5264

凹面 側縁、側端に段

第59図 平瓦拓影実測図(4) (3/4大)

平瓦・類5群



資料ナンバー	5337
長さ	(40 cm)
狭端幅	(26.5 cm)
広端幅	(26.5 cm)
叩き跡の円弧	B
仕上げ	凹面 割縁部ナデ
凸面	
胎土	砂質
その他	凸面磨れ砂 横断面粘土色ね磁 陶面の曲率が欠 凸面割縁に段



5337

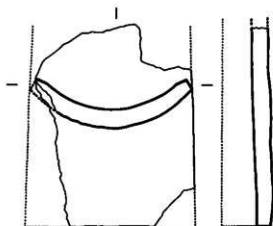


5351

凹面
無彫刻痕叩き
凸面
磨れ砂
割縁に段

第60図 平瓦拓影実測図(5) (1/2大)

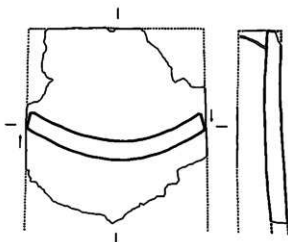
平瓦・類6群



資料ナンバー	21
長さ	
幅	(24 cm)
正 幅	
用き締めの内径	C
仕上り	凸 面
土	凸 面
土	精良
その他	凹・凸面に覆れ砂 布目粗大



21



2

御用 鋭い凸 凸面 覆れ砂(大粒)

第61図 平瓦拓影実測図(6) (3/6大)

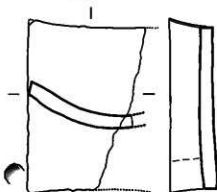
平瓦 a 類 7 群



資料ナンバー	107
長さ	34.5 cm
狭端幅	
広端幅	
叩き締めの円弧	
仕上げ側面	ナデ
仕上げ凸面	ヘラ先端でカキメ
胎土	普通
その他	粘土質 色きつげ

107

平瓦 a 類 8 群



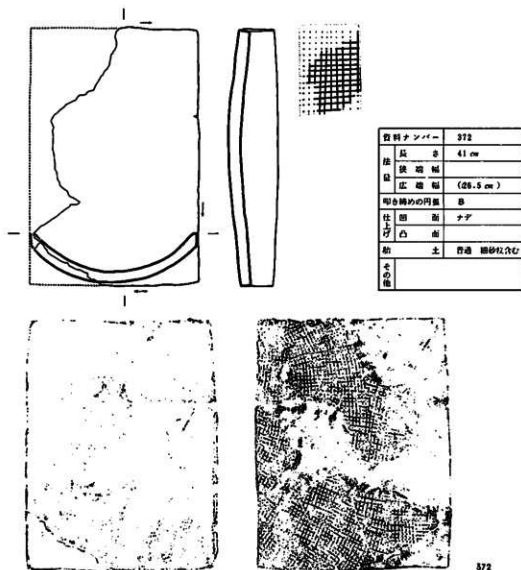
資料ナンバー	5348
長さ	26 cm
狭端幅	
広端幅	
叩き締めの円弧	0
仕上げ側面	種なナデ
仕上げ凸面	広端部ヘラナデ
胎土	普通
その他	端口荒張り 凸面に磨結び目あり



5348

第62図 平瓦拓影実測図(7) (1/4大)

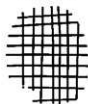
平瓦 c 順



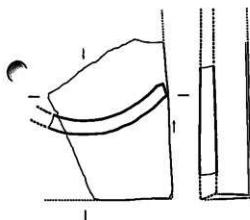
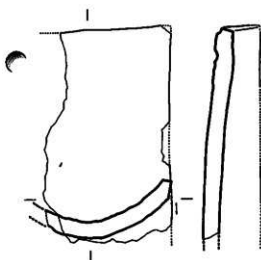
372

第63図 平瓦拓影実測図(8) (3/6大)

平瓦 d 類



資料ナンバー		測
法 量	長	さ
	狭	幅
	広	幅
型き跡めの円瓦		C
仕 上 げ	凹	面
	凸	面
材		上
その他		例証 2 面取り 側端面に布目をもつものがある



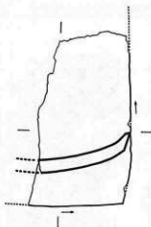
20図 側面斜断による印き



21

第64図 平瓦拓影実測図(9) (1/2大)

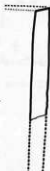
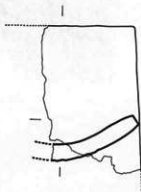
平瓦 e 類



1006

資料ナンバー	1006
法	長 端 幅
量	狭 端 幅
	広 端 幅
叩き締めの内装	A (7)
仕	凹 面
上げ	凸 面
胎	土 普通 砂粒を含む
その他	朱が付着 側縁付近でカーブがつく。 側端部に段 (7)

平瓦 g 類

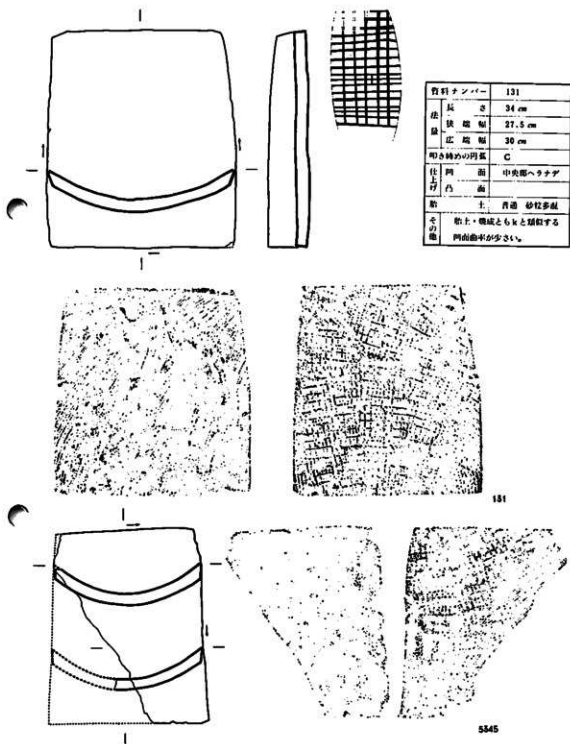


548

資料ナンバー	548
法	長 端 幅
量	狭 端 幅
	広 端 幅
叩き締めの内装	C (7)
仕	凹 面
上げ	凸 面
胎	土 普通
その他	側端部・側縁部ヘラ削り

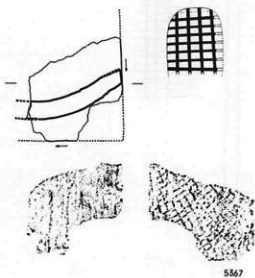
第65図 平瓦拓影実測図(00 (3/4)大)

平瓦 h 類



第66図 平瓦拓影実測図(1) (3/4大)

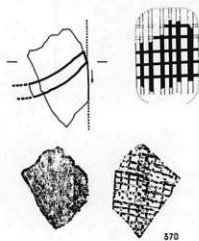
平瓦 i 類 1



資料ナンバー		5367	
法 量	長	き	
	狭	端 幅	
	広	端 幅	
叩き締めの内装		C ?	
仕 げ	凹	面 無彫刻板による叩き、一部削り	
	凸	面	
胎	土	普通 砂粒を含む	
その他			



平瓦 i 類 2



資料ナンバー		370
法 量	長	さ
	狭端幅	
	広端幅	
叩き締めの円弧		A ?
仕 上げ	凹面	一部ナデ、側縁付近あり
	凸面	
胎	土	砂質精良
その他	凸面に附れ砂	

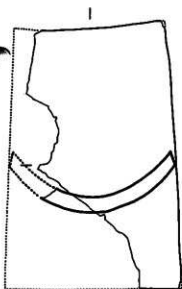


第67図 平瓦拓影実測図(12) (1/6大)

平瓦ノ類



資料ナンバー	122
長	5 41 cm
法	状 破 知
量	広 断 知
叩き締めの日数	C
往	門 面
上	状 破 部 借 ヲ フ ナ デ
行	凸 面
船	上 精 良 ス エ 質
その他	



122



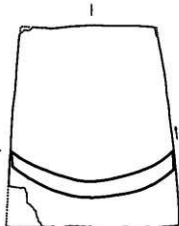
5541



即面 指針さえ
凸面 市 目

第68図 平瓦拓影実測図(3) (1/2大)

平瓦 Ⅱ 類



資料ナンバー	327
長さ	31 cm
狭幅幅	22 cm
広幅幅	(21.5 cm)
叩き締めの円瓦	B
仕上げ	凹面
凸面	
土	普通 大粒砂粒混入
その他	凹面曲率が小さい。



327



叩き締めの円瓦
A
凹面仕上げ ナデ

1007

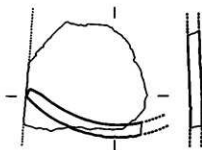


第59図 平瓦拓影実測図04 (1/4大)

平瓦 l 類



資料ナンバー	2306	
法 量	長	さ
	狭	幅
	広	幅
叩き締めの内装	C?	
仕 上 り	面	面
	凸	面
胎	土	精良
そ の 他	凸面磨れ砂	
	凹面ヨコ同線	



2306

平瓦 m 類



資料ナンバー		108
法 量	長	さ
	狭	幅
	広	幅
叩き締めの内装		
仕上 げ	面	面
	凸	面
胎		土 精良
その他		

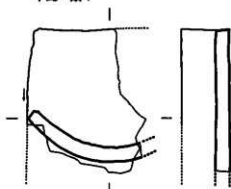


108



第70図 平瓦拓影実測図(9) (1/4大)

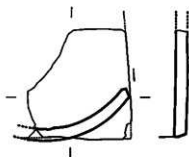
平瓦 Ⅲ類 1



資料ナンバー	568
法	長
量	幅
	厚
叩き締めの内装	C?
仕上げ	凹面
	凸面
胎土	精良
その他	凸面覆れ砂



568



2312

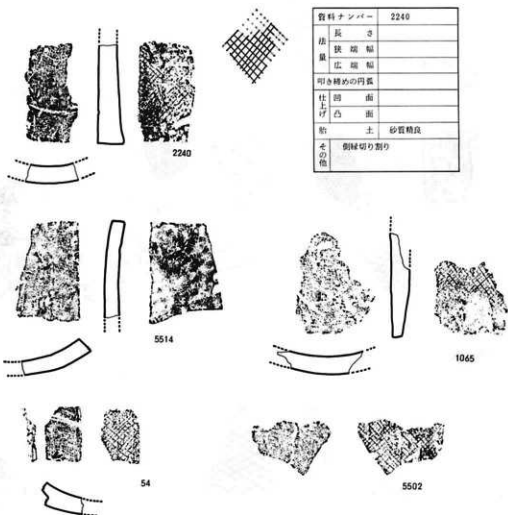


型切り割り・凸面側から

2127

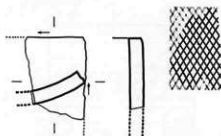
第71図 平瓦拓影実測図(1/6大)

平瓦 0 類 1

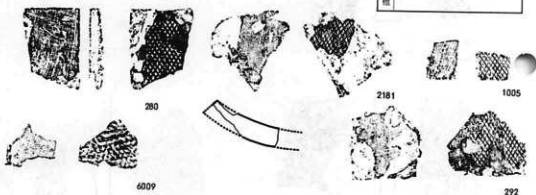


第72図 平瓦拓影実測図(17) (3/6大)

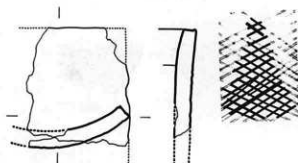
平瓦・類2



資料ナンバー		280
法 量	長	き
	狭端	幅
	広端	幅
叩き締めの円盤		
仕 上 げ	凹	面 ヲコナデ(布か)
	凸	面
胎	土	砂質精良
その他	側縁切り割り	



平瓦D類1

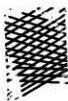
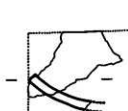


資料ナンバー		14
法 量	長	き
	狭端	幅
	広端	幅
叩き締めの円盤		
仕 上 げ	凹	面 側縁、側端付近ヘラナデ
	凸	面 側端付近ヲコナデ
胎	土	砂質精良
その他	側縁切り割り 側縁分割線(?) 側縁付近に布の末端	



第73図 平瓦拓影実測図(10) (1/6大)

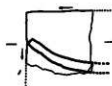
平瓦Ⅱ類2



564



461



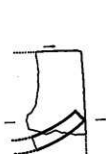
565



1078

資料ナンバー	564
注	長さ
目	狭 幅
	広 幅
明き締めの内装	
仕上げ	面
	凸 面
断	土 普通 砂粒を含む
その他	割縁切り割り

平瓦Ⅱ類3

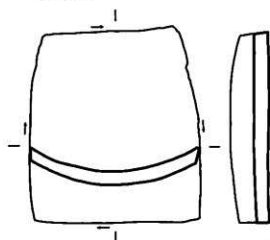


281

資料ナンバー	281
注	長さ
目	狭 幅
	広 幅
明き締めの内装	
仕上げ	面
	凸 面 (ナデ)
断	土 軽良
その他	割縁切り割り

第74図 平瓦拓影実測図(Ⅱ) (1/6大)

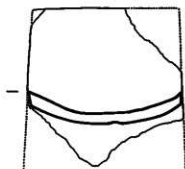
平瓦 Ⅱ 類



資料ナンバ-	130
長	30 cm
法 規 定	
後 端 幅	22.5 cm
広 端 幅	27 cm
叩き締めの円数	A
仕 上 げ	
側 面	ヘラコナデ西条
凸 面	
敷 土	普通 砂粒多量
その他	



150



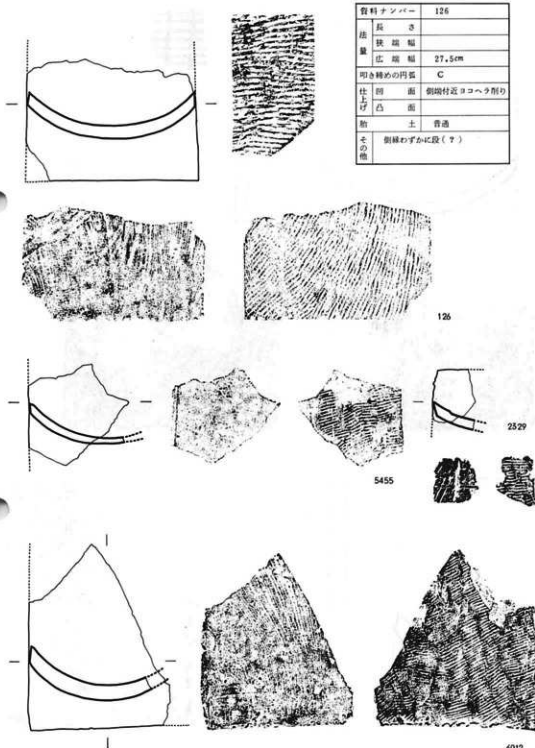
5359



5376

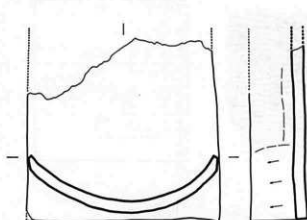
第75図 平瓦拓影実測図(2) (3/4大)

平瓦r類1



第76図 平瓦拓影実測図(2) (1/6大)

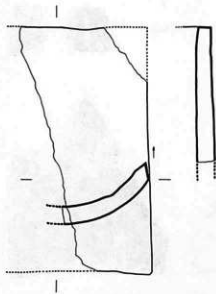
平瓦 8 類



資料ナンバー	5553
法 長	き
量 伏 端 幅	
広 端 幅	31 cm
叩き締めの円蓋	C
仕 間 面	広側端部付近ヨコヘリ削り
上げ 凸 面	
物 土	普通
その他	側端 2 面取り

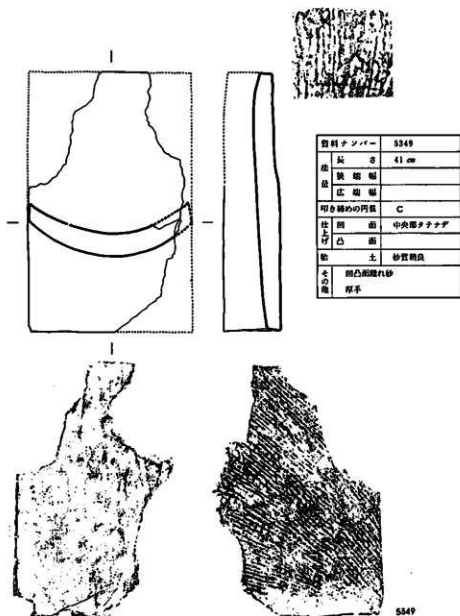


5553



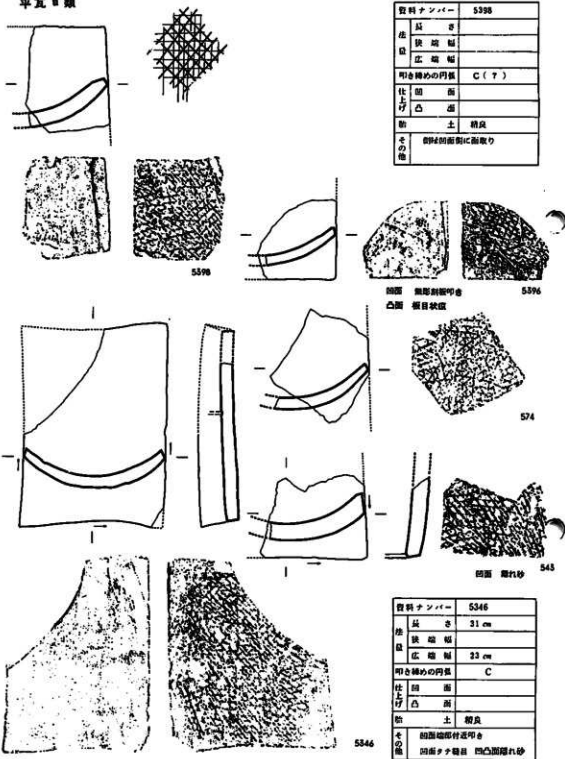
5550

第77図 平瓦拓影実測図(2) (3/4大)



第78図 平瓦拓影実測図(四) (1/4大)

平瓦 Ⅲ 類



第79図 平瓦拓影実測図00 (1/6大)

平瓦 ⅴ 類



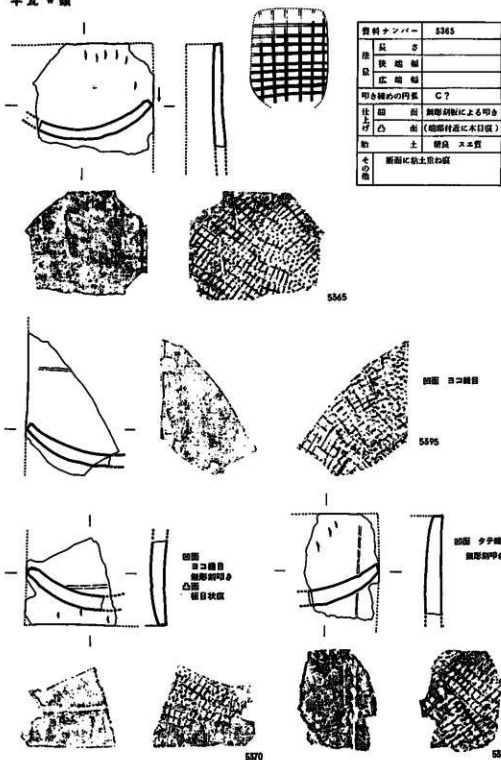
資料ナンバー	212
長さ	41 cm
幅	
厚さ	29 cm
印の跡の円径	C
仕上げ	面 粘土つぎ目のあとをヨコナデ
凸	面
土	種良
その他	切趾・側端部斜削に面取り 両面の曲率大



212

第80図 平瓦拓影実測図(ⅴ大)

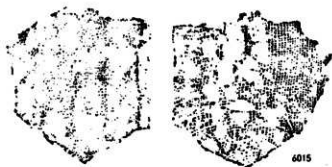
平瓦 Ⅱ類



第81図 平瓦拓影実測図(Ⅱ) (1/4大)

平瓦 x 類

凸面に叩きがなく
布目を有する平瓦
575 は布のかわり
に網を使用



6015



5505



34



5515



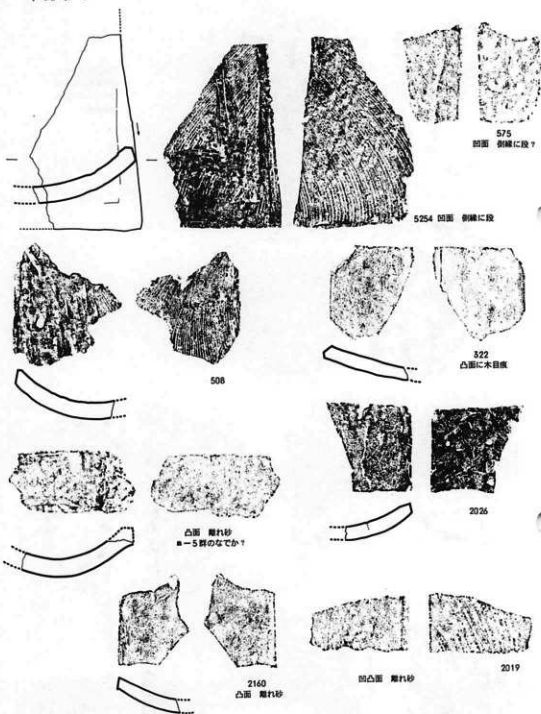
606



575

第82図 平瓦拓影実測図切 (3/4大)

平瓦なで



第83図 平瓦拓影実測図(例) (1/4大)

(4) 丸 瓦

丸瓦についても平瓦同様基本的には叩き文様を中心として形態、手法を加味して分類する立場をとった。しかしながら、丸瓦の場合叩きが丁寧になで消されることが多く、平瓦に対応する内容は期待し得ない。まず形態上玉縁付丸瓦と行基葺きの丸瓦とに分け、平瓦叩きとの対比を考慮に入れて次のように10類21種に分類した。

	分 類		平瓦叩き との対比	資料ナンバー
	叩 き	形 態・手 法		
玉 縁 付 丸 瓦	a	縄目 大形丸瓦 a1 中形丸瓦 a2		5316・5322 5304・5310
	b	木目に直交平行する格子目 小形丸瓦		5217・5327
	c	木目に直交する平行文 小形丸瓦	q	5221・5325
	d	木目に斜交する格子目	d1 O ₁	2033・81
			d2 P ₁	1041・732
			d3 P ₂	5501
			d4 (f)	1003・286
	e	なで		
	f	縄目 離れ砂使用 輪組み	f1	1009・118
			f2	2211
			f3	46
行 基 葺 き 丸 瓦	g	木目に平行する平行文 離れ砂使用		2050
	h	木目に直交平行または 斜交する格子目 離れ砂使用	t または u	5329・5516・5426
	i	木目に直交平行する格子目	i1 d	2005
			i2 e(?)	2153
			i3 m・n	83
			i4 w(?)	2154・193
	j	大形丸瓦 小形丸瓦 小形丸瓦・輪組み	j1	5330・5274
			j2	
			j3	5419

※ e および j の「なで」としたものは全面なでによって、叩きがまったく不明なものである。

一方、丸瓦の製作手法を示す資料として次のようなものがある。

- ① 分割界線 (註1)
- ② 分割方法 (註2)
- ③ 布をはずす際の引き紐 (註3)
- ④ 離れ砂 (註4)
- ⑤ 粘土紐巻きつけ手法 (註5)

註1 模骨からはずされた粘土円筒を二分割する際、刃物を入れる目安とする線である。側縁を仕上げ面取りするタイプではもちろんみることができないが、次の種類にみられる。

a 類 2 …5304・5310

c 類 ……5221

f 類 1 …118

j 類 1 …5330

j 類 3 …5419・5421

註2 模骨からはずした丸瓦の粘土円筒を分割するには、一般に円筒内面の玉縁側から広端に向けて刃物を動かして分割する。ただしa類1丸瓦には逆に広端側から玉縁側へ刃物を移動させたものがある(5316)。

註3 模骨を抜き去った粘土円筒についた布をとるための紐である。a類1丸瓦に特有のもので玉縁側で布に結びつけられて、広端側で先端が輪になっている(図版45)。玉縁側を下にして、広端側から引っぱり取るものとみられる。引き紐は布を境にして模骨側にたらず場合がほとんどであるが、粘土側の場合もある。

註4 行基葺き丸瓦に限って離れ砂を使用したものがある。使用された部位によって分類すると次のようになる。

① 凸面のみ……g類(2050)・f類2(2211)・h類(5329、5516)

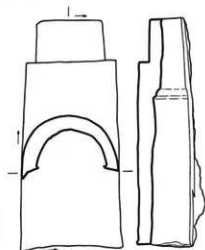
軒丸瓦Ⅳ類a(5049)に接続する丸瓦(詳細不明)

② 凹凸両面……h類(5275、5426)

いずれも目のこまかい砂粒である。丸瓦h類は平瓦tないしuと同一の叩きをもつものであり、丸瓦・平瓦相互の密接な関係がうかがえる。また、とくに離れ砂の凹面への使用については注意しておく必要がある。すなわち、丸瓦の場合、円筒状模骨を使用し、成形のち2分割する製作工程は必須のものである。したがって、丸瓦凹面に離れ砂が使用されているということは、桶巻造り平瓦の場合でも同様の使用法が当然考えられるところであり、平瓦凹面の離れ砂の使用をもってただちに一枚造りに特有の技法と断定することはできない。

註5 粘土紐巻きつけ手法は行基葺き丸瓦に限って行われている。縄目叩きなどで消しのf類3、全面がなでられたj類3にみられる。出土量は出土丸瓦全体(11,790点)のうちの数点という程度のごく限られた手法である。

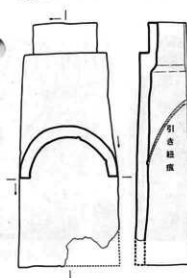
丸瓦 a 類 1



資料ナンバー	5316
全 長	35.5 cm (29cm)
狭 端 幅	14.4 cm
広 端 幅	16.3 cm
凸 面 仕 上 げ	回転ヘラナデ
削 面	
軟 土	普通 砂粒を含む
そ の 他	側縁切り割りのヘラの動きが広端から玉縁方向へ向う。 (a 類 1 のみ 3 点ある) 5322 は凹面に引き線痕、粘土つき目がある。 玉縁先端にワラ状痕



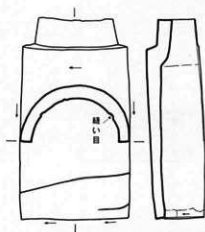
5316



5322

第84図 丸瓦拓影実測図(1) (36大)

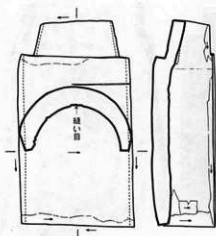
丸瓦 a 類 2



資料ナンバー	5304
全 長	31.5 cm (26.7 cm)
法 狭 端 幅	16.6 cm
廣 端 幅	17.3 cm
凸 面 仕 上 げ	圓転ヘラナデのあとヨコナデ
凹 面	縫い目(太い平紙でとじ合わせる)
胎 土	精良 砂粒を若干含む
その他	分 割 線 切り裂りののち割ったあとを削り仕上げ 広前縁部凹面をヘラ削り



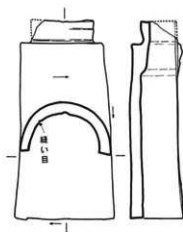
5304



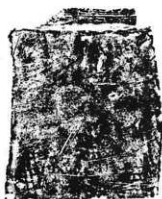
5310

第85図 丸瓦拓影実測図(2) (1/6大)

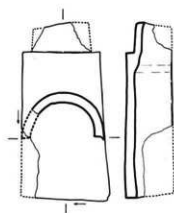
丸瓦 b 類



資料ナンバー	5217
全 長	31 cm (27.5 cm)
法 規 矩 幅	13.3 cm
量 広 端 幅	15.8 cm
凸 面 仕 上 げ	回転ヘラナデ
凹 面	縦い目 朱が付着
胎 土	普通 砂粒を若干含む
その他	玉縁先端にワラ状痕



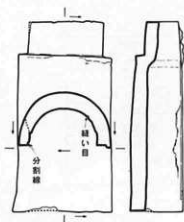
5217



5327

第86図 丸瓦拓影実測図(3) (1/4大)

丸瓦c類



資料ナンバー	5221
全長	30 cm (24.5 cm)
法	
狭端幅	15 cm
量	
広端幅	15.7 cm
凸面仕上げ	回転ヘラナデ
面	縫い目、粘土つぎ目、分割線
胎土	普通 砂粒を若干含む
その他	使用希…6本に1本の割で太糸を織り込んだ布。太糸を側縁と平行に使用。玉縁端面の仕上げが丁寧。玉縁先端にワラ状態。



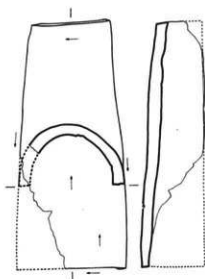
5221



5225

第87図 丸瓦拓影実測図(4) (3/6大)

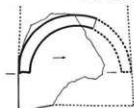
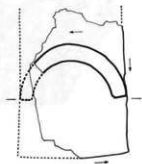
丸瓦 f 類



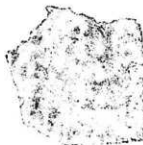
資料ナンバー		1009
法 量	全 長	39.5 cm
	拱 端 幅	12.7 cm
	広 端 幅	(17.4 cm)
凸面仕上げ		ココ・タナヘラナズ、凹凸多し
凹 面		広側端部凹面ヘラ削り
胎 土		良好 ~ 精良
その他	118 は側縁凹面に分割線	
	46 は粘土緑色き上げ、凹面ナズ	



1009



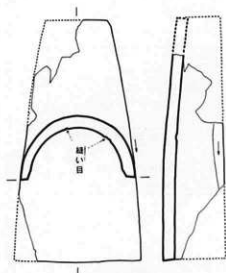
46



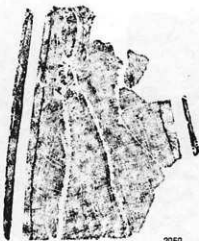
118

第88図 丸瓦拓影実測図(5) (3/4大)

丸瓦 g 類



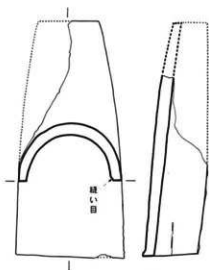
資料ナンバー	2050
全 長	38 cm
狭 端 幅	(10.5 cm)
広 端 幅	(20 cm)
凸面仕上げ	ナデ
割 面	縫い目、側縁ヘラ削り
胎 土	良好
その他	凸面にごく細かい磨れ砂使用



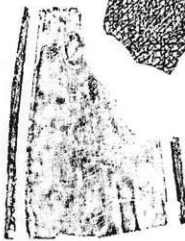
2050

第89図 丸瓦拓影実測図(6) (1/6大)

丸瓦 h 類



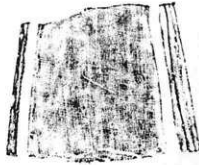
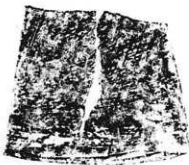
資料ナンバー	5329
全 長	37 cm
伏 端 幅	10 cm
広 端 幅	17.3 cm
凸面仕上	回転ヘラナデ
凹 面	縫い目、広側端に検針張出し
胎 土	精良
その他	細かい増着砂使用。 凹面に生着着。 5426 は側縁面取り。 5516 は凸面仕上なし。



5516

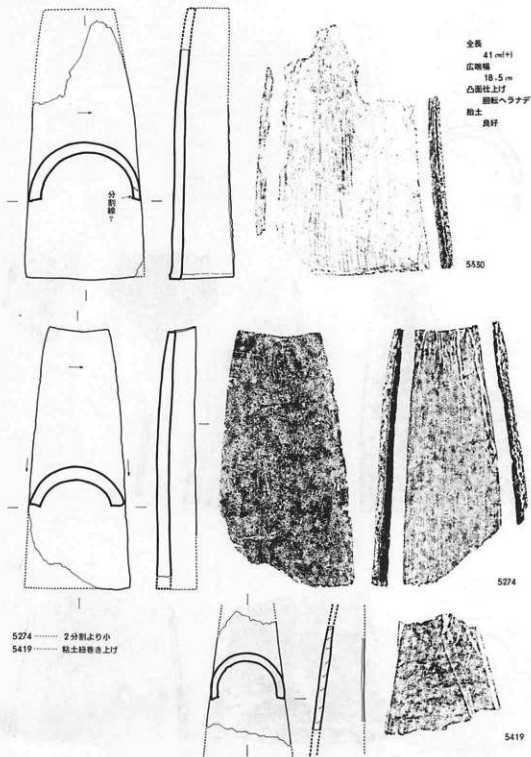
5329

5426



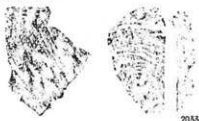
第90図 丸瓦拓影実測図(7) (1/4大)

丸瓦 j 類



第91図 丸瓦拓影実測図(8) (1/6大)

丸瓦 d 1



2033



81

丸瓦 d 2



1041

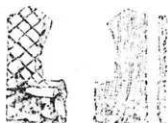
752

丸瓦 d 3



5501

丸瓦 d 4



1005



286

丸瓦 i (各種格子目叩き)



2005

丸瓦 f 2 (縦目叩き・離れ砂)



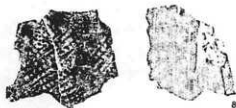
2211



2153



195



85



2154

第92図 丸瓦拓影実測図(9) (3/6大)

(5) 道具瓦

面戸瓦

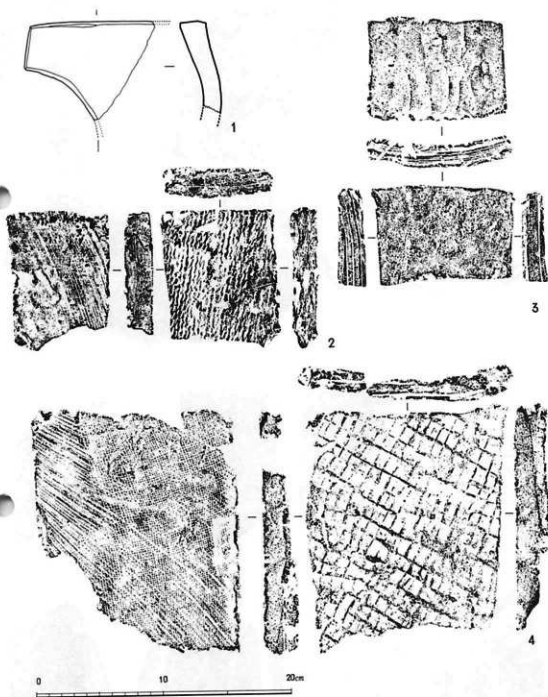
薬師堂西地区瓦溜から1点出土している。破片のため全体の形状は知り得ないが、成形後の平瓦をへら切りして造ったもので、凸面は縄目（右撚り）叩きののちなでを施している。凹面の布目は粗大でやはり上面をなでている。胎土には若干砂粒がまじり、色調は黄灰色を呈する。

熨斗瓦

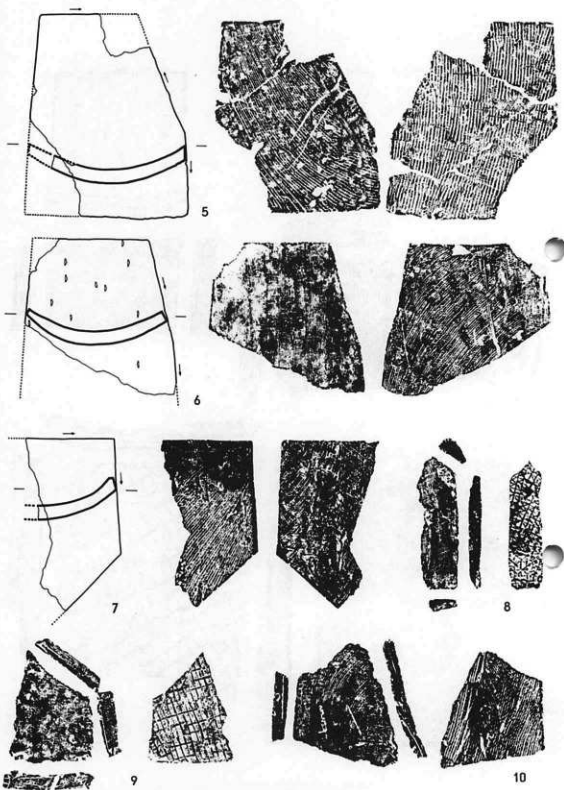
同じく薬師堂西地区瓦溜から3点出土している。すべて破片のため全長のわかる資料はない。横幅の広狭によって2種に分けることができる。(2)・(3)は狭幅、(4)は広幅の熨斗瓦である。(2)は縄目（右撚り）叩きによって成形された平瓦をほぼ3分割したものとみられ、幅9cm、厚さ2.3cmを測る。側縁のへら切り面はどちらも円弧中心へ向うが、一方のへら切り痕が明らかに平瓦成形後のものであることを示している。(3)の凸面は平滑に仕上げられているが、表面には多量の離れ砂が使用されている。全面が黒色を呈する特徴ある焼成の瓦で、平瓦のなかに類品を見出すことができる。側縁のへら切りは一方が円弧中心へ向い、他方が斜めに切られている。側端にはワラ状痕跡がみられる。凹面には布痕上に無彫刻板の叩き痕がのこる。幅11.5cmを測る。(4)は幅17cmの広形の熨斗瓦で、hの叩き文を有する。側縁は一方はほぼ円弧中心へ向うが、他方は著しく傾斜してへら切りされている。側縁の断面形を凹面側で強い鋭角に仕上げるのは平瓦hの特徴である。折損部断面は二層に分かれており、薄い粘土板を重ねて成形していることがわかる。茶色を呈し、やや軟質の焼成である。

切隅瓦

瓦の一隅をへら切りして落とした切隅瓦は全部で16点出土している。このうち1点が丸瓦の切隅瓦とみられ、他は平瓦である。叩きの種類、側縁に対するへら切りの角度、大きさ等さまざまあり様でない。出土位置は薬師堂西地区の瓦溜（9点）、塔跡（5点）、北第2遺構（1点）となって、瓦の出土量にほぼ比例した頻度といえる。叩きの種類は縄目叩きが最も多く9点、hが2点、k・q・uがそれぞれ1点、凹凸両面に布痕を有するものが1点ある。また丸瓦としたものは、凸面で消しており叩きは明らかでないが、胎土や側縁凹面側にへら切りによる面取りを施す手法からみて、行基葺き丸瓦とみられる。(5)は、平瓦qを利用した切隅瓦で、一部欠損しているもののほぼ大きさのわかる資料である。長さ31.5cmを測る。側縁に対するへら切り落し部分の角度は約20度である。凹面布目は横方向に6本に一本太糸をまじえて織った特徴的なものである。また凸面叩きは狭端を上にして瓦をおいた位置でみると、大部分を左側から叩き右側縁付近を右側から叩いている。塔跡出土。(6)は精良な粘土を使用し、細い縄目叩き、凹面に特有のキズをもつ無彫刻板による叩きを施すことで特徴的である。凹面にごく細い離れ砂を施している。(7)は縄目叩き平瓦で、側縁に対し約50度の角度でへら切りをしている。叩きkを施した(9)のへら切り落し線は若干曲線的である。



第93図 面戸丸・熨斗瓦拓影実測図 (3/4)



第94图 切隅瓦拓影实测图 (1/6大)

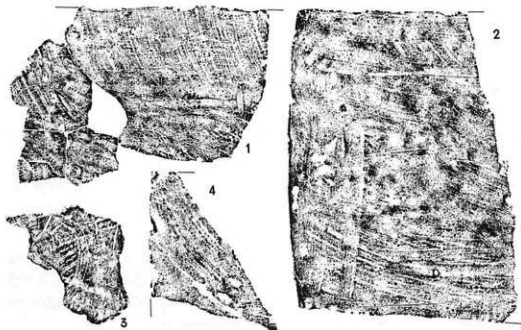
(6) その他の瓦

戯面瓦 (図版41)

縄目叩き平瓦の凹面に馬その他を線刻している。出土資料は全部で7破片に分かれ、少なくとも4枚の平瓦に線刻戯画が行われていたことを示している。(1)はおよそ24×15cmの大きさがあり、布目をなで消した瓦中央部に頭を左に向けた2頭の馬を繊細な線で描いている。欠落部分が多いためどのような状況を表したのか明らかではないが、それぞれ手綱を有し、一方には胸懸とみられる部分から出た鉸具によって連結された帯が前方に描かれている。(2)は平瓦の狭端側で全体の約1/2の大きさに同じく馬が線刻されているが、描いた後上面をなでているため不明瞭である。遺存部に描かれているのは馬の頭から頸部にかけてで、こちらは短い前足の表現がある。手綱をもち、たてがみや鋭く起立した耳など表現法は(1)とほぼ似かよっているが、目の表現はやや異なる。すなわち、(2)は正面観の目を表現した杏仁形が1つ描かれている。これに対し(1)は斜め前方から見た両眼をたくみに表わしており、よりリアルである。その他、馬の尾部を描いた破片(3)、不明線刻をもつ破片(4)がある。これらの線刻画をもつ瓦は、縄目叩きの特徴、胎土、焼成などからみてほぼ同工の平瓦(a類1)とみとめられる。出土地点は(1)が塔西地区の溝付近、(2)が薬師堂西地区の瓦溜、(3)・(4)が塔跡トレンチである。

墨書瓦 (図版50)

平瓦凸面に墨書で、「□四口五□」の文字がある。瓦は叩きを行わず、桶(または一枚造りならば凸形台)に巻いた粘土板を手で押しつけて成形したもので、凸面の凹凸著しく一面に指紋・掌紋が残る。側縁は凹面側に面取りを行う。布目は普通の大きさで、金雲母を若干含む精良粘土を使用。



第95図 戯面瓦拓影図(約1/2大)

II 土 器

土器は塔西地区の各遺構、薬師堂北第2遺構、西側溝遺構「コ」字状張り出し部、薬師堂西地区の瓦溜などから多量に出土した。

土器の種類と年代

出土した土器の種類は、土師質土器・須恵質土器・瓦器質土器・緑釉陶器・陶磁器など多種におよんでいる。しかしながら、これらの土器類は遺構面を覆う黒色土中からの発見が多く、年代のわかる遺構との関連あるいは出土層位などによって確実に年代または前後関係のわかる資料はごく少ない。

これらの中にあつて、薬師堂西地区瓦溜最下層出土の一括土器は重要である。その出土状態から推して、国分寺の主要堂宇の一つで灯火器として用いられた後に廃棄され、土器溜を形成していた土器の二次的な投棄であることは疑いない。この瓦溜最下層出土土器群はその形態や手法からみてかなり長期にわたる各時期の土器を含んでおり、そのうちもっとも古式の一群は国分寺創建時期にまで遡る。さらに、塔西地区等から出土している糸切り底の土器をはじめとする新しい時期の土器群をまったく含まないこともその年代的位置を限定する上で重要である。

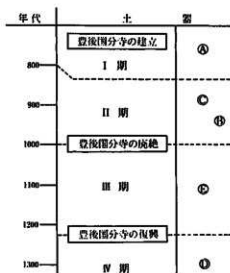
したがって、ここで当豊後地方においても古代から中世にいたる時期の土器製作手法上、底部へう切り離し手法が糸切り離し手法に先行し、かつ後者の採用から（ほとんどへう切り離し手法を衰退せしめるまでの）流行への過程がすみやかに行われたことが大きな前提となるが、瓦溜最下層出土土器群の下限年代を少なくとも底部糸切り手法の採用以前とすることは問題がないであろう。後述するように瓦溜最下層出土土器群の土器はきわめて対照的な二種類の土器群によってその大部分が占められている。すなわち、1つは当国分寺跡出土土器中古式の位置を占める環・埴・皿・蓋などの日常土器（これを①と仮称する）であり、もう1つは非常に規格性の高い2種の小皿（これを②と仮称する）である。いずれも灯火器として使用されておりそれが日常必需品であることからして継続的に使用・廃棄されたものと考えられ、②の出現時期が問題となるものの一応①→②への移行が考えられる。

一方、形態および手法からみて、前者①に後続する時期の環・埴など（これを③と仮称する）は、西側溝遺構「コ」字状張り出し部あるいは塔西地区に見出すことができ、量的にもかなりのまとまりをみせていることから瓦溜における③の欠如は、この時点でいわば専用灯火器としての機能をもつ小皿②の出現があったとみるべきであろう。小皿②の出土がほとんど瓦溜に限られることも、この土器が限定された堂宇用にとくに製作された土器ではないかとの疑いさへ持たせる。

つぎに、底部糸切り手法をもつ土器について、時期設定の資料として矛盾のない組み合わせおよび量的まとまりをもつ資料を抽出するならば、塔西地区（出土土器②）に見出すことができる（これを④と仮称する）。形態・手法のほかに④の土器群を①～③の土器群と明確に区別

することのできる相違点として、その胎土に注目すべきである。それは基本的には砂粒を含まない、細かい砂質気味の均質な粘土を使用したものであり、おそらく底部糸切り手法と密接な関係をもって導入された技術とみられる。この胎土の相違はわずかながら出土している①に先行する土器群（これを②と仮称する）にも見られる。ただし、⑥には底部へう切り離しの土器と糸切り離しの土器とがあり過渡的な様相を示している。

以上、出土土器の変遷を包括的に述べたが、古代律令制の崩壊に伴う地方官寺の著しい衰退（これをもって廃絶する場合もあろうか）の時期を土器によって求



めるならば、豊後国分寺の場合③群土器の最終末期をこれにあてることができよう。ここで④～⑥の土器群に大まかな実年代を与えるとすれば次のようになる。すなわち、④群土器は奈良時代の土師質土器の特徴をもつ最古式の一群、および内外面を粗雑にへう磨きする特徴的な手法の土器群であり、下限年代をほぼ平安時代初頭ごろ（9世紀前半）と考える。これに後続して⑤群土器、やや遅れて⑥群土器が併行するとみられる。③群土器は現状ではセット関係の把握も十分でないことから、細分すること自体あまり意味がない。また、小皿③については大小ある二種の小皿が前後関係をなす（大→小）場合は十分考えられようが、これも現状では年代を決定する手掛りはない。したがって、他地域での土師質土器の編年結果、とくに筑前大宰府地域における近年の成果を援用するならば、③群土器にはいわゆる「丸底の坏」と称される特徴的な形態の坏がないことが注目される。大宰府跡出土の資料によれば丸底の坏は、11世紀前半（SE1083）ごろにはかなりの量を占め、12世紀前半（SD1330）にかけて盛行している。さらにまた、豊後国分寺跡における出土軒先瓦の文様変遷からみた考察は、豊後国分寺の廃滅の時期を「10世紀のうちか、あるいは11世紀代までおよんでいるか……」としており、③群土器の下限年代を一応西暦1000年前後と考えてさしつかえあるまい。つぎに、①群土器は文献にあらわれる鎌倉期の大友氏による復興（仁治元年・1240年）をその上限年代の拠所と考えている。墨書銘のある蔵骨器もこの時期の所産である

このほか現国分寺の中心をなす薬師堂・観音堂などが整備された近世以後については、発掘調査によって出土した土器類はごく限られたものになるが、伊万里・唐津系の陶磁器が存在する。伊万里系の磁器は江戸期を通じて存在し、幕末ごろにはかなり多量に使用されていたことがうかがわれる。

一方、輸入陶磁器とみられるものは、ごく小片となったものが全体で8個発見されたにすぎない。①群土器に対応する時期のものが主体をなし、その種類は泉家窯系、同安窯系がある。

主要土師質土器の分類

出土した土器の種類は、土師質土器はじめ須恵質土器、瓦器質土器、緑釉陶器、陶磁器など多様であるが、ここではこのうち中心となる主要な土師質土器について分類し、形態・手法・胎土の観察結果を掲げることとする。ただし、この分類表はさきに4期に分けた土器群をさらに細分するための手掛りを得ることを目的としたもので、本来的な形式分類ではない。したがって、小皿のようにごく細かく分けたものもあれば、坏ではほぼ同時期とみられるいくつかの形態のものを1つの形態で代表させたものもある。また全体の形の不明なもの多い埴形土器については高台部分に注目して分類している。

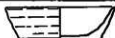
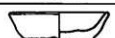
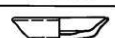
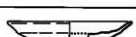
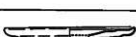
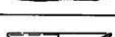
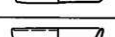
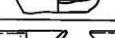
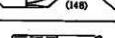
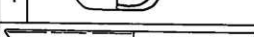
今回のこの分類作業は、この種の土器の出土例がきわめて乏しく、また実年代の拠りどころとなる好資料に欠ける当豊後地域の歴史時代土師質土器を中心とした土器研究に、あくまで1つの資料を提示することを目的としたものである。

小皿

底部の切り離し痕によって大きく2種に分かれる。a～gは底部へラ切り離しを行うものでa・b・dおよびfはへラ切りによって底部がほぼ一直線に仕上げられる。多量に出土してその規格化がうかがわれるa・bはとくに丁寧なへラ切り離しを行っており、bは一部ナデ仕上げされるものもあるが、渦状にへラ切り痕が残っている。渦状のへラ切り痕は、右まわりに中心に向う螺旋形を呈し、体部立ち上りのヨコナデの結果と合わせて、ロクロの回転方向が右回りであることを示している。ロクロの回転方向はdも同様である。また、aには若干のものに板目状圧痕がつく。このaの板目状圧痕は、糸切り底jについたものと異なり、へラ状工具の周縁で叩いた結果、数条～10数条の一見板目状についたものとみられる。おそらく、底部をへラ切り離した直後に、へラ切り離しによって生じた底部の歪みないしは凹凸を同じ工具で軽く叩いて修正したものであろう。

これに対し、c・eなどの外底中央部にふくらみをもつタイプの小皿は渦状のへラ切り痕がなく、中心部に残るへラ切り離し終端の粘土付着あるいは、外底全体の砂粒もしくは粘土の動きによってそれと判別できるものである。

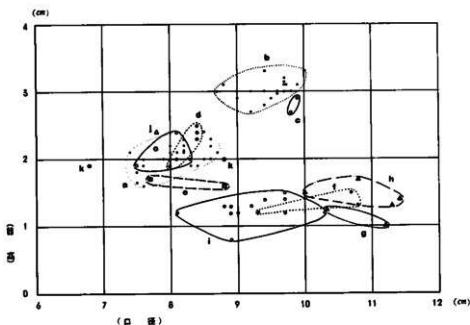
一方、これは他の器種についても共通して言えることであるが、土器の胎土の観察によっても大まかな変遷がうかがい知ることができる。ごく模式的には、砂粒を混入した普通の胎土をもつものは細砂質の精選粘土を使用した土器に先行することが多い。また、後者には火山性土壌に特有の茶色粒子（パミス?）をほとんど含まず、色調も明るい黄茶色ないしは黄褐色に統一されている。この胎土の変化は、採土地の違いと考えられないこともないが、むしろ使用粘土を吟味し、さらに「水簾」する技術の向上によるのではなからうか。小皿ではjを除いてe～iに細砂質の精選粘土が用いられており、坏ではf～hがこれに該当する。したがって、今回の資料でみる限りでは、少なくとも底部糸切り手法の採用と使用粘土の選択とが密接な関係を有しているといえよう。ただし、fは砂質というより一層木目の細かい、表面が光沢をもつような

		分 類 (土器番号)	形 態	手 法	胎 土・色 調	
小 切 り 皿	a	 (1)	(6)	平坦な底部・短く直線的に広がる 体部立ち上りを有する	(I) 胎土利用のヨコナデ (II) ヘラ切り磨し若干のもの に板目状底	胎土良好、細砂粒若干含む 茶色粒子を含む、黄褐色、 紫
	b	 (9)	(9)	体部外側にロコロに上げの裏 状底が右に上りにつく。体部立ち 上りは大形品では内肉風味	(I) 胎土利用のヨコナデ (II) 一方方向ナデを1回行う (III) ヘラ切り磨しを器口を中心 と向うら裏状底が明確につく	胎土良好、細砂粒含む、茶 色粒子を含む、黄褐色・赤 茶色、紫
	c	 (15)	(15)	外底中央部がくらくむ、体部は 直線的にやや開く	(I) 胎土利用のヨコナデ (II) ヘラ切り磨しのまま	胎土精良、細砂粒若干含む 暗褐色、紫
	d	 (14)	(14)	ヘラ切り磨し後に外底面につい た粘土のかえりをそのまま残す	(I) 胎土利用のヨコナデ (II) 一方方向ナデ (III) ヘラ切り磨しのまま	胎土良好やや砂質、砂粒を 含む、黄白色・黄褐色・茶色 粒子を含む、黄褐色、やや紫
	e	 (194)	(194)	外底中央部がややくらくむ、c と形態的に近いが口縁手小形	(I) 胎土利用のヨコナデ (II) ヘラ切り磨しのあとナデ	胎土精良、砂粒・茶色粒子 ごく少量含む、黄褐色、紫
	f	 (117)	(117)	両手で、指刺のついでに体部は中 位で小さく内側に曲して縁が つく、比較的口径が大きい	(I) 胎土利用のヨコナデ (II) ヘラ切り磨しのまま	胎土精良、茶色粒子ごく少 量含む、表面はなめらかで 光沢がある、暗褐色、紫
	g	 (195)	(195)	ほとんど平坦につく、残った体部 は口縁端をわずかに上方へつま み上げている	(I) 胎土利用のヨコナデ (II) ヘラ切り磨しのまま	胎土やや砂質精良、細砂粒 を多く含む含む、黄白色、 紫
	h	 (142)	(142)	底部・体部の厚みを4はば一定に つくられ、口縁端は丸い、比 較的口縁が大きい	(I) 胎土利用のヨコナデ (II) 一方方向ナデ	胎土細砂質、砂粒はごく少 ない、黄白色、紫
	i	 (95)	(95)	厚手の底部にぐくむに体部立ち 上りがつく、ほとんど直立的な ものや大きく開くものがある	(I) 胎土利用のヨコナデ (II) 中央部一方方向ナデ (III) 永切り磨し、板目状底	胎土良好やや砂質、細砂粒 含む、茶色粒子ごく少量、 黄褐色、紫
	j	 (150)	(150)	底部・体部立ち上りともぐく 厚手のつくり、立ち上りはやや内 肉風味	(I) 胎土利用のヨコナデ (II) 中央部一方方向ナデ (III) 永切り磨し、永切り磨大	胎土良好、砂粒・茶色粒子 を含む、黄褐色、やや紫
皿 切 り 皿	k	 (148)	(203)	底縁化に対して口径が 大で、内底 部から立ち上りへ の断面がなく やや内肉風味に近 い	(I) 胎土利用のヨコナデ (II) 一方方向ナデ (III) 永切り磨し、板目状底	胎土精良やや砂質、茶色、 紫
	l	 (53)	(53)	体部立ち上りは厚 手で内肉風味 に開く	内外面ヘラ磨き	胎土砂質精良、黄褐色、紫
	a	 (46)	(46)	平軟な底部に外縁 的立ち上りがつく	平坦・直線 (I) 胎土利用のヨコナデ (II) 各方向ナデ (III) 粘土板状底(7)中央 部回転ヘラ磨り	胎土良好、茶色粒子多量、 赤褐色、やや紫
	b	 (197)	(197)	短い体部立ち上り く、口縁部外側に みだれる	2外縁部が つぎに (I) 胎土利用のヨコナデ (II) 各方向ナデ (III) 板目状ヘラ磨き (IV) 回転ヘラ磨り、粘土板状底	胎土良好、細砂粒多量、茶 色粒子ごく少量、茶色・赤 褐色、紫
皿	c	 (62)	(62)	体部立ち上りは外 側反し、a・bに ある。口縁角は 鋭い	a底が深くや に比し長目で、 (I) 胎土利用のヨコナデ (II) 一方方向ナデ (III) ナデ	胎土良好、細砂粒若干含む やや紫

第96図 主要土師質土器(1)分類(1)

なめらかな胎土である。この種の粘土は、糸切り手法による切高台碗形土器fにもみられ、ほぼ同様の時期とみられることから、これらの土器の製作された時期が底部へラ切り離しから糸切り離しへの過渡的な時期ではないかと考えている。

糸切り底の小皿は器高のきわめて低い扁平な形態のものと、体部が深いものに大きく分かれるが、後者は外底径が大きく、立ち上りの傾斜が小さいものと、外底径が小さく、ラッパ状に大きく開く立ち上りが内底から連続して回転ヨコナデされたものとの2種類がある。i・kには外底に板目状痕を有するものがある。これらの小皿はi→j・kへの変遷がたどられ、内外面ともへら磨きするjはさらに後出のものとみられる。ロクロの回転方向は糸切り痕および立ち上りのヨコナデ等からみて、iが左まわり、j、kが右まわりである。



第97図 小皿の法量比較

皿

口径、および手法から3種類に分けられる。aは直径21cm前後のもので、薬師堂西地区瓦溜最下層以外では出土していない。体部立ち上りは直線的で傾斜度は小さい。灯火器として使用されており、赤味のつよい赤茶色の色調や、茶色粒子を多量に含む胎土など、坏bの一部のものと酷似している。

bは口径16cm前後のもので、内外面に粗雑な回転利用のへら磨きを施すことが特徴で坏・堿・蓋などの一部と共通した手法である。外底部はへら磨きというよりはへら削り状になったものもある。直線的で短い体部立ち上りはaよりもやや外傾度が大きい。ロクロの回転方向は器

面のヘラ削りあるいはヘラ磨きの際に生じた砂粒の動きからみて右回転である。 $a \cdot b$ はともにⅠ期の皿である。

cは1例しかないが、長めの外反する体部立ち上りをもち、形態的に坏に近い。Ⅱ期に属するものであろう。

坏

小皿と同様に、外底に残る切り離し痕からヘラ切り離しと糸切り離しに大別される。ヘラ切り離しを行なったもののうち、 a および b は仕上げ調整によってヘラ切り離し痕は残っていない。このうち a は、内外面にロクロの回転を利用したヘラ磨きを施すもので、Ⅰ期の手法上の特徴としてセット関係をとらえることができる。内底は各方向のナデ仕上げ、外底はナデを施したのち、一方向のヘラナデによる仕上げを行う。明茶色、堅緻な焼成でとくに仕上げが入念に行われていることもみのがせない。器面のヘラ磨きの際に生じた砂粒の走向は器面に対して内外面とも左へ移動しており、このことからロクロの回転は右まわりで、外面のヘラ磨きは土器を伏せて行ったものとみられる。

b は、形態的には少くとも3種類以上が存在するが、ここでは細分していない。図示したのは瓦溜出土資料のうち最も古式の形態を示すものである。底部はヘラ切り離しのあと、ナデないしヘラナデを行う。このためヘラ切り離し痕が螺旋状に明瞭に残るものと、切り離し痕が観察されないものがある。口径は13.5~14.5cmで、口径に対する底径の割合が大きいことが特徴で、体部立ち上りの傾斜度が $c \cdot d$ に比べ小さい。内底は体部まで連続して回転利用のヨコナデを施した1例を除いて、一方向あるいは各方向のナデによって仕上げられる。この内底仕上げのバリエーションは糸切り離しの場合と基本的にかわりはない。また、ロクロの回転方向は底部に螺旋形のヘラ切り離し痕を有するものや、体部立ち上りのヨコナデの方向からみて右まわりである。

d は体部立ち上りの傾斜が大きく、かつ口縁部近くで外反する形態で、底部から体部にかけて全体的に薄手のつくりとなる。Ⅱ期に属する坏である。

e も同様に薄手のつくりで口縁部が大きく開く形態をとるが、円板状の底部の上縁に体部立ち上りを接合した形に特徴がある。このタイプの坏は量的には少ない。

糸切り離しによる坏 $f \sim h$ は小皿の場合と同様に使用粘土が明らかに異り砂質の胎土となるが、小皿の場合と違って茶色粒子や砂粒を小量ではあるが含む。底部からなだらかに体部へつらなるもの f と、外底部立ち上りの境に明確な稜がつくもの $g \cdot h$ があって、後者が厚手で稚拙なつくりである。 h は底部に板目状痕を有するが、通常同心の長円状につく糸痕が注意して見ないとそれと気づかないくらいにごく細かい。小皿 k の糸痕も同様の細かいものである。糸切り痕を有する坏 $f \sim h$ はⅣ期に属するものである。 f がやや先行する形態的特徴をそなえている。ロクロの回転方向が観察される $g \cdot h$ は右まわりである。

蓋

輪状つまみのつく形態（台付皿とみることもできるがここでは一応蓋とした）を含めて3種類がある。この他に、例えば薬師堂北第2遺構から出している蓋破片は、内外面全面を丁寧にヘラ磨きしており1類たてるべきであるが図示できないため掲げていない。a～cはいずれも粗雑な回転利用のヘラ磨きを施すもので、量的にはaが多く、b・cは各1例しか出土していない。3類ともI期に属するものである。ロクロの回転方向はすべて右回転である。なお、蓋aのなかには焼成の際に堝と重ねて焼いた痕跡をもつものがある。この場合、蓋は堝の上に裏返しに置かれる。

台付皿

台付皿はほとんど反りのない扁平な皿部をもつ托状の形態に特徴がある。大形・小形など若干の形態的バラエティがみられる。胎土はb・cが細砂質精良粘土を使用している。aは体部と高台との境に鈎状突出の名残りともみられる低い段があり、内黒土器境cとの共通点がうかがえる。この形態の土器はIII期には確実に存在するが、上限がII期に若干入るかも知れない。

堝

全形のわかる資料が少ないので分類は高台の形態に注目して行っている。すなわち、aは内外面ヘラ磨きを施すもののうち短く外方へ蹴張りのある高台の形態を代表させたもので、坏部の形態は底部から立ち上りにいたる屈曲部が高台より外側に張り出すもの、ほとんど大きな屈曲部をつくらず緩いカーブで口縁にいたるものなどいくつかのバラエティがある。また、全形のわかる資料では坏部の形態が坏bの一部のものと酷似したものがある。bは、同じく内外面ヘラ磨きを施すが高台の形態が断面三角形となる。a・bともロクロの回転方向はヘラ磨きの際の砂粒、茶色粒子の動きから右回転であることがわかる。なお、外面のヘラ磨きは土器を伏せて行っている。

cの高台は高くなる。しかし、高台先端部のつくりは角張っており、d・eにはない力強さをもっている。ただし、小破片のため断定はできないが、外底部には糸切り痕とみとめられる痕跡がある。

dは外底部に「仏」字ヘラ描きのある土器で、坏部中位で小さく屈折する形態に特徴がある。高台は短く外方に張り出し、先端を丸く仕上げる。胎土に砂粒や黄白色軟質の小粒子を多量に含む。

eはdの高台がさらに高くなったものであるが、特異な坏部の形態をしており、また外底部を除いて内外面をヘラ磨きする。ヘラ磨きの方法は、aが比較的間隔をあけて半ば装飾的效果をねらって行うのに対し、回転を利用してほとんどすき間なく磨き、内底は一方向の磨きを行って色調もやや黒色に変化している。

fは底部糸切り離しのち、回転を利用したヘラ削りによって高台外面を整えたいわゆる切

高台の埴形土器である。高台外面の仕上げは丁寧にシャープな仕上がりである。内底は見込みが一段凹んで深い形態となる。

埴の年代については、a・bなど外面へう磨き手法をもつⅠ期に特徴的な一群と、高く伸びた高台先端を丸く仕上げる一群とに分け、後者をⅡ期と考えている。しかし、cのようにこの分類におさまらないものもあり、とくに糸切り底に高台をつける埴については、資料もごく少ないことから今回はその位置づけを保留する。

内黒土器

実測可能な資料が全部で7点ほどあり、これとは別に内外面とも漆黒色の小形埴形土器の口縁部破片が1点ある。aは小皿に高台をつけた形態で、内外面の成形・へう磨きともやや雑な作りである。bは低い踏張りのある高台を有し、形態的には埴a・bの一群に近いものがある。外底部を含めてへう磨きが施されている。内底部は各方向からとくに入念にへう磨きを行う。cは坏部と高台との埴に鉤状張り出しのある埴で2点出土している。器壁は薄手で内外面のへう磨き、あるいは外底のへうナデ等もきわめて丁寧である。高台は断面三角形の埴bに近い形態である。

dは坏で内外面ともへう磨きを行わない。

これら内面を黒色に塗った土師質土器の年代は、今回の資料のみではにわかには決定し難いがⅡ期を中心としてその前後の時期におよんでいるものと考えられる。

註1 底部糸切り離し手法の開始については豊後地方でも好資料に恵まれず、いまだにはっきりしない。筑前大宰府地域での調査成果によれば、ほぼ12世紀から行なわれているとされている。(横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集4 1978)

註2 小皿の出現について前掲書では、11世紀の段階で坏から分化するとしている。

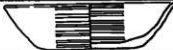
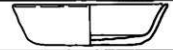
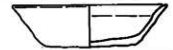
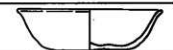
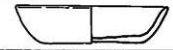
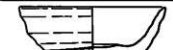
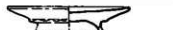
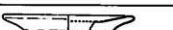
註3 前掲書

註4 第4章 豊後国分寺関係史料 史料(1)

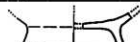
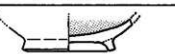
実測図中の土器の分類について

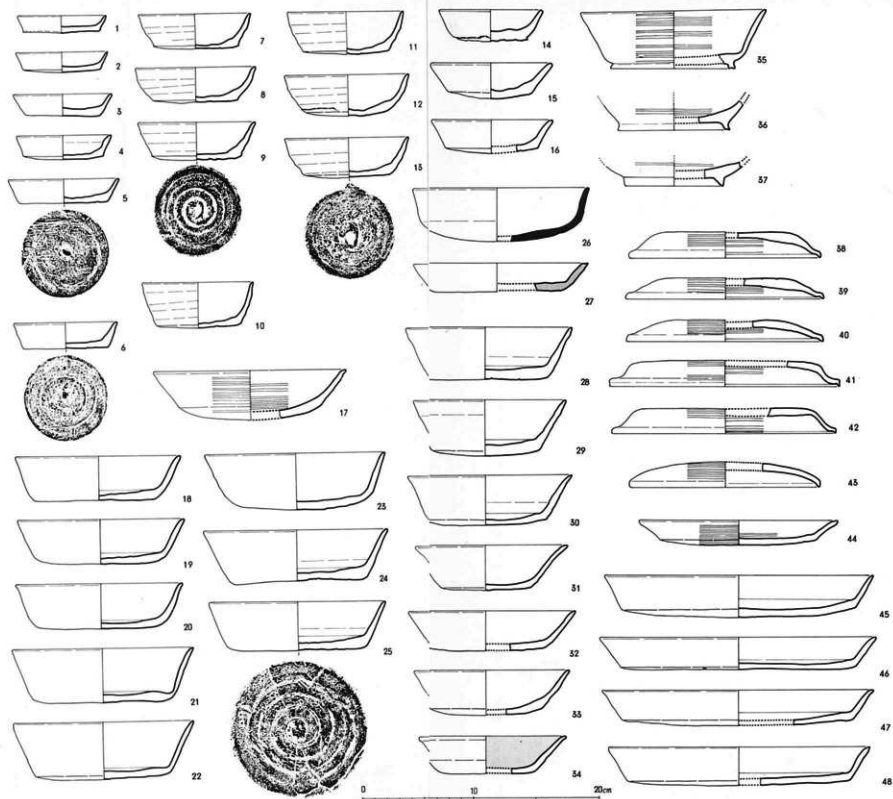
各発掘区から出土した土器の実測図は、土器の種類に応じて次のように表わした。

土師質土器	断面白
須恵質土器・陶質土器	断面黒塗り
瓦質土器	断面アミかけ
黒色土器	黒色面にアミかけ

		分 類 (土器番号)	形 態	手 法	胎 土・色 調
環	へ ら り し	a	 (168)	①(68) 回転利用ヨコナデ ②(68) 各方向ナデ ③(68) 回転利用ヘラ磨き ④(68) ナデのち一方側ヘラナデ	粘土精良、大粒砂粒若干、 茶色粒子含む、明茶色、紫
		b	 (19)	①(68) 回転利用ヨコナデ ②(68) ヘラナデ・粘土磨成形成	粘土精良、細砂粒を含む 赤茶一暗茶色、やや紫
		c	 (57)	①(68) 回転利用ヨコナデ ②(68) 中央部1回一方側ナデ ③(68) ヘラ切り磨し、粘土小塊 付着しやや凹凸	粘土精良、茶色粒子を含む 紫
		d	 (205)	①(68) ①(68) 回転利用ヨコナデ ②(68) ヘラ切り磨し、ごく細い 縦目状底	粘土大粒砂粒・砂粒多量、 暗茶一灰褐色、やや紫
		e	 (110)	①(68) 回転利用ヨコナデ ②(68) 各方向ナデ ③(68) ヘラ切り磨し	粘土細砂粒多量、茶色粒子 若干含む、赤茶色、紫
	糸 切 り 磨 し	f	 (97)	①(68) ①(68) 回転利用ヨコナデ ②(68) 糸切り磨し、糸切り痕 あり	粘土砂質良好、砂粒若干含 む、茶色粒子ごく少量、黄 白色軟質粒子含む、紫
		g	 (99)	①(68) ①(68) 回転利用ヨコナデ ②(68) 糸切り磨し	粘土砂質、砂粒・大粒茶色 粒子含む、黄茶色、やや紫
		h	 (100)	①(68) 回転利用ヨコナデ ②(68) 一方側ナデ ③(68) 糸切り磨し、糸切り痕 小、縦目状底	粘土やや砂質良好、黄色 帯・茶色粒子を含む、黄茶 色、紫
蓋	a	 (98)	天井部が上方に盛り上った形を とり、口唇部先端がわずかに下 降する。	①(68) ②(68) 回転利用ヘラ削り ヘラ磨き ③(68) 一方側ナデのち回 転利用ヘラ磨き	粘土砂粒・茶色粒子を若干 含む、茶色一赤茶色、紫
	b	 (93)	天井部から緩かなカーブで口唇 部にいたる。口唇部は短く下 降する。つくりは丁寧である。	①(68) ②(68) 入念な回転利用 ヘラ磨き	粘土精良、細砂粒・茶色粒 子を含む、黄白色軟質小塊 含む、黄茶一赤茶色、紫
	c	 (169)	天井部がやや盛り上った形をとり 口唇部のつまみをつける。口唇 部は丸くおさめる。	①(68) ②(68) ヘラ削りのち磨き (つまみ) 磨きなヘラ磨き ③(68) 一方側ナデ(中央部)の ち縦線な回転利用ヘラ磨き	粘土砂粒ごく少量含む 茶色粒子多量、茶色、紫
台 付 皿	a	 (130)	厚手のつくりで短い足がつく 口唇部は丸くおさめる。体部 と高台との境に肩状の突出し状	①(68) 回転利用ヨコナデ	粘土砂粒・茶色粒子を含む 黄白色軟質小塊含む、茶 色、紫
	b	 (注第2脚部)	厚手のつくりで短い足がつく 口唇部は丸くおさめる。高台 は低い。	①(68) 回転利用ヨコナデ	粘土やや砂質精良、黄茶一 灰褐色、やや紫
	c	 (78)	厚手で皿部はほとんど平板なつ くり	①(68) 回転利用ヨコナデ	粘土に砂粒を若干含む、茶 色粒子ごく少ない、灰褐色一 黄茶色、やや紫

第98図 主要土師質土器の分類(2)

		分 類 (土器番号)	形 態	手 法	胎 土 ・ 色 調		
境	取 り 付 け 高 合	a		(35)	底部から体部への曲線部や内側に低いふんばりのある高合がつく。立ち上りは際く直線的に外方へ開く	(体部) 回転利用ヨコナデ (内側) 一方方向ナデ (体部～内側) 回転利用ヘラ磨き (内側) ヘラ切り磨し	胎土砂粒若干含む。茶色 粒子含む。茶色～黄褐色 やや紫
		b		(36)	底部から体部への変換が鋭いカーブで立ち上がる。高合断面はほぼ三角形に近い	(内側)～(体部) 回転利用ヘラ磨き	胎土やや砂質精良。砂粒 干。茶色粒子含む。やや紫
		c		(202)	外方へ張り出した高合は厚み、先端の角ばった仕上げとも力強い	(内側)～(体部) 回転利用ヨコナデ (内側) 最後は一方方向ナデ (内側) 角切り直(?)	胎土精良。砂粒を若干含む 黄褐色。紫
		d		(63)	体部外面中位に小さい曲線部がある。外方へ開く低い高合の先端丸く仕上げる	(内側)～(体部) 回転利用ヨコナデ (内側) 回転利用ヨコナデ	胎土砂質。砂粒・黄白色軟 小塊多量。茶色粒子・金型 母若干含む。紫
		e		(64)	体部は口縁付近で大きく内湾。高合は外方へ大きく開く	(体部) 回転利用ヘラ磨き (内側) 一方方向ヘラ磨き (内側) ナデ	胎土細砂粒若干。黄白色軟 小塊含む。茶色粒子・金型 母ごく少量含む。黄褐色。紫
		f		(152)	内底見込み部に深い収がつく。高合立ち上りはシャープで丁寧なつくりである	(内側)～(体部) 回転利用ヨコナデ (内側) 永切り磨し (体部外側) 回転利用ヘラ削り	胎土精良。茶色粒子少量 含む。明茶色。紫
内 黒 土 器		a		(132)	小間張の体部をもつ。口縁端部やや外方へつむむ	(内側)～(体部) やや組織なヘラ磨き 高合との接合部ヘラ沈線	胎土砂粒を若干含む。茶色 粒子・黄白色軟質砂子若干 含む。外面黄褐色。紫
		b		(71)	低い高合は厚手のつくりでやや外方へ向うふんばりのある形態をとる	(内側) 入念な各方向ヘラ磨き (体部内側) 回転利用ヘラ磨き (内側) 各方向ヘラ磨き	胎土精良。大粒茶色粒子 含む。茶～黄茶色。紫
		c		(191)	体部は厚手のつくり。高合と体部の間に肩状の突出がある。高合は低い断面三角状	(内側) きわめて入念なヘラ磨き (体部内側) 回転利用ヘラ磨き (内側) 一方方向ナデ	胎土細砂粒・茶色粒子含む 黄茶色。紫
		d		(34)	体部立ち上りは直線的で縁がつかよい。器底厚みがほぼ一定している	(体部) 回転利用ヨコナデ (内側) 各方向ナデ (内側) ナデ	胎土細砂粒・茶色粒子小 量含む。黄褐色。紫



第100圖 藥師堂西地瓦瀝出土土器実測圖(埴大)

1) 薬師堂西地区瓦溜出土の土器

薬師堂西地区瓦溜最下層出土の一括土器である。各調査地区出土土器の大半は遺構上面を覆う黒色土中からの出土であり、遺構と密接なかかわりをもって出土した資料はごく少い。そのなかで瓦溜最下層の一括土器は、瓦溜という遺構の性格上第一義的な一括資料としては限界をもつものの、塔西地区あるいは北第2遺構などから出土した土器群と異なり底部糸切り手法の土器をまったく含まない点で、少くともその下限年代を国分寺の廃絶以前におくことのできる資料である。瓦溜最下層の土器群は、底部糸切り手法の土器をまったく含まないということのほか次のような特徴をもっている。

- ① 創建前後の時期の土師質土器のまとまった資料を含む。
 - ② 器種としては土師質土器に小皿・皿・坏・埴・蓋・黒色土器などがあり、その他須恵質土器坏、瓦器質土器皿があるが、そのほとんどが灯火器として使用された痕跡をもっている。
 - ③ きわめて規格性のたかい小皿a・bが多量にある。実測することのできる資料だけでもaが26、bが20個を数える。このタイプの小皿は小形ながらつくりの丁寧な土器で他の小皿との判別は容易であるが、北方トレンチから出土した1点(206)を除けば他の発掘区からはまったく発見されていない。
 - ④ 土師質土器の外面にみに明るい黄緑色の釉をかけた緑釉陶器の小破片がある。
- 出土土器の種類は次のようである。

土 器 の 種 類	番 号	備 考	土 器 の 種 類	番 号	備 考	
土師質土器 小皿 a	1～6	1.4.5外底面に板目状痕	埴 a	35	坏部は21と類似する	
	b	7～13	体部外面にら旋状調整痕	b	37	
	c	14	蓋 a	38～42	40は埴と重ね焼き	
	d	15・16	b	43		
	皿 a	45～48	坏20～23の胎土と類似	黒 色 土 器 d	34	研磨なし
	b	44	須恵質土器 坏	26	内底 各方向ナデ仕上げ 外底 各方向ヘラ削り	
	坏 a	17				
	b	18～25	18～19, 21と22, 24と	瓦器質土器 皿	27	
		28～30	25は同工とみられる。			
		32				
c	33					
d	31					

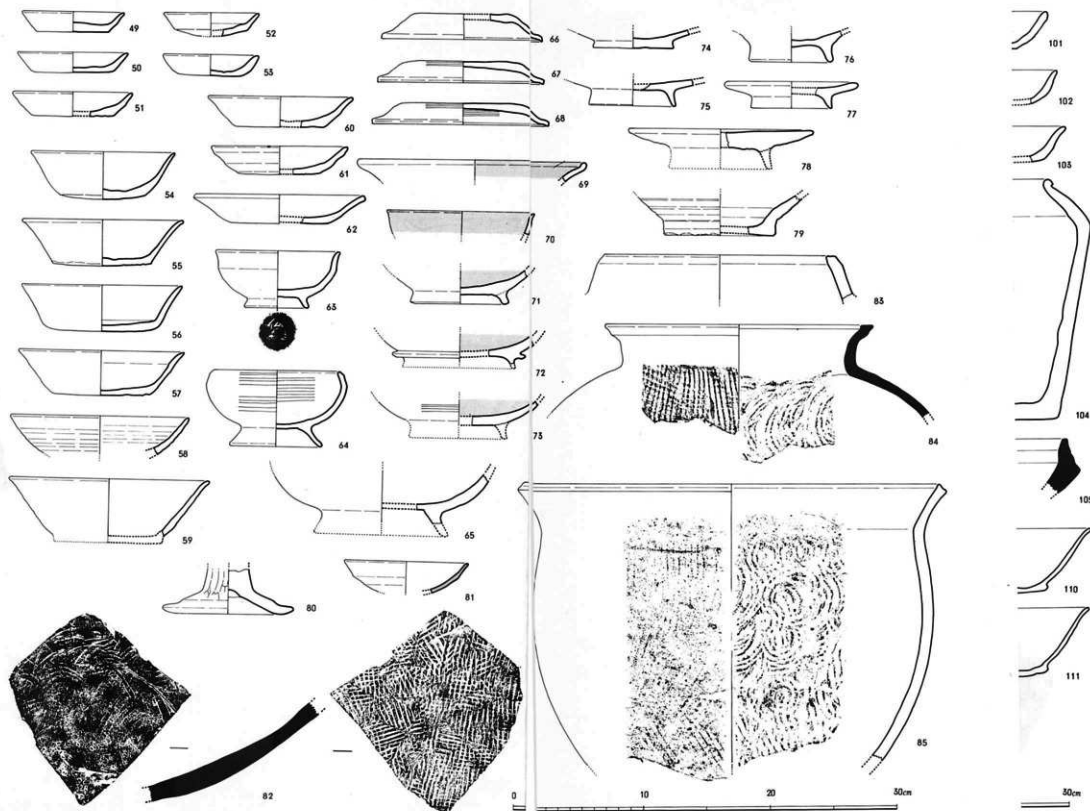
2) 塔西地区出土の土器

塔西地区は、北第2遺構とならんで多量の土器が出土した地区である。土器は遺構上面を覆った黒色土中あるいは溝中堆積土からの出土が多く、遺構との直接的関連性はうすい。とくに注意すべき土器として、緑釉陶器2点、「仏」字をヘラ描きした埴、墨書銘ある蔵骨器などがある。

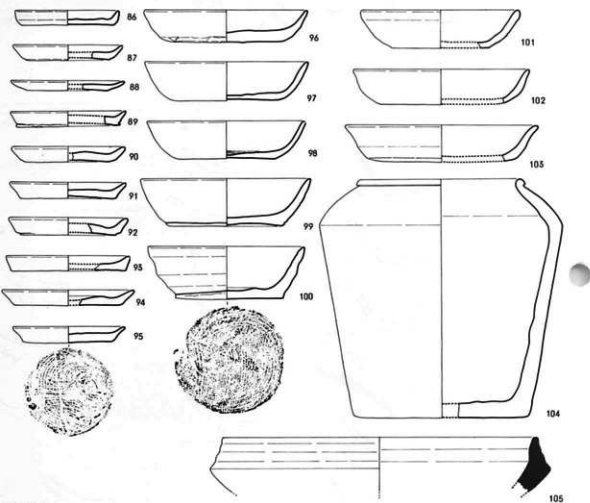
この地区の土器類は、国分寺I期から中世までの時期の土器が混然と出土しているので、便宜上糸切手法をもつ土器群とそれ以外の土器群とに分けている。後者が糸切り手法の採用時期に先行する土器であることは言うまでもないが、小皿の分類の項で述べたように糸切り手法の採用によってそれ以後の底部の切り離しがすべて糸切りで行なわれたと考えることはできず、むしろその前後の時期はヘラ切り離し・糸切り離しがかなり併用されていることが考えられる。したがって、糸切り底か否かを中心に分離した第101図と第102図上段の土器群は必ずしも厳密に時期差を示すものではない。

出土土器の種類は次のようである。

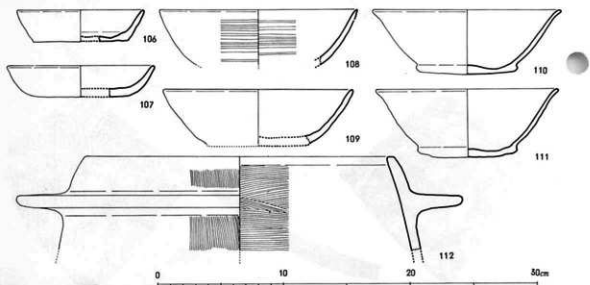
土器の種類	番号	備 考	土器の種類	番号	備 考
土師質土器 小皿	49・51	小皿aに類似	土師器 高坏脚	80	柱状部タテヘラ削り
e	52		瓦器質土器 坏	81	内面粗雑なヘラ磨き
l	53	糸切り、内外面ヘラ磨き	須恵器 甕	82	外面叩きに特徴
	50	内外面研磨			
皿c	62				
	60				
	61				
坏b	56		土師質土器 蓋	83	
c	57		須恵器 壺	84	外面は木目に直交する平行条線タタキ
d	54・55		土師質土器 甕	85	外面は浅い平行条線タタキ
e	59				
埴d	63	外部底面「仏」字ヘラ描	土師質土器 小皿i	86~95	
e	64	内外面粗雑な磨き	坏f	96~98	
	65			101~103	
蓋b	66~68	66はヘラ磨きしない			
黒色土器	69		g	99	
	70	内外面黒色研磨	h	100	
b	71・73		無類壺	104	砂質精良胎土、墨書銘
c	72		陶質土器 鉢	105	
切り高台皿	74	ヘラ切り	土師質土器 坏f	107	
台付皿	b 76・77		坏a	108	
c	78		坏e	110・111	
土師質土器	79	糸切り、砂質精良胎土 黄茶色	蓋	112	スス付着



第101图 塔西地区出土土器实测图 (1/10)



西門地区



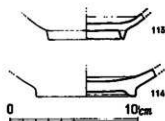
第102图 塔西地区出土土器实测图(2) (3/4大)

緑釉陶器 (図版47)

緑釉陶器は当国分寺跡の調査を通じて3点出土しているが、そのうち2点が西門地区から発見されている。もう1点は薬師堂西地区の瓦溜から出土した小破片である。

(1)は、黄白色ないしは黄灰色を呈する精良な胎土の土師質碗全面に緑釉を施している。見込みをわずかにへらで削り体部との境に段をつけ、内部をへらで暗文風に磨いている。高台は高さ0.7cmの付高台で、下方に向かってやすばまる。

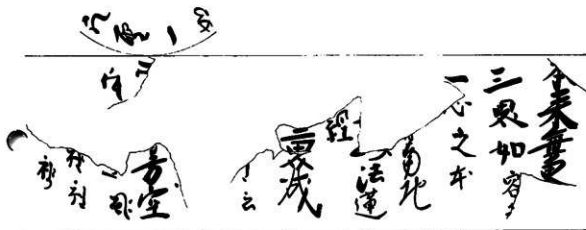
(2)は、須恵質碗の全面に緑釉を施し、色調は灰緑色である。内底部は体部との境いにわずかに段をつけ、(1)と同様へら磨き様の痕跡がみられる。高台は切高台で低く力強い。高台内面の砂粒の走行は器面に対し左まわりである。



第103図 緑釉陶器実測図

蔵骨器 (第102図104・図版50)

西側溝に接する回廊基壇上から出土した。出土位置が浅く破片となって発見されたが、とくに注意すべき施設はもっていなかったとみられる。高さ19cm、肩部で屈折して玉縁状の口縁を有する。砂質精良な胎土で、若干の金色雲母を含み、色調は茶色である。体部外面および肩部に墨書銘がある。中世の復興期のものである。



第104図 蔵骨器墨書銘

3) 薬師堂北第2遺構出土の土器

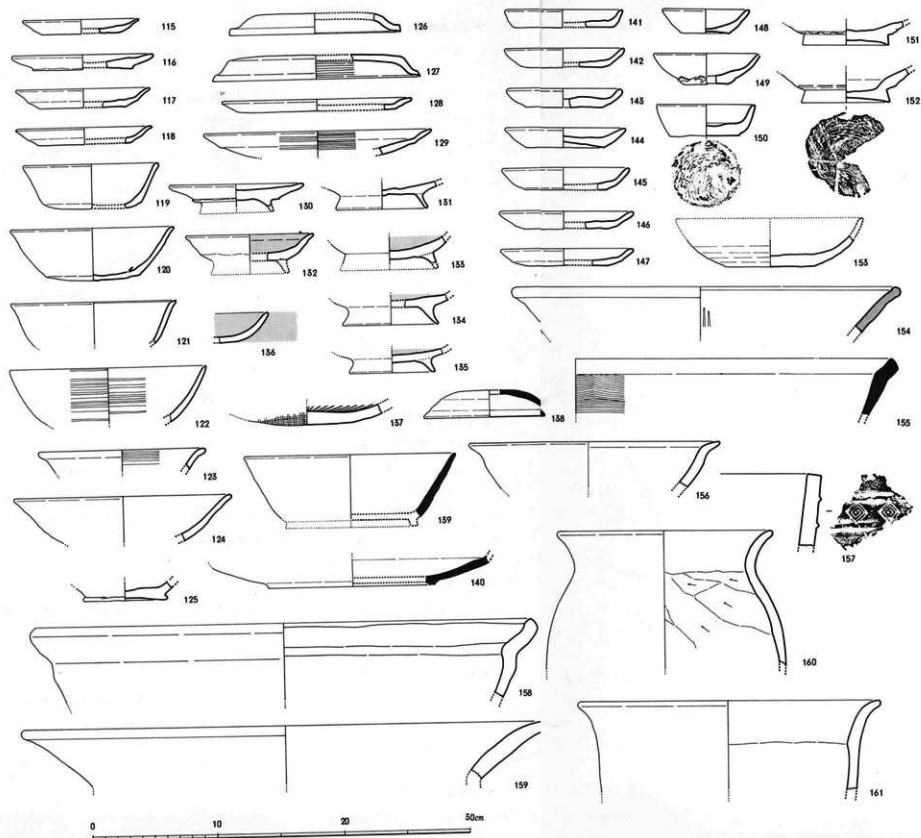
北第2遺構は基壇東北部にあたる部分と基壇北側の段落ちを広く発掘したため土器資料は多い。国分寺Ⅰ期から中世におよぶ時期の資料が存在することは、塔西地区などと共通している。量的には中世の時期の資料が圧倒的に多数を占めるが遺構面が浅いため耕作によって細片となっていることが惜しまれる。また、国分寺Ⅰ期古式に属し、瓦溜資料中になにもものが二、三注意される。1つは中心部から放射状暗文を施した盤ないしは浅い鉢形の土器とみられる破片が2点ある。赤茶色〜赤褐色の精良な粘土を使用した土器で、ほかに同時期のものとみられる厚手の蓋・皿がある。蓋はつまみ部分を欠失しているが、どちらも全面に回転を利用した丁寧なへら磨きが施されている。これらは、皿におけるへら磨きがきわめて形式的におこなわれたのと異なり、より古式の様相をもっている。

また、糸切り手法をもつ土器のうち他地区にないものに、切高台の埴形土器がある。この土器の胎土は特徴的で、ごく木目の細かいなめらかな胎土で表面に光沢がある。同じような胎土の土器に小皿f(117・118)がある。小皿fは底部へら切り離して、体部はまだ若干長く延び薄手のつくりである。

北第2遺構出土土器は、瓦溜最下層に対応する時期について比較するとそこにはなかった鉢形土器・甕形土器・壺形土器等の日常の生活に使用する土器が存在することが特徴である。このことは、北第2遺構と称した堂宇の性格ともかわかることである。中世以後の土器では、底部糸切り手法の小皿の量が著しく多い。

出土土器の種類は次のようである。

土 器 の 種 類	番 号	備 考	土 器 の 種 類	番 号	備 考
土師質土器 小皿 f	117・118	皿部と高台との境に髷状の突出がある	黒色土器	136	土器内部まで漆黒色を呈し、内外面とも丁寧に研磨
g	116				
h	140・147		盤	137	内面放射状暗文、外面格子目状に暗文
k	148・149		切り高台埴 f	151・152	高台外面の立上りシャープ
j	150		鉢形土器	156	
皿 b	128		甕形土器	158・159	
坏 a	122			161	
c	120・121		壺形土器	160	内面へら削り
d	119		火鉢	158	黄赤色、堅緻
g	153		須恵質土器蓋	138	古墳時代
蓋 a	126・127		埴	139	
台付皿 a	130		盤	140	
	131		瓦器質土器槽鉢	154	
黒色土器	a 132		陶質土器鉢	155	内面ヨコハケ目
	b 133・135				



「コ」字状張り出し部は塔
の土器に限られる。満中
目される(図版50)。
たものである。

備	考
5	ヘラ切り高台 凸線間に印花文 内面灰黒色、外面黄茶 ～灰色

として使用している。
くで外方へわずかに屈曲
ら類品が出土している。

も丁寧なヘラ磨きが施さ

の境に鈎状の突出のある
行なわれている。この種

。内容的には塔跡西地区

4) 西側溝遺構出土の土器

溝遺構に関する調査は21ヶ所におよんでいるが、このうち西側溝遺構「コ」字状張り出し部は塔西地区と並んでとくに土器類の出土が顕著である。出土土器は国分寺Ⅰ期の土器に限られる。溝中より出土した完形の土師質土器(168)には「右院」の墨書銘があって注目される(図版50)。

西側溝遺構第3トレンチの出土土器は、すべて溝内堆積土中より出土したものである。

土器の種類	番号	備考	土器の種類	番号	備考
土師質土器	環 a	167-168	黒色土器	b	174-175
	c	164-165	瓦器質土器		179
	d	162-163	須恵器	瓶	182
	e	180	陶質土器	撥鉢	181
皿 b		170	瓦器質土器	火鉢	183
	c	169		壺	184
		輪状つまみ内部に暗文 風へう磨き			
		178 底部はすわりが悪い			
埴 a		171			
	c	172			
		胎土に金粟母多混			

5) 各地区出土の土器

回廊および中門地区出土土器

小皿 d に属する 185 が第15トレンチの南側トレンチで出土した。灯火器として使用している。

186 は西側溝遺構第11トレンチの出土でつくね土器である。口縁部近くで外方へわずかに屈曲する特徴がある。黄茶色の砂粒を含まない精良な胎土である。南門地区から類品が出土している。

南回廊地区第14トレンチ北側から出土した187・188は環 a である。

薬師堂地区出土土器

189・190は薬師堂地区第4トレンチから出土した環 a である。内外面とも丁寧なへう磨きが施される。へう磨きの方向は内外面とも器面に対して左方向である。

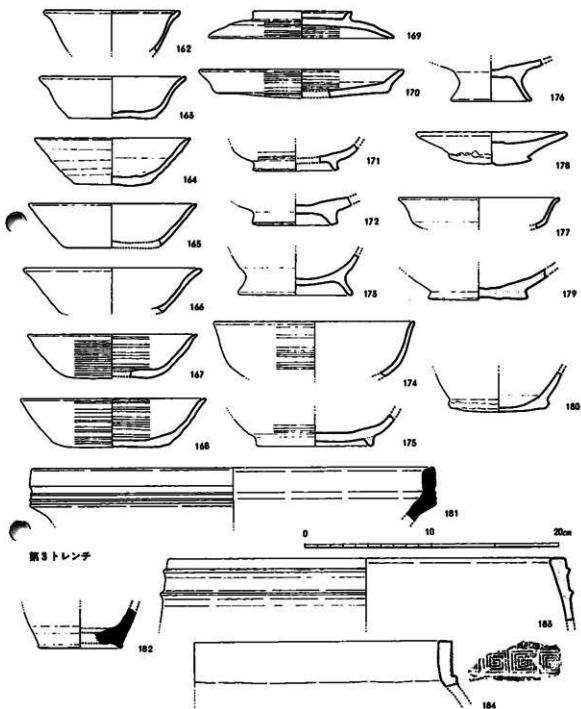
東側溝遺構第21トレンチ出土土器

191 は小皿 b に類似した土器で溝中より出土した。192 は坏部と高台との境に鐙状の突出のある特徴的な内黒土器である。つくりは非常に丁寧で内面のへう磨きも十分に行なわれている。この種の土器は他にやや粗雑なつくりのものが1点出土している(塔西地区72)。

塔跡出土土器

塔跡基壇端調査のために設定した3つのトレンチからの出土土器である。内容的には塔跡西地区

「コ」字状張り出し部



第106図 西側溝遺構出土土器実測図(1/2大)

とほぼ同様で、国分寺Ⅰ期から中世に属するものまでである。195は小皿gで底部はヘラ切り離しになっているが、この形態の小皿は通常糸切り離しが行われるものである。193・194は小皿c、197は皿bである。198・199は底部糸切りによる坏で斜めに直線的にのびる体部をもっている。胎土は砂質で、坏f前後の時期とみられる。196は底部糸切りである。

南門地区出土土器

付け高台の201とてづくね土器202がある。201は先端の角張った高い高台をもつ埴形土器で、破片のためはっきりしないが底部に糸切り痕らしきものがある。内底は回転ヨコナデののち中央部を一方ナデしている。黄褐色の精良な胎土である。202は口縁部近くで外方へわずかに屈曲する特徴ある土器で、てづくねである。溝遺構第11トレンチ出土の186とほぼ同工である。暗黄褐色の目の細かい胎土で、内面仕上げに際して布あるいは皮などを使用した痕跡がある。また、図示していないが南門基壇南側の粘土層中につくられた排水溝から砂粒を多混した胎土の陶器摺鉢破片が出土した。

東門地区出土土器

203は東門跡の柱抜き取り跡より発見した底部糸切り離しによる小皿kである。内外面ともススで黒色になっている。外底に板目状痕がある。

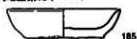
塔東地区出土土器

204は塔東地区第4トレンチ中央部の溝状遺構付近から出土した瓦器質摺鉢である。底部内面に同心円状、その外側に波状の櫛目がつく。体部内面は通常の摺鉢と同様間隔をおいて、櫛目が入れている。第4トレンチ南側からは一括して廃棄されたとみられる多量の近世～近代の陶磁器がある。大部分は江戸後期の伊万里の磁器でこれに若干の唐津の陶器が含まれる。なかに3点ほど古伊万里がある。

北方地区出土土器

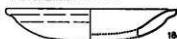
北第2遺構（推定講堂跡）より北側は、幅1mのトレンチによって北65mまで探索を進めた。その結果、遺構としては根締め石上に据えられた礎石1個を発見した。205はその礎石際から出土した土師質土器坏である（坏d）。周辺からの出土土器に206～208がある。206は瓦溜最下層一括土器のなかの小皿bと類似している。同じ礎石周辺のトレンチで前記の土器より一層下位からの出土土器が210・211である。古墳時代の包含層があるものとみられる。また、礎石と北第2遺構との中間付近で、古墳時代の須恵器高坏212と土師質土器蓋が出土している。後者は内外面を丁寧にヘラ磨きした国分寺Ⅰ期古に属するもので、内側一面に墨がついており硯として用いられたものとみられる。

中門地区第15トレンチ



185

西側溝遺構第11トレンチ



186

南回廊地区第14トレンチ

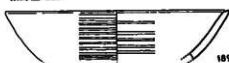


187



188

薬師堂地区

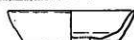


189



190

東側溝遺構第21トレンチ



191



192

北方地区



205



206



207

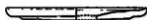
塔 節



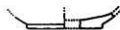
193



194



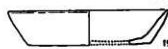
195



196



197



198

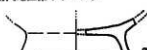


199



200

南門地区第1トレンチ

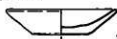


201



202

東門地区



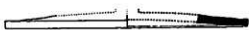
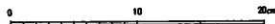
203



塔東地区第4トレンチ



204



206



209



210



211



212

第107図 各地区出土土器実測図(1/4大)

III 鉄 製 品

鉄 釘 (第108図1~18)

鉄釘は塔跡、薬師堂地区基壇遺構(推定金堂跡)、回廊、北第2遺構(推定講堂跡)、南門、薬師堂西地区大形瓦瀝などから出土した。とくに、北第2遺構からは大小の残欠を合わせると35本以上の鉄釘が発見されている。寺伝では北第2遺構の位置に阿弥陀堂を再建したとあるので、これらの鉄釘には当然阿弥陀堂に使用されていたものが含まれているとみられるが、出土の状態および形態等の特徴からそれを識別することは困難である。よって、ここでは通例にしたがって頭部の形態によって分類する。まず大きく、頭を折り曲げるもの(A)と、折り曲げによる頭の加工をしないもの(B)とに分ける。A・Bとも断面方形ないし菱形のいわゆる角釘であるが、Aが先端を除いてほぼ一様の太さにつくり、全体に細造りであるのに対し、Bは先端から頭部へ向って徐々に断面を大きくし全体を太い楔形につくる。また、Aは単に「L」字形に折り曲げただけのもの(A-1)と、折り曲げた先端を叩きのばしそれを再び折り曲げてかおせ頭としたもの(A-2)がある。ただし、(A-2)の資料は錆の状態からみて新しい時期の釘である可能性を有する。

懸垂金具 (第108図19・20)

断面円形の鉄棒両端を環状に折り曲げて、懸垂時の継ぎ手とした金具。両先端の環状折り曲げは同一方向でなく、「S」字状になるように90度ないしは180度ひねった位置をとる。

鑿状工具 (第108図21)

北第2遺構から出土した。断面円形の身は先端に至って杏仁形となりしだいに扁平度をまして刃部を形成する。身の全長9cm。茎は断面方形である。

IV 石 製 品

宝珠 (第109図1)

薬師堂西地区の大形土壇状遺構埋土から出土した。直径12cmの大ききで下部に柱状部がつく。凝灰岩製。

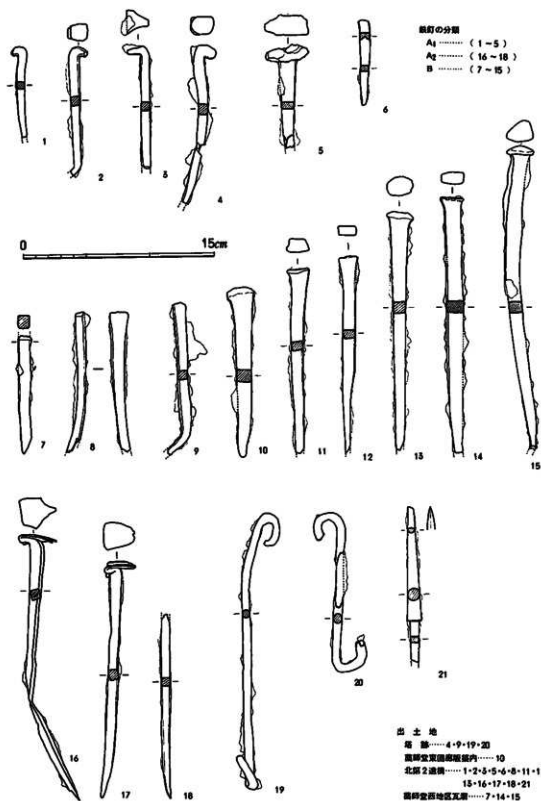
砥石 (第109図2~4)

3個出土した。出土位置は、塔跡2トレ(砂岩製、折損)、西溝遺構「コ」字状張り出し部(頁岩製、折損)、塔西地区(結晶片岩製、完形)である。いずれも4面ともよく使用している。

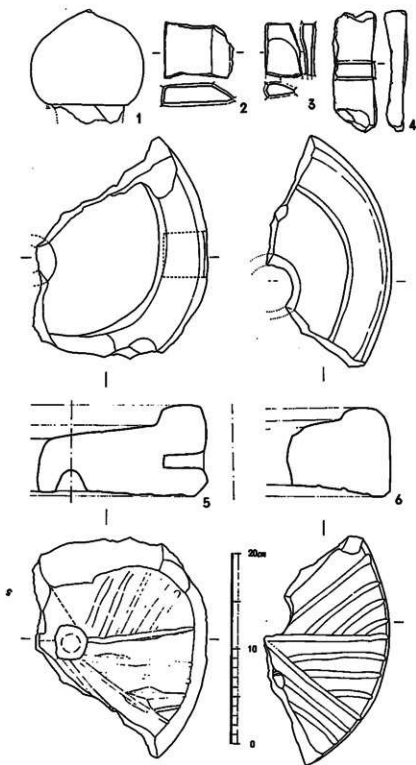
粉挽き臼 (109図5・6)

2個出土している。(5)は粒子の粗い安山岩を素材とした上臼 $\frac{1}{2}$ 片で復原直径30cm、高さ9.5cm、上縁の高さ2cm、幅5cm、ふくみ約0.5cmを測る。臼目は摩滅が著しいが6分面5溝で放射状になる。芯棒受け穴(径約3.5cm)は貫通しておらず、横に供給口(約5cm)があり、臼の側面に挽き木を固定する横打込み式の留め穴がある。

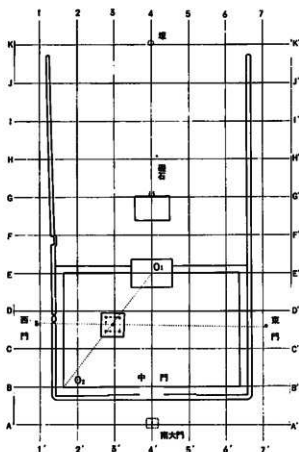
(6)は安山岩を素材とした上臼 $\frac{1}{4}$ 片で復原直径33cm、高さ9cm、上縁の高さ1.2cm、幅5cmでやや片べり気味である。ふくみ1.2cmを測る。臼目は8分面4溝で放射状になり、断面形状は丸溝である。供給口の復原直径5cm。芯棒受け穴は欠損している。



第108図 鉄製品実測図(1/6大)



第109圖 石製品実測圖(1/4大)



第111図 豊後国分寺地割り案 (1)

第1節でみたように、豊後国分寺跡では南大門・回廊・塔・金堂(推定)・講堂(推定)・北第2遺構(礎石)・東門・西門・溝などの遺構についてほぼ明らかとなった。遺構の示す豊後国分寺の規模は南北292m、東西約182m、想定される伽藍中軸線の方位はおよそN2°30'Eである。

そこで、この遺構配置をもとにして地割り法について考えよう。作業はまず、天平尺(1尺を29.6cmとする)100尺を単位として方眼をつくり、遺構配置図上に薬師堂地区基壇(推定金堂跡)の中心が方眼交点になるようにかぶせる。方眼の東西線をA—A'、B—B'のように記号で表わし、同様に南北線を1—1'、2—2'のように表わす。また、薬師堂地区基壇中心をO₁とする。この作業によって次のようなことがわかる。

南大門……O₁から4単位南へといった位置に南大門の南側をおく。おそらく南大門にとりつく外垣の位置がA—A'にほぼ一致するのであろう。

回廊……中門にとりつく南回廊・薬師堂地区基壇にとりつく北回廊は、それぞれB—B'、E—E'に接しており、両者の間隔はちょうど3単位である。東西の回廊はその中心を伽藍中軸線(4—4')からそれぞれ2.5単位づつとっている。

塔……回廊西南隅(O₂)とO₁を結ぶ線と、伽藍中軸線から西へ1単位とった3—3'との交点に心礎を据えている。

北第2遺構……O₁から2単位北へとったG—G'に基壇北側を合わせている。

東西門……南北位置は塔中心を通り、東あるいは西に伽藍中軸線からそれぞれ3単位とっている。

北第3遺構(礎石)……検出した礎石が、ここに想定される建物の南第1列の1つであるとすれば礎石中心部とO₁との距離は91mであるから、天平尺に換算すると307.4尺である。したがって想定される建物の南辺はほぼO₁から300尺付近とみられ、これはH—H'にあたる

この他、調査の最終段階になって、北方ほぼ中軸線上に直径3m前後の塚があることがわかった

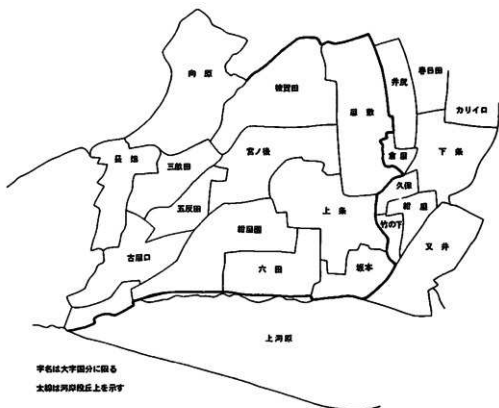
(第4次調査補足実測)。この塚の位置は発掘された西側溝道橋北端とこれを中軸線に対して対称においた東側溝北端の想定位置とを結んだ線より約10m北側にあるが、ほぼK-K' 線上にあり、O₁から6単位北に位置することになる。また、北側から国分寺の台地へ登る道の延長がこの塚までできていた形跡があり、溝道橋との位置関係からみてもこの塚が北門等の基壇跡となる可能性は強く、将来精査の必要がある場所である。

以上のように、豊後国分寺の伽藍配置は薬師堂地区基壇の中心を原点として、天平尺100尺を単位とする方眼上にきわめてうまく一致する。

豊後国分寺の占地

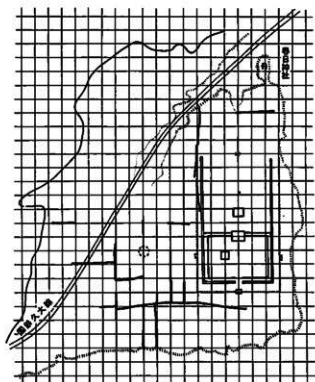
すでに第1章において豊後国分寺の占地については触れておいた。

さきに述べたように豊後国分寺の立地する河岸段丘は、東側と南側が崖、西北側が低丘陵によって画されたほぼ二等辺三角形をしている。二等辺三角形の長辺は北側で浸蝕を受け浅い谷状を呈し、そこを国鉄久大線が通って段丘西南隅へ抜けている。豊後国分寺はこの段丘の東側を占めるわけであるが、国鉄久大線を境にして田畑の様相がかなり異っている(巻首図版参照)。線路より西北側では田畑の規模は小さく、ほぼ丘陵裾の線に沿ってつくられており、とくに手を加えら



第112図 豊後国分寺周辺の字図

れた様子はうかがえない。これに対し、国分寺のある段丘上「二等辺三角形」の部分では規模が大きくしかも東西・南北に畦畔をとる水田が多い。字図との照合においても「二等辺三角形」がそこに反映している可能性は強い。試みに伽藍配置で用いた天平尺 100 尺による地割りをここに適用したのが第 113 図である。この中にこの地割り線とほぼ一致する畦畔あるいは道を太線で書き込むと、国分寺



第113図 豊後国分寺周辺の地割り案 (2)

寺域の西側線の延長がよく一致する。さらに国分寺の西側にも一致する線の多いことに気づく。国分寺西側には調査時から地元の人が「礎石が存在する」と言っていた場所（点線丸印）があり注意されていたが、段丘上において国分寺が東に偏って占地していることからみてここに何らかの遺構が存在する可能性は十分あろう。

国分寺西側の空間の利用如何にかかわらず、段丘上の「二等辺三角形」の上面の状態あるいは想定される地割りから国分寺の創建当時かなりの造成があったであろうことは想像に難くない。そして、地元で「うずくまる亀の頭」にみたまてている東北隅の突出部に春日神社が祭られている。これはちょうど国分寺伽藍の南北中軸線から東へ 200 尺の線上に位置する。

平瓦の生産と供給

平瓦を叩き板によって分類し、これを基として瓦を多量に出土した遺構についてその組成を調べた結果は、今まで莫然としか考えていなかったいくつかの事柄を明確に問題提起した。例えば塔跡と瓦溜出土の平瓦のうち組成上顕著な差をみせているのは h、k、n、r の叩きをもつ平瓦で、とくに h は塔跡が叩きのわかる全平瓦の 2% しかないのに対し瓦溜では 16% におよんでいる。また逆に n では、塔跡 16% に対し瓦溜は 0.2% である。このような相違を生産地（あるいは工人）対供給先という視点からみれば、特定の建物に使用する瓦と特定の生産地（あるいは工人）とのなんらかの結びつきを想定させるのに十分である。全遺構を通じて 65% 前後の割合を占めている

縄目叩き平瓦にしても8群に分類できたことから、これもそれぞれが叩き板の1つに対応するものとみれば、hの16%という数字が1種類の瓦としては組成上いかに高い比率であるかということがわかる。現在の段階では残念ながら、創建当初の瓦と後の補修瓦とを明確に分離することができないために、もう一つ踏み込めないうらみがある。また、「叩き」の違いがすなわち「工人」の違いを示しているのかどうかについては、製作手法上の他の要素、例えば、凹面の曲率や側縁の仕上げ、離れ砂使用の有無あるいは使用粘土などの詳細な検討を必要としよう。しかし、今回の資料による限り「叩き」の違いがすなわち「工人」の違い（この場合何人かの工人で叩き板を共有している場合もあろうが）を示している可能性は強い。

平瓦は造瓦上、「一枚造り」か「四枚造り」という基本的な違いを有しているが、これに関して出土したすべての平瓦をいずれかに分類する決定的な手法を見出すことはできなかった。しかし、例えばa類5群あるいはh、kなどは一枚造りと考えた方が有利な瓦であることが注意された。個々の瓦がいつ頃使用されたものかという点がいまひとつ不明であるが、例えば瓦瀬で16%という高い比率を示すhが「一枚造り」と断定できるならば「一枚造り」手法が当豊後でも奈良時代まで通る可能性はきわめてつよい。いずれにせよ、今後今回のような整理方法を進めて行けば瓦の需給関係についてさまざまな事が解明されるに違いない。

第3章 考 察

(1) 豊後国分寺の伽藍

沢 村 仁

1. 寺域と伽藍地
2. 地形の変化と遺構の現存状況
3. 伽藍配置について
4. 遺跡から想定した各々の建築
5. 今後の問題
6. おわりに

各説にしるしたように今回の発掘調査は豊後国分寺に関するさまざまな事実を明らかにするとともに、また新しい疑問を生んだ。これらについて主として遺構の方面から述べてみたい。

1. 寺域と伽藍地

寺域については従来の推定とは少々様子が異なることがわかった。

南辺については南大門の基壇地盤とみられる築成土の一端が発見され、遺物の出土状況からみても、寺はこれ以北にあることは明らかなので、確定したと思われる。

東側は東門の掘立柱とみられるものが発見され、地形上からも台地東縁辺に接する地点なので、確実となった。

西辺は調査途中では南北の大空濠がそれかとも考えられたが、掘立柱の門とみられるものを検出できてこれが伽藍域の西限と推定できることとなった。ここで伽藍域とししたのは、遺物・遺構両面からみて寺の附属地がなお西方に続いているかとみられるためである。

北側については依然として未解決部分が多い。西回廊外の空濠は南回廊にはとりついて回るのに、北方ではるか北まで折れ曲らず真直ぐ延長し、南大門から1000尺ほどまで延びておわる。これは寺地全体の北辺の可能性はあるが伽藍地北辺との関係をしめしていなかった。土地所有者の瞭解が得にくく大面積の発掘調査が困難だったためであって、寺域北辺を明確にする顕著な遺構を検出することができなかったのは残念であった。

唯一の可能性のある伽藍地北限遺構は、北第2遺構の北でトレンチにかかった小礎石に関するもののみである。これは礎石一個のみ検出されたので、これに並ぶ礎石も根石も発見していないので、門なのか僧房のようなものなのか、建築以外のものなのかも確定しない。ただ今回発見した南大門地盤の南端からこの礎石までの距離はおおよそ213mほどで、これはいわゆる天平尺の720尺に相当する。すなわち、2町の距離となるので国分寺伽藍地南北長としてはあり得る位置というわけである。

伽藍地の東西長さは東面掘立柱門の中心から西面掘立柱門の中心までは181.3mほどでこれは天平尺の610尺ほどにあたる。近年調査された諸国国分寺では600尺と推定される例も多いので、それに近い規格とみられる。ただし西方については伽藍地の外にさらに附属地があった可能性がある。北方についても前記小礎石の遺構が伽藍北門としても、その北に空濠が延びているので寺附属地があったか、と考えられる。伽藍地の外に広く附属地をもったとみられるのは播磨国分寺や武蔵国分寺の例をあげることができる。

以上のように考えると、当国分寺の寺地は南は南大門跡、東は東門跡、西は現在の寺地西限より少し西、北は北方の東西方向道路より少々北で西空濠の北端付近とすると、東西2町・南北292m(987尺)ほどとなる。

伽藍地は、南と東は寺地と一致し、西は掘立柱西門まで、北は小礎石の附近まで、とすると東西610尺、南北720尺となる。

2. 地形の変化と遺構の現存状況

現在の国分寺一帯をみると、北と西が高く南と東へゆるやかに下る台地上面で、東門外20mほどから台地東縁となって急激に下がる。薬師堂地区、塔東方地区は北や西より一段低い地表をもち、これらは一見旧来の自然地形をそのまま保っているようにみえる。ところが、発掘結果からみると、塔周辺では旧地表は現地表より約1m下に埋没しているが、薬師堂地区と塔東地区では、現地表は旧地表より削られ低くなっていること、逆に北第二遺構より北では現地表は旧地表より1mほど高くなっていることがわかる。さらに、この北方地区は旧地表が自然堆積によって徐々に埋まって保存されたという望ましい状態ではなく、少々流失・攪乱があった後に再堆積によって埋没したのではないかとみられる。

薬師堂地区・塔東方地区も自然流失と開田のための切下げが重なって旧地表以下に削り下げられ、北方地区のような再堆積はなかったものと考えられる。

南門地区も、南北道路より西方では数十センチメートル、東方では1mほど旧地表面が削られていとみられ、従って築地塀の痕跡などは残されていない。南大門の地下地業の一角のみが辛うじて残されていたわけである。

このような表土亡失と再堆積があったため遺構細部は現存状態が充分でなく、基壇化粧を残していたのは塔周辺と北第二遺構の東北辺のみで、塔東方遺構のごときは存在さえ怪しまれるほど失われ、地下地業の一部を残すのみとなっていた。

流失・削平の原因は台地上面の縁辺近くなので自然侵蝕も考えられるが、塔跡のように雑木林に覆われた非耕地で残りがよく、畑や水田で残りが悪い。高さに段落状の差がつくのは耕地境や農道のところであることからみて、主として開墾耕作のためと考えられる。

また、北方地区のような多量の黒色土堆積は西方の高台からの風と水とによる移動が大量にあったためとみられる。回廊をとりまく大空濠を必要としたのは、あるいはこのような流れ込みを防ぐ意図もあったのではなかろうか。

3. 伽藍配置について

南方から南大門・中門・薬師堂地区基壇、北第二遺構と中軸線上にならび、中門両脇から出た回廊が薬師堂地区基壇の東西両脇やや北寄りにとりつく。回廊内の西寄りには塔があり、東寄りには地下地業痕跡のみ残す堂跡がある。東門・回廊内東建物・塔・西門は東西一直線上に並ぶ。

もし、回廊内の東建物が版築のみではなく建築まで完成したとすると、この伽藍配置は法隆寺類似の相模国分寺と同様なもの、または川原寺を東西逆にしたものと考えられることになる。

これは薬師堂地区の建物を金堂と考えるか講堂とするかによってちがいが、金堂なら回廊内東建物は東金堂の性格が想像され、川原寺と逆の配置となり、薬師堂地区建物を講堂としてよいなら、回廊内東建物を本来の金堂と推定し、北第二遺構は食堂のごときものと考えて相模国分寺類似の配置となる。すなわち、いずれかは薬師堂地区建物の性格を細かく考えることが解決の前提となるのである。

4. 遺跡から想定した各々の建物

1) 薬師堂地区建物

主として地下地業として検出され、地上の基壇築成部は局部的にしか残っていない。現在、土壇上にある礎石はすべて原位置から動かされている。上部に新しく土壇を築きなおして東向きの薬師堂を再建している。したがって当初の建物を推定するのは、地下地業が地上の基壇と同形同大のものとの仮定をおく必要がある。この地業は形に歪みがあるが南辺で東西32.6m、東辺で南北21.6m、すなわち、天平尺で110尺×73尺ほどとみられる。

基壇のもとの高さはわからないが、地下地業の深さは1.5m(5尺)近くあったとみられるし、現在の残存壇上には根石もないところからみてかなり高く、やはり5尺位あったかと考えられる。

礎石も根石も原位置のものはないが、基壇輪郭から平面を想定してみよう。

当国分寺では、塔も北方第二建物も基壇の側柱からの出は3m(10尺)～3.6m(12尺)ほどあるので、金堂なら12尺強の基壇の出を想定できる。すると建物本体は桁行85尺、梁行48尺ほどとなる。国分寺の建物は等柱間とするものが多いのでこの全長を等間に割りつけると、梁行は12尺×4間、桁行は12尺×7間より1尺長いのでこれを中央間に加える。中央間13尺両脇間12尺×3間づつとなってバランスのよい柱配置になる。塔でも12尺等柱間なので規格として考えやすい。

基壇の出が12.5尺というと斗拱は三手先で二軒の立派な堂になり、これは唐招提寺金堂に似て正面のやや小さいものになる。

この堂が金堂であったか、講堂であったかとの問題が伽藍配置の解釈に影響することはさきに述べた通りである。

金堂とする見方は基壇の規模が大きく地業も嚴重で、当寺で第一等の堂宇にふさわしいこと、九州の他の国分寺でも回廊が金堂にとりつき、塔が回廊内にある例があること、もし講堂とすると北方第二建物を国分寺では発見されたことのない食堂と考えねばならなくなる。などから導かれる。

講堂とするのは、回廊内に東方建物がありこれが本来の金堂かも知れない。薬師堂と呼ばれ薬師如来像を安置するのは他の国分寺では講堂跡の再建堂の例が多い、などの理由による。

ただし、国分寺の講堂は基壇が金堂より簡単な地業しかされていないのが普通なので、この点を重視すると本来は金堂で、薬師像は再建されなかった講堂の信仰が移ってきたともみられる。すると回廊内の堂は川原寺と逆位置の東金堂だったことになるう。

2) 塔

塔は以前から遺跡が周知されていたが、今回、基壇が明らかになった。

基壇は約18m角(天平尺61尺ほど)、地下にも地上にも深さ・高さとも1mほどの築成層をもち、外装は玉石積みである。階段位置は確認していない。

建物自体の大きさは側柱で概略11m角ほど、すなわち天平尺で約方36尺、12尺×3間の平面をもち、基壇の出は12尺強となる。

心礎は長径2m、短径1.5mに直径0.6mほどの出杣式の遺出しを設けている。それにしても心礎全体は巨大ではないので心柱も直径1.2m(4尺)ほどしかなかったであろう。

側柱礎石には大小あるが、短径1mほどの小さいものがあり、上面の大きさからみて柱は2尺強までしか考えられず細目である。

基壇の出が12尺なら斗拱は三手先で二軒の堂々たるものが考えられ、各重の平面は初層から各間とも1枝(1尺)ずつ減じて最上層(第七重)では18尺と初層のちょうど半分になるものとみられる。

この12尺×3間の平面は相模国分寺と同形同大で、国分寺では最大級のものである。

3) 北方第2建物

南半を削られ、その部分では地下地業の底しか確かめられないが、北東部には根石と基壇化粧の一部に残り、北面中央には軒庇状の出張が附せられていた。

基壇外装は玉石列をつくり、一段引込んで瓦積をしたものらしい。推定できる基壇規模は約27m×18.7m、すなわち正面91尺×側面63尺ほどである。建物自体は根石がほぼ10尺等間にあるとみられ、7間×4間の堂となる。軒の出は11尺強～12尺弱で出組又は二手先の二軒程度の建物であろうか。薬師堂地区の堂が金堂ならこれが当然講堂にあたることになるう。建物の大きさとしては出雲国分寺や大阪百済廃寺の講堂にちかい。

4) 回廊内東建物

地下地業の底部しか残っていないので、建物として完成したかどうかさえ疑われるが、一応、当初の造営計画にあったと考えよう。地下地業の端も明確でないが、残存部と回廊との関係からみて、北面・東面とも回廊と等距離にあり、西面から伽藍中軸までの距離が塔基壇東面と対称の位置にあるとする。さらに中心が塔中心と揃えてあるとすると南北38m、東西26mの堂となり薬師堂地区基壇より巨大なものになる。あるいは、基壇南面を塔基壇南面と揃えたとしても、南北29m、東西26mほどだろう。

ただし、これは仮定を重ねての推定なので今後の調査をまつものであるが、一応、西面する仏

堂と考えることができよう。

この仏堂の存在は、九州の国分寺で回廊内に塔をもつものすべてについて、このような回廊内仏堂があったかどうか確認する必要を生じ、興味のある問題を生むこととなる。

5) 回廊

北面では幅5mほどの地下地業として、西面では空濠をともなう地形の高まりと少々基壇積土で、南面も空濠と一部の基壇積土で存在をみとめられ、いずれも幅5～5.4mほどとみられる。東面は基壇本体ではなく空濠があるので推定されているわけである。

これで見ると、基壇外側（空濠内側）で東西約154m（天平尺520尺）、基壇内側で推定141.5m（480尺）、南北は外側間で99m（330尺強）、内側間で89m（300尺）と広大な範囲をめぐるものである。あまり広いので、調査途中ではあるいはこれは外郭大垣を兼ねるかと思え考へかけた。

金堂へのとりつきが東西中央より北につく類例は少なく、伯耆国分寺金堂に独立柱回廊かと思われるものが、ほぼこの位置についているのみである。

これが回廊か、築地塀か、については、塔西方のもっともよく残っているところでも礎石・根石の類が発見されなかったことから疑問が残っている。一応、北面で基壇全幅が地下地業され、幅が5m強と広いので回廊と推定している。建物は梁間10尺（3m）ほどの単廊となるであろう。

回廊内建物との関係を見ると、塔基壇との距離は北面では約32m、西面では30mほどと近似するが、南面に対しては39.5mと離れており、塔の南を特に広くとっている。

中門の部分は民家との関係で十分な調査ができておらず、明確でない。

回廊周囲の溝は内部の遺物からみて、建立当初ではなく、やや後れて掘られたか、と考えられる点があり、雨落溝としても大きすぎる。北方へも長く延びているので寺地内の何等かの区劃をしめすものであろう。底部にアゼのような掘り残しがあったり、堆積土に流水の形跡がない点、普通の堀とはちがう空濠だったらいい。あるいは西面大垣が早く崩壊し西方からの土砂流入を防ぐような目的でもあったのであろうか。

南回廊の一部と、北西部にはこの空濠を埋めて築成し直したところもある。

6) 南大門

寺域中軸附近を南北に走る里道の西方にのみ版築層が残存している。これを南西端とすると、この附近での中軸線から西へ約5mほどに西端があるので、中軸から単純に折りかえすと約10m（33～34尺）ほどの基壇東西幅となる。正面33尺の基壇なら、建物も10尺×3間ほどの小ぶりな南大門となるが、これも仮定を重ねているので正確とはいえない。あるいは規模のもう少し大きいものであった可能性もあろう。

この両脇の大垣については旧地表面まで削られて痕跡が失われており知り難い。今後の課題の一つである。

7) 西北建物

回廊西北角より約20m北方に西空濠を埋めて版築されたところがあり、若干の根石らしいものも検出したが全容はわからない。位置からみると経蔵や鐘楼のようなものかも知れないが全形を

検出したわけでもないし、東の対称の地点の状況も知られないので断定できない。

5. 今後の問題

残された問題には国分寺の遺跡・遺物についてと、今後の保存方針についての双方がある。ここでは調査上の残された疑問点について述べよう。

- 1) 南門の規模 民家等に重なって調査できなかったところが多く、南北幅も不明である。
- 2) 南辺大垣の状況 旧表土が削られて痕跡が失われたとみられるが、全長のなかでは何らかの資料を残すところがないかどうか。
- 3) 中門の規模 南大門以上に不明の点が多い。
- 4) 回廊内東方建物の残部調査 比較的に地形の高く残っているとみられる南部が民家敷地で調査されていない。ここを調査すればもう少し資料が得られる可能性がある。
- 5) 寺域全体の西限確認 今回調査では伽藍地西限は確認できたが、さらに附属地まで含めた寺地の西限を知る必要がある。
- 6) 北限の問題 西空濠の北端より東がどうなっているのか疑問が残っている。
- 7) 僧房・小子房等の所在、規模、形式
- 8) 経蔵・鐘樓の位置、形式
- 9) その他の附属諸施設 これらにはかなり広い面積を丁寧に調査しないと検出できないものも多い。しかしながら保存方策、史跡公園の遺構標示の問題ともからんで解決の必要があるものである。
- 10) 国分尼寺との位置関係

6. おわりに

以上のように細部に疑問は残るにしても三ヵ年にわたる調査は九州でも最大規模の国分寺の実態をよく明らかにできた。

最近数年、九州全域で国分寺関係の調査件数が多く、残されているのは日向・大隅・肥後のみで、他はすべて発掘されている。

これらを通してみて、気がつくのは

1. 配置の類似性で、いずれも金堂と塔が近接し、塔が回廊内にあったとみられること。
 2. 塔の位置は大宰府からみて東方の国では塔を西に、西方の国では塔を東におくようにみえる。これは前記の未確認三國と筑後の塔が確認できないと断定できないが、現在までの資料はそのようである。
 3. 大宰府、鴻臚館系の瓦の分布がどこまでの範囲におよぶか。九州全域が同一系統の文様で統一されているのではないらしい。
- など全体像としての問題をもっていることである。これは資料にまだ充分でない点が多いが計

面と造営にあたっての大宰府の指導性との関連があらうと予測されるものである。特に九州という地域としての特別な問題としてとりあげられる必要があらう。

1. 発掘調査による瓦当資料
2. 瓦当の組合せと編年
3. その他の瓦当資料

豊後国分寺跡の5次にわたる発掘調査で出土した古瓦はかなりの量にのぼっているが、そのなかで軒丸瓦・軒平瓦に表現された瓦当文様は時代判定をする上に最も重要な資料であり、それによって建立の時期、廃滅の時期を知る手がかりが得られるのである。本稿は発掘資料の整理によって類別された瓦当文の文様構成や変遷、系譜などの問題について検討を加えることを意図したものである。まず発掘調査によって発見された軒丸瓦・軒平瓦からはじめて、国分寺現蔵古瓦のうち発掘資料にみあたらない資料を取りあげてゆくこととする。

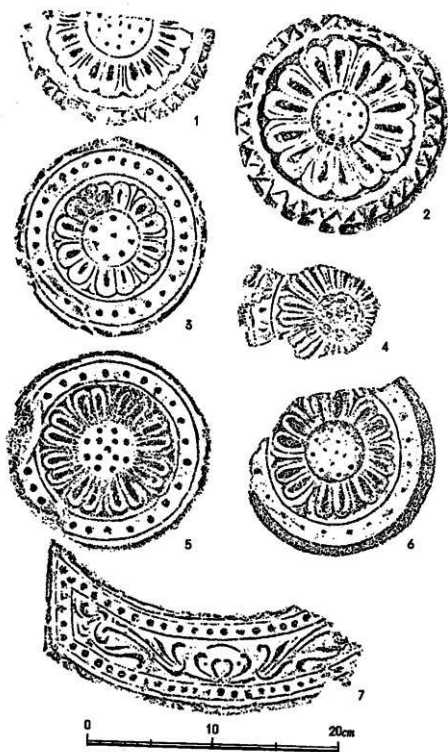
1. 発掘調査による瓦当資料

軒丸瓦 発掘調査によって出土した軒丸瓦の瓦当文様は六類に大別できる。

第1類 複弁10葉蓮花文 瓦当径16㍥

一般に複弁8葉蓮花文が多いが、本例は10葉である。したがって8葉の場合よりも複弁の1単位が占める幅がせまくなり、狭長な傾向がみられることはやむをえない。また奈良朝盛期の複弁蓮花文瓦当では瓦当半径が中房、蓮弁帯、珠文帯+周縁の占める割合がほぼ3等分割される場合が多いが、本例では蓮弁帯の占める割合がかなり大きくなっていることも蓮弁の狭長性を著しく助長している原因であろう。中房は低い円板で1-8の蓮子配列を示し、蓮弁の肉盛りも乏しく中房とほぼ同位にある。その外に隆起圓線を画して29個の珠文帯と案文帯をめぐらした周縁がつくられている。

元来、複弁8葉構成であり、中房蓮子も1-4-8のような中心蓮子をめぐる二重配置をとることが多いが、本例では10葉構成で、中房蓮子も1-8の一重配置である点に特色がある。豊後国分寺の創建に使用されたと考えられる本資料とほぼ同時期の資料に宇佐市弥勒神宮寺⁽¹⁾、大分市永興寺⁽²⁾などの例がある。まず弥勒神宮寺では複弁6葉(一類・第114図3)、複弁10葉(二類・第114図4)、複弁8葉(三類・第114図5)、複弁7葉(五類・第114図6)などの瓦当があり、二、三、五類は中房蓮子が1-4-8の配置をとり、一類では1-7の配置をとる。またこのうち一、二、三類は中房が蓮弁帯より低く最下位にあるが、五類は低い円板をなしている。二、三類は8葉(三類)から10葉(二類)への推移が考えやすく、大宰府鴻臚館系瓦当文に原型をたどることができる。これに対して一類と五類はそれぞれ宇佐市虚空蔵寺創建時の銅鍮文様複弁8葉(第114図1)と7葉(第114図2)の瓦当文に系譜をさかのぼることができる。おそらくこの畿内系瓦当文の簡略化に基礎をすえながら、大宰府

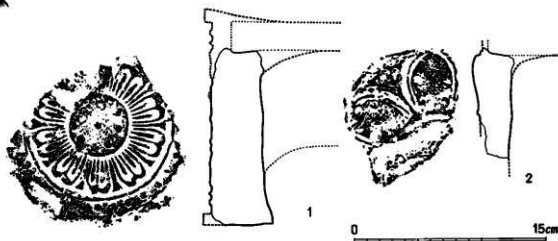


第114圖 宇佐地方出土古瓦參考資料(1/4大)

鴻臚館系瓦当文の影響を導入していると考えられる。

本資料との対比では中房や瓦当面全体の形態は五類にちかく、蓮弁の特徴では二類に近似する。したがってこれらの弥勒神宮寺資料と対比してみると8世紀後半には豊前・豊後地域の瓦当文の上に中房蓮子数の減少、蓮弁数の増加、瓦当文様全体の平板化などの傾向が現われていることがうかがわれるのである。

つぎに永興寺は中世の「豊後国図田帳」に寺名がみえ、豊後国分寺の東北4軒ほどのところにあたることから豊後国分尼寺に擬する説もあった。現蔵されている古瓦のなかに復弁10葉蓮花文軒丸瓦がある。中房は低い円板をなし蓮子は1—8の配置をとり、細部にわたって点検してみてもまさに豊後国分寺Ⅰ類軒丸瓦と同范品であると判定される。



第115図 大分市永興寺出土軒丸瓦

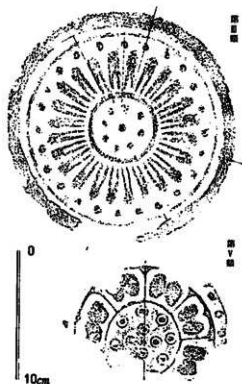
第Ⅱ類 変形復弁10葉蓮花文 瓦当径14~16㍥

第Ⅰ類瓦当文からさらに脱化変形したものである。中房最も低く、隆起圓縁で1—8配置の蓮子を囲んでいる。復弁単位の蓮弁は一段と狭長になり、分割されて単弁2個を併列したものに変形し、弁間の楔形小葉も楔形表現が消えて単純化される。ただし詳細にみると1葉だけ分割されないままの復弁文があり、またスペースがなくなったため分割された単弁のままの状態があるので、正確には復弁10葉と単弁1葉で構成されている。また外区との境界をなしていた圓縁が省略され、蓮弁帯をめぐる珠文は36個に増加しているの で珠文間の間隔も一層密になっている。周縁の一段高い平縁は第Ⅰ類に倍する幅広さである。この第Ⅱ類瓦当は豊後国分寺の出土瓦当のなかで最も多く、同伴関係からみても国分寺創建の8世紀後半代に比定できるが、九州の国分寺瓦当文でも独特の地位を占めるものである。前述したように、宇佐弥勒神宮寺の復弁10葉瓦当文(第114図4)から本遺跡の第Ⅰ類瓦当文を経て当地方で形成された瓦当文であろう。

第Ⅲ類 単弁24葉蓮花文

瓦当径18 $\frac{1}{2}$ "

瓦当径が大きくなり、弁間の小葉を省略して狭長な単弁を等間放射状に配置する。中房は第Ⅱ類を踏襲して拡大している。また珠文帯と周縁帯の間に隆起圈線を加えており、第Ⅱ類瓦当文の周縁より幅せまくして生ずる外区のスペースの広さをカバーする意図が察せられる。中房蓮子の1-8配置、単弁24葉、珠文24個という構成には第Ⅰ、Ⅱ類にみられなかった三者を結ぶ瓦当文の計画的図割りが見られる。すなわち中心蓮子を瓦当面の中心点



第116図 豊後国分寺跡出土土軒丸瓦第Ⅲ・Ⅴ類瓦当文の図割り

として4本の対称軸をもった瓦当文配置がみられるのである。この対称軸の上に8個の蓮子と8個の珠文が載せられる。かくして円形の瓦当面は8分割されるが、その1単位内に3個の単弁と2個の珠文が配当される。珠文は各単弁の間におかれる。このようにきわめて幾何学的な図割り方法によって機械的に設計された瓦当文で、第Ⅱ類からさらにすすめて発案されたものである。また瓦当径の拡大とともにこれまで第Ⅰ・Ⅱ類にみられた瓦当断面の使用時における下方断面を厚くするところから均一にする方向へという変化がみられるが、奈良時代から平安時代への推移を示す特徴であることも見のがせないであろう。

第Ⅳ類 単弁42葉蓮花文 瓦当径 a 19 $\frac{1}{2}$ "、b 18 $\frac{1}{2}$ "

第Ⅲ類を継承しながらさらに変形をとげたものである。中房を画する隆起圈線と単弁の密着を強調したために中房が蓮弁帯より一段低くなる結果となり、蓮弁相互を完全に密着させてしまったので、第Ⅲ類に倍する弁数となり、蓮弁というよりも菊花弁という方が適当な状態となった。これをめぐる珠文数は29個でやはり第Ⅲ類より増加している。本類に珠文の外側に隆起圈線をめぐるもの(a類)と、これを省略したもの(b類)がある。前者が第Ⅲ類にちかい類であることは論を持たないであろう。また中房内蓮子のうち中心蓮子をとくに大きくつくることも本類の特徴である。

第V類 複式素弁8葉蓮花文 瓦当径17.5² (復原)

いわゆる複弁8葉文であるが、普通にみる子弁をとまなう複弁と異なり卵形の素弁2個を並列して構成される複弁である。中房、蓮弁、珠文など同一面につくられ、各境界は隆起圓線で区別され、蓮弁帯も放射状隆起線で8区に区切られ、各区に複式素弁が配されている。中房は大きく、0-4-8の配置をとる蓮子があり、各蓮子は重層蓮子となっている。外区は珠文と平縁で構成されるが完形品がないので珠文数は不明である。瓦当文の構成にあたっては一定の図割りが行われている(第116図参照)。すなわち異なった2種4本の対称軸によって8等分され、蓮弁帯の界線はこの対称軸上に載っている。そして各区に複式素弁1単位を配する。2種の対称軸のうち、まず1種は瓦当面上を十字に直交する2本の軸で、蓮子の内側4個と外側4個がこの2弁の軸上に載る。もう1種はこれと45度ふれて直交する2本の軸で、内側蓮子の中間をとおり、外側蓮子のうちの残り4個がこの軸上に載る。珠文の配列がこの2種4本の対称軸とどのように関係するのかが現存する破片資料からは知ることができない。本類瓦当文は相互に関連する第I~VI類瓦当文とはまったく異質のものであり、瓦当径も小さく、新しい瓦当文が外から導入されたことを示している。

第VI類 単弁?葉蓮花文 瓦当径16.5² (復原)

瓦当面の1/4、足らずの破片であるから不明な点が多い。平板な中房の輪郭を隆起圓線で画し、蓮弁は中央の凹んだ桃割れ状素弁である。周縁は隆起圓線で画してその外側にまばらな珠文帯を配し、やや高くした平縁をめぐらしている。小破片であるために詳細を知りえないのは遺憾である。

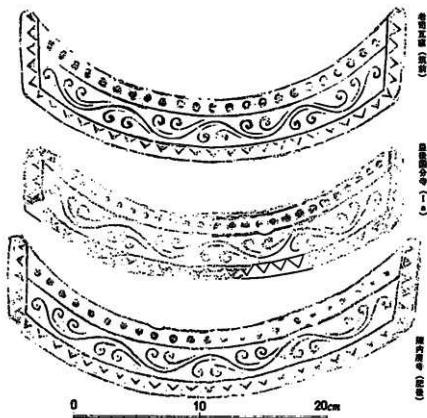
軒平瓦 発掘調査によって出土した軒平瓦の瓦当文様は2類に大別できる。

第I類 扇行唐草文 瓦当長a 29.5²、b 33²、c 29²

大宰府老司系瓦当文に属するものである。3種に細別されるが、先ず最も原型にちかいa類について検討しよう。瓦当面に主軸となる波状線をすえ、両端は巻きこんだ唐草の頭部を表わす。七つの波状部分にはそれぞれ頭部を巻きこんだ2個の唐草を配して尾を右に流す扇行唐草文である。ただし右端のみは右に頭、左に尾を流す。隆起線で画された周縁には上縁珠文、左右と下縁に外行陽起鋸齒文をめぐらしたいわゆる天星地水縁を形成する。このような文様構成をもつ老司式瓦当文と豊後国分寺例とを対比してみると、雄健な唐草文のひきしまった波状表現といい、天星地水文の表現といい標識とする老司瓦窯の瓦当文(老司1式)とさして遜色ない作風である。いま両者の拓影を重ねあわせてみると瓦当長と扇行唐草文がほぼ一致するほどの近似性を示しているにもかかわらず、珠文、鋸齒文において相違が目立つのである。すなわち老司1式では珠文23、鋸齒文左右各々5、下23であるのに対して、本遺跡では珠文27、鋸齒文左右各々4、下23である。また唐草文においては頭部の巻きこみ具合とその先端をやや太くするなどの点では一致するが、尾部の流し方が本遺跡のものではやや短かくおさめていることに気づくであろう。いずれにせ

よその相違はきわめて小さなものであるから、豊後国分寺の創設に際して大宰府から老司Ⅰ式瓦当を導入し、かなり忠実に模写しとったものであったことがうかがわれるのである。

さらに老司Ⅰ式瓦当文を導入した肥後の陳内鹿寺⁽⁵⁾(下益城郡城南町)の場合を検討してみよう。この遺跡で最も古い瓦当文は老司系軒先瓦であるが、いま当面の問題である軒平瓦についてみると、瓦当長は老司瓦窯のものにくらべてやや長い。周縁文様は上縁珠文23左右縁鋸齒文各々5、下縁鋸齒文23と老司Ⅰ式瓦当文と一致する。結局扁行唐草文の波長をやや長くすることによって瓦当長の相違が生じているものである。老司瓦窯の瓦当文拓影と重ねてみると、唐草文が7単位で構成されていることは同じであるが、左端より一、二番目の単位唐草はほぼ一致し、三番目から次第に波長が長くなり、唐草文の頭部も右側にずれてゆき、右行するにつれて徐々にそのずれは大きくなってゆくのである。また唐草文頭部の巻きこみが細身のままに終始している点も老司瓦窯や豊後国分寺の資料と相違するところである。しかしこれもまた老司Ⅰ式瓦当文との差はきわめて小さなものであるから、肥後地方においても老司Ⅰ式瓦当文を導入しながら当地方での若干の相違が生じたものであると解釈される。かくして老司Ⅰ式瓦当文を原型としながら豊後地方と肥後地方に受容した際に若干の地域的変容があったことを認識させられるのである。そうして老司系瓦



第117図 老司系軒平瓦扁行唐草文対照拓影

当文が肥後に導入されたのは8世紀前半代にさかのぼり、豊後に導入されたのは豊後国分寺創立の時点であるから8世紀頃であろうと推察できる。

つぎにb類瓦当文はa類から変形したもので、瓦当長や扁行唐草文の流麗にして適度の緊張度たどる表現にはa類とさして相違はないが、このほかに豊後独自の目立った変化があらわれてくる。先ず周縁帯では上縁の珠文帯が省略され、左右と下縁の鋸歯文が外行から内行に変わり、鋸歯文相互が密着せず、あたかも櫛の歯が交互に抜けたような状態となる。この類瓦当の完形品は出土しておらないので正確な鋸歯文の数は実証できないが、真野の復原図によれば左右各々3、下縁22となる。また唐草文はa類と同じ7単位構成であるが、左端より数えて4単位目、すなわち中央唐草より右側の7単位目まですべて頭部を右に、尾部を左に流す左行唐草となっている。a類では右端をのぞいてすべて右行唐草であったので、中央唐草より右は左行、それより左は右行となって厳密な意味での統一された扁行唐草文でないことがこの類の顕著な特徴である。しかも右端の唐草文の下に同方向の唐草文1個を新たに加えている。このような中心唐草の左右で扁行方向を変えて一見均正唐草文的に仕上げる方法は、熊本県平原窯跡の軒平瓦にもみられるので、奈良時代後半期に豊後、肥後両地域で現われた共通現象であることが知られる。このような瓦当文の出現はこの時期に流行しはじめた均正唐草文の影響下に対応したものであろうと考えられる。

つぎにc類瓦当文は完形品があるので全形が容易に知られる。瓦当長が小さくなり、唐草文も肉太くやや硬化している。周縁は上縁珠文21、左右縁内行鋸歯文各3、下縁内行鋸歯文21となるが、下縁は製作仕上げの段階で彫削りしている場合が多いので鋸歯文帯が消されてわずかに頂部がみえる程度となる。鋸歯文は相互に密着している。唐草文はb類の左端1単位を省略した6単位構成で、b類右端の唐草文の下に加えられていた1個の唐草は珠線状に表現されている。このような細部観察によってc類瓦当文がa類とb類の両者に共通する要素を備えていることが知られる。



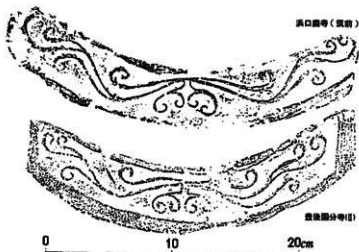
第118図 豊後国分寺跡出土軒平瓦第1—b・c類瓦当文復原図

以上述べてきたことによって、a、b、c 三類の瓦当文は先ず a 類を最古様式におくことは上述した検討結果から異論ないであろう。b 類と c 類については唐草文帯は b 類→c 類の変遷を考えるのが妥当であるが、周縁帯の殊文、鋸歯文に関しては c 類の方が b 類に先行すると考えられる公算が大きいに思われる。結局 b・c 両類はともに a 類よりおくれてあらわれるが、両者ほとんど並行してあり、相互影響を及ぼしあうような近接した関係にあったと考えられる。

第Ⅱ類 均正唐草文 瓦当長 25cm

瓦当面の中心に 2 個の下向きパルメットを並行し、その上方から左右に派生する唐草文を配した均正唐草文の様式に属する。2 個のパルメットは上方の唐草文の分岐点からそれぞれ L 字形に屈曲する蔓草で連結されている。左右に派生する唐草は一段目は頭部を上方内側に巻きこみ、二段目は第一枝を下方に延ばして頭部を下方内側に巻きこみ、さらに中途より第二枝を上方に派生させ、その中途からさらに第三枝を上方内側に派生させていずれも頭部を上方内側に巻きこんでいる。周縁は瓦当面よりやや高く素文である。ところで以上の瓦当文様をさらに細かく観察してみると、二段目唐草の第二枝頭部は右側の方が対応する左側のものに比べてやや大きい。また左側唐草の一段目と二段目の間を広くあけて柳葉状の葉文 1 枚を加えているが、それに対応する右側にはそれがいないなどの差違が指摘できて厳密な意味での左右均正文様でない。

本類と最もちかい瓦当資料を出土する遺跡として筑前の北浦廃寺⁽⁶⁾（福岡県北九州市八幡西区永大丸）、浜口廃寺（福岡県遠賀郡芦屋町浜口）の 2 遺跡があげられる。この両遺跡から発見された瓦当文は同范である。浜口、北浦の筑前発見資料についてみると瓦当長自体も豊後国分寺例より長いが、唐草文の波長も長い。また左側唐草文の間に子葉を加えるようなこともなく、より均正さを保っているが、左側の二段目第二枝頭部を右側に対比して大きく旋回させる点で均正をくずしている。さらに中心に並列する 2 個のパルメットは内



第119図 浜口廃寺・豊後国分寺（第Ⅱ類）軒平瓦均正唐草文対照拓影

傾して相対しており、唐草文と連結する蔓草はゆるいカーブを描いている。筑前例と豊後例における以上のような差違のほかには豊後ではやや文様に硬化がみられる点で、筑前例の方を古く位置づけることができよう。本類瓦当は文様、瓦当断面などから平安時代前半期に位置づけられる。

2. 瓦当の組合せと編年

上述したように発掘調査によって知られた瓦当の種類は軒丸瓦6類、軒平瓦2類に大別できた。そのうち軒平瓦第Ⅰ類はさらに3種に細別された。そこでこれらの瓦当が遺構別にどのような出土状況を示しているかという観点から整理すると右表のようになる（真野作成）。

	軒 丸 瓦						軒 平 瓦		
	I	II	III	IV	V	VI	a	b	c
金 堂 跡	○								
講 堂 跡	○			○			○		○
塔 跡	○	○	○				○	○	○
回 廊 跡								○	○
回廊付属溝	○	○	○				○	○	
回廊以北の溝		○		○				○	
瓦 溜	○	○	○	○			○	○	○

これらの瓦当は奈良時代後半期のものと、平安時代に下るものに大別される。前者には軒丸瓦第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類と軒平瓦第Ⅰ類（a・b・c）があり、後者には軒丸瓦第Ⅴ・Ⅵ類と軒平瓦第Ⅱ類がある。また各種瓦当のなかで最も多いのは軒丸瓦第Ⅱ類と軒平瓦第Ⅰ-c類であって、塔跡・金堂跡などの出土状態からしてもこの両者がセットになることはまず疑いないところである。また最古式におかれる軒丸瓦第Ⅰ類と軒平瓦第Ⅰ-a類が組みあうことも首肯されることである。一方、さらに軒丸瓦では第Ⅰ類→第Ⅱ類→第Ⅲ類→第Ⅳ類とほとんど一系の変化をとげてゆき、軒平瓦は第Ⅰ類のなかでa類→b類→c類とやはり一系の変化をとげていることを述べた。遺跡における出土状態で見ると塔跡、回廊付属溝などで軒丸瓦第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類、軒平瓦第Ⅰ-a・b・c類が伴出している点が注意されるのであるが、また軒丸瓦第Ⅰ類が瓦溜から2例出土したにすぎないことから、これが量的に少ないものであろうと予察できる。したがって以上のことを参考にして次のようなセット関係と編年序列が考えられる。

	軒丸瓦	軒平瓦
第一段階	Ⅰ・Ⅱ	Ⅰ-a、Ⅰ-b
第二段階	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	Ⅰ-c
第三段階	Ⅴ・Ⅵ	Ⅱ

第一段階は上限を豊後国分寺創建年時にさかのぼり、第二段階における下限は今回の発掘資料に拠るかぎり、軒平瓦第Ⅰ-c類が8世紀代にのぼせうる最新様式であって、軒丸瓦第Ⅳ類は補修用かとも思われるが、その下限は8世紀をこえて9世紀代にまで及んでいる場合が考えられる。また、第三段階はその組みあわせから10世紀代に比定するのが穏当であろうと思われる。そうしてこの段階をもって古代の国分寺遺構は終了しているのである。したがって廃滅時期は10世紀のうちか、あるいは11世紀代にまで及んでいるかのいずれかであるが、11世紀代よりさらに下降す

ることはあるまいと予測される。

国分寺建立の発端が天平13年(741)3月24日の詔前後にあることは一般に認められているが、『続日本紀』天平勝宝8年(756)12月20日の条に26国の国名をあげ国別に仏具を頒下した記事がみえ、九州では筑後、肥前、肥後、豊前、豊後、日向の6国国分寺の存在が知られる。筆者は天平年間の大宰府内部の政治事情から、最も早く成立したと思われる筑前観世音寺の成立よりさかのぼらないであろうことを述べたことがある。豊後国分寺の上限もそれよりはさかのぼらないであろうと考えている。一方、『豊後国風土記』大分郡の項に、

寺二所 僧寺

とあって、僧寺と尼寺の注記があるところからみて、これが国分僧寺と国分尼寺であろうという考え方が大勢のようである。風土記の成立年時については諸説あって一定しないが、肥前国や豊後国の風土記には『日本書紀』の用字や記述の影響が認められるので、いわゆる『和銅風土記』よりも新しい成立であるという指摘があり、また郷里制が廃されて郡郷里制にかわる天平11年(739)末までの成立であるとされる。また一方ではこの記事によって『豊後国風土記』の成立年時を国分寺建立の詔が出された天平13年以降にみようとする説や、この記事を後人の加入とみる説などあって、現在のところ豊後国分寺の成立年時を知る拠所とするには不十分である。やはり天平勝宝8年ごろまでに主要堂塔が成立していたと考えるのが妥当であろう。

以上のように考えてみると塔跡や回廊跡関係の遺構に顕著にみられる軒丸瓦第Ⅱ類と軒平瓦第Ⅰ-b、c類との組みあわせは天平勝宝8年前後までのばせなければならない。さらに軒平瓦第Ⅰ-c類と軒丸瓦第Ⅲ類の段階が後続し、軒丸瓦第Ⅳ類を補修瓦とみるならば、上述した第二段階は9世紀代にまで及ぶような年代幅を考えておくべきであろう。またこれに先行する第一段階の組みあわせは天平年代にまでのばせうであろうが、第二段階の上限と接触し、あるいは重複していたのが使用の実情であったかと思われる。

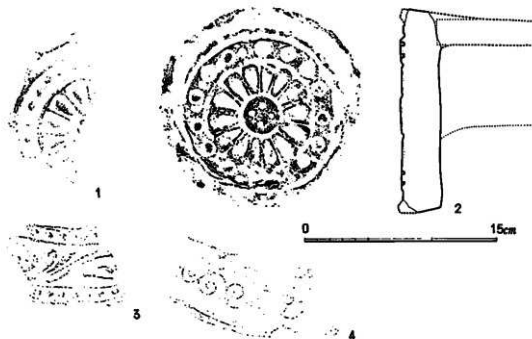
3. その他の瓦当資料

今回の調査にさきだって古くから現国分寺に所蔵されている境内出土の古瓦と伝えられている資料がある。それらはすでに鏡山猛氏によって紹介されている⁽⁹⁾。筆者も1960年10月に国分寺で手拓したので、それからの資料とすでに散逸したものは鏡山氏報文を参照して検討してみると、今回の発掘調査によっても発見されなかった資料が含まれている。以下それらについてふれておく。

1は国分尼寺跡かと伝えられる現国分寺の薬師堂の西1町ばかりのところで発見されたものである。同類瓦当が国分寺境内からも発見されていて、鏡山氏報文には「丸瓦第三」として紹介されている。これによると単弁14葉で中房は小さい。本来複弁7葉であつたらしい形跡があり、宇佐虚空蔵寺跡の複弁7葉蓮花文軒丸瓦(第114図2参照)を祖型とする変化型であろう。9世紀代に比定されよう。

2は通常の単弁軒丸瓦とは陰陽を逆にした珍らしい軒丸瓦である。おそらくこの種の陽起文軒丸瓦

の瓦当面を原型にした雌型瓦当で、珠文はあとで竹管を押捺したものである。この原型となった瓦当分は単弁14葉で、1からさらに脱化したものである。10世紀以降であろう。



第120図 豊後国分寺現蔵瓦当資料

3は法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦の中心飾の右半分とそれにつづく唐草文の一部がのこされている。

宇佐弥勒神宮寺跡に出土例があり、筆者の分類の第四式にあたる^四(第114図7参照)。弥勒神宮寺の創建当初に使用されたもので天平10年をさかのぼらないと考えられているので、豊後国分寺では第一段階にあててよいであろう。現在散逸してしまい、また発掘資料にもみあたらないので惜しまれる。

4は鏡山報文当時にはなかったものであるから、その後の蒐集品であろう。子葉を伴う渦巻状唐草を交互に反転しながら連続させてゆき、上縁と側縁にそって珠文を配している。唐草文の手法、瓦当面の形成から9世紀代よりさかのぼらない軒平瓦であろう。したがって発掘資料の軒丸瓦第Ⅳ類に対応するものとなろう。しかしながら発掘資料のなかに本資料がみあたらないところに実際にセットをなしていたかどうかの疑問がのこるので、前項では軒平瓦第Ⅰ-C類の使用期間中の補修瓦を想定しておいたのである。将来、本資料が軒丸瓦第Ⅳ類と同一遺構で共存することが確認されれば、両者セットを組んで第二段階から除外して後続させてよいと考える。

ところで、豊後国分尼寺跡として大分市永興寺と、現国分寺西方地域の二候補地があることは

すでに述べたが、前者では国分寺跡発掘資料の複弁10葉蓮花文軒丸瓦（第Ⅰ類）が、また後者では現国分寺蔵の単弁14葉蓮花文軒丸瓦が知られていて、それぞれ国分寺跡出土瓦当と共通する瓦当を出土している点が注目されるのである。したがって国分寺跡の比定問題はいまなおいずれとも断定しかねる状態であって、今後の考古学的調査に待たねばならないであろう。

(1979・3・25 稿了)

- 註 (1) 小田富士雄「宇佐・弥勒神宮寺」(『九州考古学研究・歴史時代篇』103頁以下) 1977
- (2) 河野清實「大分県内の古瓦」(大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第13輯) 1936
小田富士雄「百済系単系単弁軒丸瓦考・その1」(前掲書386頁)
- (3) 小田富士雄「大宰府系古瓦の展開」(前掲書)
- (4) 小田富士雄・真野和夫ほか「法鏡寺跡・虚空蔵寺跡」(大分県文化財調査報告第26輯) 1973
- (5) 松本雅明編「城南町史」1965
- (6) 小田富士雄「北浦庵寺」(北九州市文化財調査報告書第12集) 1973
- (7) 小田富士雄「国分寺の成立」(前掲書32頁以下)
- (8) 上田正昭「風土記の世界」(『風土記』) 1975
- (9) 鏡山猛「豊後国分寺」(『国分寺の研究』下巻) 1938
- 00 小田富士雄「法隆寺系字瓦の展開」(前掲書)

第四章 豊後国分寺の沿革および関係資料

一、豊後国分寺の沿革

はじめに

一、創建と衰退

二、中世の再興と天台化

三、近世の再興

は じ め に

豊後国分寺は、奈良時代の創建から千二百余年を経て今なお、国分寺（金光明寺）の名でその法灯を守りつづけている。もとより、律令国家の命運を担った国家仏教の殿堂としての本来の姿は、平安時代中頃には失われ、中世以後は天台系の寺院として存続してきたのだが、しかしこの間も、聖武天皇の勅願による国分寺（金光明護国寺）としての歴史は忘れられることがなかった。残されたのは名ばかりの形骸ではあるまい。ここにも、「国分寺」が辿った歴史の一典型があるように思われる。以下創建から近世に及んでその沿革を通観しつつ、二、三の問題について考えてみたい。（本文中、文末の史料①等の注は本稿末尾の史料の番号を示す）

一、創建と衰退

国分寺・国分尼寺の建立の直接の契機は、いうまでもなく天平十三年二月一四日の詔（「類聚三代格」、「政事要略」等）にあるが、勿論この年に諸国国分寺がいつせいに建立されたわけではない。また国分寺の建立を、律令政府の国策による官寺建立―国家仏教政策の推進という視点よりみれば、少くとも天武十四年（六八五）の詔以来の前史をもっていることも周知のとおりである。^①諸国国分寺は、こうした背景の中

で建立されたものであり、その建立の時については、国毎に論及されねばならない。

豊後国分寺の建立については、天平勝宝八年の詔を下らぬとすることがかねてから指摘されている。

即ちこの年の八月、豊後国分寺をふくむ二六カ国国分寺に仏具等の下賜が行なわれた。灌頂幡などの仏具・荘嚴具は、これらの国分寺で、聖武天皇の周忌御斎の装飾にあてられた。史料(1)

この「続日本紀」の記事と共に、豊後国分寺・国分尼寺の建立の手がかりとされるのは「豊後風土記」の総記、大分郡の条にみえる「寺二所、僧寺、尼寺」の記事である。従来これを国分寺・国分尼寺にあてるとの説が大勢であるが、小田富士雄氏も指摘されるように、この記事を国分寺・国分尼寺にあてた場合、「豊後風土記」の成立が天平十一年以前であるとする説が有力であるという事情もあつて、あるいは後世の追記とする説、あるいは風土記の成立時期の異論を引きだすこととなり、豊後国分寺建立の手がかりにはしがたい要素をもっている。

とはいえ、これが豊後国分寺建立にかかわる数少ない史料であるにちがいないので、これについて今少し考察を加えておきたい。

上述のように「豊後風土記」の成立期については、郷里制の考察等から天平十一年を下らないとされている。さらにいえばその撰述にあつて藤原字合が関与しており、彼が西海道節度使として大宰府に赴任した天平四年よりの大宰帥の任を終えて帰京するまでの数年間に、この風土記の撰述が行なわれたとする説が有力である。^③

いずれにせよ、「豊後風土記」の撰述が、天平十三年の国分寺建立の詔発布以前になされたものであるとすれば「寺二所、僧寺、尼寺」の記事は天平十三年以前の大分郡の事情を記したとするのが自然である。

この点、特に参考になるのは「肥前風土記」の寺に関する記事である。ここでは総記の条に寺二所（僧寺）とあり、神埼郡、佐嘉郡の条にそれぞれ寺一所とある。この記事について、佐嘉郡の寺一所は一応は、佐賀県の大和町（旧佐賀郡）にある肥前国分寺にあてられる可能性も残る。しかし、同郡にあつたはずの国分尼寺の記載はなく、一方、神埼郡の寺一所は明らかに国分寺ではない。さらに両郡下には、奈良時代の古瓦をもつ寺跡が別にある。即ち、神埼郡の辛上廃寺、佐嘉郡の大願寺廃寺がそれである。小田富士雄氏は「肥前風土記」の寺二所をこの両寺にあてている。かくて「肥前風土記」の寺二所の記事は、同国の国分寺・国分尼寺に全くふれず、両寺建立以前の寺をさしていると読むほかはない。「肥前風土記」は「豊後風土記」と内容等と同じくし、共に大宰府の強力な指導の下に、ほぼ時を同じくして撰述されたと思われるものである。^④この「肥前風土記」の「寺二所」と「豊後風土記」の「寺二所」をあわせよめば、これを後世の追記と読む必要もなく、両風土記の成立したころの、即ち天平四年から数年の間までの時期に豊後国に寺が二所あり、そのうち一所が尼寺であつたと読むのが正しいとい

えよう。この二所が肥前国では、明らかに国分寺・国分尼寺でないとすれば、豊後国においても同様であるとすべきだろう。

とすれば、この「豊後風土記」の寺二所はどこにあったのだろうか。今、その確実な候補地をあげるときではないが、大分郡下には国分寺跡の他に奈良時代の古瓦を出土する遺跡が少なくとも二カ所ある。

即ち大分市上野律院にある金剛宝戒寺周辺と、同じく大分市永興の永興寺周辺である。

金剛宝戒寺、永興寺とも大分地方を代表する古刹であり、共に奈良時代創建の伝承をもっている。古瓦の出土地は、地形的にも両寺の草創期の寺跡である可能性が十分考えられる。このうち金剛宝戒寺周辺出土の古瓦は、やや脱化した百濟系単弁瓦を主体とする。

一方永興寺周辺のそれは単弁軒丸瓦と、複弁十葉軒丸瓦である。^⑩（本書171頁115図参照）このうち永興寺の複弁十葉軒丸瓦は豊後国分寺の出土古瓦のうち軒丸瓦の最古の様式のものである。両遺跡の年代の比定にはなお資料不足は否めないが、国分寺創建の時を下らない寺院跡である可能性は十分考えられる。両遺跡の所在する大分市上野から永興につづく台地は、古墳時代から奈良時代にかけて、大分川流域を代表する在地首長の成長したところであり、眼下に国府推定地を見下す位置にある。この二つの遺跡のうち、永興寺については、「弘安國田帳」に国分寺と対記され、近世には尼寺であったとする所伝をもつ寺である。あえていえば、永興寺の遺跡が「尼寺一所」にあてられまいか。

「豊後風土記」の寺二所を右のとおり考えれば、「豊後風土記」の成立した天平十年前後には、右の二所の他大分郡に寺はなく、従って賀来国分の地には、国分寺は勿論、その前身となる寺もなかったということがいえることとなる。このことは、今日の発掘調査の結果とも矛盾しない。天平十三年から天平勝宝八年の間のある時に豊後国分寺の建立がはじまった。そのとき、永興寺の遺跡の寺で用いられていた複弁十葉軒丸瓦がもちこまれ、（国分寺軒丸瓦Ⅰ類）これをもとに複弁十葉軒丸瓦がつくられ、創建寺の主体の瓦となったと考えたい。

なお、永興寺の遺跡が、風土記のいう「尼寺」であった可能性をいい、同寺が後世国分寺と並記される寺であったことを考えると、同寺を、豊後国分尼寺にあてての意見は、あらためてとりあげねばならないだろう。

即ち、国分寺建立にあたって、尼寺は従来からあった永興寺の寺がであられ、特に新たに尼寺の建立はなかったということも一応考慮に入れねばならない。豊後国分尼寺の位置の確定に手がかりの乏しい現在、一考すべき仮説として提起しておきたい。

豊後国分寺が右のような経緯で建立されてのち、いかなる歴史をたどったかを示す直接的な資料はほとんどない。「延喜式」主税式によれば豊後国国分寺料二万束とある。（史料②）この数字は大隅、薩摩と並び、大宰府管内では筑前、肥前、肥後につづくものである。

「今昔物語」（豊後調律師從鎮西上洛第十五）には、豊後国分寺の僧と思われる調律師が任中に巨財を蓄え、これを舟で京に運び、重任の交渉

をした旨の記事がある。

いずれにせよ、豊後国分寺も、他の国分寺の多くと同じく、平安時代の中ごろに及んで律令国家の衰退と運命を共にし、国家仏教の殿堂としての偉容を失っていたとみられる。発掘調査の結果もこれを裏づけている。

二、中世の再興と天台化

「豊後国志」の所引の「豊府聞書」によれば鎌倉時代の仁治元年（一二四〇）大友大炊介親秀が堂舎を修築し、西大寺忍性比丘を請じて中興し、寺田を寄せたという。いわゆる忍性の中興として、「豊後国分寺」に関する近世以降の史料にしばしば散見するものである。

（史料0102030407）

しかし、この忍性とのかわりについては疑問がある。

和島芳男氏によれば、^⑧忍性は天福元年（一二三三）十七才のとき、東大寺で受戒、十九才の頃より生駒山竹林寺に毎月詣で仏門への帰依を深めた。出家したのは、「豊府聞書」等が忍性来豊のときとする仁治元年三月であり、具足戒をうけ、西大寺に住した。この間、かねてから悲願であった文殊圖像七幅の供養にうちこんだという。

かかる時に、九州に下向し、長期に及んで滞在し寺の中興にあたった気配は全くみえない。わずかに宝治二年（一二四八）春に至り九州に下ったが、八月には西大寺に帰っている。

こうしてみると、忍性による豊後国分寺再興は、やや史実に遠いと考えざるを得ない。

ただ大友親秀による加護は、その可能性なしとしない。「弘安園田録」には既述のように永興寺と併記されて国分寺料十町がみえる。（史料③）十町の寺料は、天平創建時の当初の寺料を引きつぐ面積にすぎないし、例えば薩摩国分寺の寺料百四町に比すべくもないが、豊後国内の在地の寺院では、最大級の寺料といえる。「国分寺」が官寺としての運命をたたえてすでに久しいこの時代に、なお十町の寺料を維持していた背景として大友氏の加護は一応考えられるのである。

このころ、鎌倉幕府は、再参にわたり、諸国国分寺の尊厳をうかがわせる動きを示していた。

文治二年（一一八五）頼朝はいちはやく、国分寺・国分尼寺の修造を志し、建久二年（一一九二）三月には、国司、領家の任において諸国国分寺の修造を計った。下つて寛喜三年（一二三一）四月十九日には、諸国国分寺で最勝王経転説の繪旨が幕府に届き、同年5月、関東御分國にこれを施行させた。^⑨

鎌倉時代初め、関東御分国の一つとして、とくに鎌倉幕府に近かった豊後において、この情勢が反映していたことも考えられる。^①

ただ、それにしても、その後、大友氏が国分寺に關して、公式の行事をとり行ったり、所領等の寄進をなした等の事実を示す史料はない。大友氏は、その後五代貞親に至つて、豊後国府に近い岩屋寺を再興して円寿寺^②を建て、大友家の菩提寺とし、ついで徳治元年（一三〇六）年には、臨濟宗の巨利万寿寺^③を建てた。これ以後、大友氏は専ら禪宗に關心を寄せ、東厳寺（大分市鶴崎）、長興寺（同戸次）、竜祥寺（挾間町向之原）などあいついで禪寺の建立を行つてゐる。^④

したがつて国分寺にたいする大友氏の加護は一時的なものにすぎず、この間、堂塔の修築等が行なわれたとしても、ごく小規模のものに止まつたであらう。今日の発掘調査の結果をみても中世の建物等の顯著な遺構は発見されていない。

その後の豊後国分寺については、「昨原八幡宮文書」にわずかに消息を伝えている。

正慶元年（一三三二）一月二日の、「由原宮年中行事次第」によれば、由原宮の放生会にあたり国分寺が講読師を出しているほか、菩薩舞・胸形・駒大等の諸役を負担している。（史料④）

また嘉慶二年（一三三八）三月の「加来社御行幸儀式次第」によれば賀来社（由原社）の八月の御行幸の儀式にあたり、国分寺僧が仏供養の講師をつとめている。（史料⑤）

由原社（昨原八幡宮）は、国分寺の北約五キロ、大分市八幡の地にある神社である。社の縁起では、天長七年（八三〇）叡山の高龜和尚が宇佐八幡より勧請したとされる。この創基縁起には疑問もあるが、いづれにせよ、この社は、豊後国衙となえず交渉をもち、国司の尊榮を得て、豊後一ノ宮として成長した神社である。社の構造は宮と天台系の神宮寺が混然一体となつたもので、とくに神仏習合色の強い神社として知られてゐる。^⑤

この由原社と国分寺のかかわりは、由原社が国府の尊榮あつた神社であつたこと、国分寺の所在する賀来の地が、賀来荘として早くから由原宮領となつてゐたことによると思われる。^⑥

永祿一〇年（一五六七）正月の「賀来社由原山諸院坊末寺書上」には社の末寺として、金蔵院ほか十四坊があげられているが（史料⑥）これについて置仙寺本明院と共に、国分寺玉蔵坊の名がみえる。玉蔵坊は由原社末寺十四坊と同一法流に属しており、おそらく事実上は国分寺も由原社の末寺化してゐたものであらう。とすれば、さきにみた御行幸、放生会等における一三世紀前半の国分寺の働きも、同寺がこの時点ですでに由原社の末寺化してゐたことを物語つてゐるかも知れない。国分寺の天台宗への転化は、いづれにせよこの由原社とのかかわりの中で進

んだものであろう。

「豊後史蹟考」所引の「寺記」によれば、国分寺はその後天正年中、大友宗麟と島津氏の戦いにあたり兵火にあい焼亡したという。この兵火にさいし、尊像はじめ勲額、経論を山中に隠し焼失をまぬがれたという。

このとき玉蔵坊円海が村民の協力を得て茅舎を建て、諸仏をおさめたとしている。

円海については、境内に元和四年銘の石塔がある。(史料⑧)

この天正の頃の焼亡の所伝に一応の信憑性があるにもかかわらず、発掘調査の結果にその痕跡をあらわしていないこと、境内に中世の塔婆の少ないことをあわせ考えると、この頃の国分寺は草堂に近い建物を残す程度に荒廃していたと考えられる。

かくて中世の豊後国分寺は、国分寺の名を残しながら、大友氏、あるいは、国府の尊崇あつて由原社との関係の中で、かろうじて法灯を維持していたことができる。

三、近世の再興

中世末にすでに天台系の寺院となり、本来の国分寺とは全く異質の寺となっていた豊後国分寺について、これを近世に下って論及するのは一義的な意味のあることではない。ただ現存する建物の建立や修復の経緯を知るうえで、あるいはすでに失われた遺跡の考察を行ううえで参考となる事項について概観しておこう。

寺記によれば、玉蔵坊円海より八代目の円能が延宝三年（一六七五）に至り寺の再興をはかったが果せず、後を嗣いだ円慶が村人と協力し元禄七年（一六九四）四間四面の瓦葺の本堂を再興した。いま金堂跡に残る薬師堂（史料⑨）がこれである。ついで宝永五年（一七〇八）銅鐘を鑄て二間四方の鐘樓に安置した。（史料⑩）

円慶については位牌銘に享保六年二月寂といひ、薬師堂に残る元禄七年棟札にも願主としてその名が記されている。現在金堂跡とされる薬師堂地区の遺構が大きく改変、削平をうけたのはこのときであろう。下って享保九年（一二二四）には、観音堂が、ついで宝暦七年（一七五七）には願摩堂が建てられている。

その他、薬師堂北方の畑地には阿弥陀堂があつたとされているが、「利光家記録」によれば寛文一二年に再建されたという。寺記に阿弥陀堂四間四面東面云々とある。^⑪この阿弥陀堂の位置に講堂推定遺構があり、この遺構の礎石を転用した堂が建つていたようである。

このようにみると、現存する国分寺の主要建物は大半が江戸時代の内慶の再興以後のものであり、宝暦年間をもってほぼ全容をととのえている。豊後国分寺の歴史の中では、もともと大がかりな修築といえる。薬師堂棟札に府内城主松平対馬守昭重の名がみえるので、由原社と共に府内藩の助力があつたものであろうか。

今回の発掘調査の結果、大規模な瓦溜りや意味不明の土壇が発見され、又各遺構で、瓦が片づけられている形跡が目立つたが、多くはこの時の作業と思われる。

さて江戸中期の復興後の国分寺については江戸末期の史書に点々と記事がみえる。この中で例えば、「太宰管内誌」に、堂宇衰廃云々（史料03）とあり、また同書所引の「龜山隨筆」は当寺がすでに田地を失い、定まつた住僧もなく、狭間向之原の竜祥寺の掛持になつていたと述べている。

江戸時代の史書で豊後国分寺に言及した史書は、「豊後国志」、「太宰管内誌」、「雄城雑誌」（史料01 02 03 05）等数多いが、境内に残る礎石等に関心をもち、往時の壮大な伽藍の考証に及んだものはほとんどないことは、研究史の立場からも惜しまれる。

なお久多羅木儀一郎氏は、前掲「豊後国分寺趾」の中で境内の石塔等について、年表の形式で目録をあげている。現状と照合した結果及び追加できるものをあわせ付記しておこう。

- 元禄十二己卯年十二月六地藏薩埵修補
- 寶永元甲申年七月八日妙法蓮華經一字一石書寫之塔
- 享保十六辛亥年中秋十八日大乘妙典一石一字塔
- 寛延三年庚午正月廿一日大乘妙典寶塔
- 寛延四辛未年二月八日大乘妙典塔
- 寶暦三龍集癸仲春西國四國巡禮供養塔
- 寶暦七歲次丁丑十一月五日一字一石大乘妙典之塔
- 寶暦戊寅天（八年）四月六日寶篋印塔
- 寶暦八年戊寅十一月廿三日一字一石大乘妙典塔
- 寶暦十二壬午中夏廿七日大乘妙典塔

- 明和九壬辰天三月廿四日銅像地藏尊鑄造
- 安永二癸巳年四月日本國供養塔
- 安永三甲午二月十二日西國供養塔
- 天明七丁末年國分寺華師堂屋根替大工矢野金石衛門
- 天明八戌申歲九月十七日西國巡禮供養塔
- 寛政三辛亥年二月十八日三界高靈塔
- 寛政九丁己歲二月十四日西國巡禮供養塔
- 文化四丁卯三月廿一日地藏石祠
- 文化十癸酉年九月西國三十三所願拜塔
- 文化十一甲戌七月四國八十八所供養塔
- 文化十三歲丙子仲春大乗妙典一字一石之塔
- 文化十癸酉年三月地藏石祠
- 文政三庚子歲大乗妙典供養塔
- 文政五壬午年十二月大乗妙典供養塔
- 文政十二年石灯籠
- 天保十五年甲辰十月大乗妙典塔
- 天保二辛卯天・大乗妙典供養塔
- 安政三辰九月大乗妙典供養塔
- 元治元甲子天石造釈迦如来座像他

(注)

- ① 天武天皇一四年(六八五)の詔、持統天皇八年(六九四)の法令(以上「日本書紀」)等参照

② 「太宰管内誌」、大分県史蹟伝説研究会編「豊後国分寺研究」(昭和六年)、久多羅木儀一郎「豊後国分寺址」大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告第六輯(昭和三年)等参照

③ 岩波版「風土記」解説—日本古典文学大系(昭和三年)、東洋文庫版「風土記」解説(昭和四年)等。藤原宇合は天平四年西海道節度使として派遣され、同五年末までに帰京したが、その後大宰帥となり同九年八月までに任にあつた。

④ 肥前国分寺跡は佐賀県大和町にある。国分尼寺は国分寺の西二町の地に比定されている。

⑤ 小田富士雄「日本各地の寺院跡—九州」仏教考古学講座2(昭和五〇年)

⑥ 前掲注③参照

⑦ 金剛宝戒寺は大分市上野律院にある。寺伝によれば聖武天皇勅願の寺という。「雄城雑誌」によれば、始め在隈郷羽屋邑五丁津留の地にあつたといひ、この地にも平安時代の古瓦を出土する。

⑧ 永興寺は金剛宝戒寺の西二キロ、同寺と同じ洪積台地上にある。寺伝では、金剛宝戒寺と同じく聖武天皇勅願という。現在、釈迦堂とよばれる小庵があり、周辺に仏供田、門前、千堂などの地名を残す。

⑨ 小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考その一」史淵九五(昭和四一年)

⑩ 真野和夫「古墳時代」大分の歴史(1)ふるさと誕生(昭和五一年)・後藤宗俊「大分川流域における在地首長の成立と発展」大分県地方史第七三号(昭和四九年)

⑪ 豊後国府は大分市羽屋・古国府地区に比定されているが、確証は得られていない。

⑫ 「市立豊府小学校建設地緊急発掘調査概報」大分市教育委員会(昭和四九年)

⑬ 「太宰管内誌」所引の「神洞隨筆」(史料04参照)

⑭ 豊後国分尼寺の所在地については

(イ) 国分寺の西一町の位置にある礎石をもつてこの一帯とする説(「豊後国志」『箋釈豊後風土記』等)

(ロ) 国分寺の東半町にあつた小庵とする説(「太宰管内誌」所引の「神洞隨筆」)

(ハ) 永興寺とするもの(「太宰管内誌」)

(ニ) 大分市勢家にあつた尼寺とするもの(「太宰管内誌」所引稿生云)

附 国分寺の寺の西五、六町の古原口及びその背後の六重原とするもの。

（郷土史跡伝説研究会編「豊後国分寺研究」に「寺を去る五、六町の西西南の地点で（中略）字名を小原口という。（久大）線路改修工事中なるが故に蓋りに発掘すべからざるも、尚其の削り落されたる断面を見るに実に夥しく一度焼けたる形跡のある古石の存在を発見し、殆ど瓦の堆積ともいふべき程なるに（中略）高さ数間の古原口を上に登れば、広き十数町歩の大平坦地で六重原と稱し、云云」とある。）

等の諸説がある。このうち、奈良時代の古瓦を出土するのは、(1)・(4)・(6)であるが、(6)の古原口は瓦窯跡である可能性が強く、その上の六重原に瓦等の出土はない。(1)の国分寺西一町の地は近きにすぎず、寺跡の立地には適している。いずれにしても決めてに欠ける状況である。

⑭ 和島芳男「敬尊・忍性」人物叢書三〇（昭和三四年）

⑮ 小田富士雄ほか「薩摩国府跡・国分寺跡―所収薩摩国分寺関係史料」（昭和五〇年）

⑯ 堀池春峰「国分寺の歴史」仏教芸術一〇三号（昭和五〇年）

⑰ 源頼朝は文治元年（一一八五年八月、伊豆・相模等六カ国を知行国としたのにつづき、同年十二月、豊後国を知行国とした。

（渡辺澄夫編「大分の歴史(3)―大友一族と二豊武士団」（昭和五二年）

⑱ 前掲⑰渡辺澄夫氏編著参照

⑲ 中野輔能「八幡信仰史の研究」（昭和四二年）・中野輔能編「大分の歴史(2)―宇佐八幡と石仏」（昭和五二年）

⑳ 前掲⑰参照

㉑ 前掲⑲久多羅木論文及び史料⑴等参照

史料

史料(1)

豊後国分寺初見（『続日本紀』天平勝宝八年条）

十二月廿日。越後・丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・美作・備前・備中・備後・安芸・周防・長門・

紀伊・阿波・讃岐・伊予・土佐・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後・日向等廿六國、國別領下灌頂幡一具・道場幡州九首・排網二条、以充_ニ周忌御齋莊_一。用了_レ取置金光明寺、永為_ニ寺物_一、隨事_ニ出用_一之。

史料(2)

大宰管内国分寺料(延喜式)主税二六

筑前国(中略)国分寺料三万二千二百九十三束(中略)、筑後国(中略)国分寺料一万三千三百九十四束(中略)、肥前国(中略)国分寺料三万三千三百九十四束(中略)国分寺料各一万六千六百九十七束(中略)、肥後国(中略)国分寺料四万七千八百八十七束(中略)、豊前国(中略)国分寺料一万四千二百七十四束(中略)、豊後国(中略)国分寺料二万束(中略)、日向国(中略)国分寺料一万束(中略)、大隅国(中略)国分寺料二万束(中略)、薩摩国(中略)国分寺料二万束、同寺十一面觀世音菩薩燈分料一千五百束。

史料(3)

弘安八年国分寺領(弘安國田帳)

永興寺国分寺二十三町八段

十三町六段 永興寺

十町 国分寺、地頭甲斐國住人市川左衛門宗清_注名連性五郎、内梨畑大略爲畠、地代不分明。

史料(4)

正慶元年由原宮年中行事次第(祇原八幡宮文書)

正慶元年正月十一日「年中行事次第」

(中略)

八月

放生會(中略)

十五日

(奉祝力)

佛供養 標山 國分後、華安、置阿弥陀像、

(奉祝力)

講讀師 國分僧役 請僧 社僧役

菩薩舞 駒形 駒犬 國分寺役

舞樂 蝶鳥舞 東舞 十烈

獅子 龍頭 國衛役 相撲十番 國衛沙汰場、役

大行道次第 菩薩 國分僧 蝶鳥 社僧 在廳 樂人
舞人 獅子 駒形 駒犬 村 田樂

仁王經講讀 一百座 馬讀師 請僧同前

御供備進 神官 供僧 國分僧行、之、 在廳 神官饗膳 國東場役

百僧供 神官 供僧 國分僧行、之、 料田七段、生石村在、之、

神官供僧壹飯 惣而當司沙汰 松明 十四日同

十六日

還 御 神官在廳供奉 於本宮 御供備進、

在廳饗膳 直入場役 神官饗膳 朽網場役

已上三ヶ月御供米九石九斗内區石貳斗、當庄生石村沙汰、貳石貳斗同兩庄沙汰
貳石貳斗莊兩沙汰、參石參斗平九保沙汰、御炊殿換校納、之御進

彼岸七ヶ日動行 如二月

史料(5)

賀來社御行幸儀式次第注文(許原八幡宮文書)

(寛政7ハロ)

「北朝 嘉慶二年 辰三月

賀來社御行幸儀式次第

(中略)

八月十四日御幸行儀式

御供備進祝 馬長 村田樂 舞樂

蝶鳥 十烈 東舞 相撲 旗鉾三本 二本國東一本佐賀

御前松明國東傳役 大宮司屋形前松明 同之

同十五日 佛供養 標山 國分寺役、華安置阿弥陀像

講師 (寺社立) 國分寺役 請僧社僧役 菩薩舞

駒形 駒犬 舞樂 蝶鳥 東舞

十烈 師子 國術役 相撲十番 國術抄汰堀役

大行遣次第 菩薩 國分僧 蝶鳥 社僧

在廳 樂人 舞人 師子

駒形 駒犬 村田樂

仁王經講讀一百座 講讀師 請僧社僧役

嘉慶貳年 戊戌 三月 日

史料(6)

永祿十年賀來社由原社諸院坊末寺書上(詐原八幡宮文書)

(原書目)
「永祿十年正月」

豐後國天台宗之分

大分縣松平寺院範圍內

一當國崇廟八幡宮賀來社由原山

法流者穴太流門於正學院

受職灌頂等相助者也

寺社立
金藏院

同衆徒

右同斷

右同斷

右同斷

右同斷

右同斷

右同斷

右同斷

右同斷

右同斷

右同斷

右同斷

右同斷

同前
一誓王山本尊藥師如來國分寺

同前
一飛來山本尊觀世音靈山寺

法苑右同前

最覺坊

常樂坊

香蓮坊

光林坊

東光坊

宮迫坊

西之坊

長賢坊

成泉坊

清教坊

南之坊

福万坊

本城坊

玉蔵坊

本明院

史料(7)

天正年間國分寺焼亡（豊後史蹟考所引の寺記）

寺記に云、後天正中大友宗麟の兵乱に際し寺院悉く焼失す。當時尊像始め勅額經論等は之を山中に匿して、僅に兵災を免がるを得たり、世鎮る後再び堂宇を経営せんとしたるも、寺領皆曰に變じ、僧侶の如きも多く離散して留る者なかりしを、玉蔵坊内海一人留りて、斯る靈場の開滅に帰するを慨き、先きに山中に匿し置たる尊像其他の物を集め、村民に譲りて僅かに茅舎を築造し、此に安置するを得たり。

史料(8)

玉藏坊內海供養塔銘

欽奉彫刻□□塔

右之意趣者

爲前住玉藏權少僧都

莊嚴報地者也

于時元和四年戊午四月

史料(9)

元祿七年藥師堂棟札

元祿七年甲戌伏宮府城大守松平對馬守源昭重武運長成

上棟奉建立豐後州大分郡金光明寺藥師堂一字倍増威光聖朝豐榮國家安寧祈愷

哀惠衆生者我等今敬禮五月十二日本願主醫王山園分寺玉藏坊內慶大工矢野金石工門

史料(10)

醫王山金光明寺鐘銘並序

豐後府內城西十二里有寺名金光明、昔者聖武帝每州建一寺命新國祚、此其一也、天正之間權大友氏兵災、變爲狐鬼之窟、厥後雖得重興而不備者多、前住即能圖復舊觀不迷而寂、其弟國慶深思師志、事專興復主誠所感大得樂助手、是佛殿僧堂次第煥然、去歲鑄大銅鐘、而□焉日者不遠千里來于飯稻微世爲銘、予感其淳懿不辭不文爲之銘。

銘曰(略)

寶永五年龍集戊子三月十二日

堂嶺心繼點知雄謹撰

幕緣主 金光明國分寺見住國慶書

府城主 松平封馬守源昭因公（下略）

史料(1)

「豐府聞書」（『雄城雜誌』所引）

聞書曰。仁治改曆春、大守親秀、詣領國分寺、寺僧等語故事。昔天平九年、勅每州建寺、行蓋菩薩作仏安置之、號國分寺。此時、南都市法民部受勅命、來豐後大分郡、議國主求清潔地、創建精舍普願寺。行基來彫刻丈六藥師木像安置之。勅名國分寺行基住之、說摩伽唯識等論。又使國中民人講衆病悉除功、顯信誓王如來。國主大喜、即以行基為開祖。至是時、天皇附郡庄於國分寺。命國主單市川氏、成大伽藍數十寺院。圍繞于山中數百末山、散處于隣國、可謂海西之名利也。而後、世々國主修補其伽藍、再建其寺宇、如今至茲。府主聞之、感即命國中四民、新成伽藍於國分寺、寄若于郡庄。又請京師大仏工、修補瑠璃光像、安于大殿。項歲、興正菩薩住于南京西大寺、盛弘戒律。親秀遙聞會之、興欲弘戒行於領州之志。故仁治元年之夏、遣臣於西大寺、白其志於叡尊律師。以請大德。爾時、尊師感大友氏信仏法、即授忍性比丘。蓋是忍性師、姓伴氏大和國磯城之人也。生建保五年、其性慕仏理、自幼歲不食葷腥。天福元年、登東大寺戒壇、二十三而到西大寺。師事叡尊師、闢律學異道、普於天下、所然。依大友之請、受尊師之命。忍性師天性會誓、為再興舊廟精舍、故喜應。親秀請速度海。來于豐府住國分寺、說戒律化衆民。其功難勝言。府主甚悅。以忍性比丘、為中興祖、以西大寺為本山。於是、性師準下野國藥師寺。最勝會、使衆僧每歲從四月八日至五月八日、講論金光明最勝王經。欽以新天下太平國豐民安、又忍性師講金光明經。故國分寺、異名金光明寺。又國本尊山號名醫王。府主大喜、欲金光明寺成額、求能書元朝張。即之有佳筆者。是故遣使於大元、請即之令書。金光明寺（今明日也）以成額、寄付國分寺掛於山門。親秀屢慕忍性律師之德、剃髮染衣。受菩薩戒名寂秀。忍性師告辭於寂秀、輕舟而帰洛。仁治三年正月元旦。

寂秀詩曰。

難窓支對爐薰、漏盡鐘鳴曙色分。

山亦更東君賜否、朝來新拾錦雲々。

指南曰。(編者云、指南ノ文、聞書ニ同ジ依テ畧シ之。)

(「豊州誌」、「豊後舊記」、「豊府指南」にほほ同様の記事あり)

史料

「豊後国志」金光明寺

在賈来郷国分村。一名国分寺。天平十三年所創。按日本紀天武紀曰、五年、十一月、甲申、遣使於四方国、說金光明經、仁王經。持統紀曰、七年、十月、始講仁王經於百国、四日而畢。八年、五月、以金光明經一百部、送置諸国、必取每年正月上元読之。其布施以当国官物宛之。蓋是時未有諸国置金光明寺也。統日本紀聖武紀曰、神龜五年、十二月、金光明經六十四帙、六百四十卷、頒諸国、国別十卷。先是諸国所有金光明經、或国八卷、或国四卷。至是写備頒下、隨經到曰、即令転読、為令國家平安也。天平十二年、六月、令天下諸国、每国法華經十部、并建七重塔焉。蓋此時始置金光明寺、法華尼寺、然未全備也。十三年、正月、故太政大臣藤原朝臣家返上食封五千戸、其二千戸依旧返賜其家、三千戸施入諸国国分寺、以充造丈六仏像之料。十三年三月、又每国僧寺施封五十戸、水田十町、尼寺水田十町、僧寺必令有二十僧、其寺名為金光明四天王護国之寺。尼寺尼一十尼、其寺名為法華滅罪之寺。兩寺相去、直受教戒。十九年十一月、詔曰、朕以去天平十三年二月、至心発願欲使國家永固、聖法恒修。遍詔天下諸国、令造金光明寺法華寺。而天下諸国司等怠緩不行、或処寺不便、或猶未開基。朕之股肱、豈合如此。是以差從四位下石川朝臣年足、從五位下阿倍朝臣小島、布勢朝臣宅主等、分道発遣、檢定寺地、并察作状。國司宜與使及国師、簡定勝地、勸加營繕。蓋斯時經營始成。此後天平宝字、神護慶雲、元應、

弘仁等、國司不報其筆、王室衰、建久以還、國府漸廢、寺宇亦荒廢。豐府紀聞曰。仁治元年、大友大炊介親秀、修興其廢、且尊尚西大寺、假尊律師、請待焉。師以電謝之。使其弟徒忍性比丘代己。忍性既住、于國分寺、日講說瑜珈、唯識諸論。大衆滿堂。遂大修金光明最勝會云。按國田縣、戲笠和鄉國分寺、料十町。弘安中尚如此。後世衰廢可知。然今堂宇地境稍廣。寺後一町許。有礎石之址、蓋言法華滅罪尼寺之故蹟也。

史料13

「太宰管内誌」國分寺

〔風土記解〕に、云今在賀來鄉國分村、稱國分寺、堂宇衰廢、〔或書〕に、云國府廢後、國府寺荒廢、建久已來、大友大炊介親秀修理其寺、且請西大寺、假尊律師、安國分寺、律師老後、以其弟子忍性比丘令代己、此比丘住後、遂修金光明最勝會、云今僅存一字、又有青銅ノ藥師如來、高九尺許、是稱彌佛、安置堂外、境內凡一町四方許、其內有空地三四段許、基他皆杉林等也などあり。

〔龜山隨筆〕に、大分郡國分寺は、荏隈郷古國府より二里許南にあり、府内ノ城よりも二里許西南にあり、今ノ府内城より直入郡岡ノ城に到る道筋にして、阿南郷狹間ノ村までいたる道の間なり、堂宇は杉林ノ内にあり、昔は領主より寄附ノ田地もありしといへど、今はなし、又定まれる住僧もなければ、阿南郷狹間（ハサマ）村龍祥寺の掛持にて、同寺より看坊せり、龍祥寺は清家ノ禪宗なり、國分寺に寺寶古器等猶殘れりとあり、〔稻主云〕大分郡國分寺は天台宗なり國分寺村にあり古國分村にありと云説はわろし古國分と國分寺との間二里あり、

史料14

「太宰管内誌」尼寺

〔風土記〕に、大分郡寺貳所尼寺とあり、さて〔風土記解〕に、云今在賀來鄉國分村、稱國分寺、堂宇衰廢、寺後一町許、有礎石之址、蓋言法華滅罪尼寺之故蹟也とあり、

〔神詞隨筆〕に、豊後國大分郡國分寺ノ東半町許に尼寺有て、永興寺と號く、是國分二寺の内なるにや、堂宇はいみじく廢れにたれども尼のすむ處なりとあり、此説によれば、尼寺のあとは、礎のみにもあらず、又〔國田張〕に、大分郡永興國分寺二十三町八段ノ内、十三町八段永興寺、十町國分寺、云云など見えたれば、弘安ノ此より尼寺を永興寺と唱へたるか、されども〔帳〕ノ首書に、永興(ヤウゴ)村と云は、荏限郷ノ内にある由記せれば、賀來郷なる國分寺にはうときこ、ちず、其上に尼寺ノ領を十三町八段と定め、僧寺ノ領を十町と定めむいかになり、されば永興寺たしかに尼寺と別なりと云證もなけれど、暫く次の件に引いでこのうちの考をまつになむ、又〔國帳〕に城興寺領二百七十餘町と云事も見えたり、是も此國ノ内の寺なるか、いまだ考へず、さて〔古書〕に國分寺といふは、僧寺尼寺の二ツにわたる名にて、僧寺のみを國分寺と唱へ、尼寺を尼寺と唱ふるはいかになるに似たれど、尼寺と云もの何れも早く絶て、今たまさかに残れるは、僧寺のみなれば、世人凡て其僧寺を國分寺と唱ふる事となれり、されば其ならひに隨ひて、凡ての人の見安からむ爲に、僧寺の方のみを國分寺と出しつ、

〔稻主三〕尼寺は府内の城下より乾の方三四丁許にあり其所をせいけと云なり今も尼の住む寺なり、

史料(5)

雄城雜誌(國分寺)

鐘樓。祇園宮。辨財天。

本尊。藥師如來。〔行基作〕。聖觀音阿彌陀。〔行基作〕。十一面觀音。〔三國伝來。光明皇后御寄附〕。山門額。元氣即之筆。

寺記曰、聖武天皇天平十三年、勅ヲ奉ジテ市川民部某〔按ニ、十九年詔ニ依ル時ハ、市川ハ名川ノ誤、石市和語相近シ。事ハ下ニ出〕、南京ヨリ下向シ、國司ニ議シテ、当寺並ニ國分尼寺ヲ經營ス。繼デ菅原寺行基僧上來錫シテ、丈六ノ藥師仏ヲ彫刻シ、僧正ヲ以開基トシ、庄田ヲ寄セ玉フ。然リシヨリ數十ノ寺院、山中ニ圍繞也。數百ノ末山隣國ニ散處ス。仁治元年大友大炊介親秀再宮シテ、若干ノ寺領ヲ増附ス。同年ノ夏、西大寺興正寺ノ高足忍性律師〔師性ハ伴氏、大和國磯城島ノ人ニシテ、建保五年誕生、其性仏理ヲ慕ヒ、幼年ヨリ軍ヲ食セズ。天福四年、東大寺ノ戒壇ニ登リ、二十三ニシテ、西大寺ノ獻尊律師ヲ師トス。律學ノ習レ、天下ニ普シト云々、師ノ説ハ元亨釈書ニ載ス。就テミルベシ〕。忍性。

「雄城雜誌」國分寺(2)

豊後國司曰、元享釈書曰、忍性姓伴氏、和州磯城島人、就獻尊律師、受爲聚之学。紀聞曰、建治元年、應大友親秀之聘、住于國分寺、講論伽唯識諸論、每歲修金光明最勝王會、不興麁業。釈忍性ヲシテ、当寺ニ請ジ、中興ノ祖トス。此ニ於テ、忍性師下野國薬師寺最勝會ニ準ジ、每歲四月八日ヨリ五月八日ニ至テ、金光明最勝王經ヲ講論シ、國豊民安ヲ祈ル。故ニ金光明寺共號。又本尊薬師仏ニ就醫王山ト称スト云々。山門ノ額ハ元ノ張即ノ筆ニシテ、大友ノ親秀海舶ニ賣シメテ、書シムル也。当代寺区漸々麁類シテ、纔ニ其旧規ヲ存在スルノミ。按ニ、此碩田叢話中、國史ニ詳ナルモノ、唯当寺ノミ。故ニ其涉獵スルモノヲ擧テ寺記ノ闕ヲ補ヒ、當時ノ壯觀ヲ知ラシム。

史料(11)

「雄城雜誌」國分尼寺

國分尼寺址 同邑

國分寺之後、壹町許ニアリ。礎石所々存在ス。鐘ヶ淵。平横瀬。里談曰、國分寺ノ免鐘、天性丙戌ノ乱、薩兒ノ却掠ヲ恐レテ、此所ニ沈ム。其他深淵ト成テ、其鐘竟ニ得ル事アタハズ。因テ此名アリ。

按ニ、長治中四方指既ニ此名アリ。前説信ジ難キニ似タリ。尚可尋。

史料(12)

「醫王山國分寺畧縁起」(國分寺蔵)

柳豊後國大分郡國分村醫王山金光明國分寺ハ往昔人王四拾五代聖武皇帝勅願、依而普く日本六拾余州毎に大梵精舎を建て、天下泰平國家安全五穀成就を祈らしめ給ふ、草創ハ神亀四丁卯三月十八日勅使大納言藤原信連卿當國に下向仕給ひ、國中を巡見し此所に靈場を定め給

ひ、同く五月下旬事始め有て、礎の石ハ府城より乾に當りて四極山の麓白木村の礎或は又阿南庄樸木村と云所より車二積て運送すると云へ共、其通路甚難所にして輒く取越事得がたく、去ルに依而三四年を経と云へ共其功成難く、諸人は心を痛ましむ、然に天平二年三月三日の夜四極山と樸木村の方より光り物有て空に數万人の聲夥數、雷電の落掛る如き音絶間なく漸々曉の比に至而鎮りける、諸人夜明て是を見るに、不思議成最大成所の海石式百五拾、山石式百五拾忽然として有けり、諸人奇異の思ひをなし、仏法の有難き事を感じ、丹誠を抽んで大伽藍成就仕て、天平十一己卯四月八日上棟供養有しと云々、本堂十八間四面東向、本尊藥師如來、二天士二六神、大力士等皆行基并の御作也、阿彌陀堂十六間四面南向、本尊并廿五の菩薩共行基并の御作也、觀音堂十二間四面東向、本尊十一面觀世音ハ大唐より渡らせ給ふ所の佛作の御仏也、正觀音ハ行基并の御作也、其外山門鐘樓坊舍に至りて是をならべ、さしも尊き靈場なりしが、其後年を経るに隨つて諸堂破壊に及しかば、人王七十七代後白河院長生壽院御草創の後再興なさしめ給ふとかや、又鎮守春日大明神ハ藤原氏の尊神なり、殊に勅使信通卿ハ大職冠の苗裔也、依而春日宮を南都より勧請して下向御供奉仕給へり、則御船着岸の所を春日の浦と名附、府城の西の磯其所に今の春日の社有り、其より國分村に供奉仕奉りて宮地ハ本堂より丑寅□當て國分寺鎮守として祭り奉る、其所の地形龜の伏たる形ちに似たれば龜甲山と名附、折念所を龜甲山神宮寺と号し塔頭六坊寺領ハ四方五拾丁宛則式千五百百也於今于野津原、戸次、來鉢、古國府村に其印しの堂社残れり、然に天平年中之頃、大友家兵亂之御薩州勢押來りて兵火之為に焼失せし事誠に惜むべし悲しむべし、さしも尊き大伽藍寶物坊屋に至る迄不殘燼燼と成る、悲しきかな來世五濁とハ言ながら淺間敷支共也、然りといへ共藥師彌陀觀音の尊像の御足或ハ御手杯をぬぎ取奉りて山の内蔵の中に隠し勸額をも隠し置皆々逃失けり、其後世鎮りて再び佛閣を経營せんとするに寺領も衰じ寺僧も散々に成りし故に更に其甲斐なし、玉藏坊法印圓海と言る僧人残り居て、隠し置奉りし所の尊客を拾ひ集めて村民をかたらい漸々茅舎を建て安置し奉りぬ、其後延寶三己卯年圓海八世の住僧圓能是を悲しミ、十方且那を進めて再興の志願を起しけるに、壽命限り有て深願を遂げずして寂しぬ、其弟子四慶師の願望の空敷事を歎き村庄村老に語るに万人燭服して、元禄七甲戌年四間四方の瓦葺の本堂を造立し、宝永五戊子年大銅鑪を鑄て武間四方の鐘堂を新立す、同八年長崎より南陽秀山と言る画師を招て卷丈三尺の涅槃像を畫調へ、夫より阿彌陀堂觀音堂各式間四面なり、尤本尊十一面觀世音ハ仏作にて、唐土三藏法師天竺より守奉り帰唐せられし御佛也、本朝四十六代孝謙天皇勝寶六年漢心大師來朝之刻、御供し來たり光明皇后に奉りしを皇后則當山に安置し給ふ所なり不思議哉此尊像諸堂炎燔の時猛火之内に飛去り給ひその行所をしらず、八十余年を経て万治元年戊戌二月十八日御夢相の告に依而横瀬村松尾谷藏の内より見出奉りて庄吏川端追御供申ければ、時の住呂圓慶法印にも御告有て村中の老若一同に川岸追御出に、互に悦ひ合て御供申今の十一面觀世音是なり、誠に靈驗あらた成ける故貴殿尊敬し奉りける、又鎮守春日大明神ハ

少しの社ありやなしの体なりしを法印と村老之者共江神勅の告有て、元禄十年丁丑十月十三日任告にて土中を掘るに、方八寸の神鏡を掘出しけり、是則大明神の御神体と云々、今に至迄四時の祭祀怠りなく行ける、然りと云へ共堂宇次第に破壊して修覆を加ふるに暇なく、國慶法印常に再興の思ひ有りと云へ共志願を達せずして寂す、其後國泰法印其志願を次で願心を起し、終に時至りて享保九甲辰年再興成就し、則三間四面之精舎を建立し畢、今の社はなり、古記を記し今有るを知らしめんがため荒々畧録記如件。

天保三年 國分寺住職

玉蔵坊法印

孟秋上旬写之、

寛海

二、豊後国分寺跡の石造品

寶曆十二年銘石幢（第一二一圖一）

總高三三四・五釐。笠は円形、基礎は四角形であるが、竿石の水平断面八角形を基調とする。基礎上面に亀を彫出し、その上に竿石をのせる。中台は比較的小さく下部側面は逆反りである。宝珠と笠との接合部は、柄小さく不自然であり、宝珠は後補である可能性が強い。よくまとまった典型的な江戸時代の様式を示す遺品である。

銘文（竿石）

大乗妙典塔

銘此立乾坤外放光萬八千願主

日見聞寫読者功德及無邊麻生留右衛門

法名

自肯了始信士

寶曆十二年壬午中夏念七日

同室

松尾氏女

法名

遠實鈔父信女

備居定安薩之小比丘智勤

齋書

法書了喜信士圓樂鈔口信女鈔誓正定聚

文重智章信女金英智王信女如錦童女

惠秀童女

寂空智光信女同輪宗普信士玄快正定聚

龕部

地像菩薩六体と十王像二体、このうち紙軸をひろげもつ十王像の方は、宝冠が少し異なるところから俱生神のいずれかであろう。

元禄十二年鐘石幢（第二二二圖）

現状の総高は二三・五程であり、竿石の水平断面八角形を基調とするが、笠及び基礎は円形である。以前倒れたとのことで、笠は著しく破損し、基礎は大部分覆土。中台は下部側面に蓮華を線彫りし、逆反り。笠は櫓を彫出する。宝珠には火焰を施し、踏花には蓮華を線彫りで現わす。龕部の像はすべて頭部を欠損しており、意図的なものと考えられる。

銘文(卒石)

奉修補六地藏薩埵

諸願成就銘曰

地藏薩埵大悲力 能化無口國土中

其一切衆生與吾樂茲善修泛真空

于時元祿十二_{己卯}年

十二月吉□ 施主谷□

醫王山國分寺現住沙門

縛圓慶敬書焉

龕部

地像菩薩は六体で、持物はそれぞれ異なり、他に十王像二体と、俱生神と思われる像が彫出されている。像容はすべて陽刻である。

宝篋印塔残欠(第一二二図三)

笠以上と台石を残すのみであり、現状の総高は一二六・〇釐。隅飾の一部を欠損する。笠の部分は裝飾性に富み、蓮華、蓮子、三結鈴、格座間などが彫出されている。相輪は上部を欠損しており、請花は侵蝕が激しく、蓮弁がわずかにみられるのみである。隅飾の渦文には墨跡がある。

無銘宝篋印塔(第一二二図四)

総高一六二・五釐。侵蝕が激しく、現在著しく傾いている。各部とも裝飾的要素がほとんどみられず、格座間にみられるのみである。塔身には胎藏界四仏が彫出されており、墨跡がある。隅飾の欠損などもあり時代考証は困難である。

寶曆八年銘寶殿印塔（第二二四五）

現状の総高は二〇五・五寸であり、二段の台石上に江戸様式の蓮弁をみせる反花、蓮華座を設け、その上の基礎は背が高く、塔身が貧弱にみえる。笠は隅飾の部分を一部欠損し、突起は反り返り、渦文を現わす。相輪上部を欠損するが、全体的によくまとまった遺例である。

一、銘文（基礎）

一字

勢寶殿印塔

三礼

松尾勘之丞

恵□理兵衛

寄附 平横瀬村 井野原太兵衛

當山現住沙門

實境坊圓忍

當山先住□僧第三世

大阿闍梨權大僧都法印是心院圓泰大和尚

願以此功德

普及□一切

我等與衆生

皆共成佛道

維時寶曆八戊寅天

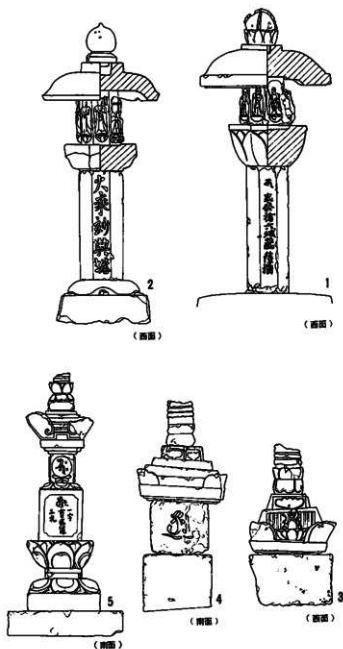
四月初六日

石工 永□村住

泰徳兵衛□

石塔々身における四方仏は、金剛界、胎藏界四仏の例が大部分である。しかし本塔においては、顯教四仏中の弥勒が観音に変る特異な例であり、三如来一観音の形式の四仏と考えられる。また阿弥陀と薬師が逆であるなど興味ある例である。なおこの形式は奥北郡及び大野郡の一部にみられる。

註 望月友善「大分の石造美術」

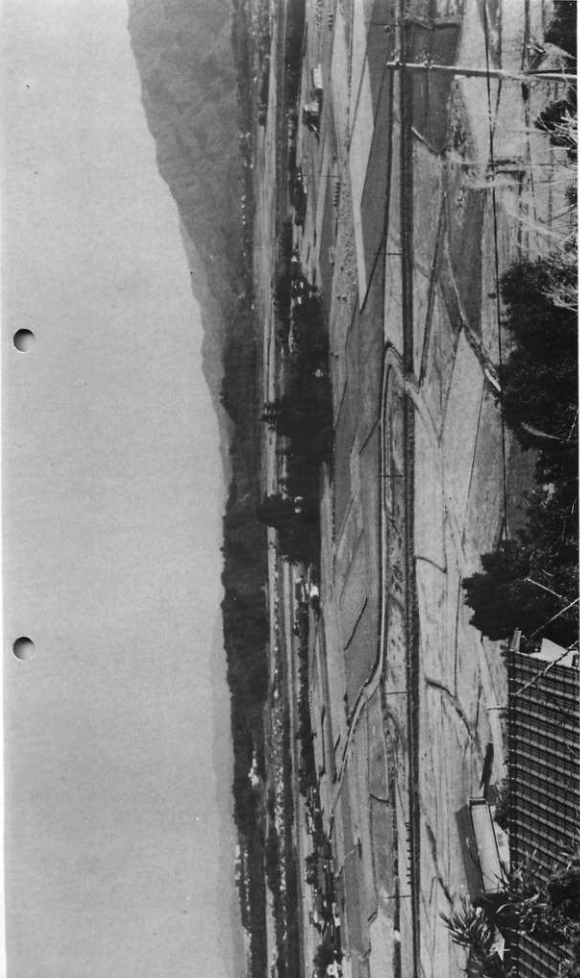


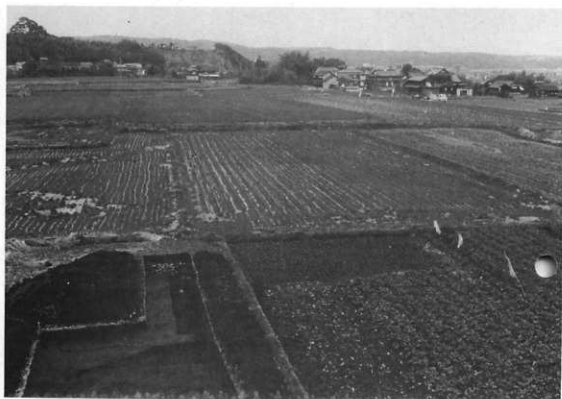
第121圖 石造品実測図

版 圖

遺

構





北側地区(トレンチは薬師堂西発掘区)



西側地区と現国分寺の森



基壇端(栗石列)と排水溝(小礫列)(南西より)



北壁断面の掘込み基壇(南より)



中門付近の現況（北より）



第1トレンチ西壁断面の掘込み基壇（東より）



薬師堂 (東より)



薬師堂 (西より)



第1トレンチ掘込み基壇 (東より)



第2トレンチ掘込み基壇 (北西より)



第8発掘区南側（東より）



第8発掘区北側（東より）

図版 8 塔跡地区(1) 塔跡の現状



観音堂（東よ



礎石北側列 (東より)



礎石南側列 (東より)

図版10 塔跡地区(3) 第3トレンチ基壇端と遺物出土状態





(南より)
↑第3トレンチ瓦出土状態



(西より)
←第1トレンチ基壇端



(東より)
北第2遺構南側基壇端
↑ 第1トレンチ西壁断面

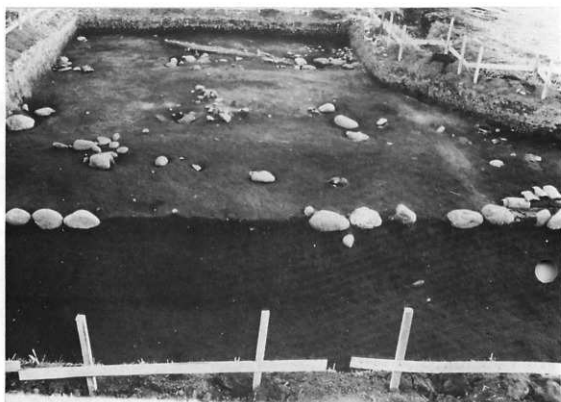
(南より)
北第1遺構
第1トレンチ全景
←



全 景 (東より)



全 景 (北西より)



全 景 (北より)



基壇中央の瓦積みと軒廊 (北より)



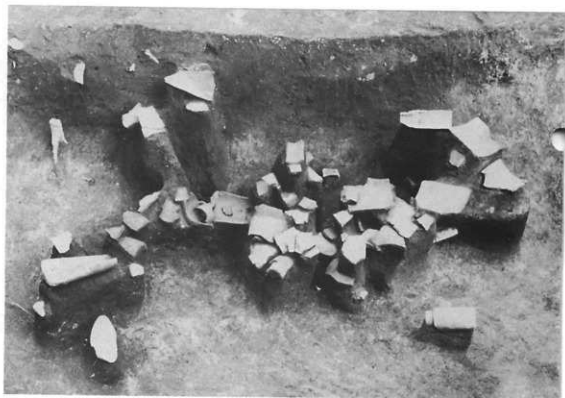
全 景 (西より)



(南西より)



(南西より)



(西より)



(南東より)



南側壁「仏」字ヘラ描 境の出土状態 (北東より)



(北西より)



(東南より)



全 景 (西より)



遺物出土状態 (北より)

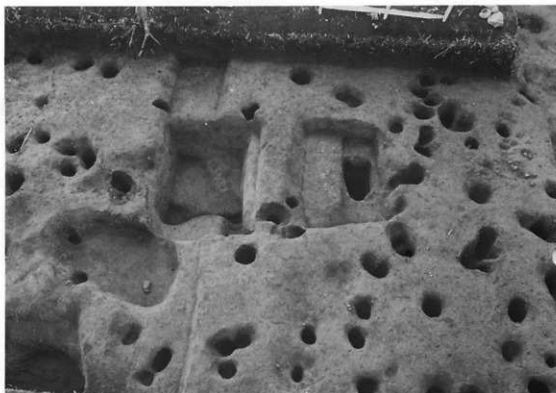


(南東より)
手前右側が東門跡
↑トレンチ全景



(西より)
東門跡および不明土壇(手前)
←





西門跡 (東より)



不定形大形土坑 (北西より)



全 景 (北東より)



第1トレンチ版築と石列 (西より)



(南東より)
西壁断面の版築と根締石
↑ 第4トレンチ



(南より)
北壁断面の版築
← 第3トレンチ





南壁断面（北より）



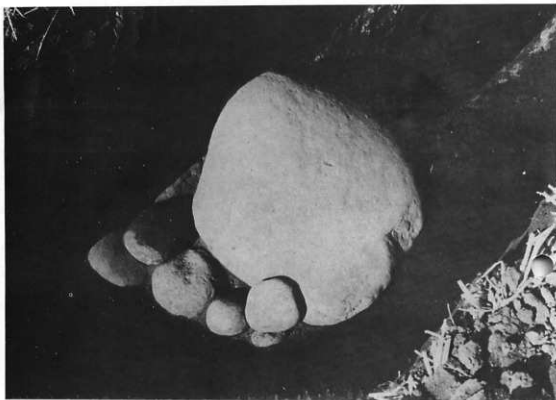
西壁断面（東より）



北側瓦溜 (南東より)



土壇上面の版築 (北西より)



北第3遺構礎石（南東より）



地下式横穴（南西より）

遺

物



5055



5051



5053



5052



5060



5058



655



5106





6011



5064



5055



656



5011



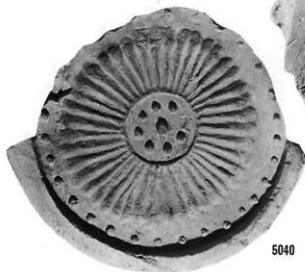
5020



5030



2093



5040



665



664



660



5334



5251



5348



107



5337



2



6001



5351



327



1006



38



131



5341



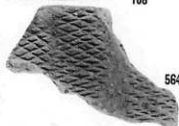
1007



108



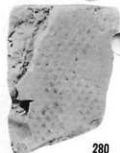
14



564



130



280



281



6012



5350



5349



5398



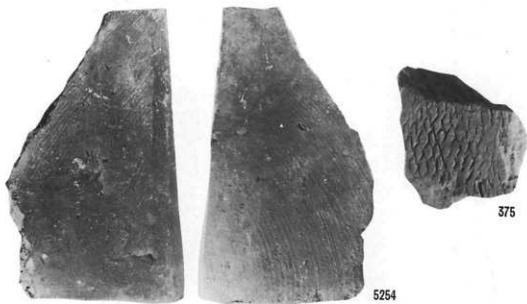
5346



212



5365



375

5254



5316



5322



5304



5217



5221



1009



2050



46



5516



2033



1003



5419



5700



国分寺



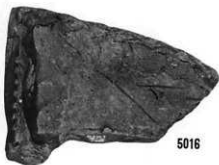
永興寺



永興寺



永興寺



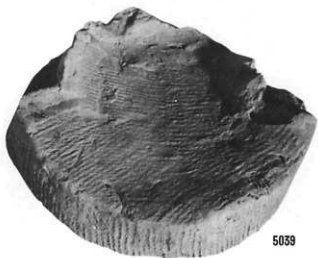
5016



5041



5020



5039



6025



5391



5397



2325

255



5264



2249



5370



125



602



5447



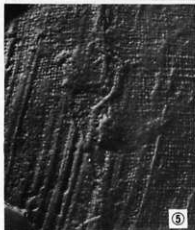
①②



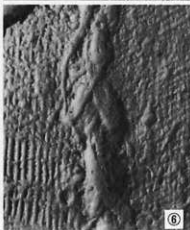
③



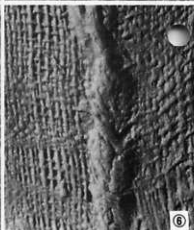
④



⑤



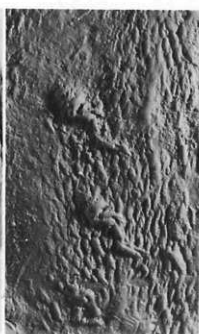
⑥



⑦



5256



5348

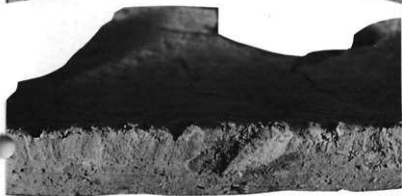


375





5390



5218



5320



5213



611



5448



18



19



20



21



22



23



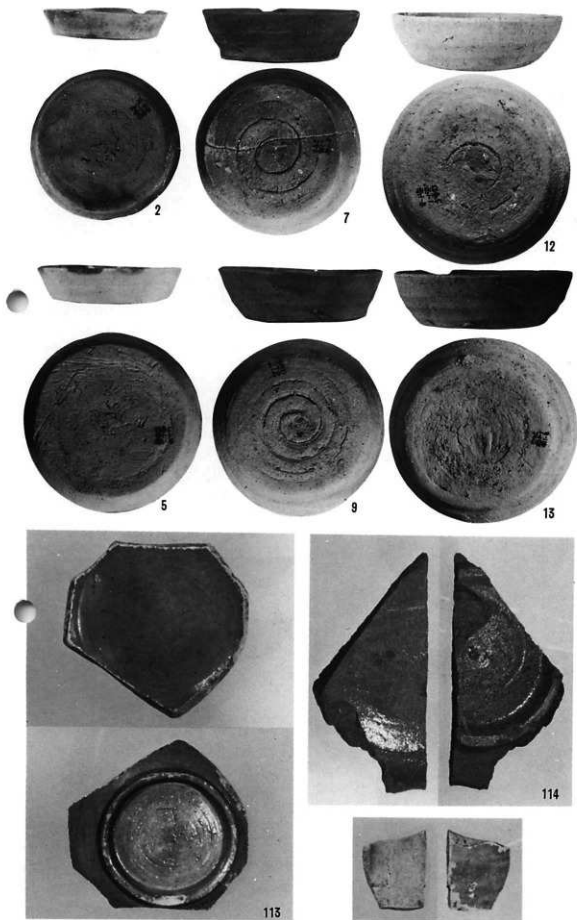
25



28



30





63



39



169



35



178



44



110



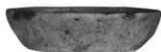
46



197



45



194



53



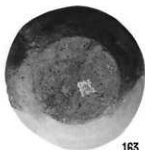
95



150



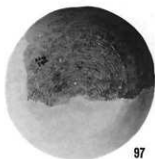
54



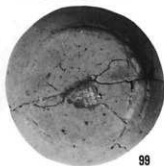
163



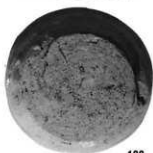
164



97

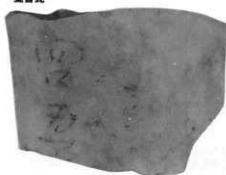


99



100

墨書瓦



土器168

土器104



豊後国分寺跡

昭和54年 3 月

発行 大分市教育委員会

大分市荷揚町2番

印刷 三恵印刷株式会社

大分市上野町